

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03148 8430



(41)

新
春
訊

大東興利

大東興利
一〇一〇

不
信
疑

日
報

日
報

日
報

日
報

日
報

日
報

中華民國二十一年二月二十日

第...期

昭和七年二月十五日印刷
昭和七年二月二十日發行

國譯一切經集部十一

編輯者

岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者

渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所

日進舎
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

不許
複製

發行所

東京市芝區芝公園地七號地十番

大東出版社

振替東京一九四七一
電話芝(三)〇四〇六番番

索引

(頁數は通頁を表はず)

一了

阿育樹	277
阿修羅	29, 121, 235
阿說示	291
阿那婆達多池	253
阿若憍陳如	291
阿那般那	86
阿奴摩山	236
阿浮陀	272
阿彌陀如來	326
阿輪歌樹	298, 323
阿羅漢	169
阿蘭若	67, 111
惡劫	213
安浮陀等	228

一イ

意華	312
一切巧音	306
因緣觀	304
因陀羅陀紺	324
陰	5, 109, 155
癩黃	182

一ウ

有	275
有爲	222
有爲道	300
優曇華	292
優婆夷	71
優婆塞	71
優鉢羅	271
鬱單越	163, 245
鬱單曰	31

一エ

緣覺	54, 101
闍浮提	139, 246
闍浮檀金	4, 164
闍浮那提金	241
闍羅	34

閻羅王	241
-----	-----

一オ

王舍城	162
黃門	114, 207
應	102, 326
沍沍	215
陰、界、入	24, 52

一カ

火少	190
火輪威藏明德地	320
迦迦村陀佛	92
迦迦村陀如來	105, 113
迦尸迦衣	318
迦葉	67
迦吒波稻	232
迦羅邏身	325
迦陵伽衣	312
歌尸歌衣	312
歌奢衣	312
佉陀羅	37
海妙深持自在智通	316
海龍王	309
歡喜	307
合掌向佛	302, 315

一キ

橋奢耶衣	312
響聲	306

一ク

俱奢衣	312
-----	-----

一ケ

化生	297
化樂天	65
袈裟	176
外道	284
解脫道	300
結使	113
月華	312

乾陀羅	247
乾闥婆王	26, 237
乾闥婆城	133, 118, 306
健闍	31
堅意菩薩摩訶薩	291
堅甲鎧	298

一コ

五有	106
五戒	84
五境界	122
五根	112
五道	26, 103, 111
五胞	204
牛頭旃檀	240, 324
後際滅	306
光華	212
鉀羅婆身	204
笏笏樹	154
劫	145
恒伽河	233
黑栴檀香	324
黑沈水香	324
金蒲羅國	233
根塵	122

一サ

三惡趣	24, 103
三惡道	122
三界	5, 25
三界	119
三解脱門	302
三塗震天	237
三業	155
三十三天	136
三十七品助菩提法	304
三毒	25, 122
三肉飽	219
三鉢梨沙槃	76
三昧	91, 118
三昧力	117

三藐三佛陀	70
鷄豆	231
—シ—	
四種の客塵	299
四種の清淨	305
四食	230
四聖地	144
四天王天	136
四大	162
四諦	86
四法	155
自性	129
自相、同相	132
時火	52
慈悲觀	304
色慢	228
七種の寶性	300
七多羅樹	307
濕生	297
實相	299
舍利弗	291
沙彌	71
沙彌尼	71
車渠	262
莎婆奴	284
婆羅	319
婆羅婆帝	234
除迦	217
除婆羅人	233
朱收摩羅魚	235, 279
須陀	7
須陀會天	324
須陀洹	133
須陀食	138
須大犍	295
須彌山	121
受想思	132
受想行識	197
衆生	296
衆生有爲行海	300
修多羅	81
修羅	158
十惡業	95
十善	232

十地	320
十二相	321
十八種の相	321
初佛地	323
十二因緣	113, 127, 229
諸入	231
諸法本寂	298
生有、四有	38
正定意菩薩摩訶薩	291
正定深滿功德威	310
正信	302
正法	329
青優鉢羅華	248
青因陀法	262
清淨光輪功德莊嚴	316
精奴金光	320
聲聞	65, 101
塵	262
定意菩薩摩訶薩	291
淨居天	324
心數法	217
辛頭河	242
身念	222
身念處	128
身念處、四念處	162
眞身	326
甚深難知廣明智德地	320
盡形	72
—ス—	
數緣無爲等	229
水衣	279
隨	147
—セ—	
世間燈	298
世諦法	306
船師	300
旃陀羅	274
染愛	228
善觀明	307
善、不善、無記	132
禪誦	172
—ソ—	

僧迦除山	253
僧迦藍	111
增上緣	284
總持	155
像法	329
雜色人	273
—タ—	
他驚伽國	233
他代自在天	154
多伽羅香	312, 324
多摩羅跋香	324
胎生	297
大意華	312
大意菩薩摩訶薩	291
大月華	312
大光華	312
大智同性	299, 305
大如意樹	312
大悲所生智相幢如來	309
第二天	154
第二の佛地	328
啖食蟲	223
檀茶迦	237
—チ—	
智意菩薩摩訶薩	291
畜	69
中隱	3
中陰、中有	38
調御丈夫	54
沈水香	324
—テ—	
帝釋	30
鐵圍山	308
天人師	54
轉輪聖王	30, 104
—ト—	
兜羅綿	259
德叉迦龍王	240, 256
等正覺	102
藝薈	181

<p>—ナ—</p>		<p>那迦羅魚 248</p> <p>那由他 145</p>	<p>糞掃衣 79, 107</p>	<p>無等等法光明智相 306</p> <p>無明 84</p> <p>無邊意菩薩摩訶薩 291</p> <p>無漏 226</p> <p>無漏智 132</p>
<p>—ニ—</p>		<p>肉搏 207</p> <p>肉團 204</p> <p>入 5, 155</p> <p>女牆 317</p> <p>如來 102</p> <p>忍</p>	<p>—ホ—</p> <p>步屈蟲 297</p> <p>菩提 102, 305</p> <p>菩提薩埵 89</p> <p>法處 99</p> <p>法身 327</p> <p>報身 326</p> <p>寶國 300</p> <p>弗婆提 37, 164, 236, 245, 281</p> <p>梵行 149</p> <p>梵身天等 275</p> <p>梵天 104</p>	<p>—メ—</p> <p>名色 218</p> <p>命慢 228</p> <p>命命鳥 15, 253</p>
<p>—ハ—</p>		<p>頗梨迦寶 262</p> <p>頗梨峯 241</p> <p>婆嚩 247</p> <p>八分道 99</p> <p>八分の功德水 314</p> <p>鉢盂 176</p>	<p>—マ—</p> <p>摩訶迦葉 291</p> <p>摩訶曼殊沙華 312</p> <p>摩訶曼陀羅華 312</p> <p>摩訶目犍連 291</p> <p>摩訶盧遮那 312</p> <p>摩伽陀 176</p> <p>摩伽羅魚 34</p> <p>摩陀羅 247</p> <p>摩羅耶 291</p> <p>摩羅耶山 237</p> <p>魔 151</p> <p>魔波旬 65</p> <p>末法 327</p> <p>曼殊沙華 312</p> <p>曼陀華 236, 312</p> <p>曼持の諸天 236, 237</p>	<p>—モ—</p> <p>盲龜 292</p> <p>目犍連 307</p>
<p>—ヒ—</p>		<p>毘舍遮 2.7</p> <p>毘舍闍 31, 91</p> <p>毘茶他 242</p> <p>毘尼 106, 69, 247</p> <p>毘毘沙那 291</p> <p>毘琉璃華 236</p> <p>毘留勒天王 248</p> <p>白衣 44, 112</p>	<p>—ヤ—</p> <p>夜叉 139</p> <p>益意菩薩摩訶薩 291</p>	<p>—ヨ—</p> <p>欲界、色界、無色界 139</p>
<p>—フ—</p>		<p>不淨觀 302</p> <p>不可見頂 325</p> <p>不退轉 308</p> <p>父母歌羅邏 325</p> <p>布薩 71</p> <p>福聚 192</p> <p>福田 149, 292</p> <p>佛身 326</p> <p>佛如來壽命無量相震聲威王 307</p> <p>佛の十號 275</p> <p>風眼 189</p>	<p>—ミ—</p> <p>彌勒 54</p> <p>彌勒菩薩摩訶薩 291</p> <p>民陀山 237</p> <p>名色 50</p>	<p>—ラ—</p> <p>羅睺 284</p> <p>羅睺 31</p> <p>羅剎 31, 235</p> <p>羅剎王 293</p> <p>卵生 297</p>
<p>—フ—</p>		<p>—ム—</p> <p>無垢威以徳師子 325</p> <p>無見頂相 325</p> <p>無上士 54</p> <p>無盡意菩薩摩訶薩 291</p>	<p>—リ—</p> <p>楞伽王 292</p> <p>龍梅鬘香 324</p>	<p>—レ—</p> <p>令移 297</p> <p>蓮華城 307</p>
<p>—ロ—</p>		<p>—ロ—</p> <p>盧遮那 312</p> <p>六根 118</p> <p>六齋日 238</p>		

(4)

六種の大神通	320	六味	171	— 7 —	169
六天	65	六欲天	105		
六波羅密	118, 305	鹿愛	26		

乘同性と爲し、亦説一切佛智行入毘盧遮那藏と名く。是の如く受持せよ。爾時、世尊偈を説いて言く。

佛菩提無上の

勝精進を覺らんと欲せば

聖無漏難思の

智法輪を轉ぜんと欲せば

若し法幢を建てんと欲せば

法鼓を打たんと欲せば

法燈を然すを得んと欲せば

法鬘を吹くを得んと欲せば

智明照なるを得んと欲せば

愚癡の闇を滅せんと欲せば

諸の衆生を集めて

菩提智に安立せしめんと欲せば

魔軍を降伏して

一切佛を供養せんと欲せば

諸の世間を照して

尊勝妙清淨に

世の諸法に染まざらんと欲せば

無漏智を得て

行行衆生を利せんと欲せば

清淨利に生ぜんと欲せば

是の如くの妙經寶を

寫、聽、受持せしめ

佛地に通ぜしめんが爲めに

讀誦し及び宣揚せよ

爾時、世尊此の經を説き已りたまふに、海妙深持自在智通菩薩摩訶薩並に一切の諸菩薩衆、佛の所説を聞いて、歡喜し奉行せりき。

て説くべきのみ。

爾時、海妙深持自在知通菩薩摩訶薩佛に白して言く、世尊、誰か是れ一切の惡道を過度する。佛の言く、善丈夫よ、若し此の一切佛智行入毘盧遮那藏甚深如來十地大乘同性經典に於て聞き已りて、信を生じ、信じ已りて、受持し、讀誦し、書寫し、若くは他をして書せしめ、廣く人の爲めに説き、乃至此の經典の名を受持するもの有らば、善丈夫よ、所有應に諸の惡道に墮すべき者も即ち皆度するを得む。菩薩復佛に問うて言く、世尊、誰か是れ菩提心を發す者ぞ。佛の言く、善丈夫、若し能く此の如きの經典を受持し、乃至名字を受持する者は是れなり。菩薩復佛に問うて言く、世尊、誰か是れ菩薩の行を行する者ぞ。佛の言く、善丈夫よ、若し此の經を受持する者有らば是れなり。菩薩復佛に問うて言く、世尊、誰か是れ六波羅蜜を速滿具足する者ぞ。佛の言く、善丈夫よ、若し能く此の經典を受持する者は是れなり。菩薩復佛に問うて言く、世尊、誰か是れ如來に値ふ者ぞ。佛の言く、善丈夫よ、若し能く此の經典を聽く者は是れなり。菩薩復佛に問うて言く、世尊、誰か是れ佛に値ひ授記を得る者ぞ。佛の言く、善丈夫よ、此の如來祕密を持する者は是れなり。菩薩復佛に問うて言く、世尊、誰か是れ、諸の衆生の爲めに大商主と爲る。佛の言く、善丈夫よ、若し此の如來の奧藏を持する者有らば是れなり。菩薩復佛に問うて言く、世尊、誰か是れ佛子なる。佛の言く、善丈夫よ、能く此の經典を信ずる者有らば是れなり。菩薩復佛に問うて言く、世尊、誰か是れ當に一切の菩薩地を得べき。佛の言く、善丈夫よ、能く此の經典を聽く者有らば是なり。菩薩復佛に問うて言く、世尊、誰か是れ一切諸佛の法を得る者ぞ。佛の言く、善丈夫、能く此の妙法明に問うて言く、世尊、誰か是れ一切諸佛の法を知りて彼の供養する者有らば是れなり。菩薩復佛に問うて言く、世尊、誰か是れ聲聞辟支佛の法を知りて彼の涅槃を取らざる。佛の言く、善丈夫、能く此の妙法藏を受くる者有らば是なり。菩薩復佛に問うて言く、世尊、云何が此の經を名け、我等云何が奉持せん。佛の言く、善丈夫よ、此の經を名けて大

【毛】唐譯「法炬」とあり。

養せば、得る所の福業何者か最も多き。佛の言く、善丈夫よ、若し一如來の身を供養せば即ち是れ一切の佛身を供養するなり。何を以ての故に。善丈夫よ、一切の光明は能く諸闇を破して普ねく明を得しむ。而も此の光明は闇と共に住せず。是の如く、是の如し。善丈夫よ、若し各各如來身を供養する者有らば、造る所の福業能く一切の是の無明の闇を破して、解脱の明路を開き、亦諸闇障と共に住せず。海妙深持自在智通菩薩復佛に白して言く、世尊、唯願はくは第二の佛地を顯現したまへ。佛の言く、善丈夫よ、汝能く見るや不や。海妙深持自在智通菩薩の言く、世尊よ、我れ今に於て相に依りて見んことを欲す。爾時、世尊一毛孔の中に、即ち光明を放ちたまふ。無相照と名く。乃至不可説不可説の諸佛刹、所有諸色を一切除滅せり。爾時、世尊、彼の一切菩薩衆に問うて言く、汝等今何の見る所か有る。諸菩薩の言く、世尊、都て有る所無し。唯だ光明を見るのみ。佛の言く、諸の善丈夫よ、汝等此の光明を何にか似たりと見るや。諸菩薩の言く、世尊、我れ唯遍ねく無量百千億那由他恒河沙微塵等の諸佛刹の一大光明を見るのみ。爾時、世尊還た光明を攝めたまふに、佛刹舊の如く是の如く安住せり。是の時、世尊一切諸菩薩の衆に告げて言く、如來若し第二の佛地を説くに、汝等一切尙知聞し難し、何に況んや如來の第三地乃至十地を見ることを得るをや。善丈夫よ、譬へば日月の光明は一切衆生に大利益を作す。彼の日月の力衆生をして一日、半日、一月、半月、乃至一年及び時分有るを知らしむ。衆生は能く分別して彼の日月の色身を見る能はず。汝等唯光輪の形相を見るのみ。是の如く、是の如し。如來至眞等正覺は一切衆生に大利益を作す。是の如來の力は彼の衆生をして諸法若くは罪、若くは福、若くは世間、若くは出世間、若くは有漏、若くは無漏を知るを得せしむ。諸法を知り已りて彼は如實に證し、一切諸有の曠野を度するを得。彼の衆生分別して如來の報身の色相を見得る能はず。唯だ神通の力用應化の形を觀するのみ。是の故に汝等應に是の如く知るべし。如來の諸地は一切の音聲語言を出過せり。唯だ名字有り

道する者當に得道すべき者、是の如きの一切即ち是れ報身なり。海妙深持自在智通菩薩復問うて言く、世尊、何をか名けて如來の應身と爲す。佛の言く、善丈夫よ、猶し今日の躡歩健如來、魔恐怖如來、大慈意如來、是の如き等の一切彼の如來有り。穢濁の世中に現に成佛する者、當に成伴すべき者なり。如來は顯現して兜率より下り、乃至一切の正法、一切の像法、一切の末法を任持したまふ。善丈夫よ、汝今當に知るべし、是の如きの化事、皆是れ應身なり。海妙深持自在智通菩薩復佛に問うて言く、世尊、何をか名けて如來の法身と爲す。佛の言く、善丈夫よ、如來の眞法身は無色、無現、無著にして見るべからず。言説無く、住處無く、相無く、報無く、生無く、滅無く、譬喩無し。是の如く、善丈夫よ、如來の不可說身・法身・無等身・毘盧遮那身・虚空身・不斷身・不壞身・無邊身・至眞身・非虚假身・無譬喩身・是れを眞身と名く。海妙深持自在智通菩薩復佛に問うて言く、世尊、若し諸佛の眞體無色、無現乃至不可說ならば、不可說とは豈斷相に非ずや。佛の言く、善丈夫よ、汝が意に於て云何。虚空界は斷絶有り及び有相なる可きや。海妙深持自在智通菩薩答へて言く、世尊虚空界は斷絶すべからず。亦相有ること無し。世尊よ、何を以ての故に。若し虚空界斷絶有らば、彼の虚空界を無礙と名けず。世尊よ、虚空界には相處・聚處邊處・色處・及び物處有ること無し。是の故に世尊、彼の虚空界は斷絶すべからず。是れ有相に非ず。世尊、是の虚空界は一切處に遍す。佛の言く、善き哉、善き哉、善丈夫よ、是の如し。是の如し。如來の眞實身も斷絶あること無し。亦相有ること無し。何を以ての故に。善丈夫よ、若し如來の眞實身斷絶有らば、亦佛出でて無邊の神通の力を現すること無し。若し有相ならば即ち聚處及び處所の執るべく捉うべき有り。一切の凡夫悉く皆一時に即ち佛と成ることを得む。應に時に依て次第有るべからず。善丈夫よ、是の故に如來眞實の身は斷絶すべきに非ず。亦相有るに非ず。惟是れ普ねく一切衆生の爲めに其の佛事を作す。海妙深持自在智通菩薩復佛に問うて言く、世尊、如來の眞身、報身及び應身を供

【三】一本に滅法に作る。唐譯「示現一切佛法隱沒滅盡」とあり。末法の成語は梵語に未だ見ず。

諸の如來初佛地を得たり。如來此の地中に在りて是の神通を作す。我が如き今日神通異ること無し。海妙深持自在智通菩薩復佛に問うて言く、世尊、若し五濁利中に在りて諸佛如來現に得道する者、當に成道すべき者、而も彼の世尊は如來地を現得し當得するや不や。佛の言く、善丈夫よ、若し諸佛菩薩能く善巧方便を現せば得。所以は何。諸衆生の爲めに大慈心を起し、諸衆生の三有の稠林の中に閉在せるを見む。是の諸の衆生無明の闇中愛網に覆はれ、其の不淨の顛倒の邪見を信じ、無量の諸苦、三惡の岸に臨み、六道に輪廻し、煩惱展轉して前際有ること無し。本際を知らず。彼の諸の衆生諸佛及び諸佛の法、諸の菩薩の法を知らず。又實の如く諸の解脱を知らず。善丈夫よ、諸佛菩薩是の如く彼の一切衆生の多く諸苦を受くるを知る。善丈夫よ、爾時、應佛五濁世界に出現し、或は兜率より下り、胎に入り、胎より生じ、初めて生じ、及び宮中に長じ、出家を喜樂し、苦行して道場に向ひ、降魔成佛して大法輪を轉じ、諸の外道と共に論議する時、法に依りて傲慢の衆數を降伏し、乃至壽を促めて大涅槃を現じ、涅槃に入り已りて、三昧力の故に、自身を顯現し、舍利の大さ芥子の如くなるを分布し、天・龍・人・非人等其の喜心を生じ、供養の爲めの故に、無量百千億那由他の諸の舍利藏を造作せむ。或は彼の法中に於て出家して苦行を修持するもの有り。或は菩提のために種子を作り、煩惱有海の彼岸に度らしむ。善丈夫よ、一切諸佛此の如きの法有り。無量無邊の諸衆生等をして煩惱有海の彼岸に度らしむ。善丈夫よ、汝今當に知るべし。若し五濁世中に如來所現の神通の力は皆佛の應化なり。或は諸の菩薩神通力の故に、善巧方便應化の出づる所なり。海妙深持自在智通菩薩復佛に問うて言く、世尊、佛身幾種ぞ。佛の言く、善丈夫よ、略して説くに三有り。何等をか三と爲す。一には報、二には應、三には眞身なり。海妙深持自在智通菩薩復佛に問うて言く、世尊、何をか名けて如來の報身と爲す。佛の言く、善丈夫よ、若し彼の佛の報を見んと欲せば、汝今當に知るべし、汝が今日我れを見るが如く、現に諸の如來清淨佛刹にして現に得

【三】唐譯「滿安用身、化身、自性身」とあり。

と爲す。毘琉璃・赤眞珠貫・鈴網・綵綵あり。彼の菩提樹電光焰を出し不斷にして絶えず。或は金光を放ち、或は摩尼光、或は因陀羅紺光、或は頗梨光、或は日寶光なり。彼の菩提樹最妙香を出す。所謂、沈水香・多伽羅香・黑沈水香・多摩羅跋香・黑梅檀香・龍梅檀香・牛頭梅檀香等の香なり。香氣出づる時彼の佛刹に遍ねし。其の菩提樹王歌讚の聲を出す。或は寶雨を雨らして諸の世界に遍ねし。彼の菩提樹の下に、其の東面に於て大池を出生す。七寶所成にして清淨にして濁なし。名けて摩訶菩提池王と曰ふ。深さ無邊恒河沙に等しき三千大千微塵等の世界にして縱廣正等なり。閻浮檀金の沙を以て底に布けり。八功德水具足盈滿す。池の四方面に各四階道あり。衆寶に填めらる。種種の雜寶網羅具足せり。彼の池水の中に大蓮華花を出す。善聞敷菩提蓮花相王と名く。七寶所成なり。縱廣無邊恒河沙等三千大千微塵等世界にして、七寶所作なり。復百千億那由他無量無邊諸寶蓮花ありて周匝圍遶せり。衆妙の七寶莊嚴を葉と爲す。柔軟の妙香人をして愛樂せしむ。其の蓮花王臺上に菩提聳王を出す。無邊寶嚴飾と名く。七寶所成なり。高さ阿僧祇恒河沙等三千大千微塵剎等の世界にして、縱廣正等なり。彼の寶嚴飾菩提聳王は所有服飾の最勝最多上中の上なり。彼の寶莊嚴殿中の所有の服飾、所有の莊嚴及び神通力百分千百分百億分、其の一に及ばず。譬へば螢火の日光の前に在らんに、其の明、隱翳ならんが如し。是の如く、是の如く、寶莊嚴殿無邊寶嚴飾菩提聳王の前に在る時、全く復現ぜざること是の如し。種種無量無邊莊嚴瓔珞、所有服飾、神通莊嚴及び光明、能く一切日月の光明をして悉く照す能はず、精光有ること無からしむ。一切の帝釋光、一切の梵天光、一切の首陀會天光、彼の無邊寶嚴飾菩提聳王の前に於て、若くは明、若くは光、若くは精、若くは照有る所のもの此の事有ること無し。彼の聲中に於て、摩訶菩提師子座王を出す。善照無礙師子莊嚴と名く。七寶所成にして、光色具足す。迦尸迦大衣を以て其の上を覆へり。高さ百億恒河沙等微塵等世界にして、縱廣正等なり。釋迦牟尼即ち彼の師子座の上に坐し、轉じて無垢威功

【10】 Indranila 即ち他處に謂ふ帝青色なり。帶黑紺香を云ふ。

【11】 蓮花王と云ひ菩提聳王と云ふが如く王を附するは其の物の勝れたるを表はすなり。衆人は人の歩いて轆く車を云へども、此にては車と同じ。

【12】 唐譯「淨居天」Suddhāvahāni

離垢地、三には發光地、四には焰慧地、五には難勝地、六には現前地、七には遠行地、八には不動地、九には善慧地、十には法雲地なり。善丈夫よ、是を菩薩十種の諸地と名く。海妙深持菩薩復佛に問うて言く、世尊、一切の白地何處より生ずる。佛の言く、善丈夫よ、一切の白地は佛地より生ず。海妙深持菩薩復佛に問うて言く、世尊、解脫、解脫、彼此何の異かある。佛の言く、善丈夫、河水海水彼此異なるや不や。海妙深持菩薩の言く、世尊、河水海水廣狹異有り。佛の言く、是の如し、善丈夫よ、聲聞辟支佛の解脫は彼の河水の如し。如來の解脫は大海水の如し。海妙深持菩薩復佛に問うて言く、世尊、諸の大小の河流水に入るや不や。佛の言く、是の如し、是の如し、善丈夫よ、汝の所説の如し。何を以ての故に。あらゆる聲聞法、辟支佛法、菩薩法、諸佛法、是の如きの一切諸法皆悉く毘盧遮那智藏大海に流入す。海妙深持菩薩復問うて言く、世尊、唯願はくは世尊、初佛地を現じたまへ。彼の初地に住して、一切如來の境界を顯現し、諸の聲聞辟支佛等をして歡喜踊躍せしめたまへ。

爾時、世尊自の佛刹を現じたまふ。無邊阿僧祇功德莊嚴寶具蓋不思議莊嚴佛刹王と名く。縱廣百千億那由他恒河數三千大千世界微塵等諸佛刹なり。是の時諸の佛刹無邊阿僧祇功德莊嚴寶具蓋不思議莊嚴佛刹の中に入り、皆同一名なり。あらゆる小須彌・中須彌・大須彌、一切の黑山、及び小河・中河・大河、及び諸大海・諸山林谷・磐石・峯崖・叢穢・沙鹵・險惡の處、悉く皆除滅し、地獄・畜生・餓鬼等の道有ること無し。及び天・龍・夜叉・捷勝婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等亦悉く除滅し、舊佛刹土功德莊嚴瓔珞等有ること無し。此の佛刹の中あらゆる地際皆琉璃もて成る。平整にして掌の如く、大因陀羅紺色金剛を佛刹の中と爲す。最上微妙の莊嚴寶花を出す。阿輸歌林あり。菩提樹王と名く。七寶所成にして、雜妙色有り。此の菩提樹王の高さ無邊恒河沙佛刹微塵世界にして縱廣正等なり。彼の菩提樹王種種の妙寶を以て花葉果實枝柯と爲す。師子無礙摩尼雜寶を以て莊嚴

【三】 一本には明地とす。

【二】 一本に白地に作る。

【一】 一本に「王」を「土」に作る。此の下や意義通稱を缺く。唐譯に「爾時、世尊自の佛刹を現じたまふ。無邊阿僧祇功德莊嚴不可思議莊嚴と名く。其の土廣博にして俱胝那由他恒河沙三千大千世界微塵等の佛刹も一一皆無邊阿僧祇功德莊嚴不可思議莊嚴佛刹王中に入る。」とあるもの正しきに似たり。

【二】 唐譯「最上勝妙の寶華莊嚴、無礙菩提樹王」。

最勝無上尊

二五

一切諸佛の地を説きたまへ

我等今驚き怪む

諸地の名を聞き已りて

飢えたるものの美食を思ひ

是の如く我れ聞かんと欲す

此の間に等しきもの無し

向に已に名を説きたまふ

未だ曾て此の法を聞かず

心意俱に踊躍す

渴けるもの、甘泉を念ふが如し

願はくは佛諸地を説きたまへ

此の語を説き已りて彼の諸の菩薩佛を遶ること三匝し、世尊の足を禮して各各蓮花座に在りて坐す。爾時世尊師子王之如く安座として顧視し、十方を觀察し、十方を觀已りて、海妙深持自在智通菩薩摩訶薩に告げて言く、善丈夫よ、如來の諸地は甚深にして知り難く、底を得べからず。覺了すべきこと難し。一切の文辭言説を出過せり。何を以ての故に。善丈夫よ、聲聞辟支佛等の諸地すら尙ほ説くべからず。何に況んや菩薩の諸地、一切の如來の佛地の名をや。時に海妙深持菩薩佛に白して言く、世尊、聲聞の諸地幾多有りとや爲ん。佛の言く、善丈夫よ、聲聞の地に凡そ十種有り。何等をか十と爲る。一には受三歸地、二には信地、三には信法地、四には内凡夫地、五には學信戒地、六には八人地、七には須陀洹地、八には斯陀含地、九には阿那含地、十には阿羅漢地なり。善丈夫よ、是を十種聲聞の地と名く。海妙深持菩薩復佛に問うて言く、世尊、辟支佛地復幾許か有る。佛の言く、善丈夫よ、辟支佛地には其の十種あり。何等をか十と爲す。一には昔行具足地、二には自覺甚深十二因緣地、三には覺了四聖諦地、四には甚深利智地、五には八聖道地、六には覺了法界虚空界衆生界地、七には證寂滅地、八には六通地、九には徹祕密地、十には得氣漸漸地なり。善丈夫よ、是を十種の辟支佛地と名く。海妙深持菩薩復佛に問うて言く、世尊、諸の菩薩の地復幾種か有る。佛の言く、善丈夫よ、菩薩の諸地は其れ十種有り。何をか十と爲す。一には歡喜地、二には

【二五】 一本「道」に作る。

一切菩薩に阿耨多羅三藐三菩提の四種記を授くるが故に。第九地は諸の菩薩の爲めに善方便を現するが故に。第十地は諸の菩薩の爲めに一切諸法無所有を説くが故に。復告げて一切諸法本來寂滅大涅槃なることを知らしむるが故に。世尊此の如來十地の名を説き已りたまふに、即時に此の娑婆佛刹 至十方不可説の諸の佛刹等、一切十八種の相を現す。所謂、地動中動大動、小搖中搖大搖、小震中震及び大震、小聲中聲及び大聲、小吼中吼及び大吼、小踊中踊及び大踊、是の諸の佛刹或は東に傾き西に起き、西に傾きて東に起き、或は南に傾き北に起き、北に傾き南に起き、或は中沒して邊起き、邊沒して中起き、一切の佛刹是の如く旋轉して十二相を現じ、其の中一の衆生も惱害有るもの無し。大勝光を放ちて諸の佛刹を照し、一切世間の諸闇を滅除し、普ねく光明を得せしめ、あらゆる一切の諸佛の刹土皆悉く此の佛刹中に於て現す。或は佛刹の中に佛有り、佛無し。若くは成、若くは壞、亦皆此の佛刹中に現す。彼の諸の佛刹大天花を雨らし、十方不可説不可説の諸の佛刹中に遍滿す。所謂、曼陀羅花・摩訶曼陀羅花・曼殊沙花・摩訶曼殊沙花・盧遮華・摩訶盧遮華・月華・大月華・蓋月花等なり。乃至一切の刹中、所有音樂鼓せざるに自から鳴る。大希有の事皆悉く諸の佛刹中に出現す。彼の諸の佛刹の所有持者悉く坐より起ち、各如來に諸の希有事を問ふ。時に彼の諸如來其れが爲めに廣く説いて疑問とする所を解せしむ。

爾時、此の寶莊嚴殿中、海妙深持自在智通菩薩摩訶薩及び諸の菩薩集坐して衆等咸た悉く驚き怪しむ。奇なる哉、奇異なるかな、何の因、何の緣ありてか、世尊は此の佛深境界、如來の所行を説きたたまふや。甚深にして知り難く、微密にして見難し。一切菩薩の所行の處に非ず。況んや諸の聲聞及び辟支佛をや。何を以ての故に。我等未だ曾て此の如きの如來の十地、不可思議諸佛の境界を聞くことを得ず。我等此の善事の爲めに和合し相隨ひ、如來至眞等正覺に佛地を廣説せんことを請ひたてまつる。諸菩薩摩訶薩各坐より起ち、合掌して佛に向ひ偈を説いて請ひて言く、

【三】 前段に日華大日華とするものはなり。唐譯の光華大光華に相當す。原語恐らくは *devata* 及び *maharajama* なるべし。

【四】 此の一字原文「花」に作る。

たてまつる。是の語を作し已るに、佛海妙深持自在智通菩薩摩訶薩に告げて言く、善丈夫よ、今若し疑有らば、汝の樂問を恣にせよ。吾れ當に汝が爲めに分別し解説し、心をして歡喜せしむべし。爾時、海妙深持自在智通菩薩摩訶薩佛に白して言く、世尊、佛地に幾ばくか有るや。一切菩薩及び聲聞辟支佛の行する能はざる所なり。是の語を作し已るに、佛海妙深持自在智通菩薩摩訶薩に告げて言く、善き哉、善き哉、善丈夫よ、汝今一切の菩薩をして能く明了を作し、利益し、安樂ならしめ、佛智を顯現せしめんと欲し、乃ち能く如來に此の事を問へり。汝善丈夫、諦かに聽き、諦かに受け、善く之を思念せよ。吾れ當に汝が爲めに分別し解説すべし。善丈夫よ、佛に十地有り。一切の菩薩及び聲聞辟支佛の行する能はざる所なり。何をか十と爲す。一に甚深難知度明智德地と名く。二に清淨身分威嚴不思議明德地と名く。三に善明月幢寶相海藏地と名く、四に精妙金光と名く。功德神通智德地と名く。五に火輪威藏明德地と名く。六に虚空内清淨無垢焰光開相地と名く。七に廣勝法界藏明界地と名く、八に最淨覺智藏能淨無垢遍無礙智通地と名く。九に無邊億莊嚴迴向能照明地と名く。十に毘盧遮那智海藏地と名く。善丈夫よ、此は是れ如來十地の名號なり。諸佛の智慧も具さに説くべからず。善丈夫よ、佛の初地は一切の微細の習氣除かるゝが故に。復一切法に自在を得るが故に。第二地は轉法輪の故に。深法を説くが故に。第三地は聲聞の戒を説くが故に。又復三乘を顯説するが故に。第四地は八萬四千の法門を説くが故に。又復四種の魔を降伏するが故に。第五地は如法に諸の外道を降伏するが故に。又復傲慢及衆數を降伏するが故に。第六地は無量の衆生を六通の中に教示するが故に。又復三種の大神通を顯現するが故に。謂く、無邊の清淨佛利の功德莊嚴を顯現し、無邊菩薩の大衆圍繞を顯現し、無邊廣大の佛利を顯現し、無邊佛利の自體を顯現し、無邊諸佛利の中、兜率天より下り、託胎乃至法滅を顯現し、無邊種種の神通を顯現す。第七地は諸の菩薩の爲めに如實に七菩提分を説き所有無きが故に。復所著なるが故に。第八地は

【三】 如來十地の名號。

【三】 如來十地の相。

【三】 三種の大神通。

已りて、又復此の勝供養の具を出す。所謂寶眞珠貫、牛頭梅檀、七寶を花と爲すもの、大寶珠の師子無礙寶藏と名くる清淨明徹なるものを以て、手を以て執持して、世尊及び菩薩の衆を供養し、供養の爲の故に、如來に散じて遍ねく其の上を覆ひ、散じじりて世尊の足を禮し、遶ること百千匝、佛に向ひ合掌して、偈を以て讚して曰く、

無量の妙相身を顯現し

螺髻には孔雀鳥蜂の色あり

毫相圓かに開いて妙花の如く

鼻高く隆直にして妙なること譬無し

耳埵妙なること芭蕉の華の如く、

舌廣く紅色にして勝味を得

妙肩洪滿にして現に闕なく

爪甲長妙にして赤銅色あり

足下に千輻妙輪の相あり

功德形勝れて師子の臆

腰は弓 肥金剛杵の如く

髀脰圓滿にして象鼻の如く

指掌輪相あり鵝王の網

如來は此の一切相を具したまふ

爾時、海妙深持自在智通菩薩摩訶薩、讚歎し訖りて復佛に白して言く、世尊、我れ今疑有り。如來至眞等正覺に問ひたてまつらんと欲す。若し佛世尊我が疑問を開きたまはゞ乃ち敢へて説を請ひ

平正端嚴にして闕少無し

額平に悅澤にして廣く開けり

雙眉の形は初生の月に似たり

眼は日の青蓮を照す色の如し

齒は齊しくして白き拘勿頭の如し

唇厚く圓滿にして赤朱の色あり

垂れたる臂は風の 婆羅を吹くが如し

手指綬網鵝王の如し

皆往昔大施主たりしに由る

體相莊嚴妙にして端正なり

陰相現せず馬藏の如し。

脚踝端正にして而も平滿なり

進止徐庠として師子の歩

是の故に功德王に頂禮したてまつる

【八】婆羅は *Vara*、又は *Sila*、一本婆羅に作るも明かに誤なり。

【九】肥はゆづかか調じ、弓の中央部にして手に執るところを云ふ。

盈滿せり。一一の池の中に、無數百千億那由他の蓮花開敷せり。七寶を填飾し、妙色端正なり。是の諸の蓮華大さ車輪の如し。龍王よ、彼の寶莊嚴殿に寶樹園有り。周匝し圍遶して如意樹有り。種種の雜寶花果をもて莊嚴せり。諸の鈴網及び眞珠貫、繡綵細疊以て莊飾と爲す。微妙の香を出して心をして踊躍せしむ。種種の寶塔妙色端正以て莊嚴と爲す。龍王よ、一一の樹下に各七寶師子の座有り。天の迦尸迦衣以て敷具と爲す。彼の師子座高廣微妙にして成就具足し、一切諸佛菩薩に稱可せり。龍王よ、十方所有の一切諸佛刹、所有の瓔珞莊嚴及び諸花雨、一切彼の寶莊嚴殿に現す。龍王よ、彼の寶莊嚴殿は是の如き等の大及び安住あり。爾時、世尊菩薩の衆に告げて言く、諸の善丈夫よ、海妙深持自在智通菩薩摩訶薩の願を滿さんが爲めの故に、汝等我れに隨つて寶莊嚴殿に向ひ、彼處に俱に坐せよ。爾時、世尊座より起ち、不可數の諸菩薩摩訶薩と與に、前後圍遶せらたまふ。時に海妙深持自在智通菩薩は右邊に在り、彌勒菩薩は左邊に在り。虚空の中に於て安座にして去りたまひ、寶莊嚴殿に向ふ。彼處に至り已りて、爾時に世尊菩薩の衆と與に彼の寶莊嚴殿に入る。殿中東面して師子座有り。高さ無數由旬にして縱廣正等なり。是の時に世尊即ち其の上に坐したまふ。世尊師子座に坐したまふ時、彼の寶莊嚴殿六種に震動し、百千億那由他無量種種の大光明網を出す。所謂青・黃・赤・白・紅・紫・金色なり。彼の諸の天子天の音樂及び歌讚を作し、大天花を雨らし、然も諸の天香恒に斷絶せず。爾時、世尊菩薩衆に告げて言く、諸の善丈夫よ、汝等各各蓮華座を敷きて其の上に坐せよ。世尊勅し已りて彼の菩薩衆各蓮華座上に就て坐す。佛及び菩薩摩訶薩衆皆悉く坐し已る。時に海妙深持自在智通菩薩摩訶薩是の思惟を作さく、我れ今如來至眞等正覺を供養したてまつり、兼ねて復許請して佛地を問はむ。時に海妙深持自在智通菩薩摩訶薩即ち坐より起ち、意に隨つて所生の種種無量無邊阿僧祇の花・香・塗香・末香・花冠・衣服・幢幡・寶蓋・音樂・歌讚をもて世尊及び菩薩の衆を供養し、恭敬し、尊重し、承事供養せり。希有心を生じて供養し

【三】唐譯「寶嚴錯峙」とあり。「寶塔」は或に「寶構」ならざるか。

【四】Kautila 前註を看よ。

たまへ。爾時、世尊、海妙深持自在智通菩薩摩訶薩に告げて言く、善き哉、善き哉、善丈夫よ、汝今此の寶莊嚴殿を以て、如來至眞等正覺に奉施せり。善丈夫よ、汝は此の賢劫の中に於て毘婆尸佛より已來、乃至賢劫の千佛まで、此の一切寶莊嚴殿を以て、過去亦施し、現在亦施し、未來亦施さむ。善き哉、丈夫よ、乃ち能く此の大寶莊嚴殿を以て此の中に娑婆佛刹を嚴飾せむ。

二 爾時、海龍王佛に白して言く、世尊、寶莊嚴殿今何處にか在る。復大小若ん。爾時世尊、龍王に告げて言く、龍王よ、彼の寶莊嚴殿置いて欲色二界の空中に在り。縱廣三千大千世界なり。龍王よ、彼の寶莊嚴殿は、一切諸佛菩薩の神通三昧力の故に彼の寶殿を出す。一切菩薩安樂の處、以て供養して如來に奉獻するに堪へたり。龍王よ、復彼の寶殿は佛所居の處、又是れ如來福力の故に生ず。能く菩薩の心をして清淨を得せしむ。復能く十方世界を照明し、諸の衆生をして心意歡喜せしむ。一切諸天の宮殿を隱翳し、不可說無邊の莊嚴の事成就し具足せり。普ねく十方一切の菩薩に告げて皆覺知せしめよ。龍王よ、彼の寶莊嚴殿は白琉璃を三土と爲し、閻浮檀金を壁と爲し、功德藏寶を以て女牆と爲し、馬瑙藏寶を以て却敵と爲し、摩尼寶藏を以て欄楯と爲し、淨光明寶を以て欄柱と爲し、普光明寶を以て其の輦と爲し、一切衆寶を以て其の座と爲し、一切雜寶、半月形の如く光明無邊なるを以て殿上を覆へり。八萬四千億那由他の柱あり。雜色端嚴にして衆寶の成ずる所なり。精妙具足、最勝の供養、如來に稱可せり。龍王よ、其れ彼の寶殿に諸の雜寶無量無邊の眞珠の綺綵、金鈴羅網を懸けたり。正妙幢を立て、諸の幡蓋を懸け、牛頭栴檀を以て其の地に塗り、堅栴檀及び沈水最上の妙香を燒いて之を以て熏と爲す。龍珠、寶華間錯して莊嚴し、種種の華を以て遍ぬく其の地に散ぜり。龍王よ、彼の寶莊嚴殿の一切あらゆる諸殿の柱上に無數千億の諸天子坐して天の五音を作し、最妙の歌讚聲を出して踊躍せしむ。諸法明門音樂より出づ。龍王よ、彼の寶莊嚴は周匝輪迴する大風の持する所、千億の七寶の妙池有り。金沙を底と爲す。八功德水清淨にして

【二】 以下は寶莊嚴殿に關する叙述なり。

【三】 原本「上」とあれども唐譯に照すに「白琉璃爲地」とあれは「上」は明かに「土」の寫誤なり。

【四】 唐譯「勝藏寶を以て都欄峯と爲す」に照せば原語の「勝藏」にして四牆の寫誤ならむか。

【五】 半月形とは建築物の一部分にして形より名を得たり。唐譯「覆以一切妙寶半月」とあり。以て其の意を知るべし。

【六】 「熏」を一本に燃に作る。今已に燒香なること明かなれば取らず。

蓮華百千邊有ること無し

億數の幢蓋及び繪幡

無量種の福慧光明は

世尊何事ぞ此の相を

復雜華妙寶樹有り

並びに眞珠貫鈴網等

一切惡道の苦を滅除せり

明淨娑婆佛利の中に現じたまふや

此の語を説き已るに、佛彌勒菩薩摩訶薩に告げて言く、汝復た坐すべし。吾れ當に汝の爲めに分別し解説すべし。何の因、何の緣ありてか大希有法世間に現すとならば、彌勒よ、東方阿僧祇洹河沙等の佛刹を過ぎて、彼に佛刹有り。清淨光輪功德莊嚴と名く。寶纒をもて圍を界せり。彼の佛刹に佛有り。開敷精妙具莊嚴神通法界輪一蓋吼聲毘盧遮那藏安自在王如來至眞等正覺と名く。現在遊行して法要を演説せり。世界清淨にして慳貪瞋癡一切の煩惱諸惡道等を除滅せり。彼の佛刹の中、十住の菩薩摩訶薩の居住する所なり。彼の佛刹の中に菩薩摩訶薩有り。海妙深持自在智通と名く。一切の菩薩の禪定三昧神通陀羅尼を得ること最も第一なり。一切の寶莊嚴殿を持して、過無邊數の諸の菩薩摩訶薩と虚空の中より此の娑婆佛刹に來至せんと欲す。是の善丈夫の威神力の故に、此の世界に於て大莊嚴神通自在を作し、先づ是の事を現するなり。

爾時、世尊此の事を説き已りたまふに、海妙深持自在智通菩薩摩訶薩及び其の後徒衆、即時に大威德光輪を現す。莊嚴の中、無量億の光明羅網有り、具足圍遶して虚空の中を行く。百千種の音樂歌詠を作し、部別各各に衆の天華を雨らし、復百千億那由他の光明を放ちて此の娑婆佛刹に來至し、即ち寶莊嚴殿を以て欲色二界の空中に安置す。既に安置し已りて其の後衆と與に空中より下り、佛所に至りて、合掌して佛に向ひ、接足頂禮して、圍遶すること三匝す。爾時、海妙深持自在智通菩薩摩訶薩其の徒衆と合掌恭敬して佛に白して言く、世尊、唯願くは我等を憐愍して、此の寶莊嚴殿を納受して坐したまへ。世尊よ、此の寶莊嚴殿に於て、大菩薩衆の爲めに、無等等深妙の法を説き

數の幢幡懸蓋有り。種種の雜寶間錯して成る。虛空の中に於て無量無邊の眞珠等の寶、及び諸の繪綵を懸け、復無量無邊の寶鈴羅網を懸けたり。是の如き等の功德莊嚴有り。此の佛刹に於て自然に顯現す。是の如く不可説・無量無邊・阿僧祇の未曾有の事、此の娑婆佛刹中に於て現す。又不可説・不可量・不可數の大莊嚴神通の力、昔より未だ見ざる所、本未だ曾て聞かざるもの、此の娑婆世界中に於て、是の如き等の最大最勝希有の法を現ぜりき。

爾時、彌勒菩薩摩訶薩即ち此の念を發せり。何の因、何の緣ありてか、此の佛刹の中に希有不可思議大莊嚴事を顯現し、神通の力業をして踊躍せしむるや。我れ當に佛至眞等正覺に問ひたてまつり、此の疑心を破らむ。爾時、彌勒菩薩摩訶薩座より起ち、偏に右の肩を袒ぎ、其の右膝を以て蓮華の上に置き、佛に向ひて合掌して佛に白して言く、世尊、我れ今疑有り。如來に問ひたてまつらんと欲す。願くは疑網を開きたまへ。佛彌勒に告ぐ。如來至眞等正覺常に汝の問を聞く。若し疑惑有らば、當に爲に解説すべし。爾時、彌勒菩薩摩訶薩佛の許を蒙り已りて佛に白して言く、世尊、是れ誰の因緣ありてか此の事相有るや。此の娑婆佛刹に於て是の如きの希有奇特踊躍の法を顯現するや。所謂神通力を現じて、一切の功德莊嚴あり。佛刹は勝淨嚴飾、明徹無垢なり。一切の惡心は悉く已に除滅し、乃至稱説すべからず。窮盡有ること無し。未だ曾て聞見せず。世尊、此の菩薩衆是の如き等の神通の法として世間に顯現せるを見、一切疑惑せり。世尊、何事をか爲したまはんと欲す。爾時、彌勒菩薩摩訶薩偈を説いて佛に問ひたてまつる。

世間希有今是れ何ぞ

顯現是の如し大世尊よ、

驚き怪む。未だ曾て斯の法有らず

今此の事に於て疑惑を生ず

大地並びに巨海を震動し

或は淨世界に安住する有り

清淨の金光網を開敷して

世間一切の闇を除滅せり

【〇】、「佛に合掌を向け」と讀むに至當とすべきか。前註合掌向佛を見よ。

金色にして精妙

多種雜寶の座

威光百の日の如く

無量諸池の邊

八分の功德水

百千種の蓮華

廣大なること車輪の如く

復堅牢の座有り

百千億千の天

諸の微妙音を奏して

如來神力の故に

日月を翳障す

諸菩薩有りて坐す

衆相身を莊嚴せり

摩尼寶周匝せり

清淨にして中に盈滿す

陂池の裏を莊嚴す

展轉して前に倍す

一切寶を以て成ずる所

天衆悉く端嚴なり

讚歎し及び歌詠す

此の衆妙聲を出す。

是の如き等の音樂・歌詠・事相偈法を出し、過無量無邊阿僧祇の法句有り。爾時、世尊の集會の中、あらゆる諸天及び人等、大乘の行者、大乘を樂しむ者、信廣く大意なる者有り。此の無邊の光明力に因るが故に、彼の一切の佛刹土の如きの功德莊嚴の清淨を見る。其の中の天・人・聲聞・辟支佛の行を行する者有り。佛刹の功德莊嚴の清淨を見ず、知らず。其の諸の菩薩摩訶薩等此の刹中に在りて、悉く無量無邊阿僧祇の三昧神通法句を得。復諸の大聲聞有りて一切寂滅三昧に入るを得。爾時、獅子座有り。縱廣正等にして、高さ百億由旬なるもの自然に現す。七寶所成にして天衣を上に敷けり。時に如來有り、身大にして無邊、坐上に現じ、如臥して坐す。其の身相好端嚴にして譬無し。顯現具足せり。大蓮花有り。縱廣正等にして高さ八萬四千由旬、七寶の作す所、佛の前に出現す。無量百千億那由他の蓮花有り。莊嚴し圍遶せり。開敷し柔軟にして精妙端嚴なり。復過無量阿僧祇

諸の瓔珞を雨らす。閻浮檀金を以て所作し成就せり。種種の雜寶間錯して微妙なり。所謂、鑲劍・耳璫・天冠・臂印・珠繩・寶璣・金鎖・瓔珞、是の如き等の雨なり。又彼の諸の寶如意樹の下に、百千億那由他の師子の座を出生す。各種種七寶を以て成ずる所なり。彼の師子座高さ七仞、菩薩上に坐し、三十二相其の身を莊嚴し、容貌端嚴にして衆の惑ひ見る所なり。其の身の内外自然に明徹なり。彼は一切諸の菩薩の前に、百千億那由他の榻を出生す。各七寶より成る。彼の諸の榻の上に各千の天子ありて其の上に坐し、五音の樂を奏し、並びに歌歎を出す。其の聲精妙にして能く聞く者をして心意を喜躍せしむ。其の音聲の中に諸の歌讚を出し、是の偈を説いて言く、

平等にして等しく等しきもの無し
功德莊嚴を具すること

諸の苦行を精進し

莊嚴の事を生ぜり

能く地獄等のあらゆる

及び諸有等の苦

彼の塵垢の穢諸人等の

善勝微妙の事

今無邊の刹

大山及び諸河

琉璃を以て地と爲し

諸寶雜色樹

刹中復此の嚴淨なる

我所悉く皆無し

一切世に希有なり

此の法是の如く微妙

故に一切世に現す

生道の苦を除き

是の時皆滅するを得む

癩垢を除けば

故に諸人の中に現す

是の時皆平廣にして

須彌海悉く無し

清淨にして平なること掌の如し

精妙にして普く樂見す

焰光明有り

卷の 下

是の時、雜類の衆生貪欲・瞋恚・愚癡・慳妬等の心有ること無し。唯だ善心・慈心・安樂の心有り。猶し父母・兄弟・姊妹の如し。是の時に當り、一切の衆生是の如き等を得て、心行安樂に、歡喜踊躍し、諸根遍滿せり。復熱及び憂愁無し。是の如く一切の衆生樂心具足し、高聲及び諸の大聲を聞かず。復此の大地平正にして掌の如し。琉璃所成なり。種種深廣の妙池を化出す。七寶を砌となし、金沙を底に布けり。八功德水清淨にして盈滿す。彼の諸の池の中に自然に無量の蓮華を化出す。大さ車輪の如し。彼の諸の妙華七寶の色有り。開敷すること微妙にして、其の莖柔軟なり。或は復無量の蓮華を化出す。廣きこと一由旬なり。雜色精妙にして香氣柔軟、迦陵伽衣の如し。又百千億那由他の諸種種なる蓮華莊嚴を化出す。或は復無量の蓮華を化出す。廣きこと二由旬なり。或は三、四、五乃至一十、二十、三十、四十、五十、及び百由旬なり。或は復無量の蓮華を化出す。廣きこと千由旬なり。是の時、娑婆佛刹大香雨を雨ふらして諸地に灑ぐ。彼の水香氣柔軟微妙にして、能く衆生をして歡喜踊躍せしむ。諸の微妙の風吹けば、彼の種種の天の妙華雨自然に墮落す。所謂、曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華・月華・大月華・意華・大意華、是の如きの廣大の諸華を雨らす。復勝妙なる諸の末香雨有り。復沈香・多伽羅香・黑沈水香・牛頭栴檀有り。此等の香烟是の如く出現して處處に遍滿す。又復過無量百千億那由他阿僧祇數の大如意樹を出生す。七寶所成にして縱廣下或は一由旬乃至百由旬なり。最勝端嚴にして悉く皆樂見す。其の諸の寶樹、種種の寶・衣服・繒絲・白拂を以て垂れ、鈴網莊嚴せり。彼の諸の寶樹、種種精妙の七寶を雨らす。所謂金・銀・琉璃・摩尼・眞珠・車渠・馬瑙・赤眞珠の貫、是の如き等の雨なり。又諸の寶樹、種種柔軟の雜色の衣服を雨らす。所謂、歌奢衣・俱奢衣・橋奢耶衣・歌尸歌衣、是の如き等の雨なり。又諸の寶樹、

- 【一】原文「遍滿諸根」とあり。これにては通ぜず。對照すべき異譯無し。蓋し語根 spharṇa 又は spharṇi の相違にかゝる譯語を生ぜしならむか。即ち遍滿は恐らくは spharṇa ならむも、これは寧ろ spharṇita 又は spharṇita とすべきものにて、これならば開展し、若くは「明利」と譯すべきものなり。
- 【二】砌は階下の石だ、み（甃）なり。
- 【三】迦陵伽衣恐らくは Kāṭikā, Inḍrapāṭikā なるよし。カリంగా地方より出でたる布帛の意。尙ほ常に柔軟を表はす遊旃隣陀 Kaśīndika と關係あるや否や、考ふべし。
- 【四】月華大月華を後段には虛遣華、摩訶虛遣華とす、唐譯に光華大光華となすものこれに相當す。後註を見よ。
- 【五】原文「垂氈」とあり。一本「垂氈」に作るも明かならず。
- 【六】Kāṭiyā カシー即ちペナレス地方より出でたるの意、布帛の名。
- 【七】Kūṭya 草の名なれども、絹を意味するが如し。
- 【八】Kāṭikāyā 胡布の總稱。
- 【九】Kāṭikā カシーより出でたるの意。布帛の名。

なり。時に彼の世中に羅刹衆とは更に別衆に非ず。今の毘毘沙那楞伽王の羅刹衆是なり。龍王よ、汝が意に於て云何。時に彼の世中の正定深滿功德威呪神王とは亦別人に非ず。即ち是れ海妙深持自在智通菩薩摩訶薩是なり。^{四九}是の語を作し已りたまふに、此の三千大千世界即時に震動す。猶し船舶の大海の中に在りて波に隨つて動搖するが如し。衆生の類中、見て驚怖し及び害せらるゝ者無し。唯一切安隱快樂を得、一切の衆生は十善の行を持せり。時に此の娑婆佛刹利高山・須彌・大海・國土・聚落・山林・海島・黑山・龜窟・稠林・園池・河泉・陂澤・丘陵・坑坎・崖隴・石壁・沙鹵・棘刺・泥蕪・臭穢を除去し、惡むべきを悉く除き、閻浮檀金の日光普ねく此の三千大千世界所有一切大小の鐵圍山中の一切の諸闇、一切の光明及び日月の照さざる處を照し、彼の明遍ねく照して日月を隱蔽せり。況んや餘の光明一切の諸影是の時現ぜず。一切の地獄畜生餓鬼等の苦を滅除し、即時に此の娑婆世界諸天人等、若し苦惱有らば一切皆安隱受樂を得、若し衆生飢うる者有らば食を得、渴する者は飲を得、裸者は衣を得、貧者は寶を得、盲者は色を見、聾者は聲を聞き、啞者は能く語り、六根殘缺なるは悉く具足するを得、牢獄に閉在するものは普ねく皆解脱せりき。

【四九】以下この娑婆世界清淨の土となる叙述。

しむべし。龍王よ、時に毘毘沙歌羅利童子、好堅甲を帯び、羅刹の衆と、各種種別色の器械を持ち、虚空を飛行して彼の大悲所生智相幢如來に向へり。往いて彼に至り已りて虚空に住し、其の徒衆と與に世尊に語りて言く、去れ、去れ、沙門よ、我れ汝の此の山頂に住するを用とせず。復我れをして汝沙門及び汝衆等を殺さしむる莫れ。龍王よ、爾時、大悲所生智相幢如來即ち神通を現す。神通を現じ已るに、時に毘毘沙歌羅利童子及び其の徒衆、各自身に五繫縛を被るを見、又十方に鐵網の羅布せるを見る。走らんと欲するに路無し。慄然として定住す。龍王よ、時に毘毘沙歌羅利童子及び羅刹衆、心驚き惶怖して即ち是の念を生ず。我等今何れの處にか去らんと欲する。歸命を誰にか求め、誰に向つて救を求め、誰か我等の難を脱れしめむ。龍王よ、爾時、彼の佛の衆中に呪神王有り。正定深滿功德威と名く。彼の毘毘沙歌羅利童子と宿善友と作る。彼の世尊の衆中集に在りて坐せり。龍王よ、爾時、正定深滿功德威持呪神王毘毘沙歌羅利童子に語つて言く、善友よ、諸佛世尊人天を教化したまふ。得る所無量諸功德の法なり。三界の獨尊、衆生中の寶、大悲の行有り。汝善友及び羅刹衆、此に(佛)及び法僧に歸依すべし。汝等三寶に歸依して菩提心を發さば、一切の繫縛即ち解脱を得む。是の語を説き已るに、龍王よ、爾時、正定深滿功德威持呪神王の教化力と及び佛の威神力の故に、即時に毘毘沙歌羅利童子及び羅刹衆、俱に共に合掌して是の如きの言を出す。南無、無邊功德莊嚴身者、南無最上大悲覺者、我等汝と今日已去、佛及び法僧に歸依せむ。我等恒に歸依三寶を行じて、阿耨多羅三藐三菩提心を發さむ。時に毘毘沙歌羅利童子及び一切の羅刹衆、此の言を出し已るに、一切の繫縛即ち解脱するを得たり。虚空より來りて、大悲所生智相幢王如來に向ひ、彼の世尊に至りて三匝し圍遶す。時に毘毘沙歌羅利童子及び羅刹衆、一切俱時に佛足を頂禮し、彼の如來に於て懺悔を乞求す。懺悔を乞ひ已りて、各本處に還る。龍王よ、汝の意に於て云何。汝今當に知るべし。是の時世の中、毘毘沙歌羅利童子とは豈異人ならんや。今の毘毘沙那楞伽王是

【四〇】一本に憐に作る。慄は「心堅固なるなり、又心動くなり」とあり。

【四一】懺悔の梵語は懺摩(クマ)日伽を正しとす。忍耐、省愆の意なり。故に「懺悔を乞ふ」との語例あるは當然なり。

一にはあらゆる願行違せず失せざらむ。二には諸の衆生に於て常に慈心を行ぜむ。三には一日三時に三寶を供養して晝夜に絶えざらしめむ。四には聲聞辟支佛の果を願はざらむ。此を汝等の四法と爲す。具足せば彼の菩提の心を忘失せざらむ。

爾時、海龍王坐より起ち、偏へに右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、佛に向ひ合掌して佛に白す。世尊よ、毘毘沙那楞伽王、往昔何の善根を造してか、乃ち能く是の如く廣供養の具をもて佛及び無數の聲聞菩薩衆等を供養し、供養し訖りて、菩提心を發し、菩提心を發し已りて、不退轉を證し、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを得たるや。是の語を作し已るに、佛海龍王に告げて言く、龍王よ、往昔、無量阿僧祇劫數の時を過ぎて彼に佛有り。大悲所生智相幢如來四三至眞等正覺・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士調御丈夫・天人師・佛、世尊と號しき。而して彼の如來亦還りて此の娑婆世界五濁世の中に生ぜり。而も彼の如來至眞等正覺衆生の中に於て、三乘の法を演説し分別せり。龍王よ、時に彼の如來亦還りて此の摩羅耶山の頂上に住し、五百の比丘大聲聞衆、無量の天龍及び非人等と與に(ありて)、衆中に法を説く。龍王よ、時に四四羅刹童子有り。毘毘沙歌四五と名く。亦還りて此の楞伽大城に住す。形貌雄猛に、大膂巨力・其性瞋惡・面目鄙醜・唯だ肉血を食して、口牙畏るべし。龍王よ、時に彼の毘毘沙歌羅刹童子佛世尊の摩羅耶山頂上に住したまふを聞き、即ち是の念を作す。我れ此の沙門及び比丘衆の摩羅耶山の頂上に在りて居住するを欲せず。何を以ての故に。若し彼の沙門摩羅耶山の頂上に住せば、我れ大海の雜類を攝する能はず。亦衆生の殺害すべき者無し。我れ今此に住せば則ち恒に饑餓せむ。龍王よ、時に彼の毘毘沙歌羅刹童子即ち其の衆諸の羅刹に告げて言く、汝等大力有る者宜しく速かに來りて堅牢の甲を著くべし。各刀杵・槌斧・斧戟・弓箭・鉾楯並びに金剛杵・鬪輪槊等を執り、是の如きの種種の器械を嚴持せよ。何を以ての故に。我れ今應に當に彼の沙門及び沙門の衆を驅つて我が境界を去らしめ、其をして我が所住の處を捨離せ

【四三】「至眞等正覺」と「應供正遍知」重複なるものゝ如し。

【四四】毘毘沙歌羅刹童子說話沙那に同じ。

【四五】唐譯「暴烈勇壯にして牙齒弊惡、形容畏るべし。寬腹小面にして、血を飲み肉を食ふ」。

一切諸法空にして夢の如し

我及び無我悉皆無し

衆生中に有りて自から生滅し

初中後等所有無し

衆生業に隨ひて果報を得

若し此の如くの菩提行を行ぜば

清淨非有にして虚空に同じ

我れ化の如く電光の如しと知る。

一法を誦求するに得べからず

畜養・衆生・命亦然り

中に有りて展轉して休息せず

諸法の體皆空なるを知ること得む。

爾時、毘毘沙那楞伽王是の偈を説き已りて空中より下り、佛を遶ること三匝、遶ること三匝し已りて、佛の威神を蒙りて却いて一面に坐す。時に海衆中に或は天・龍・阿修羅等の法を證し果を得るもの有り。或は夜叉羅刹の菩提心を發すもの有り。或は緊那羅、摩睺羅伽の諸佛の法に於て疑無き者有り。或は迦樓、羅乾闥婆及び呪神等の陀羅尼を得て法を證り果を得一切法に於て不退轉を得る者有り。即時に大地震動し、自然の光明佛刹に遍滿し、乃至大小の鐵圍山間普ねく皆明かに照され、一切の惡道に諸苦悉く除かれ、上虚空中に諸の天華雨ふり天鼓を撃つの叫嘯等の聲響き、並びに諸の衣服は空中より舒卷して自然に顯現せり。是の如き種種の事ありき。時に毘毘沙那楞伽王其の自衆を觀て是の如く告げて言へり。汝等一切相與に和合して來りて世尊に向ひ、恭敬の心を生じて阿耨多羅三藐三菩提心を發せよと。時に彼の無量百千の羅刹相與に和合して佛に向つて合掌して白して言く、世尊、我等聚集して相與に和合して今より已去佛及び法僧に歸依して菩提心を發さむ。世尊、我等今より已去大乘の行を行ぜむ。如來證知したまへ。世尊、我等未來世に於て、此の娑婆刹中に在りて正覺を成ずることを得む。定んで惡業を斷じて無上尊と爲らむ。一切衆生に利益を作さむが爲めの故に。佛の言く、善き哉、善き哉、汝等若し能く菩提心を發さば、汝等當に四種の善法を行すべし。凡そ善行者は此の四法を行じて彼の菩提の心を忘れざるを得む。何等をか四と爲す。

色光明を放ちたまふ。所謂青・黄・赤・白・紅・紫・頗梨及び金等の色なり。普ねく無量無邊阿僧祇の諸佛の刹土を照す。既に遍ねく照し已りて還りて頂上より入る。爾時、尊者大目犍連即ち座より起ち偏に右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、偈を説いて問うて言く、

佛の上妙の徳は無因に非ず

清淨の光明網を開放す

今意精妙覺を發すものは誰ぞ

百の光網を放ちたまふ。願くは佛説きたまへ

佛目犍連に告げて言く、汝見るや不や、此の毘毘沙那楞伽王、我が前に在りて合掌して正立し、此の廣大供養の具を以て、用て我れ及び聲聞衆、諸菩薩衆を供養せり。此の功德に因りて阿耨多羅三藐三菩提の心を發せり。目犍連の言く、世尊よ、我は見る。世尊よ、我は見る。佛の言く、目犍連よ、是の毘毘沙那楞伽王、我れより已去乃至當に百千億那由他の諸佛を供養承事せんと欲すべし。是を過ぎ已りて後、彼の身功德本力具足せむ。世界有り。蓮華城と名く。彼に世尊有り。蓮華功德相震聲威王如來、阿羅呵、三藐三佛陀と號す。現在彼に住して遊行し說法す。彼の佛如來壽命無量にして世界清淨なり。此の毘毘沙那楞伽王彼の刹に化生せむ。彼の中に生じ已りて即ち菩薩歡喜の地を得む。是の如く乃至菩薩の十地を得む。無量劫數を過ぎ已りて、後に於て此の娑婆世界に生じて當に成佛するを得べし。號して善妙震聲金威善淨光明現功德寶蓋莊嚴頂相毘盧遮那王如來、應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士調御丈夫・天人師・佛、世尊と曰ふ。是れ最後の生にして彼の世界を電寶冠と名く。諸の山阜・坑坎・崖坂・土石・糞穢を除き、女身及び惡道等有ること無し。而して彼の佛刹清淨にして彼の現在阿彌陀如來の佛刹に勝る。諸の菩薩衆彼の國に充滿せり。劫を善觀明と名く。彼の佛如來の壽命無量なり。目犍連よ、是の故に如來至眞等正覺微笑したまへり。時に毘毘沙那楞伽王阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを得し時、爲法を以ての故に、歡喜踊躍し、遍體戰慄し、飛んで虚空に上ること七多羅樹なり。虚空の中に於て此の偈を説いて言く、

【一】 佛放光す。

【二】 前註を見よ。

菩提、無上は是れ菩提、無鬻ひつは是れ菩提、無求は是れ菩提、無斷は是れ菩提、不壞は是れ菩提、無破は是れ菩提、無思惟は是れ菩提、無物は是れ菩提、無爲は是れ菩提、無見は是れ菩提、無害は是れ菩提、無明は是れ菩提、無流注は是れ菩提、常住は是れ菩提、虚空は是れ菩提、無等等は是れ菩提、不可説は是れ菩提なり。楞伽王よ、菩提を求めんと欲する者、若し法を求めざれば、是れ菩提を求むるなり。何を以ての故に、楞伽王よ、若し著有ること無くんば阿耨多羅三藐三菩提を證するを得む。又我相・衆生相・命相・人相・畜養相・衆數相・作相・受相・知相・見相無くんば乃ち阿耨多羅三藐三菩提を證するを得べし。若し世諦相を得ずんば法に執着せず、陰界に執著せず。乃至諸佛菩薩に執著せず。乃ち阿耨多羅三藐三菩提を證するを得べし。何を以ての故に。楞伽王よ、執著する所無きは是れ菩提なり。若し物に執著せず、若し常に執著せず、若し斷に執著せずんば、未來世に於て菩提を證成せむ。所以は何。楞伽王よ、一切の諸法は三九二後際滅の故に。

時に毘毘沙那楞伽王復佛に白して言く、世尊、云何が一切世諦法を知ることを得るや。佛の言く、楞伽王よ、一切の世諦法は幻まぼろしの如く、化の如く、夢の如く、焰の如く、水中の月の如く、乾闥婆城だんたつばの如し。一切の世諦法を應に是の如く知り、是の如く覺り、是の如く觀すべし。爾時、毘毘沙那楞伽王、即ち菩薩の三昧を得たり。無等等法光明智相と名く。陀羅尼を得たり。一切巧音と名く。是の如き等の無量無邊の諸三昧陀羅尼を得已りて、時に、毘毘沙那楞伽王即ち佛に白して言く、世尊、我れ今此の三昧陀羅尼を得已りて、一切の世諦法を覺知せり。佛の言く、楞伽王よ、云何が覺知せる。毘毘沙那の言く、世尊よ、一切の世諦の法は夢の如く、幻の如く、響聲等の如く、山水の駛せきが如く、水中の月の如く、風の空華を吹くが如く、秋雲の起るが如く、珠光の明かなるが如く、燈焰火の如く、華上の露の如く、穢けし陶婆城の如く、水上の泡の如く、虹の如く、焰の如し。世尊、我れ已に世諦の諸法現に皆無常なるを覺知せり。爾時、世尊即ち頂上百千億那由他の種種の妙

【三九】 唐譯「必ず壞に歸するが故に」。

【四〇】 世諦法。

彼の無漏の智慧を求めし時

衆寶もて莊嚴し、濁垢無し

多億の諸の衆生を攝化して

精妙の刹中に佛と成るを得たまへり。

爾時、世尊、毘毘沙那楞伽王に告げて言く、善き哉、善き哉楞伽王よ、汝能く如來に此の事を諮問せり。諦らかに聽け、諦らかに聽け、善く之を思念せよ、當に爲めに解説すべし。楞伽王よ、菩薩摩訶薩は常に須らく六波羅蜜を行すべし。一切衆生の邊に於て惡心を生ぜざれ。楞伽王よ、菩薩是の如きの法を行する時、不減不少にして、諸佛の法に於て常に增長を得む。亦世間の法に染著せず、無量の衆生を攝受教化せむ。亦能く如來の刹土を清淨にし、復能く具さに大智同性を得て、佛法中に於て無障無礙ならむ。爾時、毘毘沙那楞伽王佛に白して言く、世尊、云何が修行し、云何が阿耨多羅三藐三菩提に住するを得べき。佛の言く、憍慢・貢高・嫉妬を放捨して、常に四種の清淨梵行を行じ、歡喜して普ねく一切衆生の爲めに恒に正眞を行じ、須らく殺・盜・妄言・綺語・兩舌・惡口・飲酒・姦婬を捨つべし。暫くも菩提の心を忘れしむる勿れ。意六波羅蜜を勤行するを樂しみ、所作恒に衆生を安樂ならしめんが爲めにし。有爲の中に於て心常に寂靜に、有海の諸の怖畏多きを度せんと欲す。汝當に正に三界の衆生を觀じて度脫を得せしむべし。

復次に楞伽王よ、汝若し菩提を求めんと欲せば、須らく是の如く知るべし。言く、菩提とは但だ名字言語の菩提と謂ふ有るのみ。何を以ての故に。楞伽王よ、無有は是れ菩提、無根は是れ菩提、無住は是れ菩提、無垢は是れ菩提、無塵は是れ菩提、無我は是れ菩提、不可捉は是れ菩提、無色は是れ菩提、無形は是れ菩提、無此は是れ菩提、無彼は是れ菩提、無憂は是れ菩提、無惱は是れ菩提、無著は是れ菩提、無染は是れ菩提、無邊は是れ菩提、無爲は是れ菩提、無濁は是れ菩提、已過の一切の根は是れ菩提、一切の憶想念を除くは是れ菩提、已過の一切の有行は是れ菩提、無底は是れ菩提、難知は是れ菩提、甚深は是れ菩提、無字は是れ菩提、無相は是れ菩提、寂靜は是れ菩提、清淨は是れ

【三】菩提とは何ぞ。

得るものは、^{三三}或は我が邊に因りて正信を得る者なり。或は復内淨ならん。或は戒を破ると雖も、恒に慈行有り、或は精進有り。是故に楞伽王よ、是の破戒及び還俗者と雖も、還た我が法に因りて善處に生ずることを得ん。爾時、世尊偈を説きて言く、

往昔已に多くの罪業を作り

無邊千億世生の中に

發露懺悔して更に造らざれば

滅して增長無きが故に清淨なり。

時に毘毘沙那復佛に問うて言く、世尊、凡そ幾種の助菩提法有りや。佛の言く、楞伽王子よ、三十七品の助菩提法有り。何をか名けて三十七品と爲す。所謂、四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分及び八聖道なり。楞伽王よ、是を三十七品助菩提法と名く。復佛に問うて言く、世尊、解脫門は幾許か有りや。佛の言く、楞伽王よ、三解脫門有り。何をか三と爲す。所謂空・無相・無願なり。復佛に問うて言く、世尊、須らく何の法をか念すべき。佛の言く、厭滅・入涅槃を念す。復佛に問うて言く、世尊、諸對治の法凡そ幾許か有るや。佛の言く、楞伽王よ、總じて之を言はゞ三種の對治なり。何をか三と爲す。謂く、貪欲心の者には不淨觀、瞋恚心の者には慈悲觀、愚癡心の者には因緣觀、是を三種の對治法と名く。復佛に問うて言く、世尊、幾許の巧か能く應に須らく念持すべき。佛の言く、楞伽王よ、須らく念持すべき者は巧知陰と巧知界と巧知入と巧知方便となり。復佛に問うて言く、世尊、須らく何の觀をか作すべき。佛の言く、楞伽王よ、須らく甚深の十二因緣及び四聖諦の因果證等を觀すべし。爾時、毘毘沙那楞伽王復更に世尊を圍遶すること三匝、諸の雜色七寶の華を以て佛の上に散じ、散じ已りて右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、如來を敬敷して偈を説いて言く、

云何が菩薩諸の聖行に

精進意を生じて世間を利せん。

施・戒・忍辱及び精進

最上意を發して菩提の爲めにす

【三三】唐譯「佛所に於て淨信敬悔するもの有り」。

【三四】唐譯「戒は直心淳淨ならん」。

【三五】唐譯「云何が修成せん。佛の言く、修成に三有り。謂く離染修、滅修、涅槃度修なり」。

【三六】唐譯「善修幾くか有る。佛の言く、善修四有り。謂く、善陰修、善界修、善入修、善方便修なり」。

【三七】「合掌向佛」は恐らく Anjali-puṇṇamya の譯語なり。果して然らば專之合掌を佛に向けて」と譯するを至當とすべきが如し。

を證する者は復何等にか似たる。佛の言く、楞伽王よ、七菩提分を得て大乘同性を證する者は譬へば七種の寶性に値ひ得て、巨富貨賄、意に稱ひて満足なるが如し。善き哉、善出家者は我が法中に於て無礙無上の佛果を證せん。爾の時、世尊復偈を説いて言く、

諸有の苦を觀察し

自ら衆生の苦を苦しみ

亦諸有の縛を捨て、

我が法中に出家せば

即ち名けて佛子と爲す

衆中最大の徳なり

勤苦して法の如く行ぜば

當に世尊と爲ることを得ん。

爾時、毘毘沙那復佛に問うて言く、世尊、若し衆生有りて佛法の中に於て出家するを得已りて戒を持つこと能はず。或は戒を犯す有り。或は破戒犯欲の行者有り。或は法服を脱して戒を捨て、還俗する有り。世尊、是の如きの癡人は譬へば何等の如くなるや。佛の言く、楞伽王よ、若し衆生有りて我が法中に於て出家するを得已りて戒法を受け、諸の毀犯を作さむ。是の癡人の輩多く惡道に墮す。治世の人大海中に在りて船舶破壊して命を水に没するが如し。毘毘沙那の言く、世尊、若し破戒、犯戒、犯欲行者有らんに、復我れ精進梵行を行すと説き、復法服を捐棄し、戒を捨て、還俗するもの有らんに、彼の一種の人命終り亡し已りて或は好處に生ずるは、彼何等にか似たる。佛の言く、治世の人大海の中に於て船舶破壊し水中に没溺するが如し。或は船板を得る者有り。或は死屍を得る者有り。或は自力もて浮ぶ者有り。楞伽王よ、是の治世の人、船板を得る者は風力に因りて吹かれて洲島に至ることを得ん。死屍を捉ふる者は海波に推されて漸く彼岸に到らん。何を以ての故に。大海の法死屍を宿さず。若し其れ自力もて能く浮ぶものは意に隨つて所至に度るを得ん。此は是れ海神の慈悲彼を濟ふなり。是の如く、是の如し。楞伽王よ、若し我が法中に出家するを得たる者、戒に依りて法の如く護持する能はず。若し戒法を捨て、俗服を著し、善處に生ずることを

有爲海の中、已に得度する者あり。當に度せんとか欲する者あり。而も衆生界は亦増減せず。楞伽王よ、譬へば虚空界の如し。不増不減にして前もなく後も無く、亦中間も無し。是の故に虚空は知ることを得べからず。一切處に遍し、礙無く、形無く、作無く相無し。是の如く、是の如し、楞伽王よ、衆生界も初中後有るに非ず。之を求めて得べきに（非ず）。楞伽王よ、唯だ已に聖法の同性を得たる有りて、是を衆生界を盡すと名くるのみ。而も有爲道は盡きず、滅せず。楞伽王よ、彼を離れずして解脱道有り。何を以ての故に。是れ衆生界の法此の如きが故に。是故に初も無く、中も無く、後も無し。

毘毘沙那復佛に問うて言く、世尊、衆生有爲行海の相貌は何にか似たる。佛の言く、楞伽王よ、衆生有爲行海は猶し大海の如し。復佛に問うて言く、世尊、諸佛の法は復何等にか似たる。佛の言く、楞伽王よ、諸佛の法は猶し船舶の如し。復佛に問うて言く、世尊、出家の比丘の具戒法を受くるは復何等にか似たる。佛の言く、楞伽王よ、出家の比丘の具戒法を受くるは治生の人の船舶に乘るに似たり。復佛に問うて言く、世尊、世尊の説きたまふ如く、佛の戒法を具足奉行して毀破すること無きものは復何等にか似たる。佛の言く、持戒精進に法を受けて知足するは治生の人の堅牢の船成就具足せるに乘るに似たり。楞伽王よ、能く佛の所説の如く、戒法を破らず、犯さず、具足する行者あらば、亦復是の如し。復佛に問うて言く、世尊、善知識は復何等にか似たる。佛の言く、楞伽王よ、善知識は猶し船師の如し。復佛に問うて言く、世尊、八聖道を勤行するは復何等にか似たる。佛の言く、楞伽王よ、八聖道を勤行するは正しき疾風の船舶を吹くに似たり。毘毘沙那復佛に問うて言く、世尊、禪定、三昧、及び諸の神通、復何等にか似た。佛の言く、楞伽王よ、神通、三昧は猶し寶國の如し。毘毘沙那復佛に問うて言く、世尊、七菩提分は復何等にか似たる。佛の言く、楞伽王よ、七菩提分は猶し七種の寶性の如し。復佛に問うて言く、世尊、七菩提分を得て大乘同性

【三】原文「非衆生界有初中後求之可得」。初中後の之を求めて得べきもの有るに非ずと讀むべきなれども、かくては何となく初中後を肯定するが如き語調を成すが故に取らず。

【三】唐譯「商人の船に乗るが如し」。

香是れ斷相ならば、人の聞くを得ること無からん。佛の言く、是の如し。是の如し。楞伽王よ、識相亦然り。應に是の如く見るべし。楞伽王よ、若し識斷相ならば、則ち生死無くして知るを得べし。是の如く楞伽王よ、識相清淨にして、唯だ是れ無明・貪愛・習氣・業等の諸の客煩惱の覆障する所なるのみ。楞伽王よ、譬へば清淨なる虚空界の如し。唯だ四種の客塵の汚染有るのみ。何等をか因と爲す。所謂烟・雲・塵・霧なり。楞伽王よ、識相是の如し。本清淨の故に。無邊にして捉ふべからず。色染有ること無し。唯だ是れ諸の客煩惱の覆染する所なるのみ。所以は何。楞伽王よ、若し正觀する時は衆生を得ず。我無く、衆生無く、壽命なく、畜養無く、人無く、衆生數無く、知者無く、見者無く、覺者無く、受者無く、聽者無く、乃至色受想行識等無し。楞伽王よ、若し正觀する時は分別して得べきもの有ること無し。楞伽王よ、諸法は和合にして實相有ること無し。汝はの衆生の實相を得と雖も、亦此の生有を曠野に捨つること莫れ。云何が衆生の實相を得と名くる。所謂彼の大智同性を得るなり。爾時、世尊偈を説きて言く

衆生の業力自から廻轉して

八聖最上の道を得ず

若し諸業を離れて無漏を證せば

無上行を行じて衆生を利せん。

時に毘毘沙那の言く、世尊、無量恒河沙に等しき衆生有り。此の三界の稠林有海に於て、彼岸に到る者、復到らんと欲する者あり。聲聞法を證する者有り、緣覺法を證する者有り。亦若干の已に無上大智同性を證する者あり。未來世に於て亦無量無邊不可數阿僧祇、是の數に過ぐる恒河沙に等しき衆生有り。此の三乘各別乘に乗じて涅槃に入ることを得。而も衆生界は増無く減無し。是の如く世尊よ、我れ是の如きを知りて心厭倦を生ぜり。佛の言く。楞伽王よ、汝此に於て厭倦の想を生ずること莫れ。所以は何。諸の衆生界は前後盡すべからざるが故に。虚空界法界亦爾り。是の故に楞伽王よ、諸衆生界は言説すべからず。是を以て不増不減なるを知り得。是の如く三界の稠林

【三】 衆生界は不増不減なり。

る。而も是の神識業風に捉へられ、卵中に停住して昏鈍として覺えず。乃至覆成して識方に覺す。當に知るべし、彼の卵已に熟すと爲すなり。何を以ての故に。卵生の衆生法是の如くなるが故に。未だ成熟せざる時、覺せず。了せず。所以は何。業力の爲めの故に。楞伽王よ、復衆生有り。福力純厚にして轉輪王の家に於て子と作るを得ん。而も彼れ胎に在りて胎の爲めに汚されず。亦胎の不淨と共に住せず。亦汚染せられず。楞伽王よ、其の轉輪王所生の子は多く化生を受く。設し胎を受くれば初の入胎中に結子已に成り、及び生れ出でて後、膜を破りて出身す。楞伽王よ、是の因縁の故に中陰有りて説く。時に毘毘沙那楞伽王の言く、世尊、衆生の神識當に幾ばくか大なりとせん。何色を作すとやせん。佛の言く、楞伽王よ、衆生の神識は無邊大なり。色も無く、相も無く、見るべからず。礙無く形無く定處なし、説くべからず。毘毘沙那の言く、世尊、識相此の如く、無有邊大にして、色無く、相無く見るべからず。礙無く、形無く、定處無く、説くべからずんば、豈斷絶に非ずや。佛の言く、楞伽王よ、吾れ今汝に問はん。汝の意に隨つて答へよ。當に汝の爲めに説くべし。楞伽王よ、譬へば大王の宮殿の中、或は高樓の上に在りて姪女に圍遶せられ、安樂に坐せん時、種種の衣及び諸の瓔珞を著けん。時に大園林、阿輸歌樹、種種の雜華、莊嚴精麗ならん。其の園の在る處、細軟風有り。或は大獸風あり。彼の園林阿輸歌樹を吹かんに、衆華の香氣王の所に至らば王はこれを聞くや不や。毘毘沙那白して言く、世尊、我れ此の香を聞く。佛の言く、楞伽王、汝此の香を聞きて分別して知るや不や。王の言く、世尊、我れ能く知ることを得。佛の言く、楞伽王よ、此の華の香氣を王知ると言はゞ、大小を見るや。定んで何の色をか作す。楞伽王の言く、不なり、世尊、何を以ての故に。此の香氣の相色無く、現無く、礙無く、相無く、定處無く、説くべからず。是の故に大小形色を見ず。佛の言く、楞伽王、意に於て云何。若し彼の香氣の大小を見ずんば、斷絶の相に非ずや。毘毘沙那言く、不なり、世尊、何を以ての故に。若し此の衆

【三六】 阿輸歌樹、即ち無憂樹。

の言く、世尊。彼の衆生とは何を以て本と爲し、何に依て住し、何を以て因と爲すや。佛言く、楞伽王よ、此の衆生とは無明を本と爲し、愛に依て住し、業を以て因と爲す。毘毘沙那楞伽王の言く、世尊、業に幾種か有る。佛の言く、業に三種有り、何等をか三と爲す。身・口・意業なり。復三相あり。淨・不淨・非淨非不淨なり。時に毘毘沙那楞伽王復佛に白して言く、世尊、云何が衆生此の壽命を捨て、彼の壽命を受け、此の故身を捨て、彼の新身を受くるや。佛の言く、楞伽王よ、衆生此の身を捨て已れば業風力吹いて識を移して將ち去る。自から造る所の業其の果を受く。若し善及び不善、非善非不善、衆生此の如きの業行を造る者、即ち彼の處に於て新身を受く。或は卵生を受け、或は濕生を受け、或は胎生を受け、或は化生を受く。皆是れ、一切業風の造る所、而も業亦自から知らず。造る所各自ら報を受く。楞伽王よ、衆生是の如し。此の壽命を捨て、彼の新身を受く。楞伽王の言く、世尊、衆生此の壽命を捨て、未だ彼の身を受けず。其の中間に於て識は何れの處にか停る。佛の言く、楞伽王よ、汝が意に於て云何。田中の種子芽を生ずるに至る時、當に子先づ滅し已りて然る後に芽生ずとや爲ん。當に其の芽先づ生じて然る後に子滅すとや爲ん。當に唯だ子滅する時其の芽即ち生ずとや爲ん。毘毘沙那王の言く、不なり、世尊。佛の言く、楞伽王よ、是の義云何。楞伽王の言く、世尊、其の子若し滅すれば其の芽即ち生ず。先の子滅して然る後に芽生ずるに非ず。先に芽を生じて然る後に子滅するに非ず。佛の言く、是の如く、楞伽王よ、識先づ滅して後に識方に生ずるに非ず、楞伽王よ、亦先に後識を生じて前識方に滅するに非ず、楞伽王よ、唯前識滅して後識即ち生ずるなり。楞伽王よ、歩屈蟲の先づ頭足を安んじて次に後足隨ふが如し。其の形屈伸して間斷絶無し。是の如く是の如し楞伽王よ、此の神識前有中の生處を見了りて、識即ち令移して託して彼に就く。間斷絶無し。毘毘沙那楞伽王の言く、世尊、若し是の如くんば中陰無きや。佛の言く、楞伽王よ、一種の衆生あり。是なり。此の身を捨し已りて卵中に入

【二八】 令移。したがひうつるの意。

總行して睡らず亦乏しきこと無し

衆生の所須常に隨順し

昔禪定を行じて伏心を爲し

三味の念五神通の力

如來の智慧無漏を滿じ

我衆生命及び人無く

欲界不淨にして四種惑あり

既に實淨の衆生の本たるを知らば

誰か能く此の智方便を説いて

勝三業を發して如來に向ひ

無量の佛を尊重供養し

成佛無上の法を熏修す

已に四禪無色定を善くす

往昔無漏禪を行滿せり

法は幻の如く悉く虚假なるを知り

煩惱の網因業に纏うて轉ず

衆生煩惱界は本淨し

六種の波羅蜜を具するを得む

無盡の佛の福聚を勤求するものぞ

來世に佛たるを得む我れ頂禮したてまつる

爾時、毘毘沙那楞伽王此の偈を説き已り、復無量種種最妙の香・華・末香・塗香・華冠・衣服・寶幢・幡蓋を以て、音樂、歌詠もて如來を讚歎し、尊重恭敬し、具足承事し、佛並に諸の聲聞大菩薩衆を供養せり。彼の羅刹衆亦復是の如し。法の如く發起して、如來を供養し、佛意に稱可せり。爾時、毘毘沙那楞伽王供養し訖りて佛に白して言く、世尊、我今疑有り、如來至眞等正覺に問ひたてまつらんと欲す。唯願くは世尊、我が爲めに開解せよ、此の語を説き已るに、佛楞伽王に告げて言く、楞伽王よ、吾れ常に汝の佛に所疑を問へるを開く。汝の意樂に隨つて當に解説を爲し、心をして歡喜せしめむ。時に楞伽王、開許を得已りて佛に白して言く、世尊、衆生衆生とは何の義を以ての故に名けて衆生と爲す。佛の言く、楞伽王よ、衆生衆生とは衆縁和合するを名けて衆生と曰ふ。所謂地・水・火・風・空・識・名色・六入の因縁より生ず。又衆生とは猶ほ束竹の如し。縁業の故に報あり。縁業果を得。我・人・衆生・壽命・畜養・衆數・知者・見者・觸者・受者是を衆生と名く。毘毘沙那楞伽王

【三八】衆生とは何ぞ。

昔、王子須大聖と名け

前には自身を捨て、産虎を救ひ

眼を挑りて、首みたる婆羅門に施し

頭を施すは菩提の因を求めんが爲めなり

戒品を護りて長しへに清淨ならんが爲めに

生命を斷(たす)他物を盗ます

飲酒を離れ妄語せず

昔より兩舌と諸の悪言せず

世尊邪を離れて常に調順に

功德意の如く邪見を離る

家を出でて垢無く五欲を除き

前に忍辱を行じて諸苦を受け

往昔受くる所の諸の苦痛も

若し佛邊に在りて殺惱を起さば

佛世に生じて常に忍を修し

如來往昔道を求めし時

彼の所生の中に割截せられ

彼の國王及び夫人の爲めに

不思議劫常に精進して

昔諸の苦行皆能く忍び

山林中に於て妻子を施せり

其の身肉を割いて、窮餓を濟ひ

彼の生の中に於て怨恨無し

心索むる者に於て常に歡喜す

聖行を犯さず無爲に順す

常に梵行に順ひて世に妬無し

諸の衆生を護ること己が身の如くす

亦隨喜無く綺語を説く(無し)

前の衆生に於て憐觸無し

三寶を供養して壞心無し

佛戒解脫行に依順せり。

誹謗毀訾及び困責と

衆生の爲の故に恨心無し

彼に於て慈心もて視ること子の如し

億數の苦の衆生を解脫せしむ

大仙人と作り名けて忍と曰ふ

痛を忍び王に於て害心無し

白法を演説して歡喜せしむ

懈怠邪意狹劣除かる

廣大の精進菩提を覺る

【三】須大聖太子のことは六度集經第二並に太子須摩羅經を見よ。或は毘輪安毗羅太子とも云ふ。
【四】金光明經捨身品、並びに本生曼(Manimani)の說話第一。又菩薩投身餓虎起塔因緣經を見よ。
【五】窮餓を濟ふことは本生曼說話第二。
【六】首婆羅門に眼を施すことは撰集百緣經の第三十三說話これに近し但し少異あり。

我れ應に未來に斯の法を得て

此の世界の中に佛道を成じ

諸佛微妙の法

二〇 我が所作をして無邊智ならしめ

若し精勤して善行を行じ

衆生を利益して怖畏を脱せしめ

面は日月の如く淨光明あり

爾時、毘毘沙那楞伽王、阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得、即ち其の意に隨つて念に應じて

種種精妙の華・香・塗香・末香・華冠・衣服・寶幢・幡蓋・摩尼・紺束・眞珠瓔珞を出生し、諸の伎樂を作

し、掌を撃ち歌讚して妙聲遍滿し、如來の功德相好を讚嘆し、此の如き等の諸の供養の具を持し

て、其の眷屬と與に虚空の中に於て、鵝王の行くが如く、來りて佛所に向ふ。佛所に至り已りて空

より下る。時に毘毘沙那楞伽王眷屬と俱に佛に向つて合掌し、世尊の足に接して頂禮すること百

遍、禮拜し訖りて、佛を遶ること三匝、乃至千匝したてまつる。時に毘毘沙那楞伽王即ち佛所に於

て五體を地に投ずること斫られたる樹の倒るゝが如し。復此の言を説く。南無無量功德を莊嚴した

まへる最上法身・師子丈夫・三界最勝の世尊、釋迦牟尼至眞等正覺と。此の語を出し已り、即ち起ち

て掌を合せ、世尊の前に於て偈を説いて讚歎すらく、

昔の世億生に 専ら事に精み

飲食及び衣乘を布施し

不思議劫に悔悟無し

王宮と莊嚴寶の豐滿なる

一切無礙智を具足せむ

無量億の衆生を度脱せしめむ

最勝無漏の八聖道を演説し

三十二相身を莊嚴せむ

及び佛の功德行を満足する有らば

諸の功德を持して 有障を滅せむ

三界の中に於て佛と作るを得む

【二〇】唐譯「無邊智備さに顯はれ、三十二相を具し、成佛して菩提を證し、此を以て身を莊嚴せむ」。

【二一】唐譯「塵を滅して生死を破らむ」。

【二二】事は一本心に作る。

地獄と畜生と

六趣に往來して

此の衆生の類をして

衆生を利益するが故に

智日光の照す所

相隨て彼處に至り

天人をして世中に

爾時、毘毘沙那楞伽王、此の偈を説き已りて、佛の神力の故に、虚空の中に於て、百千億那由他の

の大光明網を放ちて、遍ねく楞伽大城を照す。照し已りて毘毘沙那及び一切の羅刹衆皆悉く踊躍

せり。爾時、彼の大光明網中に、甚深法相の偈を演出せりき。

諸法本寂空にして無我なり

譬へば虚幻夢泡焰

世諦の縁法は悉く眞に非ず

眞觀は無愛にして無明なり

爾時、毘毘沙那楞伽王、彼の光明網の中に是の如きの法相の偈を演出するを聞き已りて、即ち甚

深の無我法忍を得たり。彼の羅刹衆の中に或は忍を得る者あり。或は菩提心を發す者あり。或は順

忍を發す者有り。(或は)實を見る者有り。爾時、毘毘沙那楞伽王佛法中に於て明了にして疑無

し。既に菩提の堅甲鎧を著け已り、復此の願を發して偈を説いて言く、

天人及び阿修羅と

此の如き無上最妙の法を

最も苦しき餓鬼道と

展轉すること車輪の如し

諸の八難の厄を離れしめ

故に世間燈は出でたまへり

能く無明の盲を破す

無上尊を供養せむ

供養して大果を獲せしめむ

衆生は初中後に得回し

霧電水沫旋火輪の如し

無明愛根世間に現す

諸法は空の如し淨にして説き已し

一切梵王上天衆は

彼等未だ曾て覺見し得ず

【五】唐譯「諦を見る者有り」。

と名く。彼に治化せり。時に毘毘沙那楞伽王、佛今しも大摩羅耶精妙山頂、摩訶園林、華池沼邊、大持呪神所居の處、人の行く能はざる、最得道(者所居の)處に住したまひ、千二百五十の比丘と與に、現に梵行を説きたまふと聞き、時に毘毘沙那楞伽王即ち念言を生ずらく、如來は名字すらも世間に希有なること、優曇華の如し。無量時に於て乃ち一たび聞くことを得。何に況んや佛に値ひたまつらんをや。我れ是の中に於て、無量無數時、法を聞くを得ず。猶し首龜の浮木の孔に遇へるが如し。是の中に諸佛及び佛法を以て佛の境界に入り、佛道を證する者、是の如きの事倍復た最も難し。我れ若し多くの諸の珍寶を齎持し、及び眞珠の貫、無量香・華・末香・塗香・華冠・衣服・寶幢・幡蓋、並びに繪束・音樂・歌讚もて、我が眷屬と與に佛所に往詣し、佛所に到り已りて、此の種々の供養の具を以て如來に供養したてまつり、正法を問ひて我が一生に報ぜんと欲す。

時に毘毘沙那楞伽王普ねく皆諸の羅刹衆に宣告すらく、汝等共に同心和合すべし。豐足勝妙の金・銀・摩尼・寶珠・珂玉・琉璃・珊瑚・瑪瑙・眞珠・環珞並びに赤眞珠、種々精妙無量の香華を捉持し、諸の音樂及び歌讚を作して、須らく佛所に向ふべし。如來法王は三界に最も勝れたり。無上の福樂にして衆相を具足し、一切知見あり、無上の福田なり。我等彼に向ひて此の供具を持し以て供養せむ。所以は何。無量の時に於て佛の出世に値ひ、佛を見るを得ることは難し。八難を離るゝことは難し。三寶を聞くことは難し。此の念を作し已りて爾の時に毘毘沙那楞伽王、その衆中に於て偈を説いて告げて言く、

無量無數の時

八難を離れんと欲せば

百千億劫の中に

譬へば優曇華の

佛乃ち世間に現す

復無量世を経む

希に世尊に逢ひたてまつる

無量時にして乃ち出づるが如し

大乘同性經

(亦一切佛行入智毘盧) (遮那藏神變と名く)

周宇文氏天竺三藏闍那耶舍譯

卷の上

是の如く我れ聞けり。一時、婆伽婆、大摩羅耶精妙山頂・摩訶園林・華池沼邊・大持呪神の居止する處、人の行く能はざる最得道者の所居の處に住在了たまひ、大比丘二百五十人と俱なりき。一切皆是れ摩訶聲聞なり。所作已に辦じ、已に一切凡夫の地を過ぎたり。其の名を、尊者 阿若憍陳如、尊者 阿說示、尊者 摩訶迦葉、尊者 舍利弗、尊者 摩訶目犍連と曰ひき。是の如き等の諸大聲聞と與に、復菩薩摩訶薩の衆有りき。皆大菩薩にして悉く一切菩薩の三昧、陀羅尼行を得、一切已に諸の菩薩地に住せりき。其の名を、聖者 彌勒菩薩摩訶薩、大意菩薩摩訶薩、益意菩薩摩訶薩、堅意菩薩摩訶薩、定意菩薩摩訶薩、無盡意菩薩摩訶薩、無邊意菩薩摩訶薩、海意菩薩摩訶薩、正定意菩薩摩訶薩、淨意菩薩摩訶薩、智意菩薩摩訶薩と曰ひき。是の如き等の一切、各各の佛刹に、已に受記を得たり。阿耨多羅三藐三菩提の爲めに法輪を轉するが故に。復最上最勝の天龍・夜叉・健甕婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽、並びに持呪神及び非人等有りき。種々の形容あり、天冠衣服して、器械並びに諸の幡蓋を執持せり。及び諸の鬼神、仙人衆等、皆來集して坐し、法を聽かんと欲せり。

爾時、世尊、衆大海の如きに前後圍遶せられ、說法する所有れば、初中後善、其の義深遠に、其の語巧妙、具足して廣く清淨の梵行を説きたまふ。爾時、楞伽大城の中に、羅刹王あり、毘毘沙那

【一】持呪神とは vidyādharī 是持明神ともいふ一種の鬼神なり。

【二】 ajātakamūḍhyaḥ

【三】 aśvajit

【四】 mahākāśyapaḥ

【五】 śāriputraḥ

【六】 maṇḍalyāyanaḥ

【七】 mahāmaṇḍya

【八】 vīraśamati 唐譯「勝慧」

【九】 śāramati 唐譯「寂慧」

【一〇】 śāramati 唐譯「寂慧」

【一一】 abhayaṃati

【一二】 śigaramati

【一三】 śigaramati

【一四】 śuddhamati (vimalamati) 唐譯「無垢慧」

【一五】 jhānamati

【一六】 唐譯「毘毘沙那」 vibhīṣa-

と譯して「恐怖せしむるもの」と謂ふべし。クペラ及びラー

ーナの同胞にして、ラーマ

王楞伽島を討伐し、ラーマ

鬼王を敗りし後、ビブヒーン

ヤナを以て楞伽島の王となせ

方マイソール地方一帯の山地を以てこれに擬するが至當であらう。この邊は特に上質の梅檀樹を産出すること、全印度これに匹敵すべき地方は無い。そこで楞伽城即ち楞伽なる都市は摩羅耶山頂に在つたやうであるが、どうもこの楞伽城を現今の一地點に示することは到底不可能らしい。或る一説では楞伽は現今の錫蘭島よりもつと廣い地點を指すのだと云ふ。さすれば或は南印度の或る一地方に楞伽と呼ばれる都市があつたのかもしれない。然しそれは至極曖昧な話でもあり、寧ろこれはこの經典作者の地理的概念が

土地懸隔の爲めに的確を缺き、單に想像の上で南方の二地域を結び付けて摩羅耶山頂の楞伽城と云ふやうにしたものであらう。尤もこれは楞伽經の上のことであるが、本經では其の云ふ所一層不明確で「大摩羅耶精妙山頂、摩訶園林、華池沼邊、大持咒神の居止する處、人の行く能はざる、最得道者の所居の處」と見えてゐる。これでは全く神話の領域となつてしまつたわけである。

にも十地ありと云ふは頗る奇なる一説と謂うべきである。ともかく十地の研究に於ては一應これを考察に入れねばならぬことは勿論である。

本經の翻譯は歷代三寶紀卷第十一によれば天和五年(西紀五七〇)闍那耶舍、二弟子耶舍崛多及び闍那崛多等と共に、大冢宰晋蕩公宇文護の爲めに、長安の舊城四天王寺に於て譯すとある。又唐代永隆元年(西紀六八〇年)に地婆訶羅の譯なる證契大乘經二卷は同本の異譯であつてよく吻合する。脚註唐譯の名を以て數々類文を對照するものは此の譯である。

昭和七年一月

譯者 泉

芳 環 識

を知らざるは無く、實に印度の理想的人格として最も深き尊敬が捧げられる。

ラーマ王が理想的な人格として憧憬の中心をなすのと反對に、その敵對者羅刹鬼王は憎惡嫌厭的となることは自然勢である。然るに大乘佛教徒はかゝる敵役の一人を拉し來つて經典の勸請者となし、説法の端を起す重要動機となす所に、かの大乗佛教徒が印度一般文學と社會通念に對して一種反逆的な態度を表明して居たのを看取すべきではないか。蓋し戒日王朝の前後に婆羅門文學と佛敎文學とは相並んで互に華々しい光彩を競つたことがある。其の間この種の皮肉な思想上の挑戰的態度は相當に有り得たことと首肯せられる。

或は又恚ういふ見方もあらう。佛敎は本來印度の社會に對しては反逆者である。印度の社會はカスト制度が總てであつて、このカスト制度を除去したならば

何ものも殘らぬと云つて可い。然して釋尊の敎團はこのカスト制度の無視を敢へてした。釋尊の敎團は婆羅門を容れると共に旃陀羅をすらも拒まない。これは確かに佛敎が印度から逐はれるに至つた有力なる原因の一つであらねばならぬが、同時に又それが世界的宗教として國境を超越する所以で、この本來の性質の反映としてラーマ王も羅刹鬼王も一視同仁、大乘海中に融合せしめられたものであらう。

或は又恚う見ても可い。佛敎は平和の使者である。印度の社會制度に對する反逆も、基づく所は平等平和の理想にある。

さればラーマ王がヴィシュヌ神の權化の一と信じられてゐるやうに、釋尊も亦印度敎徒にはやはりヴィシュヌ神の化現の一として無上の尊敬が表せられる。佛陀伽耶の釋尊像は現今ヴィシュヌ神の標相を著けて塗り替へられてゐる。これも印度人に

とつてはさまざま不自然なことは感じられてゐないのである。そこでこの理を以てすればラーマ王も釋尊も共にヴィシュヌ神の化現なるに於て同一である。この印度民族の心理を捉へ來りて楞伽並びに本經典の創作者は此に釋尊といふラーマ王と羅刹鬼王とを握手させ、平和の天地を開展せしめた。叙事詩ラーマヤナ以來久しく敵對の地位に置かれた二つの人格は此に平和の光明の裡に融和せしめられた。この大乘佛敎徒の手腕、隨つてその抱負は敬服に値するものと云へよう。

楞伽と云へば現今の錫蘭島なれども、現今の錫蘭島には摩羅耶山なるものは無い。摩羅耶山は現在印度文學の上では南印度地方の山脈一帯を指すもので、摩羅耶の山には梅檀を産し、詩人は常にマヤの風は梅檀の薫りをこめて吹くと歌ふ。現今南印度マラバル沿岸地から、東

大乘同性經解題

本經は楞伽王毘毘沙那の來詣に端を起して、衆生の實相、衆生界の無盡菩提、世諦法の論議、次に佛放光の奇瑞、楞伽王の授記、その本生説話、かくて娑婆界の嚴淨國土となること、次には他方界より寶莊嚴殿を携へて菩薩の來るあり、次には十地の相を詳説して佛は如來の初地を示す。而も第二地以上は説くも大衆に了解せらるゝことなし、只光明を見るのみと結んでゐる。蓋し大乘の立場より佛教々理を縦横に論じて、點綴するに興趣ある説話を以てせるものと謂うべきである。

大乘同性の「同性」なる語は蓋し唐譯の「證契」に相當するより見るも、abhisamaya を譯したものであらう。abhisamaya は通常「一致」「約束」を意味し、佛教

解題

の用語としては「明瞭なる理解」「現觀」の意義がある。孰れにしてもこの經の取扱ふ項目は、大乘教徒としての「約束」「證契」でもあり、同時に「一致」「没入」して大乘そのものに成り、きることでもあらう。此に面白いことは破戒者の如き癡人が正信を得て直心淳淨ならば亦能く善處に生ずることを述べて居る。これは他力教を暗示するものであり、又一方に娑婆世界を阿彌陀如來の佛刹に勝ると説いて居るのと併せて注意を惹くのである。

楞伽王毘毘沙那を捉し來つて大乘行海の一人格として取扱つてゐる所は、かの十卷楞伽及び七卷楞伽の第一品に羅婆那楞伽王を捉し來つて佛の説法を勸請せしむるものと巧を同じくするもので、否寧ろ楞伽の彼の一品は——あれは明かに後

世の加添であるが——この大乘同性經から暗示されて構想したものでは無いかとの推測は十分に根據を有し得ると信ずる。此の經の説處は「大摩羅耶山頂云云」とあつて、楞伽經の「大海濱摩羅耶山頂」若くは「大海畔摩羅耶山頂」と大體に於て同じである。又毘毘沙那なる楞伽王は楞伽經の羅婆那とは兄弟の關係にあることは印度神話の告ぐる所、加ふるにラーマ王の楞伽島討伐の後、王は毘毘沙那を楞伽島の王としたものである。經典作者は此に毘毘沙那を取り扱ふ一方に、その兄弟の羅婆那を楞伽經で取扱つたことは自然であり、影略互顯して大乘教徒が印度文學上の人格を如何に看取せしかを知らしむる好資料と謂うべきである。

楞伽の王とはいへど彼は一個の羅刹鬼王である。印度ではラーマ王の羅刹鬼討伐を詳説するラーマヤナの詩篇は最も汎く讀まれ、三歳の童子もラーマ王の名

學し、放逸を得ること無けん。是れ我が教ふる所なり」と。時に諸の比丘、世尊の説きたまふを聞きて皆大歡喜し、世尊の説に於て信樂の心を生じ、歡喜して奉行せり。

正法念處經終

身念處品第七之七

二八五

名け、次を康白洲くわうびやくしゅうと名け、次を普賢洲と名け、次を心自在洲と名け、次を黑髮洲と名け、次を香鬘洲と名け、次を三角洲と名け、次を須摩拏洲しよまたなしゅうと名け、次を除那斯都洲じよなすしゆと名け、次を阿藍迦洲あらんがしゅうと名け、次を楞迦洲りやうがしゅうと名け、十二山有りて羅刹らせつの住する所にして、次を彌留毘羅迦洲みやりうひらかしゅうと名け、次を山佳洲と名け、次を赤貝洲と名け、次を赤眞珠洲と名け、次を雪施洲と名け、次を沙塵遶洲と名け、次を無道洲と名け、次を五銅洲と名け、次を覆洲と名け、次を賒吉帝力洲じよきつていりきしゅうと名け、次を女國洲と名け、次を僂樹洲と名け、次を翳沙波陀洲おひさばたしゅうと名け、次を丈夫洲と名け、閻浮提界に是の如き等の最勝の小洲を説く。此の閻浮提は縱横七千由旬にして、周遍く愛す可きこと前に説く所の如し。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、日月の光は何等の處を照すを觀るや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て日月の光を見るに、須彌山王の四面の四天下を照し、及び大海を照し、須彌山王を照すこと八萬四千由旬にして、光は山側を照して但其の半に周し。斫迦婆羅金剛六山の周圍は三十六億由旬ありて、忍び難き業火は金剛斫迦婆羅山の乳水海を燒然き、近ければ則ち酪を成し、轉また此の山に近ければ則ち生酥を成し、漸漸く復また近ければ則ち熟酥を成し、漸漸に之れに近ければ、地獄の火之れを燒きて磨滅せしめ、是の故に滿ちずと爲す。閻浮提等の是の修行者は欲界を觀、實の如くに之れを見て欲意を厭離おんりするに、一處として常に破壊せず、變易せざる法を見ず、一切の處に於て、始は無なき生死の自業果報の因緣力の故に自業の果報に戲弄あそせられ、一處として生ぜず死せざる有ること無く、若しは百、若しは千、若しは百千返も無量無邊に生死して無間なり。内外身を觀じて欲愛を厭離おんりし、色しき・聲しやう・香かう・味み・觸たくに於て愛樂せざれ、是の如くに那羅帝婆羅門長者の聚落の修行する比丘は、身念處を修めて魔境に住せざれ。是の如き念處を説くを聞き已れり。衆多の人有りて我が見垢を破し、無上法中に法眼の生ずることを得て、(今)身念處無上の法を説けり。若しは山谷に於て、若しは山窟に在り、若しは塚間に在り、若しは露地に在り、若しは艸積さきの邊まにて禪定を修

は衆生の自らの業にして、星曜の作すに非ず。

復次と、修行者は外身に隨順して、曜星宿を觀じて業の果報を見るに、曜等の作すに非ず。多星宿海を觀じ已り、須彌山憂陀延山峰を觀じ已らんには、實の如くに外身を知らん。

復次に、修行者は多星海を觀るに、縱廣七千由旬なり。此の海を過ぎ已りて、諸の神僊有りて住して此の洲に在り、山河・林樹・華果を具足すること閻浮提の如く、其の洲の縱廣は三千由旬あり、僊人・夜叉の住止する所にして、一切の如意樹と華果を具足す。此の洲を過ぎ已りて大圍山有り、及び大海有り、三千由旬にして、閻浮提と弗婆提なる二國の中間に在り。是の如き大海を冷暖水と名け、縱廣三千由旬、多く螺貝・提彌魚・堤彌鯢・那迦羅魚・摩伽羅魚・失收摩羅魚・龜・鼈の屬有りて大海中に住せり。此の山を過ぎて一大海有りて名けて赤海と曰ひ、閻浮提を去ること遠からず、縱廣五千由旬にして、赤水中に滿ち、多く大魚有り、其の魚は赤色にして互相に食噉ひ、魚血を以ての故に海水をして赤から令むるが故に赤水と名く。此の海を過ぎ已りて一大海有りて名けて清水と曰ひ、縱廣七千由旬にして、山河を具足し、多く大魚有り、第一に極めて深し。此の海を過ぎ已りて一大海有りて名けて寶渚と曰ひ、縱廣三千由旬にて、一切の衆寶は集りて此の渚に在り、金沙・砵磧・眞珠・珊瑚・蘇摩羅寶など種種に具足し、摩偷果有りて亂心毒と名け、生じて樹の上に在り、若し閻浮提人果を取りて之れを食さんに、七日死せるが如く、若し飛鳥有りて之れを食さんには即ち死す。此の渚を過ぎ已りて一大海有り、名けて鹽と曰ひ、縱廣七千由旬にして、多く螺貝・眞珠・蚌蛤・提彌魚・提彌鯢・那迦羅魚・軍毘羅魚・那迦羅魚有りて其の中に充滿し、復諸の龍・夜叉・羅刹・毘舍遮鬼有りて皆水中に住し、水下に多く無量の諸山有り。此の閻浮提洲は、五百の小洲以て圍遶を爲す。勝れし者を略說せんに、所謂、金地洲(と名け)、次を寶石洲と名け、次を幢臺洲と名け、次を迦那洲と名け、次を螺貝洲と名け、次を眞珠洲と名け、次を圍洲と名け、次を光明洲と名け、次を摩沙波陀迦洲と

一法として能く生死の險道、曠野を度ること、正法を聞きて受持し讀誦するが如きこと有ること無し。他人の爲に説くは諸の施中に勝れ、所謂、法施は第一に持戒せしめ、謂く、正法を聞き、正法の智を聞くを最も第一と爲す。正法とは亦前に説くが如し。弗婆提の業の果報を觀じ已らんに、實の如くに外身を知らん。

復次に、修行者は弗婆提を觀するに、復何等の山河・海渚有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て、弗婆提の八千由旬を過ぎて大山有るを見る。名けて礎石と曰ひ、縱廣三千由旬、此の山の四面は一萬由旬あり、微少の鐵有るも皆悉く速に起きて此の山に走奔る。此の山を過ぎ已りて一大海有り、七千由旬にして、名けて波行と曰ひ、五山を圍遶きて猶し環劍の如し。何等を五と爲すや。一を鉞山と名け、二を大藏山と名け、三を多吒迦山と名け、四を蛇多山と名け、五を歡喜山と多く。此の山を過ぎ已りて一大洲有りて蛇吒迦曼荼と名け、縱廣三千由旬にて、多く夜叉・緊那羅有りて此の洲に住し、河池・樹林・華果を具足して甚だ愛樂す可く、閻浮提中、弗婆提中の所有る禽獸は此の洲に悉く有り。此の洲を過ぎ已りて一大海有りて多星宿と名け、海中に山有りて憂陀延と名け、十三峰有りて此の大海を遶り、須彌山を去ること遠からず。外道説きて言く「閻浮提の人の善・不善の業の増上緣として、善・不善の風は、憂陀延山中に於ける星宿より出す」と。諸の婆羅門、外道の論師は業報を失ひ、眞諦を知らず。人王の所説に於ては言く「星宿諸曜の所作にて業の果報あるに非ず。」是の諸の外道、婆羅門論師は邪見にて倒説す。星曜の所作にて業の果報あるに非ず。(外道は、)若し星曜の所作にて業の果報あるに非ざれば、日月勝るゝが故に善・不善の時節、流轉する一切の時節に而も華果有らん(と言ふも、)日月若し勝れば何が故に日月は餘曜の覆ふ所と爲るや。所謂、日、莎婆奴、月は羅睺に、一切の星宿は曜の爲に覆はれ、曜は餘の爲に覆はれる。是の善・不善の業を以ての故に、宿曜にも亦善・不善の業有るにて、是の故に(衆生の)善・不善の業

【二】外道。佛教以外の教學又はその人を云ふ。六師外道、九十五種外道等あり。下の外道の説は、人間生活の直接の因縁たる業の原理を知らず徒に不合理な天體現象と人間生活と直接の因縁を成立すると説くものにて不合理なる邪説なりといふなり。

【三】増上緣。因縁、所等無間緣、所縁々と共に四緣と云ふ。何法に依らず、一法の果に對してすべて皆増上の用あり、之れを増上緣と云ふ。

【四】Srivastu。二十八宿の第廿、牛星か。字書に此語は一病名となつてゐるからこの風が日蝕を起すといふ傳説あるにや。學者の提擧を云ふ。

【五】羅睺(Rahu)。障蔽と譯す。阿修羅王の名なり。館く日月の光を覆ひ、日蝕、月蝕をおこすと云ふ。

種の華果・禽獸を具足することも亦前に説くが如し。眞珠鬘山より一大河を出して不見岸と名け、廣さ一由旬にして、一有りて眞珠鬘山に住し、名けて普眼と曰ふ。是の如くに弗婆提の六山は圍遶けり。弗婆提に三大城有り、一を善門城と名け、二を山樂城と名け、三を普遊戲城と名く。一の大城は廣さ三由旬にして、中・下の城は六十三有り、一中城有りて鳩吒舎と名け、次を大波舎と名け、次を普吼城と名け、是の如き等有りて中城の中第一に最も大なり。下の城を一切負と名け、次を大晉城と名け、次を曠野穴城と名け、是の如き等有りて、小城の中第一に最も大なり。復三億五十萬三千五百五十六の聚落有り、第一の聚落を迦戸摩羅と名け、次を水沫と名け、次を根村と名け、次を樹啼村と名け、次を一切人と名け、次を葉聚落と名け、次を毘頭羅と名け、次を波迦村と名け、次を毘吒聚落と名け、次を摩摩聚落と名け、次を刪提と名け、次を伽吒嚧と名け、次を徒呵と名け、次を林聚落と名け、次を赤施と名け、次を阿叉と名け、次を風吹と名け、次を鬘村と名け、次を頂樹と名け、次を黑飯と名け、是の如き等の第一の聚落有り、此れ等の衆人は其の面圓滿にして地洲の形を像る。闍浮提人は耳と髪を莊嚴り、鬱單越人は眼に莊嚴を爲し、瞿陀尼人は頂と腹を莊嚴り、弗婆提人は肩と脛を莊嚴りて、四天下の人は自身を嚴好にす。

復次に、修行者は業の果報を觀るに、衆生は何の業にて弗婆提に生るゝや。上・中・下の業有りて、彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て此の衆生を見るに、生の生に業法の果報を知らず、知らざるを以ての故に福田に非ざるに施し、或ひは乞求を難くすれば乃ち施與し、或ひは求むることを勤み苦しむは亦施與すること前に説くが如く、此の業を以ての故に下品生と名く。若し衆生有りて中品戒を持し、若しは國王の法に近くを以ての故に衆生を殺さざるも、清淨の心なるに非ざれば、此の因縁を以て身壞れ命終りて天上に生れ、天従り命終りて弗婆提に生れて中業の生と名く。上人上業とは、正法を聞きて受持し讀誦し、他人の爲に説きて隨喜を生じて、説の如くに修行せしむ。

河と名け、林覺山中に住する所の人を俱知羅と名く。

復次に、修行者は第三山を觀す。孔雀聚と名け、縱廣千由旬にして、此の山の四大林に於て一を雲林と名け、二を百池林と名け、三を高吼林と名け、四を眞珠輪林と名く。復大河有りて、所謂、泥均輪陀河（と名け）、次を大喜河と名け、次を愛林河と名け、次を先流河と名け、次を吉河と名く。孔雀山に於て住する人有り、名けて青咽と曰ふ。

復次に、修行者は弗婆提を觀るに、第四山有りて默峪と名け、此の山に林有りて闍知羅林と名け、次を可愛林と名け、次を彌伽林と名け、華果を具足すること亦前に説くが如し。林中に河有りて涅槃迦と名け、次を普笑と名け、次を歌羅羅と名け、林中に獸有りて名けて調伏と曰ひ、次を普影と名け、次を毛獸と名け、次を見走と名け、次を名けて馬と爲し、次を無道と名け、次を偕獸と名け、次を多羅頭拏と名け、次を好耳と名け、次を象頭と名け、次を第一兒と名け、次を愛影と名け、次を兎毛と名け、次を駝身と名け、次を黑尾と名け、次を白頭と名け、次を端正と名け、次を蛇舌と名け、次を狗牙と名け、次を伽婆耶と名け、次を鉗婆と名け、次を確井井と名く。是の如き獸は闍浮提中に或ひは有り或ひは無し。默峪山中に闍林流池・華果・樹木の一切を具足すること前に説くが如く、一切の華池は闍浮提の如し。默峪山に住する人を名けて速力と曰ふ。

復次に、修行者は弗婆提國を觀るに、第五山有りて名けて海高と曰ひ、縱廣一千由旬にして、園林流池・華果を具足することも亦前に説くが如し。此の山に林有りて名けて三瀋林と曰ひ、次を咽喉閉林と名け、次を山林と名け、林中に河有りて名けて三角と曰ひ、次を高喚と名け、次を石聲と名け、人の海高山に住する者を遮鉢羅と名く。海高山を觀じ已らんには實の如くに外身を知らん。

復次に、修行者は隨順して外身を觀て弗婆提を觀るに、何等の山有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て第六山を見る。眞珠鬘と名け、縱廣一千由旬にして、園林・流池を周廻く具足し、種

し、山河・海渚にして生死處に非ざる有ること無く、山河・海渚に鍼の鋒許も我が生處に非ざる無し。百千億億億百千生死の中は皆愛別離し怨憎合會し、百千億億億百千生死の處は地獄・餓鬼・畜生に墮ち、始無く終無き貪・瞋・癡の網に繫縛せられて生死に流轉す。是の故に應に生死を遠離すべく、貪・瞋を生ずること勿れ。此の生死は甚だ苦惱と爲し、久しく堅牢なる痛苦と忍び難き老死・憂悲・苦惱・愁毒を受け、一切の生有るは必ず當に墮落して破壞門に歸すべく、生死中に於ては少しの常なる無きこと、譬へば日出でては少しの闇有ること無きが如く、生死中を觀るに亦復是の如し。是の如く修行者は外身を觀ぜんに、實の如くに外身を知ることを得ん。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、平等海を過ぎて何等の山河・海渚有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て、弗婆提を見る。縱廣八千由旬にして、多く眷屬の小洲を具足し、聚落・城・邑・河池・林樹・洲渚・山窟・窟窟・華果・禽獸を具足すること有り。六大山有りて、一を大波賒山と名け、二を新鬘山と名け、三を孔雀集山と名け、四を獸嶺山と名け、五を海高山と名け、六を眞珠鬘山と名け、弗婆提に過し。閻浮提の如きは四大山有り、前に説く所の如し。大波賒山の縱廣は三千由旬にして、此の山中に於て三大山有り、其の一一の林は皆悉く縱廣一千由旬あり、一を須彌林と名け、二を流水林と名け、三を嶺鬘林と名け、衆樹を具足す。所謂、呵梨勒樹(等)。次を平面樹と名け、次を嶺生樹と名け、次を枝等樹と名け、次を堦生樹と名け、次を石生樹と名け、閻浮提の樹を説けるが如し。此の山に住する者を大鬘人と名け、山中に河有りて婆盧河と名け、次を流沙河と名け、次を狹流河と名け、次を連流河と名け、次を龍水河と名け、次を光林河と名け、次を征迦河と名く。第二の大山を名けて林鬘と曰ひ、縱廣一千由旬にして、此の山に林有りて鳩吒林と名け、次を行林と名け、次を天木行林と名け、次を煙林と名け、次を久垂林と名く。山中に河有りて、一を多羅覆と名け、次を角圍河と名け、次を愛水河と名け、次を攝念河と名け、次を煙笑

縱廣五百千由旬にして樹林多饒く、所謂、那梨崙羅樹（と名け、）次を波那婆樹と名け、次を無遮果樹と名け、次を多羅樹と名け、次を多摩羅樹と名け、次を卑耶羅樹と名け、次を俱羅迦樹と名け、次を陀婆樹と名け、次を佉提羅樹と名け、次を提羅迦樹と名け、次を阿殊那樹と名け、次を迦曇婆樹と名け、次を泥奈羅婆樹と名け、次を佉殊羅樹と名け、次を菴婆羅樹と名け、次を卑未婆陀樹と名け、次を婆多利樹と名け、次を婆吒樹と名け、次を甄叔迦樹と名け、次を龍樹と名け、次を無憂樹と名け、次を騏驎陀樹と名け、次を咬多迦樹と名け、次を迦尼迦羅樹と名け、次を佛堤目多迦樹と名け、次を那浮陀利迦樹と名け、次を波吒迦樹と名け、次を波吒羅樹と名け、次を迦卑多樹と名け、次を毘羅婆樹と名け、次を天木香樹と名け、次を波頭摩樹と名け、次を臙波迦樹と名け、次を迦羅毘略迦樹と名け、次を青無憂樹と名け、次を鳩羅婆迦樹と名け、次を軍陀樹と名け、次を婆陀羅樹と名け、次を鳩吒闍樹と名け、多く是の如き種種の樹有り、處處に流泉あり、乾闥婆王は彼の林に遊戲す。此の山を過ぎ已りて一大海有り、縱廣五百由旬にして、名けて乳水と曰ひ、其の水の色と味は乳の如くにて異なる無く、海に大魚有り、長さ五由旬にて、住して海中に在り。是の山を過ぎ已りて一沙山有り、縱廣一千由旬、林樹及び諸の藥艸有ること無し。此の山を過ぎ已りて一大海有りて名けて龍滿と曰ひ、縱廣六千由旬、海に諸の龍有りて旃遮羅と名け、此の海中に住し、自相は鬪諍ふにて、樂みて大雨を注ぐ。此の海を過ぎ已りて一大海有りて蘇無陀羅と名け、縱廣二千由旬、其の水は動かす清淨く湛然として、多く軍毘羅魚・那迦羅魚・失收摩羅魚・螺貝の屬有り。

復次に、修行者は業の果報を知る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て説くが如き處なる山河・海渚・林樹の處を見るに、一處として生ぜず死せず、生ぜず滅せざる有ること無く、一切の恩愛別離せざる無く、一處として業に非ざるが故に行くこと有ること無く、一處として業藏に非ざる有ること無く、一處として業に非ずして流轉する有ること無く、自業の果を受けて或ひは生れ或ひは死

功德を除き、譬へば外なる三種の田の如し。一には石饑く、亦水衣多きを名けて中田と爲し、二には其の水豊に足りて艸穢有ること無く、又水衣無く、亦寇賊無きを名けて上田と爲し、三には多く水衣と艸穢有り、其の水調はず、又寇賊多きを是れを下田と名け、若し諸の田夫れ勤めて功力を加へんには果實を得。此の内外法は業蔵を以ての故に業に隨ひて流轉し、業にて轉じて行き、各各勢力有り、各各因縁ありて各各生を受け、瞿陀尼人は浮業を修めざるが故に此處に生れ、命終りて自らの業にて生死に流轉す。是の如くに修行者外法の業を觀じ已らんには、實の如くに外身を知らん。

復次に、修行者は隨順して外身を觀るに、瞿陀尼を過ぎて復何等の山河・海渚有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、瞿陀尼と弗婆提なる兩洲の中間に一大海有りて清淨水と名く。縱廣一萬二千由旬にして、清水盈滿ち、多く螺貝・堤彌魚・提鯢維魚・那迦魚・摩迦羅魚・軍毘維魚・大收摩維魚有り、魚亦青色なり。此の海を過ぎ已りて珊瑚山有り、縱廣五千由旬、毒害の衆生住して山中に在り。此の山を過ぎ已りて熱水海有り、多く毒蛇有りて、毒蛇の氣の故に海水を熱から令め、一の衆生も有ること無く、蛇毒を以ての故に衆生は皆死す。毒の熱を以ての故なり。此の海を過ぎ已りて一大海有りて名けて赤海と曰ひ、縱廣一萬五千由旬にして、龍・阿修羅此の海の下に住し、飲食を以ての故に、互相に瞋恚りて常に共に鬪争ふ。龍有りて名けて摩多梨那と曰ひ、阿修羅有りて僧伽多と名く。此の海を過ぎ已りて一大洲有りて羅刹女國と名け、縱廣二千由旬にして、羅刹女有りて名けて長髮と曰ひ、住して此の洲に在り、火燒の香華及び肉を啖食ひ、一念のころ能く二千由旬を行き、常に人の便を求めて心常に憶念ひ、是の羅刹洲には骸骨・血骨狼藉れて臭穢く其の洲に充滿せり。此の洲を過ぎ已りて一大洲有りて毘舍遮鬼女國と名け、縱廣五千由旬にして、毘舍遮鬼ありて名けて髮覆と曰ひ、住して此の洲に在り。此の洲を過ぎ已りて一大山有りて名けて饑山と曰ひ、

【一六】 水垢の意か。

【一七】 Saiman 鱈魚。一名「小兒殺し」とも呼ばる。此語は前に度々出でたり。

復次に、修行者は隨順して外身を觀じて瞿陀尼を觀るに、何を受用する所なりや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て瞿陀尼を見るに、牛・犢多饒くろしおほく、一切の女人に皆三乳有り、闍浮提の女人の十月にて乃ち産むが如く、瞿陀尼人も亦復是の如し。闍浮提の如きは女人に二の乳ありて汗を流し、瞿陀尼の女人には三乳ありて汗を流すこと亦復是の如し。闍浮提の如くに園林を具足し、華果と河池の一切を具足するも、其の果は半の味、其の華は半の香、河水は半の味なり。

復次に、修行者は隨順して外身を觀るに、衆生は何の業にて瞿陀尼に生るゝや。下・中の業を以て瞿陀尼に生れ、彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、餘の生處にて戒少く、施少く、業少く、法行に順すること少し。云何んが戒少きや。前の生處に於て、貧窮を以ての故に雇を受けて戒を持し、或ひは刑罰を畏るゝも、清淨心なるに非ず、佛・法・僧を禮し、國王に親近して財の布施を得るも、王に近づくを以ての故に經を讀誦せず、福田に非ざる、貪る邪見の人に施して謂ひて福田と爲し、十善も垢濁の行にて、清淨ならざる業の因縁の故に闍浮提に死して瞿陀尼に生れ、是の如くに善・不善を知らざるが故に食は半味の食にして、少智・少慧にて、女人に貪著せし先業の因縁にて瞿陀尼に生る。一切の衆生は業藏を以ての故に、業に由るが故に、行業の故に流轉して、其の作す所の業の善、不善の業の如くに、是の如くに果を得、若し善業を作さば人・天中に生れ、若し不善の業にては、地獄・餓鬼・畜生に墮ち、業の因縁を以て相似の果を得ること、種子を種くが如く、譬へば穀を種かんとに穀を得、麥を種かんにには麥を得、稗子は稗子を生ずるが如し。種子を以て薄地に種かんに收果は減少し、若し種子を以て之れを良田に種かんに多く果實を收むるが如く、赤稻を種かんにには餘の物を生ぜず、豆を種かんにには豆を得、甘蔗を種かんにには甘蔗を得るが如く、田勝るゝを以ての故に果も亦勝る。三種の田の如きは、一には福田施、二には福田苦施、三には苦施にて、福田施は之れを名けて上福田と爲し、苦施は之れを名けて中と爲し、苦施の下と爲すは思の

の如し。此の山を過ぎじりて三十五里 甌叔迦林オウソクカリン有り、縦横は二千由旬、種種の園林・華果を具足す。此の林を過ぎりて一大山有り、縦横五千由旬にして、金の蓮華池の鵝・鴨・栗蜂は衆の音聲を出せり。此の山を過ぎじりて一大海有り、縦横は十千由旬、金色の水其の中に充満して金色の光を出し、海に金山有りて名けて金水と曰ひ、高さ五百由旬なり。此の山を過ぎじりて瞿陀尼クダニ有り、十億の聚落と一萬二千の城有り、第一の大城は其の數五百、閻浮提に三百餘の大城、所謂、波吒梨弗多城バダリフダウ(等)あるが如く、是の如く瞿陀尼大雲聚等の五百の大城にて、其の大雲聚城は縦横十二由旬あり、四交街巷・屋宅・樓閣は城中に充満せり。中國に住する第一の大城を名けて百門と曰ひ、次を欄楯と名け、次を泥目羅と名け、次を光明と名け、次を山谷と名け、是の如き等の第一の大城有り。中城を攝めて復大國有りて伽多支カダシと名け、次を佉差那多國カサナダクニと名け、次を摩尼國と名け、次を銀國と名け、次を旃國と名け、是の如き等の第一の大國有りて、閻浮提中の第一の大國の如し。謂く、迦尸國、橋薩羅國・摩伽陀國にして、瞿陀尼國の第一の國土も亦復是の如し。次に中國有りて尼棄羅國ニキラクニと謂ひ、次を單持國タンチと名け、次を遮都羅國シヤドラクニと名け、次を俱蘭荼國クランチャクニと名け、次を窟多婆國クツダバクニと名け、次を窟行國クツヤクニと名け、瞿陀尼界に是の如き等の第一の中國有り。二十五國有りて一切の國を攝し、閻浮提の十八大國の如し。瞿陀尼國に五大河有り、一を廣河と名け、二を均周師波帝河クンシュハハテと名け、三を月力河グツリキカと名け、四を樂水河と名け、五を増岐那河クマキナカと名け、閻浮提の四大河の如し。所謂、恒伽河・辛頭河・婆叉河・斯陀河スダカなり。瞿陀尼に五大山有り。何等を五と爲すや。一を龍飛山と名け、二を三峰山サンボウと名け、三を珠門山と名け、四を百節山と名け、五を堅山と名く。閻浮提の如きは四大山有り。何等を四と爲すや。一を雪山と名け、二を民陀山ミンダカと名け、三を摩羅耶山マラヤカと名け、四を雞羅婆山キラバカと名く。瞿陀尼國に三大池有り、一を深岸池と名け、二を無間池ムカンチと名け、三を放光池ホウコウチと名け、閻浮提の阿那婆達多池アナバダタチ及び瞻婆池テンバチの如し。

【五】阿育樹(Ashoka)(無憂樹)を指すとす。その花は甌叔迦實(Kimsuka)の如く赤色なるより、此樹に寶石の名をつけしものか。

有り、一を天冠池國と名け、二を波羅賒池國（波羅賒）と名け、三を鬘衣國（鬘）と名け、四を孔雀晉國と名け、五を山綱住國と名く。天冠池國の縱廣は一百五十由旬、波羅賒池國の縱廣は一百五十由旬、其の鬘衣國の縱廣は二百由旬、孔雀晉國の縱廣は一百由旬、山綱住國の縱廣は一百由旬なり。復十國有り、一の國土は各百由旬なり。何等を十と爲すや。一を拘登伽國（拘登伽）と名け、二を持香國と名け、三を黑腹國と名け、四を轉目國と名け、五を山險岸國と名け、六を順行國と名け、七を四方國と名け、八を圓國と名け、九を髮覆國と名け、十を僧伽多國（僧伽多）と名く。復此の國を觀るに、河池・園林・華果を具足すること亦前に説くが如し。彼の洲の四方の人の面も亦然り閻浮提人の面の大洲を像りて上廣く下狭きが如く、鬱單越人の面の大洲を像ることも亦復是の如し。鬱單越國の一切の洲渚・山谷・園林・華果・河池・禽獸を具足せるを觀ることは是の如く、觀じ已らんには實の如くに外身を知らん。

復次に、修行者は隨順して外身を觀ず。鬱單越國と瞿陀尼國を過ぎて、二國の中間に復何等の山林海渚有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、鬱單越國と瞿陀尼國（瞿陀尼）なる二國の中間に一大海有りて名けて普眼（普眼）と曰ひ、廣さ一萬由旬にして、一水眼有りて廣さ一由旬あり、龍の勢力の故なり。此の大海を過ぎて一大山有りて遊戲臺と名け、縱廣は十千由旬、色は聚墨の如し。龍の氣燒くが故なり。此の山を過ぎ已りて一大海有りて貝思彌（貝思彌）と名け、縱廣一千由旬にして、多く大魚なる堤彌魚・堤彌鯢・維魚・軍毘羅魚・那迦羅魚（那迦羅）有り、是の如き等の魚海中に充滿し、其の海甚だ深くして見る者怖畏れ、此の海中に於て樂住龍有りて瞋恚を離る。此の大海を過ぎて一大海有りて名けて水雲と曰ひ、縱廣十千由旬にして、此の海中に於て大波湧出し、或ひは十由旬・二十由旬・三十由旬なり。此の海を過ぎ已りて一大洲有りて眞珠蛤と名け、多く眞珠有り、若しは魚若しは龍水中に於て死すれば此の洲に棄てらる。其の洲の縱廣は一千由旬なり。此の洲を過ぎ已りて一大山有りて名けて寶山と曰ひ、縱廣は正等（正等）く五千由旬にして、七寶の山峰の毘琉璃等は猶し第二の須彌山王

【一四】 須彌四州の西方の國。

以ての故に色・聲・香・味・觸の樂を受け、還りて天上に生れ、天上に命終りて、先に法を開けるが故に、未來世に於て初禪定を得て、梵身天若しは梵衆天若しは大梵天に生れ、聞法の種子の因縁力を以ての故に未來世に於て第二禪を得、此に従り命終りて少光天・無量光天・光音天に生れ、復法を開ける因縁力を以ての故に、未來世に於て第三禪を得て、遍淨天・福德生天に生れ、復法を開きて修行せらる因縁を以て、難きを閉ひて思惟して未來世に於て第四禪を得、著を離れし智火の煩惱の樹を燒けるを以て、無量善天・遍善天・廣果天に生れ、復法を開ける因縁の種子を以て、修行し讀誦し、難きを閉ひて思惟し、邪見の爲に説きて正法に住せしめて、一切の有を盡くし、險難を度りて緣覺道を得、若しは阿耨多羅三藐三菩提の願を發しては則ち無上正覺・明行・足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊を成す。正法を開ける因縁力を以ての故なり。正法を聞くは謂く布施・持戒を聞くを以て根本と爲す。何を以ての故に。此の聞法は、若しは在家・出家の布施の果を聞き、既に了知し已りては布施を行じ、布施の果を知り、持戒の果を聞き、禁戒を持し、智慧の果を聞き、智慧を修集し、聞き已りて即ち天に生ずることを得、終に解脱を得ればにて、是の法を聞くことは生天・涅槃の種子なり。一切の施の若しは資生施、若しは無畏施、若しは戒を以て施するに於て、正法を聞かしむる施を最も第一と爲す。若し正法を聞かんには第一に持戒し、若し正法を聞かんには他人の爲に説きて不善を捨て令めて法を増長せしめ、是れ正法の父たり。

復次に、修行者は隨順して外身を觀す。鬚單越を過ぎて復何等の人有りて住するや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て鬚單越を見るに、北に國有り、縱廣二千由旬にして、一を迦旃毘利と名け、縱廣三百由旬、河有りて迦旃毘利と名け、人の所住の處も亦迦旃毘利と名け、河池・蓮華・華果あり、園林の枝葉相ひ覆ふこと前に説く所の如し。此の國を過ぎ已りて河有りて阿彌多と名け、其の邊の縱廣七百由旬にして、園林・華池を皆悉く具足すること亦前に説くが如し。阿彌多河の邊に五國土

【一】梵身天等。色界に十八天あり、則ち初禪の三天、二禪の三天、三禪の三天、四禪の九天なり。その中今此處に三禪は二天、四禪は三天のみを出せり。

【二】存在、又は生死の意。

【三】佛の十號をあぐ、

1 無上は如來 (Tathagata) の誤りか。

2 正覺 (Samyaksambuddha) 又は正徧智。

3 明行足 (Vidyāraṃbha-sampanna) 三明の行を具足せるものゝ意。

4 善逝 (Sugata) 善く涅槃に入れるものゝ意。

5 世間解 (Lohavita) 世間の真相を了解するもの。

6 無上士 (Anuttara)。

7 調御丈夫 (Puruṣa-tamya-garhita) 丈夫を調御するものゝ意。

8 天人師 (Devamanuṣya-sīpati) 人天の導師。

9 佛 (Buddha) 覺者の意。

10 世尊 (Lokanātha) 世界に尊ばれるもの。

何等は十山なる。一を僧迦勝山と名け、二を平等峯山と名け、三を勿力迦山と名け、四を白雲持山と名け、五を高聚山と名け、六を鬘莊嚴山と名け、七を因陀羅樂山と名け、八を歡喜持山と名け、九を心順山と名け、十を俱賒耶舍莊嚴山と名く。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て此の衆生を見るに、前世の善業にて此の山中に生れ、殺さず、盜まず、邪淫せず、飲酒せず、十善業を行じて此の山中に生る。復次に、修行者は業の果報を觀す。何の業を以て、彼の諸の衆生は色力・形相餘の衆生に勝るゝや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て此の衆生見るに、正見にて施を行じ、心詔曲ならず、衆生を惱さず、直心にて憐愍し、法に順じて修行し、正法に親近し、此の因縁を以て身壞れ命終りて善道の四天王天・三十三天に生れ、彼しこに於て命終りて此の間に生れ、此の間に命終りて彼處に生る。

復次に、修行者は業の果報を觀するに、此の衆生は何の業を以ての故に勝れたる報を受くるや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て此の衆生を見るに、前世の時を以て怖畏るゝ者に於て施するに無畏を以てせり。人の死に就くに、右門を出で、反縛へられて出で、將ゐられて冢間に至り、惡聲の鼓を打ち、旃陀羅を遣して其の命を斷たんと欲するを見て、之れを躑ひて脱れしめぬ。是の因縁を以て身壞れ、命終りて善道の若しは四天王天・三十三天、若しは夜摩天に生る。

復次に、修行者は隨順して外身を觀るに、此の衆生は何の業を以ての故に勝れし天中に於て餘の天に勝れ、色相は愛す可くして衆人に供養せらるゝや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て此の衆生を見るに、前世の時に於て樂みて正法を聞き、佛の正法、聖法の毘尼を聽き、佛法を讀誦し、乃至一偈も讀誦して思惟せり。一句の正法を開ける因縁を以て轉輪王を作して四天下に主となり、此こ從り命終りて天上に生れ、六欲天に一たび返り二たび返り乃至は七たび返る。謂く、四天王處・三十三天・夜摩天・兜率陀天・化樂天、他化自在天なり。天從り命終りて來りて此の間に生れ、善心を

【八】十善業。六十七卷に出たり。

【九】旃陀羅 (Caitanya)。殺者、屠者、暴戾、嚴儀等と譯す。古代印度の婆羅門 (Brahmana) 刹帝利 (Ksatrya) 毘舍 (Vaisya) 首陀 (Sudra) なる四姓の外に位する人種で、屠殺、守獄等の業をなし、印度他種姓の最も卑しむ姓外の人々である。

【一〇】毘尼、毗奈耶 (Vinaya)。調伏、離行、滅等と譯す。律のことなり。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、鬱單越國に復何等の愛す可き山林有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て鬱單越を見るに、一大山有りて俱賒耶舍くろしやと名け、縱廣一千由旬にして、蓮花池有りて名けて清涼と曰ひ、縱廣五百由旬、金色の蓮花其の中に充滿して垢濁有ること無し。此の池中に於て多く衆蜂有り、鵝鴨鷺さぎ鷺さぎ以て莊嚴を爲し、蓮花池中に天の俱賒耶舍の花、曼陀羅華有り、林樹・華果・河谷・園林・清涼の池あること前に説く所の如し。俱賒耶舍山の半山の中なる五百由旬に於て八萬四千の殿有り、奇特にして愛す可く、眞金を殿と爲して頗梨の欄楯らんじゆんあり、白銀を殿と爲して眞金の欄楯あり、頗梨を殿と爲して毘琉璃寶は以て欄楯を爲し、毘琉璃の殿に頗梨の欄楯あり、青寶玉の殿に車渠の欄楯あり、車渠の寶殿ありて青因陀羅寶以て欄楯と爲し、是の如き諸寶の欄楯互相に間雜り、鈴の網彌覆みまし、歌舞し戲笑し、伎樂の音聲ありて心常に歡喜し、葡萄の蔓は覆ひて猶し天中の善見大城、天の善法堂の如く、俱賒耶舍の莊嚴れる大山も亦復是の如し。八萬四千の殿は園林・河池・樹林・花果の一切を具足し、俱賒耶舍山中に住する所の人を名けて雜色と曰ひ、心常に歡喜して歌舞し戲笑す。飲食を樂むが故なり。

復次に、修行者は業の果報を觀す。是の如き衆生は何が故に愛別離苦し、一切の衆生の恩愛別離して異處に行くを見ざるや。一切は皆當あたに死滅すべきを知らざるや。業に隨ひて報を受け、若し善業有らんには人・天中に生れ、若し不善の業なれば地獄・餓鬼・畜生に墮おつ。此の雜色人は心に放逸を懷なきて厭足えんそくを知らず、色・聲・香・味・觸に愛著して愛の縛しる所と爲り、愛の河に漂たはされ、欲の火に燒かれて而も覺知せず、常無くして死滅しては大黑闇に入る。老苦の少壯を破壊するを見ず、死火の來りて人を燒きて能く永く一切の親愛と離れ令めんと欲するを見ず。死は大火の如くにて、人の命の樹を燒き、衆生の林を焚く。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、鬱單越人は何の業を以ての故に十山中に生るゝや。

【七】色は此場合肉體であるべく、心に肉體を雜へるもの、即ち肉體といふ弱點をもつてゐる人間、凡夫人といふが如き意味か。

就くを見るも、云何んが覺らざるや。初には苦を生ぜず、生を受くる時に於ては父母の精血にて、尿道中に識生じて胎を受け、業風の集まる所は和合して之れを動ごかし、七日に一たび變じて、阿浮陀アフトと名け、阿浮陀中は先生に於て殺生せざるが故に識心滅せず爛れず、第二の七日なるを伽那身カナシンと名け、煩惱・癡識は壞せず滅せずして、是の如く七の七日なるを名けて肉團と曰ひ、住して胎中屎尿の間に在り、若し母身を動かし、若しは母飲食せんに、壓を被りて辛苦して壓せられたる蒲桃の如し。復業風吹いて肉團を動かすを以て、肉團増長して五胞を生ず。所謂、兩手・兩足及び頭なり。復業風に動かさるゝを以て増長して膜衣を生じ、膜衣中従り脈の筒の如きもの有りて上りて生藏を衝き、若し母冷食・熱食の或ひは美き美からざるを食さんに、筒孔中従り其の臍中に入りて胎中の命を爲し、其れをして死せざらしむ。是の如き胎中にて大苦惱を受け、若し胎中に於て死せず填せざれば尿と月水の穢汚する所と爲り、十月胎に住して牢獄に在るが如く苦惱に逼迫られ、一切の身分は猶し山の壓するが如し。胎中従り出でて既に生れたるの後、風日に觸れられて大苦惱を受け、之を地に棄て、意の隨に捨て行かんに、自ら其の指を噉ひて指中より乳を生じ、自て自ら増長して壽命を得、増長して嬰兒となり、轉盛年を成じ、漸く衰老に至りて時の風に滅せらる。衆生は業の故に業藏に流轉し、業の作す所の或ひは善・不善なるが如くに諸の業を成就す。此の如くに衆生は現に業法の果報と苦惱を見るも、而も猶放逸なり。生死中に於ては苦受の本にして、所謂生たるや、寒熱・飢渴・疲極・病瘦・愛別離・苦・怨憎會・苦あり、生死中に於て生れて大苦を爲し、生具を破壊せられて生死に流轉し、無常・苦・空・生滅・無我なり。云何んが爵草越人は而も覺知らざるや。此の如き山谷・園林・花果・河池・蓮花の一切は皆當に無常にて、破壊して虚空に歸すべし。是の如き衆生は一切皆死して天上に生るゝも、天上にて命終らんには、其の本の業に隨ひて地獄・餓鬼・畜生に墮つ。是の修行者は是の如くに業の果報を觀じて生死の過を見んに、自光明人に於て慈悲の心を生ぜん。

【五】阿浮陀(Arbuda)。安浮陀のこと。安浮陀、伽那等は前に出でたり。

【六】胞の字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。

果を啄食むに、此の音聲を聞きては皆悉く止住め、衆蜂聲を聞かば美味を飲まず、若し仙人有りて虚空中に在り、其の歌音を聞かんにには即ち住して行かず。是の如くに心順山中の緊那羅女の歌頌の音は甚だ愛樂す可し。其の山は皆是れ毘琉璃寶・金・銀を石と爲し、珊瑚を樹と爲し、眞珠を沙と爲し、鉢鉢羅池は頗梨寶を以て、優鉢羅と爲せり。多く白鵝有りて其の色貝の如く、復諸の鹿有りて七寶にて莊嚴られ、俱翅羅・孔雀・命命鳥有り、其の音は愛す可く、復池水有りて衆蜂にて莊嚴られ、是の如きを心順山中の一切の衆人の若しは見若しは聞かんに心に愛樂を生じ、遍く山上に於て一切の男女は歡喜して戲笑し、心に悅樂を生ず。此の心順林に復第二の愛す可き事有り。須彌山の如きは、出す所の光明上りて二百由旬を照らすも、心順山中の光明は上りて二千由旬を照らし、其の光は白淨にして、金樹の光明も毘琉璃山の光力を以ての故に皆白色を作り、須彌山王に金色の光明ありて、草來りて之れに近かに皆金色を作すが如し。是の如くに心順山の光は一切の禽獸・河池・華樹をして皆白色を作さしむ。心順山の光明の力を以ての故に、山に人の住する有りて名けて白人と曰ひ、光明亦白く、住して此の山に在り、大力ありて端嚴にして心常に歡喜し、第一清淨にて妙香を身に塗り、華鬘にて莊嚴られ、歌舞し戲笑して音聲を愛樂し、嫉妬を生ぜず、我所の心無く亦我慢無く、一切の光明は皆白色を作り、種種の末香を以て其の身に散らし、種種の歌音ありて之れを聞きて悅樂す。如意の樹は香美の酒を出し、之れを飲むも患無く、其の念ふ所の隨に衣樹従り出で、衣に線縷、經緯の別無く、種種の飲食あり、種種に莊嚴られ、種種の衆鳥は妙なる音聲を出して人をして睡息らしめ、復妙なる音の種種の衆鳥有りて其れをして覺悟めしめ、種種の花池には種種の華を生ず。是の如くに白光明人は菓果の相を受け、其の作す所の上・中・下の善業の如くに樂を受くることを成就す。

復次に、修行者は隨順して外身を觀じて此の衆生を觀るに、云何んが現に他の善業盡きて死苦に

【三】優鉢羅(Uruba)。又は鬱鉢羅、唄鉢羅、酒鉢羅、優鉢刺、又、尼羅唄鉢羅と云ふ。青蓮華、黛華と譯す。蓮華の一種なり。

【四】鳥の一字を加へしは、宋・元・明本及び宮内省圖書寮本に依る。

卷の第七十

身念處品第七之七

復次に、修行者は諸の衆生の業の果報を觀す。此の是き衆生は應に啼哭すべきに、如何なれば乃ち歌舞・戲笑を作し、放逸なる衆生の地獄に受くる苦と啼哭と悲哀を觀ざるや。衆生は愛の網に縛らるゝを知らずして、身・口・意に惡業を作すを以ての故に地獄・餓鬼・畜生に墮ちて大苦報を受け、憂悲み啼哭き、種種の苦を受く。其の業の如くに行ひて活地獄・黑繩地獄・衆合地獄・叫喚地獄・大喚地獄・焦熱地獄に墮ち、五種の愛の故に、色・聲・香・味・觸を愛するが故に之れの縛る所と爲りて、流轉して生死の大海に在り。是の如くに修行者は、竹岸人を觀じ已らんに、實の如くに外身を知らん。

復次に、修行者は隨順して外身を觀じて鬱單越を觀るに、復何等の愛す可き山林有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て鬱單越を見るに、一大山有りて名けて心順と曰ひ、縱廣一千由旬にして、此の山中に於て常に緊那羅女有り、山峯中に於て衆の妙音を歌ひ、河岸・園林・平處・山谷に多く華地有り、諸の園林有りて、所謂、咬多咬林（こ名け）、次を龍林と名け、次を那梨咬羅林と名け、次を婆那婆林と名け、次を佉羅林と名け、次を菴婆林と名け、次を無遮林と名け、次を金比羅林と名け、次を迦卑他林と名け、次を孔雀林と名け、次を俱翅羅林と名け、次を鸚鵡林と名け、次を河池林と名け、次を蓮華林と名け、次を優鉢羅林と名け、次を辛頭波利多林と名け、是の如き林中に一切の珍寶と美妙の音あり、一切の人聞きては歡喜して樂を受け、癡愛に覆はれて轉た愛火を増長し、若し此の緊那羅女の歌頌の音を聞くこと有らんに百倍に増長す。若し飢えたる鹿有りて草を食みて口に在るも、此の歌音を聞かんに遺墮つるを覺えず、飛鳥樹に在り、雙鳥遊戲して美

【一】竹の字は元・明本及び宮内省圖書寮本に依れり。別本に行に作る。

【二】聞の字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。

彌羅鳥と名け、次を婆求鳥と名け、次を時鳥と名け、次を畏熱鳥と名け、次を夜行鳥と名け、次を樂鉢頭摩花盆鳥と名け、次を辛頭波鳥と名け、次を住水波鳥と名け、是の如き等の二十種の鳥有りて蓮花池に住す、普遍林をなせる、歡喜持山の半山となる五百由旬を過ぎて復五百由旬有り、竹岸人と名くるもの住して此の山に在り、其の山に樹有りて名けて軍持と曰ひ、妙なる歌音を出し、天女之れを聞き、空に住して聽く。園林・河池・蓮花を皆悉く具足すること前に説く所の如し。

れ、羸瘦の本にして、能く眼・耳・鼻・舌・身意を滅しては涎・涕流溢し、身曲りて端からず、牙・齒・髑髏・骨節・筋脈皆悉く慢緩みて去來する能はず、清池に洗沐せんに、諸の少年の輕毀する所と爲り、死の地に入らんと欲して氣力を失ひ、不安隱の處、不善の地にあり、數大小便し、眠臥を樂む。放逸を以ての故に決定して當に疾病有るべきを見ず。疾病を以ての故に、四大調はずして諸根樂を失ひ、一切の筋・肉・皮・血・脂・膚及び精髓皆悉く乾燥き、一切の味を憎み、坐起する能はず、醫師を憶念ひて以て安隱を求むるも、一切の飲食の口に入るを皆惡み、頓く乏く疲極れて起止する能はず、多く睡眠らんことを欲し、身體羸瘦せて唯皮骨のみ有り。一切の親族及び妻子も伴と爲る能はざるに、死の怖畏の如きを而も此の衆生は知らず覺らず。是の修行者、放逸を行する衆生を觀じ已らんに、悲愍の心を起し、悲愍するを以ての故に四梵行を修めん。謂く慈・悲・喜・捨なり。是の修行者はの如くに鬱單越人を觀じて悲愍の心を起す。身の威儀を觀するに賊の如くにして異なる無く、身は水沫の如く、諸の識は幻の如く、富樂は夢の如し。是の觀を作し已らんに厭離の心を生ぜん。

復次に、修行者は隨順して外身を觀じて鬱單越を觀るに、復何等の殊勝なる愛す可き山林・河池有りや。彼れ聞惡を以て、或ひは天眼を以て觀るに、一大山有りて歡喜持と名け、其の山に林有りて名けて周遍と曰ひ、縱廣五百由旬、一切寶性の莊嚴る所にして、所謂、金性・銀性・銅性・寶性・酒性・蜜性なる六味の性と及び餘の異の性なり。其の林に普遍く毘琉璃花の蔓の鬘纏ひ遶り、金葉の蓮花の白銀を莖と爲せるものと、金・銀の莖と花にて毘琉璃の莖なる蓮花充滿して目の初めて出するが如く、種種の鳥有りて其の池を莊嚴れり。所謂、鵝・鴨（と名け）、次を鴝鳥と名け、次を婆伽鳥と名け、次を金鳥と名け、次を白咽鳥と名け、次を遮沙鳥と名け、次を摩頭求鳥と名け、次を鴛鴦鳥と名け、次を波婆鳥と名け、次を鶴鳥と名け、次を阿嗟鳥と名け、次を婆羅婆鳥と名け、次を堤

蘭智羅花と名け、時樂山中に是の如き等の二十種の花有りて季春に生ず。鬱單越人の善業の力を以ての故に、時樂山中に孟夏時に於て復諸の花有り、岐多迦花と名け、次を鳩吒闍花と名け、次を餘多婆熙賦花と名け、次を迦曇婆花と名け、次を尼朱羅花と名け、次を由提迦花と名け、次を蘇摩那迦と名け、次を龍舌花と名け、次を無間愛樂花と名け、次を善味花と名け、次を善香花と名け、次を普樂花と名け、次を一切攝取花と名け、次を轉花と名け、次を鼻境界花と名け、次を五葉花と名け、次を愛雨花と名け、次を愛觀花と名け、次を塗摩花と名け、次を水流花と名け、次を雪色花と名け、是の如き等の二十種の花有りて、時樂山中に於て孟夏時に生ず。鬱單越人の善業の報を以ての故に、時樂山中に季夏時に於て復異花有り、所謂、笑花(と名け)、次を蘇摩那花と名け、次を常瞻葡萄花と名け、次を林生花と名け、次を虚空轉花と名け、次を夜可愛花と名け、次を一切方花と名け、次を流花と名け、次を遊戲地花と名け、次を樂花と名け、次を山谷花と名け、次を陸生花と名け、次を迦曇婆花と名け、次を卑陽伽花と名け、次を鵝旋花と名け、次を修留毘花と名け、次を多摩羅婆花と名け、次を水花と名け、次を月花と名け、次を險岸上花と名け、是の如き等の二十種の花有りて季夏に生ず。鬱單越國時樂山中の樹林の花果と蓮花の河地は時に轉りて普遍く、此の時樂山は、餘の山中の一切の花果の如きは此の山に常に有り。時樂山中に住する所の人を名けて陀利支摩と曰ふ。魏に問遊と云ふ。

復次に、修行者は業の果報を知る。云何んが衆生、先業既に盡きて新業を作さず、而も時節の輪轉するを知らざるや。衆生命を食みては時に大火の命の薪を焚燒くが如く、時に惡電の命の禾を摧壞するが如く、時に師子の人獸を噉害うが如く、時に駛き河の人の樹根を抜きて漂ひて異處に至らしむるが如くして、一切の死法は逃避す可からず。云何んが衆生而も覺知らず、老・病・死を見ざるや。(老・病・死の)一切の少壯及び一切の欲を破壊し、一切の力を破しては、一切衆人に輕笑せら

【三〇】禾の字は宮内省圖書寮本に依れり。別本天に作れり。

に於ては一處として惡業風の吹く所と爲らざる有ること無くして、諸有に流轉するも、然も諸の衆生は猶厭を生ぜず。鬘莊嚴山の常遊戯人を觀じ已らんに、實の如くに外身を知らん。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、鬱單越國に復何等の愛す可き山河・花池有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、鬱單越に一大山有りて名けて時樂と曰ひ、廣さ千由旬、高さ三十由旬にして、六時常に鮮なり。一には孟冬、二には季冬、三には孟春、四には季春、五には孟夏、六には季夏にて、第一時に於て何等の花有りや。孟冬時に於て常開樹有りて不合華と名け、次を堅花と名け、次を凍花と名け、次を蜂覆花と名け、次を婆佉羅花と名け、次を善香花と名け、次を無芽花と名け、次を鴨音花と名け、次を第一花と名け、次を可愛花と名け、次を凍冷具足花と名け、次を深生花と名け、次を夜開花と名け、次を第一堅花と名け、次を目花と名け、是れを猛冬寒時の十五種の花と爲し、時樂山に生ず。第二の季冬に復蓮花有りて鬱單越に生じ、時樂山中、善業を以ての故に阿提目迦花は念ふ隨に墮落つ。所謂、鳩羅婆迦花(と名け、)次を鉢頭摩花と名け、次を究羅婆迦花と名け、次を多香花と名け、次を蜂旋花と名け、次を三摩柘花と名け、次を無憂花と名け、次を甄叔迦花と名け、次を青無憂花と名け、次を不合花と名け、次を香拘陀花と名け、次を阿彌茶迦花と名け、次を痛生花と名け、次を河岸生花と名け、次を尼支藍花と名け、次を赤花と名け、次を婆那帝花と名け、次を鳥愛花と名け、次を常開花と名け、次を百葉花と名け、是の如き二十種の花有りて季冬及び孟春時に生ず。阿提目迦花等は二時を經るなり。鬱單越國の時樂山中に復諸の花有りて季春に生ず。謂く瞻蔔花(と名け、)次を蘇摩那花と名け、次を善色集花と名け、次を徒摩羅花と名け、次を香花と名け、次を蜂蓮花と名け、次を除飢香花と名け、次を尸利沙花と名け、次を赤花と名け、次を等香花と名け、次を常香花と名け、次を耽婆羅味花と名け、次を風萎花と名け、次を百葉花と名け、次を畏日花と名け、次を時蘭帝花と名け、次を護色花と名け、次を

嚴を爲し、或ひは金色・毘琉璃色なる有り、或ひは白銀の色、或ひは身の黄色、或ひは綠色なる有り、或ひは雜れる色なる有り、或ひは池中に在り、或ひは樹下に在り、或ひは榛林に在り、或ひは周遍く一切の處に行くもの有り。復衆鳥有りて眞金を身と爲し、白銀を翹と爲し、或ひは白銀の身にて眞金を翹と爲し、或ひは珊瑚の身にて毘琉璃の翹、毘琉璃の身にて青寶王の翹あり、或ひは頗梨の身にて眞金を翹と爲し、或ひは衆鳥有りて眞金を腹と爲し、白銀を翹と爲し、毘琉璃の背にして、或ひは衆鳥有りて七寶を身と爲し、謂く、青寶王・摩伽羅寶・頗梨迦寶・車聚・珊瑚・摩蘇鳩留摩利寶・赤蓮花寶にて、是の如き自業の種種に雜れる色と種種の音聲と無量種の身あり。舊單越人は自業の力の故に、無量種の雜色の樹林・山河・花池の甚だ愛樂す可きもの有り、心の念ふ所の如くに種種の衆寶に莊嚴られ、先世の善業の化する所の飲食あり、河池・樹林は周遍く莊嚴れり。鬱單越人は鬘莊嚴山の處に於て樂を受け、此の山に住する人を常遊戯と名け、鬘莊嚴山に於て常遊戯人は、猶し諸天の夏四月に於て、波梨耶多拘鞞陀樹下に在りて歡娛して樂を受くるが如し。唯峻陶すると、身に骨肉及び垢汗有るを除き、自餘は悉く等し。

復次に、修行者は業の果報を觀するに、衆生は三種の憍慢と放逸にて善業を作さず。何等を三と爲すや。一には色を恃みて憍慢を生じ、二には少きを恃みて憍慢を生じ、三には命を恃みて憍慢を生ずるにて、身に善業を作さず、口に善業を作さず、意に善業を作さず。勝れたる善業を以て上りて天中に生るゝも、天従り還り退きて地獄・餓鬼・畜生に墮つ。人中の愛は蜜に毒を雜へしが如くにて第一の苦を受け、第一の繫縛、第一の惡處にして、愛に縛られたる衆生は生れて何れ従り來り、去りては何の所に至るやを知らず。一切の諸の欲は甌波迦果の如く、初に少しく味ありと雖も後に大苦を至して、猶し網に覆はれたる衆生の嶮岸に墮つるを覺えざるが如く、愛別の大苦は火の自ら焚くが如く、壯色の停らざること山峻の水の如くにて、無常にして住せず、變易し衰壞す。五道中

して衆蜂も捨つるが如く、人も亦是の如し。若し病惱無くんば花の新に開けるが如きも、衰病既に至りては花の萎爛せるが如く、衆蜂の圍遶くことは、猶し富樂なれば親友の臻集まるが如し。衆生是の如くに愛の誑す所と爲り、自ら壞するを覺らず。是の如くに比丘、高山の園林・花樹・河泉・陂池・仙人・禽獸・山谷を觀じ已らんに、實の如くに外身を知らん。

復次に、修行者は隨順して外身を觀ず。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て第六の山を見るに、復何等の愛す可き山有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て第六の山を見る。鬘莊嚴と名け、其の山中に於て種種の莊嚴有り、其の山に朱・綠・青・黄なる種種の色の樹ありて、所謂、雜花林の樹にして、復花樹有りて名けて無憂と曰ひ、復花樹有りて名けて金葉と曰ひ、復花樹有りて名けて枝覆と曰ひ、復花樹有りて阿提目多迦と名け、金の莖銀の葉にて、風吹けば動搖す。水中に復尼均輪陀樹有り、毘琉璃の葉にて、芭蕉有りて珊瑚を葉と爲し、日を見れば則ち起り、復提羅迦樹有り、若し月光を見れば即便ち開敷き、復花樹有りて 拘牟陀と名け、日無ければ則ち開き、復花樹有りて半月喜と名け、復花樹有りて那羅迦羅と名け、復花樹有りて三歡喜と名け、復花樹有りて槃頭時婆と名け、復花樹有りて烟を得れば增長し、復花樹有りて名けて無憂と曰ひ、女人之れに觸るれば花即ち爲に出で、復花樹有りて名けて軍陀と曰ひ、其の性柔軟なり。復花樹有りて尸利沙と名け、人の足の陷むことを得んには則便ち增長し、復花樹有りて髀多婆と名け、暖なれば則ち香有り、復花樹有りて鳩鳩摩と名け、異なる國に流轉し、復花樹有りて名けて見吉と曰ひ、復蓮花有りて名けて善意と曰ひ、天人に愛せられ、復蓮花有りて青優鉢羅と名け、生じて水中に在り、復蓮花在りて常開敷と名け、復花樹有りて名けて師子迦曇鉢羅と曰ひ、復蓮花有りて名けて水笑と曰ひ、足にて躡めば則ち生じ、復花樹有りて赤無憂と名け、女人足にて躡むに、女人の色・香・味・觸を得て花は則ち爲に出づ。復花樹有りて阿吒迦と名け、是の如き花樹は二十有二にして、周遍く花鬘は以て莊

【九】 Kumuda 白蓮華。

次を無比蓮花池と名け、次を蜜林蓮花池と名け、次を香風蓮花池と名け、次を常水蓮花池と名け、是れを十種の蓮花池と名く。此の山峯中に住して復大河有り、處處に流れ、六味を具足し、一切の意樹以て莊嚴り、衆樹の花果と河池を具足することも亦前に説くが如し。彼の比丘、第五山の第五峯を觀じ已らんに、實の如くに外身を知らん。

復次に、修行者は隨順して復高山を觀て業法の果報を知り、衆生の業法の果法を知る。衆生は自らの業にて自業に住して流轉し、自業を以ての故に此の山に生れ、善業盡くるが故に、不善業の故に地獄・餓鬼・畜生に墮ち、若し善業有らんに人・天中に生る。高山の四面に住する所の人を樂善樂と名け、常に希望みて欲は常に足ることを知らず、是の如き比丘、偈を以て頌して曰く、

譬へば火の薪を得たるが如く、海の衆流を受くるが如く、愛欲は厭足くこと難し。是の故に應に捨離すべし。

是の如くに修行する比丘は清淨の眼を以て此の衆生を見るに、大憂・悲・愁の毒の中に於て猶復歡ひ笑ひ、衆生は一切皆苦・無我・無常にて、一切法は空なるを知らず、一切は闇冥く、一切は生死し、常樂有ること無く、寂靜に非ず、寂滅に非ず、一切の資具は要す當に破壊すべく、此の法實ならずして終に地獄・餓鬼・畜生に墮つること、譬へば日出でては必ず當に没すること有るべきが如く、一切の衆生も亦復是の如し。有生の類は必ず死に歸すこと、譬へば春時の一切の大地・山樹・藥草・叢林・平地の如く、秋時に至りては大地・山樹・藥草・叢林・陂澤・花池の一切は衰變す。少きは春時の如く、老は秋時の如きに、鬱單越人は覺知する能はず。一切の少壯は皆衰老に歸すること、譬へば夏時に天降雨を降らし、河に崖岸有りて諸水臻集り盈流れ充滿るも、孟冬に至りては一切減少するが如く、富樂を具足しては猶し夏時の如きも、富樂も破壊すること猶し孟冬に於けるが如し。譬へば水に泛べる蓮花の池中は衆蜂の樂む所にて、歡喜して樂を受くるも、霜雪既に降りては蓮花萎爛

くに欲を觀ぜんに、厭離の心を生じ、正念にて觀察して塵垢を滅除せん。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに憍單越國に更に何等の愛す可き山河有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て第五山を見る。名けて高山と曰ひ、縱廣一千由旬にして光明普く照し、眞金の樹有りて毘琉璃の葉にして、白銀の樹を爲せるは珊瑚の葉と爲し、毘琉璃樹は眞金を葉と爲して光明燈の如く、復異なる樹有りて、無量種の樹、蓮花林の池、園林に遊戲せる種種の麀・鹿、種種の山峯も亦前に説くが如し。須彌山に住する持鬘天衆と三惡傑天は須彌山從り下りて此の高山に至り、遊戲して樂を受く。其の高山の峯は皆是れ衆寶の成就する所にして、五の大峯有り、一一の山峯は高さ五十由旬、縱廣二百由旬なり。第一の金峯は山谷中に於て一切の寶を生じ、謂く、毘琉璃・珊瑚・車渠・頗梨迦寶・赤蓮花寶・柔軟寶・青因陀寶・大青寶王自然の天衣なり。第二の銀峯は銀樹を具足し、峯中多く牛頭栴檀有り、若し諸の天衆の阿修羅と共に鬪戰する時、刀の傷くる所と爲るに、此の牛頭栴檀を以て之れに塗れば即ち愈ゆ。此の山峯の狀は牛頭に似、此の山峯中に於て栴檀を生ずるを以て、故に牛頭と名く。第三の山峯を天女樂と名け、金・銀・毘琉璃以て園林を爲し、其の地柔軟にして、歡喜して遊戲する愚癡の凡夫は愛の誑す所と爲り、正法を聞くことを離れて常に欲樂を愛す。第四の山峯を名けて生色と曰ひ、四大天王蒲桃園に於て遊戲して樂を受け、一切の禽獸・夜叉・仙人・憍單越人皆悉く樂を受け、蒲桃酒の河は盈滿して流れ、其の味は蜜の如く、石蜜の如きなる有り、或ひは辛き味なる有り、或ひは雜れる味なる有り。其の峯の河岸に諸の生色多く、所謂、水牛・牛・羊・猪・狗・野狐・象・馬・駝・龍・熊・羆・獅子・兕・豹などは如き種種無量の寶色あり。峯を生色と名け、諸の生色を生ずるが故に生色と名く。第五の山峯の毘琉璃の林に蓮花の池有り、毘琉璃の莖にて、其の花は柔軟なり、所謂、少滿蓮花池（と名け、）次を衆多蓮花池と名け、次を轉行蓮花池と名け、次を花覆蓮花池と名け、次を日照蓮花池と名け、次を柔軟岸蓮花池と名け、

【二五】形は小き鹿の如くにて毛色美し。

【二六】Mṁsuragaṭṭva 勝威と譯す。琥珀（赤色寶）をいふ。

【二七】委くば帝釋持寶 Sākerī bhīḥingamātmanī 帝釋持寶。
【二八】Indaravāṇī 帝釋青寶。

四の林有りて水音聲と名け、種種の仙人此の林中に住して遊戯して樂を受け、若し汗熱有らんに池中に入りて遊戯して樂を受く。諸の仙人有り、一を無礙仙人と名け、次を力仙人と名け、次を徐行仙人と名け、次を虚空行力仙人と名け、次を穿雲行仙人と名け、次を行日道仙人と名け、次を行量仙人と名け、次を白色仙人と名け、次を刪那多仙人と名け、次を鳩尸迦仙人と名け、次を山無礙仙人と名け、次を常樂仙人と名け、次を乾陀羅仙人と名け、次を行虚空仙人と名け、次を富物仙人と名け、次を内住仙人と名け、次を闍窟仙人と名け、次を常力仙人と名け、次を鵝殿仙人と名け、次を龍殿仙人と名け、次を放電光仙人と名け、次を住摩羅耶仙人と名け、次を鷄多迦鬘仙人と名け、次を樂姪女仙人と名け、次を樂酒仙人と名け、次を住彌樓山仙人と名け、次を三車那仙人と名け、次を常遊戯仙人と名け、次を常歡喜仙人と名け、次を垂莊嚴仙人と名け、次を飛行仙人と名け、次を呪藏仙人と名け、是れを三十仙人と名くるにて、白雲持山に住し、種種に莊嚴りて遊戯し、水音聲池に在りて歌舞し戯笑し、自らの業にて樂を受け、自業の力の故に相似の姪女と共に遊戯して樂を受く。是の如くに過く白雲持山の諸の林樹を觀じ已らんに、實の如くに外身を知らん。白雲持山中を觀するに、頗らくは一法の是れ常にして動かす、變ぜず壞せずして涅槃に攝せらるゝこと有りや。是の如き比丘、一法として是れ常是れ樂にして、動かす變ぜず破壞せざるを見ず。一切の諸法は皆悉く無常にして破壊し磨滅すること譬へば日光の諸の闇雲を破するが如く、無常なる世間は初め味あるも後に苦くして深流を出でず、愛の果に樂無きこと甄波迦果の如く、毒の如く刀の如く、得たる時は甚だ樂しきも、目を悦ばすは須臾にして電の住せざるが如く、水の駛く流れて住せざるが如く、乾陀婆城の人を誑惑すが如し。一切の人貪らんに果の必ず墮つるが如く、毒を雜へたる食の消(化す)る時に大苦あるが如く、蜜を塗れる刀の如く、亦利き戟の如くにて無量百千の衆生を誑惑し、猶し河岸の峻きに臨める大樹の如く、諸欲の無常なるも亦復是の如し。是の修行者實の如

【四】宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依り、雲の下に持の一字を加補せり。

復次に、修行者は隨順して觀じて鬱單越を觀るに、更に何等の愛す可きの處有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て第四の山を見る。白雲持と名け、縱廣千由旬、純淨なる白銀の成する所に於て、光明は月を踰え、閻浮提の滿月出現するに衆星光を失ふが如く、白雲持山も亦復是の如し。鬱單越人の此の林に住する者を常發欲と名け、常に樂みて遊戯し、白雲持山の蓮華にて身を嚴り、怖畏・憂悲・疲極・寒熱・飢渴を離れ、常に歌戲を愛し、蓮華の間に於て遊戯して樂を受け、山峯中に於て衆の姪女と共に遊戯して娛樂し、常に愛欲を行じ、常に憂悲を離る。白雲持山に諸の園林有りて鼓音聲林と謂ひ、次を鴨音林鴨音林と名け、次を憶念林と名け、次を水聲林と名く。鼓音聲林とは、持鬘持鬘天菜、天の鼓を擊ちて美妙の音を出し、譬へば 篳篥篳篥・笙笙・笛笛の和合して聲を出すが如く、天の鼓を擊つ音は復此れに過ぎ、閻浮提の音は十六分中其の一にも及ばず、鳥獸、園林、華池の地界、金銀の流水の功德も是の如く、天の鼓の音聲は前に説く所の如し。常欲人は天鼓の音を聞き、常に愛もしき色・聲・香・味・觸を受くること、迦樓足天の歡喜園に於て天の樂を受くるが如し。第二の林有りて鴨音聲と名け、其の林の花池は數百種有りて具に説く可からず。鴨音聲林に衆の寶鹿有り、次を鞞那沙鹿と名け、次を寶莊嚴鹿と名け、次を調伏鹿調伏鹿と名け、次を樂音聲鹿と名け、次を火色鹿と名け、次を賒羅鹿賒羅鹿と名け、次を能投嚴鹿と名け、次を山峯行鹿と名け、次を遮波羅鹿遮波羅鹿と名け、次を普眼鹿と名け、次を迦多那寶鹿迦多那寶鹿と名け、次を金角鹿と名け、次を銀側鹿銀側鹿と名け、次を風刀鹿と名け、次を食樹葉鹿食樹葉鹿と名け、次を住水音聲鹿住水音聲鹿と名け、次を行林鹿行林鹿と名け、次を珊瑚鹿珊瑚鹿と名け、次を凹窟鹿凹窟鹿と名け、次を細腰鹿細腰鹿と名け、次を黑皮鹿黑皮鹿と名け、次を賒輪多那鹿賒輪多那鹿と名け、次を日光明鹿日光明鹿と名け、次を柔軟鹿柔軟鹿と名け、次を白鹿白鹿と名け、是の如き等の二十五種の鹿有り、常欲樂人は鹿と遊戯し、種種の自業にて、白雲持山中に於て相似の樂を受く。復第三の憶念之林有り、人を樂欲と名け、若し念ふ所有らんに樹從り得、一切の園林の莊嚴の愛す可きことも亦前に説くが如し。白雲持山に第

【二】鬘の字は宋・元明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。
 【三】篳篥、百濟琴とも云ふ、一種の琴樂器。

【三】窟は鹿の名。

れ常にして變ぜず、若しは樂若しは我ありて空ならざる者有ること、前に説けるが如きや。一切の生死に攝せらるゝ衆生に、頗らくは生ぜず死せず、一切の愛する所と離れず別れずして、破壊せざること有りや。彼の修行者平等山峯を觀るに、一處として是れ常にして動かす、若しは樂若しは我あり、若しは空ならざるものを見ず。一切衆生の所住の處は生死せざる無く、愛別離の破壊する所と爲り、是の如き一切は生死する常無き衆生にして、針の鋒の處も生ぜず死せず、生ぜず滅せざる無し。四聖諦を念じて鬱單越の平等山峯を觀じ已らんには、實の如くに外身を知らん。

復次に、修行者は鬱單越を觀るに、更に何等の愛す可き處有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て第三の山を見る。名けて勿力迦と曰ひ、具足する莊嚴は、前に説く所の僧迦賒山及び平等山の具足の莊嚴の如きも、此の山轉勝る。勿力伽山は流水を具足し、石蜜の河水と意樹を具足し、所謂、金樹に六時の花果有りて敷榮え蔚茂り、光明は日の如し。勿力迦山に光明林有り、所謂、金光施林(と名け)、次を銀聚林と名け、次を普山林と名け、次を柔軟林と名け、次を金光施林と名け、廣さ百由旬にして、眞金の林樹ありて多く衆蜂有り、次を銀聚林と名け、縱廣三百由旬にして無量の銀樹あり、其の林の光明は百千の月の如く、多く師子有り、無量の衆鳥ありて心常に歡喜すること前に説く所の如し。勿力迦山に第三の林有りて常樂林と謂ひ、林中に鳥有りて常遊戯と名け、樂を受けて歡喜し、其の國に人有りて名けて解脫と曰ひ、常樂林中に歡喜して自ら有り、意の隨に遊樂して人遮礙ぐるごとく無く、諸の天衆の如くに悅樂を受く。勿力迦山に第四の林有りて名けて柔軟と曰ひ、金樹・銀樹・珊瑚之樹あり、多く衆鳥有りて名けて解脫と曰ひ、其の林の縱廣は五百由旬にして、常に多欲の人は住して此の林に在り、其の地柔軟にして、兜羅綿の如く、花果の樹及び蓮花池ありて、無量百千の衆峰は圍遶けり。修行者勿力迦の第三の山を觀じ已らんには、實の如くに外身を知ることに前に説く所の如し。

【○】兜羅綿。兜羅(Era)は
又は罽羅、罽羅蠶羅と音譯す。
草木の花架なり。

は、次を大・瑚花池と名け、次を竹樹花池と名け、次を深花池と名け、次を月愛花池と名け、次を上月花池と名け、次を雜水花池と名け、次を洄瀾花池と名け、次を竹林花池と名け、次を仙愛華池と名け、次を魚施華池と名け、次を三波陀魚蓮華池と名け、次を峯中花池と名け、次を池薑花池と名け、次を旋轉花池と名け、次を淨水花池と名け、次を月光花池と名け、次を月輪花池と名け、次を離垢花池と名け、次を乳水莊嚴花池と名け、次を清涼花池と名け、次を月愛花池と名け、次を頤梨施花池と名け、次を速旋花池と名け、次を澄靜花池と名け、次を不動花池と名け、次を天愛花池と名け、次を歡喜花池と名け、次を美味花池と名け、次を如意味花池と名け、次を樂花池と名け、次を鷄殊婆花池と名け、次を甘露上流花池と名け、次を龍花池と名け、次を樂花池と名け、次を阿殊那花池と名け、平等山峯に是の如き等の四十七の池有り、平等山中に於て最も殊勝と爲し、其の池に皆八功德水あること前に説く所の如し。其の山は高く勝れて空を破りて出づるが如く、山高きを以ての故に勝れたる園林の功德を具足すること有り。所謂、清涼の林は色白くして月の如く、廣さ百由旬にして、多く銀樹有りて色白く雪の如く、此の林中に於て蓮花池有りて離水衣花池と名け、次を蜂覆華池と名け、次を貝色花池と名け、次を常水花池と名け、次を半見花池と名け、次を歡喜花池と名け、次を迦耽婆菩提迦花池と名け、次を鵝翹花池と名け、次を遊戲花池と名け、次を可愛花池と名け、次を見峯花池と名け、次を樂遊戲花池と名け、次を常蓮花池と名け、次を常歡喜花池と名け、次を曇花池と名け、是れを第一に最勝なる十六花池と名く。其の中・下の無量百千の無名の者を除く。一切清淨にして垢濁有ること無く、亦水衣無く、鵝・鴨・鶯・鶯の愛す可き音聲は鬻單越人をして常に歡喜を得令め、命命・孔雀は園林中に於て妙音聲を出す。修行者平等山峯を觀じ已らんに實の如くに外身を知らん。

復次に、修行者は隨順して外身を觀じ、四聖諦を信解して平等山峯を觀るに、頗らくは一處の是

【九】宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依り、地を池に換へたり。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、復何等の勝妙なる山林有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て第二の山を見る。平等峯と名け、猶し天上の歡喜の園の如く、平等山峯の所有の河池・花果・林樹は前の僧迦餘山中の如し。廣説するに復何の勝ること有りや。其等の山峯に三百の金峯ありて光明目の如く、五百の銀峯も亦前に説くが如くにて功德は前に勝る。鬱單越人は其の身の光明猶し滿月の如く、離怖畏と名け、實に怖畏無きが故に無畏と名く。鬱單越人は此の山中に住して歡娛して樂を受け、四天王天の夏四月の時、歡喜園に於て五欲の樂を受くるが如し。何等の勝ること有りや。四天王天には骨無く肉無く、垢・汗有ること無くして鬱單越人の及ぶ能はざる所なるも、鬱單越人は怖畏を遠離して四天王天より勝る。四天王天は高山の頂の宮殿に住して居るも猶怖畏を懷き、鬱單越人に宮宅有ること無きも、我所の心無く、是の故に畏無く、鬱單越人の命終らん時一切上生し、是の故に畏無し。四天王天は則ち是の如からず。鬱單越人に復勝れたる法有りて、怖畏を離るゝが故に四天王天より勝る。平等山中の所有の樹林は第二の日の如く、離怖畏人の心の念ふ所の隨に皆樹従り衣の線樓せんろう無きと瓔珞いんじやくの莊嚴さうげんを出し、或ひは飲食を念はんに、百千の河に於て飲食盈流し、鳥音の愛す可きことも前に説く所の如し。金翅ある毘琉璃の無量百千の鵝・鴨・鶩・鶯と、無量の衆鹿の眞金を身と爲し、珊瑚を角と爲し、車渠を目と爲し、青玉を甲と爲せる、及び餘の異なる獸の無量の種類は住して山中に在り。樹枝相ひ蔭おほひて交互に生じて眞珠の綱の如く、俱翅羅鳥と孔雀の妙音あり、百千の流水を無量の河岸は以て莊嚴を爲し、一切の河流に八功德水あり。何等を八と爲す。一には味を具へ、二には清淨、三には香ひ潔く、四には渴を除き、五には涼冷、六には之を飲むに厭くこと無く、七には垢無く、八には之れを飲むに患無く、惡魚の過無し。此の山中に於て種種の花池有り、所謂、廣博山花池と名くる有り、次を衆沙花池と名け、次を五樹花池と名け、次を鷓鴣岸花池と名け、次を鷄水花池と名け、次を鴈翅花池と名け、次を鷓鴣百鳥花池と名

秋清水河と名け、次を山谷流河と名け、次を峯輪笑河と名け、次を雪水河と名け、次を日不照河と名け、次を速流河と名け、次を洞漚河と名け、次を尼均轉陀流河と名け、次を香水河と名け、次を鷄多迦香薰河と名け、次を雨歡喜河と名け、次を屯頭摩河と名け、次を周遍施轉河と名け、次を無量流河と名け、次を潛水澆岸河と名け、次を婆鳩羅河と名け、次を滅水河と名け、次を歡喜施流河と名け、次を壞山河と名け、次を雲行河と名け、次を歌音河と名け、次を鼓音河と名け、次を雷音河と名け、次を龍女喜樂河と名け、次を夜叉所愛河と名け、次を仙人所愛河と名く。是れを僧迦隰山の第四溫涼林と名け、是の如き等の七十の大河有り、其餘の無量の小河を説かず。(此の林には復)林樹・華果の功德を具足す。清涼林を觀じ已らんに實の如くに外身を知らん。僧迦隰山の第五を震雷雲鬘龍遊戲雲鬘と名け、所謂、離瞋婆修吉龍王・德叉迦龍王・齒毒龍は大電光を耀し、雲を興して普く覆ひ、行法に隨順し、是の如き等の七千の大龍有りて、鬱單越に於て時を以て雨を降らして平地に澍ぐ。鬱單越人は猶し諸の天の如し。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、前に説く所の如く、若しは樹若しは花、若しは果若しは實、若しは河、若しは石窟、若しは地方處、若しは草、若しは山谷若しは石窟などの是の如き處にて、針の鋒許りも衆生の住する所にして生ぜず死せず、退かず出でざるは無く、百返千返の一切の愛樂も種種の衆生も破壞せざること無く、恩愛別離しては惱亂せられて心悔い、曾て怨親中の人と爲らざる無く、合和せざること無くして無量の生處に百たび生れ千たび生れ、或ひは水性に在り、或ひは陸地に生れ、或ひは虚空を行く。畜生中に於ては一衆生として相ひ噉食はず、相ひ殘害はざるは無く、一衆生として怨結を作さざる無く、我が此の身の如きは處として生れざる無し。是の如くに比丘、針の鋒の地も生死處に非ざるを見ざること前に説く所の如し。僧迦隰山を觀じ已らんに實の如くに外身を知らん。

【七】 Venkīr ngāṭāṇa 廣

財子龍王と譯せらる。

【八】 不詳。

と名け、次を肩生樹けんしやうじゆと名け、次を因陀羅長樹と名け、次を岸生樹と名け、次を巷生樹と名け、次を珊瑚色樹と名け、次を鳩摩鬚樹くまじゆと名け、次を棟樹むねじゆと名け、次を應時生樹と名け、次を煙色樹と名け、次を燈明樹と名け、次を風動樹と名け、次を巨蕉樹きよせうじゆと名け、次を俱翅羅樂樹くしりやうらくじゆと名け、次を散華樹と名け、次を花未覆樹けふみふくじゆと名け、次を開鳥彌羅樹かいじゆみやろじゆと名け、次を憶念樹おくねんじゆと名け、次を如飯樹にょはんじゆと名け、次を優曇鉢羅樹うたんぱつらじゆと名け、次を頭頭摩樹づづもじゆと名け、次を蜂施樹へんせじゆと名け、次を負峯樹ふほうじゆと名け、次を涼風樹りやうふうじゆと名け、次を動搖樹どうごうじゆと名け、次を無憂樹むいうじゆと名け、是の如き等の六十種の樹の餘の樹に勝過すぐたたる有り。中、下を説かず。鎗毘羅林かうびらりんの流水、河池は甚だ愛樂す可く、鬱單越人うつだんごつじんに怖畏・憂悲・病苦有ること無く、君主有ること無く、亦熱惱無く、怨對・妬嫉ねたみの患を離れ、僧迦賒山そうぢやせんざんの鎗毘羅林に於て、歡喜して樂を受く。僧迦賒山を觀じ已らんに實の如くに外身を知らん。

復次に、修行者は隨順して外身を觀ず。鬱單越國僧迦賒山の第四の林を名けて溫涼と曰ひ、彼れ開慧を以て、或ひは天眼を以て溫涼林を見るに、種種の涼池あること亦上に説くが如く、花葉・果樹あり、河流を具足して清涼河と謂ひ、廣さ一由旬にして其の水甚だ深し。一を清淨河じやうじやうがはと名け、次を無濁河むじやくがはと名け、次を乳水河にゅうすいがはと名け、次を蒲桃汁河ぼたうじゆがはと名け、次を蘇摩河そまがはと名け、次を美乳渥白水河びにゅうわくぱくすいがはと名け、次を憶念河おくねんがはと名け、次を鵝王河がわうがはと名け、次を鴨河あひがはと名け、次を鴛鴦河うんおうがはと名け、次を妙音聲河めういんせうがはと名け、次を花流河けがうがはと名け、次を弱楊河じやくやうがはと名け、次を濤波流河たうぱりうがはと名け、次を駛流水樂河せりすいりやうがはと名け、次を迦曇婆翅河かだんぱしじゆがはと名け、次を殊嘴河じゆしじゆがはと名け、次を鵠龜河こくきんがはと名け、次を赤魚施行河せきぎよしんがはと名け、次を軍毘羅河ぐんびらがはと名け、次を魚施河ぎよせがはと名け、次を華流河けがうがはと名け、次を沫輪河もくりんがはと名け、次を水笑河すいせうがはと名け、次を平岸河へいがんがはと名け、次を雨聲河うせうがはと名け、次を昔曲流河せきまげりうがはと名け、次を隨時轉河じゆじゆてんがはと名け、次を無力河むりきがはと名け、次を山峯河さんぽうがはと名け、次を金色水河こんしきすいがはと名け、次を銀色水河ぎんしきすいがはと名け、次を銀石河ぎんせきがはと名け、次を眞珠沙河しんじゆさわがはと名け、次を山流河さんりうがはと名け、次を雲轉河うんてんがはと名け、次を車渠莊嚴河じゆせうじやうげんがはと名け、次を春歡喜河しゆくわんぎがはと名け、次を

鳥・喜月明鳥・月出歡喜鳥・日色孔雀鳥・若見雷時歡喜出聲・生樂鳥・少黃色鳥・俱羅婆鳥・那提背鳥・泥均窣陀鳥・陀婆迦鳥・雜身鳥にして、衆蜂施鳥は、其の音能く滿ちて一由旬に至り、闍浮提の蜂の樹木に住するが如く、(また)鳥鳥・山舞鳥・第一音鳥・鷄鳥・婆羅羅鳥・華覆身鳥・住蓮華鳥・青優鉢羅鳥・遮沙鳥・頻伽項鳥・般舟吒鳥・樂沙羅鳥・常音聲鳥・空候音鳥・見雲歡喜鳥・僧迦摩鳥・見闍歡喜鳥・白雲鳥あり、復異なる鳥有りて、之れを觀るに愛す可き離瞋恚鳥にして、林樹の間に住し、鬱單越人は之れを見て歡喜す。彼の衆鳥の林中に住するを觀ぜんに、實の如くに外身を知らん。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、僧迦賒山に何等の林有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て第三林を見る。鎗毘羅林と名け、披葉相ひ覆ひて蔭影涼原にして、鬱單越人は遊戲せん爲の故に此の林中に入る。林を斑葉樹と名け、次を龍華樹と名け、次を菴婆羅樹と名け、次を拘鞞陀羅樹と名け、次を婆羅樹と名け、次を喜愛樹と名け、次を鳥鳥樹と名け、次を婆羅多羅樹と名け、次を賒摩樹と名け、次を尼沙迦毘陀樹と名け、次を周多樹と名け、次を迦羅樹と名け、次を毘羅迦樹と名け、次を旗隣陀樹と名け、次を婆鳩羅樹と名け、次を喜香樹と名け、次を僑樂樹と名け、次を突多羅樹と名け、次を多摩羅樹と名け、次を羅迦樹と名け、次を青荊香樹と名け、次を月輪樹と名け、次を賒行樹と名け、次を常開敷樹と名け、次を尼均輪樹と名け、次を開樹と名け、次を阿濕波他樹と名け、次を甄叔迦樹と名け、次を賒摩梨樹と名け、次を楊柳樹と名け、次を毘羅樹と名け、次を迦卑樹と名け、次を那梨咬羅樹と名け、次を波那婆樹と名け、次を無遮果樹と名け、次を阿殊那花樹と名け、次を迦曇婆羅樹と名け、次を泥周羅樹と名け、次を天木香樹と名け、次を乘攝樹と名け、次を水生樹華と名け、次を曼陀羅樹華と名け、次を俱賒耶舍樹花と名け、次を金色華と名け、次を銀色花と名け、次を毘琉璃樹と名け、次を孔雀止息樹と名け、次を異處行樹と名け、次を洲生樹と名け、次を迦離賒合樹と名け、次を婆迦賒樹と名け、次を互相映厚樹と名け、次を滑樹

【五】遮の字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。

【六】宋・元・明三本に依り、羅の下に樹の一字を加ふ。

卷の第六十九

身念處品第七の六

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、十大山中に復何等の河池・流水・華果・鳥獸有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て、僧迦賒山を見るに、僧迦賒樹に六時の華あり、其の樹は晝夜に光明斷ぜずして閻浮提の燃えたる大炬火の如く、其の香普く薫りて一由旬に滿ち、閻浮提の所有の林樹の如くにて少分相ひ類す。是の如き僧迦賒山に四大林有り、一を青影林と名け、二を鳥音林と名け、三を溫涼林と名け、四を鈴毘羅林と名く。若し此の林に至るに、其の花雲の如くに空從り下りて合和・聚集せるが故に僧迦賒山と名く。僧迦賒とは聚集を言ふなり。青影林とは、一切の白色の衆鳥有りて住して此の林に在るに隨ひ、林の力を以ての故に琉璃色の如きが故に青影林と名け、鳥音林とは、若し此の林に入るに、意の念する所の如くに鳥は妙音を出し、鬱單越人之れを見て大歡喜を生ずるが故に鳥音林と名け、溫涼林とは、若し人寒有るに入れば則ち溫暖にして、若し熱有る者此の林に入れば則ち清涼を得。林中に鳥有りて名けて風行と曰ひ、是の命命鳥は、鳥の力を以ての故に一念のころ能く一千由旬を行き、若し人鳥を見て憶念して行かんと欲し、即ち此の鳥に乗するに一念のころ能く一千由旬に至る。其の命命鳥は能く四天下の所有の語言を解し、亦能く宣説し、人の如くに樂を受け、人の如き欲樂あり、其の身は七寶にて莊嚴られ、兩翼は青寶にして、車梨・頗梨・赤蓮華寶其の身を莊嚴り、見る者は歡喜す。僧迦賒山を觀るに、第二林有りて名けて鸚鵡と曰ひ、林鳥は歡喜し、蓮華池有りて、遍く其の上を覆へり。若し閻浮提の鵝王中、熱にて死すれば此の池中に生る。閻浮提の鵝王の如きは、阿那婆達多池中に住せり。種種の衆鳥住して此の林中に在り、鵝・鴨・鴉・鳶・鷲・鷓鴣鳥・恒荼摩那婆鳥・黃鳥・鳩・屯頭醜鳥・香鳥・三婆闍鳥・瞿耶沙陀鳥・聲歡喜鳥・六時行

身念處品第七之六

二五一

【一】 Spring-ganges 合集の意。

【二】 共命鳥 Jivajiva。

【三】 遍の字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。

【四】 又は阿耨達池 Anavatīpava 無熱惱、清涼と譯す。大雪山の北にありとせらるゝ想像上の池。

嫉妬ねまを起さず、心は常に歡喜し、夜叉・羅刹らさつ・毘遮舍鬼びしゃしゃゑ・鳩槃荼鬼くわんたゑ・師子・虎・豹・夜叉・惡龍・惡蟲の類を畏れず、亦荒儉・寒熱・飢渴・疾病か無く、一切の怨家の恐怖を遠離し、互相たがひに愛敬して妨礙たがひを爲さず、王賊・水火・刀兵の畏おそれ有ること無く、金樹に金明ありて晝夜別ならず、金鳥・銀鳥・珊瑚の鳥あり、若しは樹若しは鳥に種種の雜色ありて歡喜すること人の如く、心識無しと雖も亦人法の如し。

復次に、修行者は隨順して外身を觀じて鬱單越うぜんごつを觀るに、復何等の愛す可き味有りや。彼れ開慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、鬱單越うぜんごつに十大山有り。何等を十と爲すや。一を僧迦賒山そうがしやと名け、二を等峯山とうぼうと名け、三を陀摩勿力伽山だまぶりきかと名け、四を白雲持山はくうんぢと名け、五を高聚山かうじふと名け、六を普疊山ふたふと名け、七を持節樂山ぢせつがくと名け、八を持歡喜山ぢくわんぎと名け、九を如意山によういと名け、十を俱賒耶山くしやと名け、是れを十大山と名くるにて、鬱單越國の大海を周匝しうさつる。閻浮提の如きは四大山有り。何等を四と爲す。や。一を雪山せつせんと名け、二を民陀山みんたと名け、三を摩羅耶山まらやと名け、四を鷄羅婆山けらばと名く。鬱單越國に十種の大山あることも亦復是の如し。

【五〇】鳩槃荼(Kumbhāṅḍa)。陰囊、形卵と譯す。人の精を吸ふ鬼。

師迦花ありて、其の時節に隨ひて皆自ら敷榮え、或ひは異時に於て、持鬘天衆は本の住處を離れて此の山に遊戯し、諸の夜又有りて此の山中に住し、歡喜して樂を受けて天衆を惱さず。此の山中に於て多く俱翹羅鳥有り。此の山を過ぎ已りて大海濱有りて名けて鵝住と曰ひ、其の中に多く百千の鵝群と無量の蓮花有り、是の如き海濱には鵝・鴨・鶯・鴛・鴦・珠嘴の鳥・民那羅鳥・咽喉鳥等ありて、其の蓮花の色は融けし金の聚の如く、十千由旬にして、諸蜂は圍遶きて遍く其の上を覆へり。此れを過ぎて以北に鬱單越有り、一大海有りて縱廣千由旬にして、多く大魚有り、堤彌鯢魚・那迦羅魚・收摩羅魚・龜等有りて大海中に滿ち、其の水は青色にして猶し虚空の如く、深さ十千由旬あり、螺貝の母此の水中に住し、身の廣さ十里なり。水下に山有り、螺に大力有りて千の象の力を敵とし、山峯上に墮ちて則ち皆破碎せしむ。此の海を過ぎ已りて一大海有り、名けて乳海と曰ひ、縱廣五千由旬にして洪波常に起り、大惡毒龍有りて常に雷聲の如し。

復次に、修行者は隨順して外身を觀じて閻浮提の北を觀るに、復何等の山・河・海渚有りや。彼れ開慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、諸の大山ありて其の數五百、金・銀・頗梨にて一千由旬あり、鬱單越に近く多くの蓮花有り、日の初めて出づるが如し。此の山を過ぎ已りて一大國有りて名けて乳旋と曰ひ、山河・園林あり、多く鳥獸有り、夜又止住して心常に歡喜し、多く花樹有りて衆華を具足す。

復次に、修行者は隨順して外身を觀じて閻浮提の北を觀るに、復何等の山・河・海・渚有りや。彼れ開慧を以て、或ひは天眼を以て觀るに、閻浮提及び鬱單越の二國の間には更に國有ること無し。鬱單越國は縱廣十千由旬にして、三十六億の衆落は愛す可く、三十六億の受くる所の樂は少しく四天王天より減す。天に骨・肉・垢・汗無く、天亦胸かざるも、鬱單越人に骨・肉・垢・汗有り、目視胸すること有り。我と我所無く、亦我慢無く、死すれば則ち決定して天上に生れ、慢と惰曲を離れ、

けて電光と曰ふ。此の海を過ぎ已りて一大山有り。涅蜜沙（ねみつさ）と名け、山中に窟有りて堤彌沙（ていみさ）と名け、黑暗の窟にして、窟中に多く化生の龍女有り、初夜に化生し、端正を具足して其の身を莊嚴（さざり）り、壽命は一夜にして、日の出づる時に於て則ち皆老死す。殺生の餘業の故に斯の報を受くるなり。此の山を過ぎ已りて復一山有りて名けて蘇摩祇利（そまぎり）と曰ひ、縱廣五百由旬なり。此の山を過ぎ已りて一大山有りて須彌等と名け、縱廣五百由旬にして、此の山の北に於て一大森林有りて岐多迦林（きたか）と名け、羅刹有りて名けて惡夢と曰ひ、住して此の林に在り、其の行は速疾（すみか）にして、目を開く頃（とき）に於て能く行いて百千由旬に在り、諸の衆生の爲に不利益を作し、不安樂を作す。

復次に、修行者は隨順して外身を觀じて閻浮提と鬱單越の二國の中間を觀るに、復何等の山・河・海・渚有りや。何の處（ところ）に頗（おほ）らくは生ぜず死せず、退（しりぞ）くに非ず滅するに非ず、業の因縁（いんげん）に非ず、愛別離（あいべつり）に非ず、怨憎會（おんぞうかい）に非ざること有りや。是の故に生死中に於て厭離（おんり）を生ずることを得、應（たま）に縛（むす）著（ちやく）を離れ、以て解脱（げつたつ）を求めて生死を厭（いと）ふべく、生死中に於て貪樂（こんらく）を生ずること勿（な）れ。愛心と共に遊戯（ごうぎ）すること莫（な）かれ。愛の網（あま）を以て自ら纏縛（てんぱく）する勿（な）れ。生死を樂（たの）むこと莫（な）かれ。一切の生死は熾然（しぜん）たる大苦にして、憂悲・苦惱・愛別離苦・怨憎會苦の大火は熾然（しぜん）り、地獄・餓鬼・畜生・人・天の中は常無くして變壞（へんわい）するも、癡人は貪著（こんちやく）して之れを謂（い）ひて樂と爲す。應（たま）に厭離（おんり）を生ずべく、魔境（まきやう）に住すること莫（な）かれ。煩惱と共に遊戯すること勿（な）れ。後に悔心（くわいしん）を生ぜん。是の如く修行者は、隨順して外身を觀じて實の如くに生死を見んに、魔境（まきやう）に住せず、垢濁（かうじやく）を離れ、疑の曠野（くわうぎや）を離れん。

復次に、修行者は隨順して外身を觀じて閻浮提の北方を觀るに、復何等の山・河・海・渚有りや。彼れ聞慧（もんゑ）を以て、或ひは天眼を以て見るに、大山有りて俱翅羅（くし）と名け、縱廣三十山旬、高さ十由旬にして、彼の山中に於て無量百千の俱翅羅鳥（くし）と青無憂樹・赤無憂樹・七葉花樹・軍陀羅樹（ぐんた）・賢迦曇婆（けんた）・婆花（は）・飛摩利花（ひま）・金余提迦花（きんよてい）・蘇摩那花（そま）・深婆羅花（じんば）・多羅花（た）・卑陵伽花（ひりや）・鳩迦華（く）・瞻婆花（せんば）・軍陀親命花（ぐんた）・婆利

【四七】非ざること有りや。の後に、何等かの都合にて「かゝる處なし」の意味の文缺除されたるならんと思はる。
【四八】宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依り、著の下の者なる一字を除けり。

復次に、修行者は隨順して外身を觀じて閻浮提を見るに、海龍を過ぎ已りて一大洲有りて耽婆迦と名け、縱廣一百由旬にして、多く諸の大惡羅刹等有りて、魚を食して自ら活く。彼しこに地獄有りて耽婆迦と名け、衆生を焚燒き、一大河有りて橋尸迦と名け、滿河は流血にして、頭髮、骸骨は河に隨ひて流れ、地獄の縱廣は五百由旬あり、大劇苦を受く。地獄を過ぎ已りて一大海有りて狀は地獄の如く、縱廣一萬由旬、其の水青黒にして龍、夜叉無く、乾闥婆無し。此の海を過ぎ已りて北方に海有り、名けて寶滿と曰ひ、衆山に圍遶かれ、(山には) 林樹無量にして、松・栢・梅・楨・如意樹有り、山中に復無量の果樹有り。此の山を過ぎ已りて一大山有りて名けて彼岸と曰ひ、縱廣五千由旬にして、此の山中に於て多梨耶羅果・吱羅果あり、一切の時の果を六時に具足し、河池には鵝・鴨・鴛・鴦を充滿し、諸の大仙人住して山中に在り、山に千の峰有りて種種の衆寶其の山を莊嚴り、山に種種の毘多羅樹有り、皆是れ金樹にして種種の衆香あり。此の山を過ぎ已りて一大河有りて名けて石水と曰ひ、此の河中に於て、一切の衆生、若しは草若しは木、若しは人も人に非ざるも、若しは禽若しは獸も、入れる者石の如し。其の河の兩岸に諸の竹林を生じ、名けて吱遮と曰ひ、風吹きて相ひ揩るに自然に火を生じて無量百千の衆生を燒き殺す。行者復觀るに、此の河を過ぎ已りて一大河有りて名けて斯陀と曰ひ、廣さ十由旬長さ三百由旬にして、人の能く度ること無し。水鹹なるを以ての故に若し入る者有らば、身は即ち碎裂す。此の河を過ぎ已りて渚有りて閻浮摩と名け、乾闥婆有りて名けて常樂と曰ひ、此の渚の上に住し、多く布施を行じ淨く禁戒を持ち、心常に歡喜して憂惱を離れ、欲の果を具足す。此の渚の上に於て金樹を具足し、毘琉璃花池中に充滿し、須彌山に近ければ、一切の河水及び諸の禽獸は皆金色を作し、多く無量の瓔鉢羅花、拘物陀花有り、處處に酒の河海洋として溢流し、自然に稻米ありて種殖を須ひず、其の渚の縱廣二千由旬なり。此の渚を過ぎ已りて一切の山河・樹林有ること無く、一大海有りて水沫輪と名け、海中に多く、大毒惡龍有りて名

【四六】 大の字は宮内省圖書寮本に依れり。

は甘美にして、大力の龍等住して山中に在り、多く咬羅多人有りて住して此の山に在り。

復次に、修行者は晴順して外身を歡じて閻浮提の北方の國界を觀るに、復何等の山・河・海・渚有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、雪山の東に懸雪山と名くるあり、多く愛す可き禽獸と中に滿てる松栢の樹及び天木樹・那迷流林・婆鳩流林・閻摩迦樹有り。此の山を過ぎ已りて復一山有りて多摩伽羅と名け、縱廣二十由旬にして、一千の窟有り。此の山を過ぎ已りて百由旬の空曠の地有り、多く河池有るも、藥草及び樹木有ること無し。此の山を過ぎ已りて白銀山有りて鷄羅沙と名け、金峰に圍遶かれ、毘留勒天王住して其の上に在り、山峰中に於て河池有りて清涼にして、多くの蓮華・青優鉢羅花有り、池中に多く鵝・鴨・鶖・鶖有りて以て莊嚴る。鷄羅沙山を過ぎて一大山有りて名けて峰山と曰ひ、緊那羅王其の山下に住し、歌舞し遊戯す。此の山上に於て五の金峰、三の頗梨峰、十の白銀の峰有り、無量の天花有りて香氣愛す可く、山中に河有りて鳩摩羅と名け、山從り流出し、多く鵝・鴨・鶖・鶖有りて河中に充滿す。此の山を過ぎ已りて復大山有りて彌那迦と名け、縱廣五十由旬にして、多饒くの阿修羅此の山中に住し、常に樂みて歌詠す。

復次に、修行者は隨順して外身を觀じて閻浮提を觀るに、復何等の山・河・海・渚有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て、此の山を過ぎ已りて大海有るを見る。縱廣一萬由旬にして、多く大龍及び提彌魚・那迦羅魚・螺貝の類有り。此の山を過ぎ已りて一大山有りて名けて善意と曰ひ、山中に池有り、名けて凝酥と曰ひ、縱廣一由旬にして、其の池は愛す可く、此の池中に於て多く鵝・鴨・鶖・蒼・迦陵頻伽鳥有り、其の山の縱廣五十由旬、山中に河有りて橋尸迦と名け、多く水鳥有りて其の河を莊嚴る。此の山を過ぎ已りて一大海有り、縱廣二萬由旬にして甚だ怖畏る可く、雷聲常に吼え、惡龍嗔恚りて互相に攻戰し、或ひは刀火を雨し、大熾電を放ち、瞋れる心を以ての故に毒を吐きて相ひ殺す。

【四三】 Vindhakoh 毘留勒又天王の略、四天王の一、南方の增長天なり。

【四四】 Uplava 青蓮華のこと、梵漢並びあぐるること。

【四五】 摩迦羅魚のことか。

地形を像りて其の面正方なり。是の如くに外を觀じ、四天下の人の形相を觀じて實の如くに了知す。復次に、修行者は瞻順して外身を觀じて、云何んが閻浮提國の北方の國界・山河・海渚を觀するや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、北方に國有りて名けて、婆嗟と曰ひ、其の上の縱廣は滿十由旬、次の第二國を民陀羅と名け、其の土の縱廣は二十由旬、次の第三國を首羅斯那と名け、其の土の縱廣は一百由旬、次の第四國を阿梯梨と名け、其の土の縱廣は一百由旬、次の第五國を名けて陀羅と曰ひ、其の土の縱廣は一百由旬、次の第六國を名けて、鳩留と曰ひ、其の土の縱廣は一百由旬、次の第七國を、摩陀羅と名け、其の土の縱廣は五十由旬、次の第八國を、乾陀羅と名け、其の土の縱廣は一百由旬、次の第九國を名けて、賧迦と曰ひ、其の土の縱廣は一百由旬、次の第十國を婆陀羅迦と名け、其の土の縱廣は二百由旬、次の第十一國を陀羅陀と名け、其の土の縱廣は一百由旬にして、此の國中に於て多く山の嶮しき有り、次の第十二國を婆佉邏國と名け、其の土の縱廣は一千由旬、次の第十三國を毘師迦國と名け、其の土の縱廣は二百由旬、次の第十四國を摩醯沙國と名け、其の土の縱廣は二百由旬、次の第十五國を名けて、漢國と曰ひ、其の土の縱廣は一千由旬にして、官屬の都を合して一千由旬なるにて、眞漢は唯二百由旬有り、次の第十六國を都佉國と名け、其の土の縱廣は五百由旬、次の第十七國を跋跋羅國と名け、其の土の縱廣は二百由旬、次の第十八國を究頗羅國と名け、其の土の縱廣は五十由旬、次の第十九國を鳩留摩國と名け、其の土の縱廣は五十由旬、次の第二十國を甘滿閼國と名け、其の土の縱廣は一百由旬なり。自餘の小國及び空地は悉く數に在らず。

復次に、修行者隨順して外身を觀じて閻浮提の北方の國界を觀るに、復何等の山王有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て觀るに、大山有りて名けて雪山と曰ひ、種種の山峯と其の山の眷屬の廣さ千由旬、山中に多く慮陀羅樹・松樹・栢樹・天木樹・沙羅樹・多摩羅樹有り、多く夜叉有り、聚那羅多く、毘舍遮・夜叉の屬多し。其の山は愛す可くして、禪を修學する者多く此の山に依り、河流

【五】 Yaktu 中印度の國。ヤムナ河の流域。橋貴彌(コサンビ)を首都とす。

【六】 Kuru 拘樓、居樓等と音譯す。北印度の國恆河の北方流域。

【七】 Mathura タル國の南に位す。

【八】 Gandhara 北方印度の國。ガンダラ美術として其名著し。

【九】 Sakya 釋尊の生地、釋迦種族の國迦毘羅衛城を主都とする國を指すか。

【十】 支那國を指すならん。

【十一】 Kamboja 甘婆菴、鉞浮等と音譯。

【十二】 毘舍遮(Vishāka)、持國天に屬する鬼なり。

て白き光明の色ならしむ。行者復觀るに、四天王の壽命は幾歲なりや。閻浮提中の五十年を一日一夜と爲し、是の如くにして壽命は五百歲に滿つ。亦中天するも有り。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、須彌山上に復何等の界なる天の止住すること有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て須彌山王を見るに、三十三天有りて住して山頂に在り、受くる所の樂行は具に説く可からず。城を善見と名け、縱廣十千由旬にして七寶にて莊嚴られ、因陀青寶・金剛・車乘・赤蓮花寶・柔軟なる大寶は以て莊嚴を爲し、善法堂有りて廣さ五百由旬にして、毘琉璃珠は以て欄楯を爲し、眞金を壁と爲し、一切の門戸も亦復是の如く、一切の莊嚴を以て殿堂を莊嚴り、釋迦天王は善法堂に住して、善業の力を以ての故に相似の樂を受く。人中の百歲を第二の天の一日一夜と爲し、是の如くに壽命は一千歲に滿つ。亦中天するも有り。須彌の西の面を日沒山と名け、日の此の山に至るに、閻浮提人は之れを謂ひて日沒と爲し、故に沒山と名く。

復次に、修行者は隨順して外身を觀じて、須彌山王の其の量と高下を觀ず。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て須彌山を觀るに、高廣八萬四千由旬にして、阿修羅王住して其の側に在りて此の水下に居り、衆生の業の住持する所を以て日をして施轉せ令め、大尊神有りて名けて健疾と曰ひ、常に前導に在り、目を向く頃能く十千一百五十由旬を行きて周匝・施轉し、日を以て度と爲して諸の衆生の壽命の長短を知る。

復次に、修行者は隨順して外身を觀じて四天下の人の所住の處を觀るに、閻浮提國・弗婆提國・瞿陀尼國・鬱單越國は幾許の量なりや。彼れ見るに、閻浮提國は七千由旬、弗婆提國は八千由旬、瞿陀尼國は九千由旬、鬱單越國は十千由旬なり。四天下の地の形相に隨ひて、人の面も亦爾くして其地形を像る。閻浮提人の面の形相は上廣く下狹くして其の地形を像り、其餘の三方なる弗婆提人の面は地形を像りて猶し半月の如く、瞿陀尼人の面は地形を像りて猶し滿月の如く、鬱單越人の面は

【四】 Janubvīpāṇī の音譯、須彌四州の南方州。南瞻部州と譯せらる。

き難し。此の水を過ぎ已りて仙光山有り、諸の阿修羅此の山中に住し、常に天衆を畏れ、多く姦女有りて種種に莊嚴り、酒の河は流溢す。飄波迦果及び粘那果は仙光山に生じ、其の味甚だ美きも、之れを食へば人を殺す。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、復何等の山河・海濱有りや。彼れ開慧を以て、或ひは天眼を以て六萬金山を見る。紫磨金樹は山中に周遍く、禽獸は此の山中に充滿し、處處に多く金の蓮花池有りて大光明を出し、一切は金の山なり。須彌山王住して其の中に在り、諸の持鬘天・樓迦足天・三婆天・四天王天此の山上に住し、此の山上に於て如意樹有り、天の念ふ所の隨に皆樹羅り一切の禽獸の身皆金色なるを生じ、多く衆花有り、曼陀羅花・拘賒那花なり。山の四陲に於て四大林有り、一を歡喜林と名け、二を雜殿林と名け、三を鮮明林と名け、四を波利耶多林と名く。歡喜園中に大樹王有りて波利耶多と名け、此の樹下に於て夏四月の時、五欲の樂を受け、遊戯して自ら娛む。四天王天は歡喜園に於て遊戯して樂を受け、四天王天の此の園中に於て歡娛して樂を受くるが故に歡喜園と名け、鮮明林とは、衆くの彩に莊嚴らるゝが故に鮮明林と名け、雜殿林とは、種種の雜殿ありて、天子之れに乘りて遊戯して、愛す可き色・聲・香・味觸等を受くるが故に雜殿林と名く。波利耶多林・歡喜林中、一切の天衆は五欲の樂を受く。須彌山王の閻浮提に向へる一方の面は毘琉璃寶にて、毘琉璃の光照の力を以ての故に、閻浮提をして仰ぎて虚空を觀るに皆青色を作さしめ、第三方面の鮮明林中には、諸天阿修羅と共に鬪はんと欲し、此の林中に於て集まりて共に議論し、須彌山王の瞿陀尼に向へる一方の面は眞金の成する所にして、瞿陀尼をして仰ぎて虚空を觀るに皆赤色を作さしめ、第二の方面に雜殿林有り、此の殿中に於て天の鬪具を盛り、須彌山王の弗婆提に向へる一方の面は白銀の成する所にして、弗婆提をして仰ぎて虚空を觀るに皆白色を作さしめ、須彌山王の鬱單越に向へる一方の面は頗梨の成する所にして、鬱單越をして空を見るに清淨にし

【四】 Avruggodāniyah 須彌四州の西方州。西牛貨州と譯せらる。

【五】 Puravāyidāni 須彌四州の東方州。東勝身州と譯せらる。

【六】 Uttarakuruḥ の音譯、須彌四州の北方州。北俱盧州と譯せらる。

を以て、或ひは天眼を以て復西海を見る。縱廣一萬二千由旬にして、彼の大海に於て山無く城無く、水中に於て唯象頭の魚身と猪頭の魚身有り。行者復觀るに、此の海を過ぎ已りて一大山有りて名けて金山と曰ひ、其の山の光明は大海水を照し、大海水をして、猶し金色の如くにて其の山を莊嚴らしむ。山の高さ三百由旬廣さは五十由旬にして、乾闥婆有りて閻浮摩利と名け、住して其の上に住し、心常に悅樂し、壽命は二千歲なるも、亦中天する有り。無量百千の乾闥婆衆此の山中に住し、身は金色の如くにて、一切の色相は天と相ひ類し、樹果を食し、其の性勇健にして、一切の阿修羅は水下に住し、能く此の乾闥婆衆の有する所の根果を奪ふこと無し。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、此の山を過ぎ已りて復何等の山・海・渚有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て此の大海を見るに、五分を過ぎ已りて大輪山有り、眞金の成する所にして、高さ千由旬廣さ五百由旬、金剛を頂と爲す。此の山中に於て、緊那羅及び阿修羅有りて住して此の山に在り、是の甄那羅の園林は愛す可く、河流・泉池ありて多く花果有り、獼猴遊戯す。河を盆水と名け、廣さ半由旬にして、此の河中に於て多く金魚有り、遊洋して鱗を曜す。行者復觀るに、輪山を過ぎ已りて一大海有り、縱廣一萬由旬にして、其の海に渚有りて名けて寶渚と曰ひ、此の渚中に於て種種の衆寶あり、土石有ること無く、渚上に過ぐ皆是れ珍寶なり。行者復觀るに、此の海渚を過ぎて復何等の山・河・海・渚有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、大山有りて名けて白山と曰ひ、多く林樹有り、其の色は白淨にして水沫に圍遶かれ、高さ一千由旬、縱廣五百由旬なり。行者復觀るに、此の山を過ぎ已りて大山有るを見る。名けて善雲と曰ひ、高さ百由旬、廣さ六十四由旬、空にして人の住する無く、若しは夜叉若しは緊那羅も、阿修羅を畏れて悉く住する者無し。此の山を過ぎ已りて頗梨山有り、高さ三千由旬縱廣千由旬にして、河池・林果を一切具足して天の山の如し。是の山を過ぎ已りて大清水有り、縱廣百由旬にして多く螺貝有り、其の水行

にして、遊戯して樂を受け、城を鉢利多と名け、第二の住處を名けて長髮と曰ひ、其の處は愛す可くして、此の迦羅の渚の重閣・殿堂には多く流水有り。此の住處を過ぎて辛頭河有りて西海の口に入り、一大山有りて名けて蘇乘と曰ひ、住して海中に在り、此の山中に於て多く珊瑚有り、若し商人有りて此の寶山に至らんに、多く珍寶を獲て富樂窮み無し。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、此の山を過ぎ已りて復何等の山・海・渚有りや。諸の羅刹等は何等の處に住するや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、大海有りて多く大魚有り、五千由旬にして、多く螺貝・摩伽羅魚・提彌魚・提彌鯢羅魚有り、海水を撈擄して風の大海を鼓りては、魚をして亂れ行かしむ。行者復觀るに、是の國を過ぎて一大洲有り、名けて周遍可愛樂師子國と曰ひ、其の國に蛇有り、身長は十里にして、空を飛びて行きて障礙する所無く、壽命千歲にして、相ひ憎嫉せず。行者復觀るに、此の洲を過ぎ已りて復一の海有りて名けて可愛と曰ひ、縱廣五由旬にして、此の水中に於て多く蓮華有り、衆蜂にて莊嚴られ、花臺は廣大なり。諸の羅刹有りて鳩迦羅と名け、此の海中に住し、蓮花の臺を食して恣意に充ち足らしむ。行者復觀るに、此の住處を過ぎて一大山有りて名けて曠野と曰ひ、縱廣一百由旬にして、此の山中に於て、多く白象及び迦陵頻伽鳥有りて妙なる音聲を出し、是の如き美音は若しは天若しは人、若しは緊那羅、若しは阿修羅も能く及ぶ者無く、唯如來を除く。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、此の大山を過ぎて復何等の山・海・渚有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、大山有りて高さ五十由旬にして、其の山に多く毘琉璃の林有り、諸の師子の羽翼を具足せる有りて寶林を守護す。曼提呵羅刹の來りて其の處を奪ふを恐るればなり。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、閻浮提を過ぎて復何等の山・海・渚有りや。彼れ聞慧

ずして破壊し磨滅し、得已りて還りて失ひ、幻の如く夢の如く、之れを得るも還りて失ひ、此れ恩愛の處にて、誑惑と愚癡と無始より流轉する欲・瞋・癡の處、猶一怨家の如くなるに詐りて親友と爲す愛欲の住處なり。是の故に應に有爲を離れて厭離の心を起し、亂心を捨つべし。無常の境界に於て喜樂を生ずること勿れ。愚癡と共に遊戲する莫れ。是の如くに修行者は諸の衆生に教ふ。實の如くに隨順して外身の四十の住處を觀するに、一衆生として業に依りて生ぜざる無く、一衆生として業に非ずして流轉するは無く、一衆生として業の縛る(所と爲らざる無く、作す所の業の或ひは善・不善なるが如くに果報を得。彼の比丘是の如く觀る時、一衆生として業に非ざるが故に生ずるを見ず、一衆生として業藏に非ざる者無く、一衆生として業に非ずして流轉するは無くして、作す所の業の或ひは善・不善なるが如くに果報を得。彼の比丘業を觀察し已らんには、實の如くに外身を隨順して正しく觀ん。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、云何んが閻浮提中の西方の國土・山河・海渚を觀るや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、大河有りて名けて富那と曰ひ、諸の花樹有り、婆鳩羅樹・娑婆迦樹・佉殊羅果・哆迦花・那梨吠羅樹・多摩羅樹など、是の如き種類の樹有りて其の河を莊嚴り、多く山谷有り、河邊に國有りて哆迦移と名け、此の國界を過ぎては辛頭河と名け、河邊に國有りて蘇毘羅と名く、人民豐樂にして赤稻米を食し、其の國は安樂にして、山林・流水あり。此の國界を過ぎて復一國有りて蘇羅沙吒と名け、此の國界を過ぎて復一國有りて波羅多と名け、其の土の縱廣二十由旬にして、國中に多く石榴・蒲桃有り、其の國に城有りて彌多羅蒲迦と名け、此の大城を過ぎて五大河有り、共に合して流る。此れ従り以西に乃ち大海有り、多儂く種類の惡魚・惡獸ありて甚だ怖畏る可し。是の修行者西海中を見るに、一大洲有りて名けて迦羅と曰ひ、縱廣一百由旬にして、種類の衆鳥住して此の洲に在り、種類の園林は甚だ愛樂す可く、是れ毘荼他の住止する所

【二八】 Indus インダス河のこと、信度河とも譯す、印度の北方に流るゝ大河。

【二九】 Yavatte 布置者、創造者、梵天の異名。

得。乾闥婆王此の山中に住して歌舞し喜戯し、以て自ら娛樂す。牛王山を過ぐるること五百由旬にして、一大海有りて大水沫と名け、大風の音聲あり。此の海を過ぎ已りて一大山有りて名けて三峯と曰ふ、一を金峯と曰ひ、二を銀峯と曰ひ、三を頗梨峯と曰ふ。其の峯に池有りて名けて沫輪と曰ひ、金沙を底に布き、天の華にて莊嚴られ、鵝鴨鶩・鴛鴦其の中に充滿す。風海水を吹きては三の山峯を撃ちて多く大魚を殺し、白業を以ての故に打を被りて死す。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、大海を過ぎ已りて復何等の山・海・渚有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て、前の大海を過ぎて、閻羅王の罪福を決する處を見る。一切衆生の業果を證する處なり。是れ閻羅王の住する所の境界にして、閻羅王は諸の罪人を法治し、是の諸の衆生は自心に誑されて黑闇の處に住す。此の住處を過ぎて一百由旬は唯虚空のみ有り、百由旬を過ぎて閻羅王の住する所の宮殿に至る。其の王の宮殿は閻浮那提金の成就する所にして、一切の衆寶以て莊嚴を爲し、河泉・流水・蓮華にて嚴飾られ、縱廣一百由旬あり、其の殿の光明は第二の日の如し。此の住處を過ぎては日月の光無く、一切黑闇なり。海廣大なるが故に日光現れず、地獄の衆生の惡業の因を以ての故に、一切黑闇にして目に見る所無く、東西を知らず。

復次に、修行者は隨順して外身を觀じて遍く衆生所住の處を觀るに、若しは地獄處、若しは河若しは山、若しは樹若しは海、若しは諸の天處、若しは畜生道、若しは餓鬼道なる八方上下に、頗らくは衆生有りて生ぜず死せず、生ぜず滅せず、頗らくは恩愛有りて而も別離せざる（ことありや。一處として壞せず變ぜざること有ること無く、常無き恩愛要す當に別離すべし。是の如くに比丘は一處として愛別離に非ざるを見ず、五道中に於て、一指地として愛別離に非ざる無く、諸の衆生の所住の處に隨ひて、生死し生滅して無常なるに非ざる無し。是の故に此の有爲生死の諸行の中に於て、應に厭離を生ずべし。此れは是れ誑惑・躁急ける障礙にて、多く憂悲有り、速疾にて停ら

【三五】 Shukita 水晶のこと。紫、白、紅、碧の四種色あり。

【三六】 閻羅王 (Yamaraja)。閻魔王、炎魔王等と云ひ、雙生王、靜息王等と譯す。地獄の總司にして十王の一なり。もとペーダ神話より來れるものなるも、經說一ならず。本書第一冊に委し。

【三七】 Janu-du-ukta-Suvarita 閻浮河に生ずる沙金。色は赤黃にして紫焰氣を添ふ。

ひは虎の頭を作し、或ひは豹の頭を作し、或ひは獼猴の頭を作し、遍く一切畜生の面に似ること印の印する所の如し。此の海を過ぎ已りて、一大山有りて、日輪山と名け、一切の諸の欲を皆悉く具足し、天の蓮花池と上味の果あり、若し其の果を食せんには樂を生ずること七日なり。緊那羅王

此の山中に住し、自業を以ての故に心常に歡喜し、上・中・下の業にて、互相に娛樂し遊戯して樂を受く。其の日輪山の縱廣は二千由旬なり。此の山を過ぎ已りて、復一山有りて軍闍摩と名け、其の山は皆白銀を以て成就せられ、毘琉璃石は天の如くに莊嚴り、其の山に樹有りて名けて女樹と曰ひ、此の山中に於ける遍山の諸樹は、天明ならんと欲する時皆嬰兒を生じ、日出で能く行きて食時に至りては皆少年を成じ、日中時に至りては身色盛莊にして、日晡時に至りては年已に朽ち老いて杖に拄へて行き、頭髮皓白くして霜の樹に著けるが如く、日没の時に至りて一切皆死す。一切の衆生は業と共に行き、作す所の業に隨ひ、業に隨ひて報を受く。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、軍闍羅山を過ぎて復何等の山・海・渚有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て南方を見るに、此の山を過ぎ已りて一大海有り、海水の下五百由旬に於て龍王宮有り、種種の衆寶以て莊嚴を爲し、毘琉璃寶・因陀青寶・頗梨の欄楯ありて七寶にて莊嚴られ、光明・摩尼と種種の衆寶は殿堂を莊嚴り、重圍の殿は猶日日光の如く、是の如き等の無量の宮殿あり。德又迦龍王は自業を以ての故に此の宮殿に住し、是の德又迦龍王日夜常に佛を念じ法を念じ僧を念ずることを修む。此の寶堂を過ぐるごと五百由旬にして大惡海有り、一切衆生を見る者惶怖れ、多くの瞋れる惡龍以て圍遶を爲せり。此の海を過ぎ已りて復一山有りて名けて牛王と曰ひ、其の山は一切の衆生を具有し、此の山中より牛頭旃檀の香を出し、第二の梅檀を名けて黄色と曰ひ、其の梅檀の相は日の光明の如く、一切の凡人は見るごと能はず、若し人法に順ぜんに、轉輪聖王世に出現し、或ひは法の如き小王世に出現して轉輪王の如きことありて、則ち能く之れを

【一〇】 日の字は、宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。

【一一】 緊那羅 (Kinnara)。疑人、疑神、人非人と譯し、又歌舞を作すを以て歌樂神、音樂天、歌神とも譯す。八部衆の一なる人獸いづれともつかざる怪物にて、帝釋天の歌舞の神なり。

【一二】 宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依り、年少を少年に換へたり。

【一三】 德又迦 (Takaka)。能害、多舌と譯す。

【一四】 Gokirahe-Gundann
此山狀牛頭に似たり、是故に此山より出づる旃檀にこの名あり。

王天は帝釋の所に至りて是の如き言を白さく「天王よ、應に歡喜を生ずべし。魔軍を破壊し、正法を増長して、諸の天衆と一切の閻浮提人とは善法を行ぜり」と。時に釋迦天王及び諸の天衆は其の所説を聞きて皆大歡喜す。若し閻浮提人にして法行に順ぜずんば、時に四天王天則ち皆怒惱し、十三天に向ひて是の如き説を作さく「閻浮提人は法行に順ぜずして、魔軍を増長し天衆を損滅すと。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、摩醯陀羅山を過ぎて復何等の山・海・渚有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、摩醯陀羅山を過ぎて一の渚有るを見る。縱廣一百由旬にして、一足の人有りて住して此の渚に在り、根果を飲食して以て自ら生を存し、壽命は五十歳にして、樹葉を衣と爲し、屋宅を爲さずして住して樹下に在り。此の國中に於て多く師子、猛惡の獸有り、其の師子の身には皆兩翼有り、土田は調適にして寒無く熱無く、一切の女人は皆狗の面の如くにして口に妙音を出す。此の洲を過ぎて一大海有り、縱廣二萬由旬、海中に山有りて摩利那羅と名け、金・銀・頗梨・毘琉璃寶の成就する所にして、多く種種の金色の鳥有り、曼陀羅華・俱賒耶金花を六時に常に具し、神通力有る大阿修羅此の山中に於て遊戲して樂を受け、愛しき色・聲・香・味・觸等を受く。山の長さ五千由旬、高さ一百由旬、十五峰有りて皆是れ白銀にして、諸の天女等中に在りて樂を受け、阿修羅の惱亂する所と爲り、此の因縁を以て諸の天初に阿修羅と共に闘ひ、一切の天人と黒癩の凡夫は、皆女人の使役する所と爲れり。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、多梨那羅山を過ぎて復何等の山・海・渚有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て、彼の山を過ぎ已りて大海有るを見る。縱廣五千由旬にして、水中に魚有りて長さ一由旬あり、此の海中に於て諸の水人有り、身長は五由旬、或ひは牛の頭を作し、或ひは猪の頭を作し、或ひは水牛の頭を作し、或ひは駱駝の頭を作し、或ひは師子の頭を作し、或

十由旬あり、空曠にして人無し。昔仙人賦れるが故に國をして空なら令めし也

復次に、修行者は隨順して外身を觀じて閻浮提中を觀るに、復何等の山河、大海有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、大河有りて、瞿陀婆利くつたぼりと名け、其の水は清淨にして、廣さ一拘捺くたつ、長さ二百由旬なり。復一國有りて名けて安陀羅あんとらと曰ひ、其の土の縱廣は四十由旬なり。復一國有りて名けて鷄羅けいらと曰ひ、其の土の縱廣五十由旬にして、其の國に多く牛及び水牛有り、多く稻田・林樹・花果有り。南の海濱に近く國有りて迦俱羅摩かきらまと名け、一切の林樹を皆悉く具足し、其の土の長さ三百由旬、廣さ五十由旬にして、一大河有りて迦毘梨かひりと名け、種種の樹林以て莊嚴を爲し、其の水は清淨にして廣さ一由旬長さ五由旬あり、多く愛す可き迦俱羅樹かきらじゆ・鷄多迦樹けいたか有りて其の河を莊嚴り、甚だ愛樂す可し。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、閻浮提を過ぎて復何等の山・海・洲・渚有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、大海有りて不梨那ふりなと名け、蓮華の葉にて覆はれ、縱廣一萬由旬あり、風吹くとも動かさず、蓮華の葉の遍く水を覆ふを以ての故なり。此の渚を過ぎ已りて復一の渚有り、縱廣五百由旬、諸の羅刹らせつ有りて住して其の中に在り、其の形醜惡にして甚だ怖畏る可し。羅刹の渚を過ぎて一大山有りて摩醯陀まげだと名け、縱廣四十由旬高さ十由旬、多く衆樹有り、謂く、多羅樹、娑羅樹にして、諸の阿修羅、諸の龍、龍女其の中に遊戯し、或ひは復園林に在りて遊戯す。閻浮提の六齋日に於て、四天王天は此の山上に住して、閻浮提の何等の衆生は父母に孝養し法行に隨順し、何人は齋日に齋戒を受持し、何等の人有りて佛・法・僧を信じ、何等の人有りて魔と共に戦ひ、唯れか直心を行じ、唯れか布施を行じ、何人か慳ならず、唯れか他を惱まさず、何人か恩を知り、何人か業を信じ、唯れか十善を行じ、唯れか善友に近き、何人か邪見の外道を離るゝやを觀る。是の如くに四天王、摩醯羅山に於て閻浮提を觀、若し閻浮提の法に順じて修行せんに、四天

【六】 Gotavari 南印度の大

河。
【七】 拘捺 (Kotavi)。拘樓跋、俱盧舍、拘盧舍と云ふ。印度の里程なり。諸説不同、或ひは一由旬の八分の一と云ひ、或は四里と云ふ。

【八】 六齋日。四天王の天下をめぐりて、伺察する日にて、一月より六月までの各月の八日、十四日、十五日、廿三日、廿九日、卅日の六日なり。
【九】 離の字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、優婆延山を過ぎて更に何の山有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、大山有りて名けて善意と曰ひ、一切の閻浮檀金の廣大なる金華は以て莊嚴を爲し、廣さ十由旬、高さ五百山旬にして、多く金樹、眞金の禽獸、紫磨金色の波羅睺樹有り、多く諸の天・乾闥婆王・鬘持天・三寶後天有りて、其の業相の如く上・中・下の業にて、自らの業果の故に善意山に至りて閻浮提を見る。是れを閻浮提の東方の山海と名く。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、云何んが閻浮提の南方の山海なりや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、民陀山は廣さ八百山旬にして、河有りて名けて南摩多と曰ひ、廣さ半由旬長さ二百山旬あり、大毒龍有りて住して河中に在り、河中に多く失收摩羅・龜・伽羅摩有り。復大河有りて名けて濤波と曰ひ、復大河有りて名けて鞞伽と曰ひ、此の河邊に於て多く林樹有り。復、大河有りて黑寶拳と名け、廣さ三由旬長さ三百山旬ありて大海に入り、復大河有りて名けて大盧陀と曰ひ、大毒龍有りて住して其の中に在り。摩羅耶山には多く梅檀有り、其の山の廣長さ五百山旬高さ三由旬にして、一大河有りて登祇尼と名け、摩羅耶山より出で、廣さ一由旬長さ一由旬ありて大海に入り、復一河有りて質多羅と名け、種種の林樹、種種の業鳥以て莊嚴を爲し、廣さ一由旬長さ五十山旬ありて大海に入る。

復次に、修行者は外身に隨順して閻浮提を觀す。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、國土有りて彌佉羅と名け、種種の樂ある處にして、其の國の縱廣は四十山旬なり。復一國有りて諸迦羅と名け、廣さ五十山旬にして多く種種なる美果の樹有り、咬那迦果・波那婆果・無遮樹果・毘邏樹果・迦卑他果・不樓迦果・婆陀羅果・阿殊那花・梅吒迦華其の國を莊嚴れり。次ぎを迦陵伽國と名け、其の土の縱廣九十山旬にして、多く林樹有り、多く稻田有り。次ぎを毗婆婆國と名け、其の土の縱廣一百山旬にして、多く樹林有り、多く稻田有り。復一國有りて檀茶迦と名け、其の土の縱廣二

【八】 Gandharvah. 尋香神と譯す。

【九】 Malakamh.

【一〇】 三空居天か。普通する故に今の字を用ゐたるらし。即ち地居天に對して、欲界の夜摩、兜率、化樂、他化自在の四天と色界の諸天を指す。今は初めの三天を指すか。

【一一】 Vindhya. 印度の南方テツカン高原を北限する山脉をいふ。

【一二】 不詳。

【一三】 智度論第十八に「摩黎山を除いては梅檀香を出すなし」云々、「西域記」第十にも、秣刺耶山に生ずる白檀木に關する記事あり。

【一四】 Ealinga. 南印度の國名。

【一五】 Darudaka. 舊に檀特(山)南印度の國名。

卷の第六十八

身念處品第七之五

復次に、修行者は外身を隨順して觀するに、青水海を過ぎて復何等の山・海・渚有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、大海有りて名けて清淨と曰ひ、縱廣五百由旬にして、海中に山有りて光明臺と名け、高さ一百由旬、縱廣三百由旬、白銀の成する所にて金華もて莊嚴り、蓮華の池有りて名けて善意と曰ひ、長さ三十由旬廣さ十由旬あり、一覺持の諸天、樓迦足天、諸の天・鵝・鴨・鷲・鶯にて莊嚴らる。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、清淨海を過ぎて復何等の山・河・海・渚有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、大海有りて名けて大波と曰ひ、廣さ五千由旬にして、水下に風起りては衆く因縁を生じて、一切の大海及び洲渚と諸の海に波出づること二由旬に過ぎ、閻浮提人は説きて海潮と名く。大波海中に大魚の住する有り、首は狗の頭の如し。

復次に、修行者は外身を隨順して觀するに、大波海を過ぎて復何等の大山海有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、大波海の北に一大山有りて阿奴摩那と名け、廣さ十四由旬にして、白銀もて莊嚴りて第二の日の如く、天の曼陀華・拘賒耶舍花・毘琉璃華及び天の園林以て莊嚴を爲せり。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、阿奴摩山を過ぎて復何等の大山海有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、阿奴摩山の東に一大海有りて名けて澄淨と曰ひ、水を去ること遠からずして、須彌山の側の毘琉璃の面に山有りて優陀延と名け、弗婆提に向ひて金色に光を生ず。閻浮提國は毘琉璃の故に其の影青色なり。

【一】 *Mañjarān* 雜地とも譯せらる。

【二】 *Garuḍa* 金翅鳥神のこと。

【三】 曼陀羅華 (*Mandāravā*) 適意花、風茄子花等と譯す。

【四】 不詳。

【五】 *Vaiḍūryān* (*Qaḥayo*) この寶玉の色をした華を指すならん。

【六】 *Anoma*

【七】 須彌四州の一。東勝身州 (*Pūrāvāḍḍhān*) 國なり。

大海に入り、大風力の爲に將に寶山に至らんとす。其の大海水は廣さ萬由旬にして、海中に多く捉彌魚・捉彌鯢・失收摩羅魚・捉影魚有り、其の難を爲さずして大海を度ることを得て金壁渚に至るに、眞金を地と爲し、諸の羅刹等住して此の渚に在り、其の形畏る可くして大勢力有り。此の渚を過ぎ已りて復一海有り、廣さ二千由旬にして、此の海を過ぎ已りて復一山有り、名けて二一と曰ひ、其の山の三峯は高さ七由旬、縱廣三百由旬にて、七寶にて莊嚴られ、青寶・金剛・青毘琉璃・車渠の諸寶と赤蓮花寶其の山を莊嚴れり。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、此の山を過ぎ已りて復何等の山・海・渚有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、大海有りて名けて黑水と曰ひ、廣さ一萬由旬にして、諸の阿修羅其の中に遊戲し、龍及び龍女も亦其の中に遊び、其の黑水海は之れを觀るに畏る可く、羅刹鬼有りて名けて捉影と曰ひ、阿修羅を攝へて其れをして劣弱ならしめ、退いて水の下に入ら(しむ)。其の黑水海は水の下に山無く、水は黑雲の如くにて、多く諸龍有りて住して其の中に在り。是の修行者は既に觀察し已り、實の如くに外を觀じて行者復觀るに、黑水海を過ぎて何の山・海・有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、大海有りて赤寶水と名け、(赤寶水)其の中に充滿せり。海岸に樹有りて閻浮樹と名け、一切の樹中最も高く勝ると爲し、樹の高さは九十由旬にして、迦樓羅鳥王は金剛を嘴と爲し、住して其の上に在り。閻浮樹を去ること一百由旬にて青水海と名くるあり、此の海中に諸の羅刹有りて曼頭呵と名け、身長十里、水中に山有りて、此の諸の羅刹は住して山中に在り。

【六〇】摩羅は摩訶羅(Makara)の略であるまいか、即ち海の怪物、鯨、鰐等を含めるものらし。是に前語シヌ(Sinu)を加へたであらうと思はれる。

【六一】Takkāras 鬼神。

【六〇】Aaru 六道の一。

【六一】Garuga 金翅鳥と譯す。

聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、盧醯河は五 佉羅山より出で、廣さ三由旬長さ百由旬にして東海に入り、多く人民・城邑の莊嚴有り。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、閻浮提中に何等の山河ありや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、大山有りて彌斫迦と名け、高さ一由旬長さ一百由旬なり。復一山有りて名けて高山と爲し、高さ五由旬長さ百由旬、山上に池有り、池に大五 石有りて廣さ半由旬、其の池に河有り、長さ二百由旬にして大海に入る。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、閻浮提中に何等の異なる河ありや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、閻浮提中に一大河有り、迦毘梨と名け、多く大花有りて其の河を莊嚴り、謂く、迦多岐花・般遮花・阿殊那花・迦陀摩花・南摩梨迦花・阿提目多迦花以て莊嚴を爲し、復第二の河有り、瞿摩帝と名け、牛多饑きを以ての故に牛河と名くるものにて、是の如き二河は廣さ半由旬長さ三百由旬にして、大海に入る。瞿摩帝とは牛に名く。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、閻浮提中に復何等の山河有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、閻浮提中に復何等の山河有りて、娑羅婆帝と名け、河邊に城有り、俱尸那と名け、其の河は駛はやからずして洋洋として流れ、其の山の方圓は三十由旬、山中に人有りて跋難陀と名け、邊地の惡人にして慈悲無し。其の山に復取衣の人有りて住して其の中に在り、善能く水を行き、大海水に於て能く過ぎ能く渡り、山水の饑うくの魚の、宿習を以ての故に唯血肉を食し、以て自ら活を存す。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、閻浮提を過ぎて復何等の山・海・渚有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、寶山有りて海邊に住し、高さ千由旬、種種の衆寶の成就する所にして、所謂、青寶・大青寶王・金剛・車乘・赤蓮花寶以て莊嚴を爲す。往昔諸法を行商せる人有り、

【六〇】 Kāla (未闕伏) ?

【六一】 石の字は宋・元・明三本に依れり。

【六二】 Gomati 牛群を所有するの意。

【六七】 Kāravati か。五河の一にして所謂辯才天はこの河を衆徴せる神なり。さらりと流れる水音は音樂を奏する如くなるよりこの神は藝術の神として崇拜せらる。後には吉祥天と同視せられて願の神となり、辨財天とせらる。

次を縛相稻と名け、次を舌愛稻と名け、次を澁稻と名け、次を堅稻と名け、次を須陀稻と名け、次を麥色稻と名け、次を少稻と名け、次を六種藏稻と名け、次を無皮稻と名け、次を甜稻と名け、次を黑色稻を名け、次を青色稻と名け、是の如き稻中に二種子有り、一には自生、二には種殖にして、及び餘の一切の香花は、惡世時に於て盡く皆滅没す。滅没するを以ての故に、閻浮提人の皮・肉・脂・骨は悉く皆減少し、一切の身骨は蛀陋、短少にして、食味薄きが故に、一切の内外互相に因縁となりて皆悉く耗滅す。是の修行者は是の如くに外を觀するに、一切は常無く樂無く淨無く我無く、亦作者無く、無因生に非ず、異因生に非ず、是れ一の作すに非ず、亦二の作すに非ず、三に非ず四に非ず、五に非ず六に非ずして、(是の如きは)邪見の外道の造作する所なり。是の如くに外の境界を觀じ、隨順して身を觀じ、是の如くに修行者は初・後の時を觀すること上に廣く説くが如く、實の如くに隨順して外身を觀す。復次に、修行者は隨順して外身を觀じて、云何んが四天下の山河・城邑・國土・海魚・山甸の身を觀するや。須彌山王の四面の大洲を閻浮提國・鬱單越國・弗婆提國・瞿陀尼國と謂ひ、八大地獄・餓鬼・畜生・六欲の諸天有り。是の如くに隨順して外身を觀す。

復次に、修行者は初に閻浮提の東方の大海・山河・國土を觀す。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、大山有りて名けて無滅と曰ひ、高さ十山甸、縱廣三十山甸にして、此の山中に於て恒伽河有り、國有りて 迦尸と名け、復二河有り、一を安輪摩河と名け、二を毘提醯河と名く。橋薩羅國に六國土有り、他耆伽國と名け、毘提醯國と名け、廣さ百山甸にして、安輪國は廣さ三百山甸、迦尸國に一萬四千の聚落ありて城廣は二百山甸、金蒲羅國は人民と衆多の林樹を具足し、那梨岐樹・多羅樹・多摩羅樹其の城を莊嚴り、佉殊羅樹・波那婆樹ありて多く衆果有り、是の修行者は復異人を觀・取衣人・賒婆羅人と謂ひ、其の唇口を穿ちて珠を以て莊嚴り、駱駝の面の人にて、其の國の縱廣一百三十山甸なり。彼の國土を觀じ、隨順して外身を觀じて復閻浮提の山河・聚落を觀る。彼れ

【毛】 空因緣の理を説く。

【五八】 Garga.

【五九】 Kariy ナレス市のある國。

【六〇】 Kosal 舍衛城のある國

【六一】 Anga 「他」の字不用の如し。

【六二】 Kambujin (顛浮) (顛浮沙)。

【六三】 Sthavari (山隱) 山に住する一人種。

復次に、修行者は外身を離順して觀じて、閻浮提人の壽命・色量を觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て閻浮提人を見るに、鬪戰時に於ては其の人の壽命は一百歳を受け、身の長さは一弓なり。

復次に、修行者は隨順して外身を觀じて末劫の時を觀るに、十善無き時にして、一切の人民は但自ら擁護し、福德無き時なり。云何んが壽命にして、壽は幾許の命なりや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て惡劫無法の時を見るに、一切の好き味は皆悉く磨滅し、所謂、鹽・酥及び安石榴、蜜と石蜜と、甘蔗・稻糧・六十日稻、是の如き等の味の世間に勝る、者は一切滅す。一を赤稻と名け、次を烏將來稻と名け、次を飛蟲稻と名け、次を迦吒波稻と名け、次を赤芒黃米稻と名け、次を易洛稻と名け、次を斑稻と名け、次を白眞珠稻と名け、次を速稻と名け、次を鐵芒稻と名け、次を垂穗稻と名け、次を赤色稻と名け、次を朱吒迦稻と名け、次を樹稻と名け、次を水陸稻と名け、次を陸地稻と名け、次を正意稻と名け、次を海生稻と名け、次を變穗稻と名け、次を等嘆稻と名け、次を焦熱稻と名け、次を鸚鵡不食稻と名け、次を日擊稻と名け、次を一切處生稻と名け、次を師子稻と名け、次を無垢稻と名け、次を大輕稻と名け、次を一切生稻と名け、次を大力稻と名け、次を生香稻と名け、次を割蛇稻と名け、次を廟賓稻カシニヒと名け、次を山中稻と名け、次を近雪山生稻と名け、次を離縛稻と名け、次を迦陵稻カウラガと名け、次を大迦陵伽稻と名け、次を如雪稻と名け、次を大貝稻と名け、次を華德稻と名け、次を流稻と名け、次を不學稻アスガと名け、次を不曲新陀稻アウラガと名け、次を負黑稻と名け、次を波斯主稻カシニヒと名け、次を多得稻カシニヒと名け、次を鷹伽梨稻カシニヒと名け、次を量稻と名け、次を長稻と名け、次を雜稻と名け、次を非人稻カシニヒと名け、次を惠稻カシニヒと名け、次を日種稻カシニヒと名け、次を摩伽陀稻カシニヒと名け、次を水沫稻カシニヒと名け、次を時生稻カシニヒと名け、次を無糠稻カシニヒと名け、次を第一稻カシニヒと名け、次を暖稻カシニヒと名け、次を漢稻カシニヒと名け、次を黃色稻カシニヒと名け、次を婆薩羅稻カシニヒと名け、

【五〇】 十善。不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見の十善を云ふ。

【五一】 十善の十善を云ふ。銅の形した米か。不詳。

【五二】 不詳。

【五三】 不詳。

【五四】 支那種（漢時代）の稻を指すか。

は飢、二には渴、三には希望なり。第二時に至り、是の如き人等は不善の心を以て、遂に地皮をし
て穢濁・不淨なら令め、所謂、飢・渴及び希望ありて、命終らんと欲する時は熱病にて死す。是の
如く、閻浮提人を觀るに外食に因りて壽命を得、病無く惱無し。

復次に、修行者は外身を隨順して觀するに、云何んが閻浮提人は第三時に於て、一切食に因りて
壽命を得るや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て第三時を觀るに、地皮皆滅し、食の過を以ての
故に風・冷・熱等皆調順ならずして無量の病起る。一切有爲の行聚は外食の因縁内に入りて増長し、
内の因縁にて外法を増長するにて、外身は内に因り、内法は外に縁るを觀る。

復次に、修行者は隨順して外身を觀するに、云何んが第四の闘時に、閻浮提人は何等の食を食す
るや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、閻浮提人は闘戰時に於て、莠子を食し、或ひは
鵲豆四九を食し、或ひは魚肉を食し、或ひは菜根を食す。一切の好き味は皆悉く滅没し、多く病苦有
り、非時に老い、闘戰時に於ては人氣力無し。

復次に、修行者は外身を隨順して觀するに、云何んが劫初の時の閻浮提人の壽命の長短なりや。
彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、劫初の時、閻浮提人の壽命は八萬四千歳にして、身の
長さは五百弓なり。今は人の身長五〇
は一弓なり。

復次に、修行者は外身を隨順して觀するに、云何んが閻浮提人の第二時に於ける壽命・色量なり
や。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、閻浮提人は第二時に於ては壽命四萬歳、人の身量
は長さ二百弓なり。

復次に、修行者は外身を隨順して觀す。云何んが閻浮提人を觀るに、第三時に於ける壽命・色量
なりや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て閻浮提人を見るに、第三時に於ては其の人の壽命一萬
歳、人の身量は長さ一百弓なり。

うに見える食物、「固」はしつ
かりした、又はどつしりした
もの、と解しては如何。
【四六】六根六識の十二處のこ
と。

【四七】光音天。色界十八天の
第六、二禪天の第三。

【四八】稷に似て實らぬ一種の
はぐさ。

【四九】鵲豆。不詳。鵲の色に
似た豆か。空豆のことか。

【五〇】長の字は三本及び宮内
省圖書寮本に依れり。

善き禪樂を増長することを得るなり。是れを初觀と名く。外法の内法を増長すとは、云何んが外法の因何の縁にて八分を具足するや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て劫初の時の衆生の食する所を觀るに、何の色貌外法とは、謂く、床褥、臥具、湯藥にて、能く身を增長して樂みて善法を修め(しむ)。是の如くに修行者は外身を隨順して觀ず。若し蚊虻、蟻等身を惱まして觸れずんば内法を増長し、若し風雨・寒熱若し妨礙せずんば内法を求むることを得、若し不愛・不樂の醜惡の聲を聞くに、之を聞きて礙無くんば内法を増すと名け、若し臭氣の愛樂す可からざるを聞き、以て礙を爲さずんば内法を増すと名け、若しは愛香を聞くも障礙する所無くんば内法を益すと名け、五根皆悉く内なる因と外より入ることありて、五の内入有り。是れを外身觀と名く。賢聖の弟子は實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は外身を觀するに、云何にして六識は法を取るや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、外法の障礙する所無きに於て、則ち能く法を知る。何等は六識なりや。所謂、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識にして、是れを内法と名け、外法を了知し、是の内外法の互相に因縁となること、譬へば飛鳥の虚空に違ぶに、其の所至に隨ひて影の常に身に隨ふが如く、内外の諸人も亦復是の如し。若し一切の身、一切の内法增長せんには心も亦增長し、心は一切法の因縁と爲りて、各各相ひ因となりて諸法有り、是の如くにして修行者は、一法として是れ常にして變ぜず破壊せざる者を見ず。

復次に、修行者は外身を隨順して觀じて閻浮提の人の壽命を觀るに、云何んが損減り、云何んが增長すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て劫初の時を見るに、光音の諸天閻浮提に下りて地皮を食するに三十三天の須陀の味の如く、劫初の時は人善心なるを以ての故に、地皮は好き色好き香善き觸ありて一切の過を離れ、衆人之れを食して壽命は八萬四千歳にして、唯三病のみ有り、一に

て四方に希求する位。
(j)有(Māra)。未來世の業因を作る位。
(k)生(Bhūti)。

(1)老死・憂悲、苦惱(Marṇa-mṛtyu, Pīṭha-paṭideva, dukkha-dammanavaṇa napaṭiāo)。今は試に三世にわたる胎生學的の説明たる有部の説をあげ。
(2)心、心數法。前卷の最後の註を見よ。

(3)四食。搏食とは有形の食物、印度は指につまみて食する故に食事の様式に従つてこの名あり。思食とは思念によりて身を保つこと、觸食とは感觸によりて身を保つこと。識食とは心力の能く身を保つこと。

(4)宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依り、識の上の愛の字を除けり。

(5)此本文は「所謂、愛味色聲愛聲樂軟堅固色貌」にて甚だ解し難し。今強ひて八分して上の如くせり。この中「色」は物がら、「聲」といふは齒で嚙んで音のする所に風味ある食物を指すらしい。「樂」とはいかにも樂しさうな、愉快さうな澆潤として清新な又は豊潤な食物を指すか、「堅」と固を分けたのも苦しい仕方であるが、佛典には随分かうした分け方がある。「堅」はかたさ

各因縁となりて各各力生ず。若しは内若しは外なる一切の有爲は、三種の法を除く。所謂、數縁無爲、非數縁無爲、虚空無爲なり。云何んが諸法は各各力轉するや。所謂、無明は行に縁り、行は識に縁り、識は名色に縁り、名色は六入に縁り、六入は觸に縁り、觸は受に縁り、受は愛に縁り、愛は取に縁り、取は有に縁り、有は生に縁り、生は老死・憂悲・苦惱に縁り、是の如きの一切は大苦聚集なり。若し無明滅すれば則ち行滅し、行滅すれば則ち識滅し、識滅すれば則ち名色滅し、名色滅すれば則ち六入滅し、六入滅すれば則ち觸滅し、觸滅すれば則ち受滅し、受滅すれば則ち愛滅し、愛滅すれば則ち取滅し、取滅すれば則ち有滅し、有滅すれば則ち生滅し、生滅すれば則ち老死・憂悲・苦惱の大苦聚滅し、是の如くにして唯大苦聚の滅すること有り。是の如き諸法の若しは内若しは外なるものは、互相に因縁となりて生長することを得。是の如くに修行者は内身を身に循ひて觀三種の外身界を隨順して觀じ、内を觀ること外の如く、外を觀ること内の如く、實の如くに觀察し、是の如くに修行者は内外法を觀る。先に閻浮提を觀て爲に正法を増長し、内法觀を修めて分別して觀察し、一一を觀察し、人天を合して觀じ、別して無覺を觀ぜり。内は外なる一切の四大に因り、外は内なる心。心數法に因りて内法と外法の増長すること有り。若しは内法有りて内法を正しく了り、若し内法増長せんには外を見れば則ち了なり。云何んが内法は外に因りて増長するや。床褥、臥具、病瘦への醫藥、須ふる所の物を皆悉く具足せんに、比丘は則ち能く善法を増長す。若し臥具、病瘦の醫藥無くば一切の善法を増長する能はず、心に怖求むること無し。是の如くに内外互ひに共に相ひ因りて増長することを得るにて、作者有るに非ず、常不變に非ず、無因生に非ず。云何んが一切の三界の衆生は外法の因縁にて増長することを得るや。一法の増長すること有らんに、一切の有爲に攝せらるゝ衆生に、四種の食有り。何等を四と爲す。一には搏食と名け、二を思食と名け、三を觸食と名け、四を識食と名け、欲界の食の四大種子にして、外食に因りて内なる

- 【四】數縁無爲等。新譯には擇滅無爲、非擇滅無爲、虚空無爲に作る。造られたるものに非ざる即ち因縁所生の生滅變化を離れたる三種のもの。數縁無爲とは、煩惱を滅盡して現はるゝ眞如のこと。非數縁無爲とは、縁を缺ける不生の滅法に名く。智を以て得たる滅虚空無爲とは、虚空の他に礙へらるゝこと無くして、以上は又六無爲の中に攝せらる。以上は又十二因縁と云ふ。六十一卷の註を見よ。
- 【五】無明等。十二緣起又は流轉する煩惱。
- 【六】行(Samskara)。過去世の善惡の業。
- 【七】識(Vijñāna)。無明、行の因にて母胎に託された結生の初念。
- 【八】(a)名色(Nāmarūpa)。託胎以後、六根の成就するまでの位。
- 【九】(b)六入(Saḍaṅgha)。將に胎を出でんとする時。
- 【十】(c)觸(Sparśa)。只物に感觸する間のこと。
- 【十一】(d)受(vedāna)。苦、樂、捨の三受を知りわくるに至る時代。
- 【十二】(e)愛(Prema)。愛の感情出づる時代。
- 【十三】(f)取(Uppādāna)。愛欲盛に

に於て分散して沙の如きが如く、人の命終らん時、風大調はずして死の苦に逼らるゝことも亦復是の如くにして、復佛・法・僧寶を念する能はず。一切の凡夫は盡く縁心の相續すること有りて生ること印の印する所の如くにて、命終らん時に於て、盡く心有りて生ずることも亦復是の如し。心の彌猴の因縁の力を以ての故に生老・病・死の身を受く。是れを四大調はずして四種の死有りりと名く。行者見已りて無常・苦・空・無我を觀察し、是の如くに見已らんに魔境に近かずして涅槃道に近き、^{三五}染愛・色・聲・香・味・觸に於て樂まざるせず、愛心を起さず、塵垢を離れ曠野を離れ、色・聲・香・味・觸に著せず、色慢を起さず、少年を恃まざる、命慢を恃まざる、多語を惹ばざる、城邑に入らず、偏著する所無く、常に死の畏れを念じ、微細の罪に於ても心に怖畏を生じ、實の如くに身を知り、生滅の法を知り、一切の染欲に於て心に厭離を得、樂みて正法を行じ、心懈怠らざらん。是の如くに那羅帝婆羅門長者の聚落に修行する比丘は觀察し修行す。

復次に、修行者は内身を循ひて觀、云何にして修行して内外身を觀するや。所謂、外法を觀已りて内身を觀、身に循ひて觀るなり。種子を觀察するに、種の如きは芽を生じ、芽從り莖を生じ、莖從り葉を生じ、葉從り花を生じ、花從り實を生ず。是れを外觀と名く。

復次に、修行者は内身を觀す。前識の種子は業煩惱と共に不淨中に入りて、安浮陀と名け、安浮陀從り歌羅囉と名け、歌羅囉從り名けて伽那と曰ひ、伽那の時從り名けて肉搏と爲し、肉搏從り五胞を生ず。所謂、兩手、兩足及び頭なり。五胞從り五根を生じ、是の如くに次第して乃至老死す。

復次に、修行者は外身を隨順して觀す。草木は云何ん。前に青綠なることを見、後漸く黃に變じ、終時墮落す。身も亦是の如く、初に嬰兒を見、次いで中年に至り、漸く老に至りて則ち死に歸す。

復次に、修行者は外身を隨順して觀す。外なる諸の種子は云何んが生ずるや。地從り一切の藥草及び叢林に生じて増長することを得。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て是の諸法を見るに、各

【三五】 煩惱の愛、又は汚れの愛欲。

【三六】 肉體に對する慢りの心。命に對する慢りの心。

【三七】

【三八】 安浮陀等。いづれも胎内五位の一。各七日間を纏て位名を變す。通常は歌羅囉(Kalaha)(膜)安浮陀(Arbhuta)(池)閉戸(Peiti)(軟骨)伽那(Ghana)(肉團)、鉢囉舍法(Trasikha)(五支又は五胞)の順序なれど今は第一と第二を換へ第三を略し、その代り五根の名を加へたり。

【三九】 宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依り、行の下に者の一宇を加へたり。

び一切愚癡の凡夫をして身命を喪はしむるや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、水大調はずんば擧身の筋脈、一切の皮・肉・骨・脂・髓・精・氣は、我れ及び一切衆生の命終らん時に臨みて一切皆爛れ、膿血流れ出で、互相に逼迫りて一切皆動き、兩山の壓するが如きことは亦前に説くが如し。生酥の持を以て海中に置くに、黒風に吹かれて洪波相ひ撃ち、止住す可からずして堅無く牢無く、是の如き水大の其の身を破壊することも亦是の如くにして、佛・法・僧寶を念する能はず。餘念の心相續して斷ぜず、一切愚癡の凡夫は緣心相似して生身を受くること印の印する所の如くにて、命終らん時に臨みて現陰既に盡くるも、相似の生を受くること亦復是の如し。心の獼猴を以て生死を受け、引いて生死に入れらる。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、云何んが火大調はずして人命を斷するや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て命終らん時を見るに、火大調はずんば一切の諸の筋、一切の輔筋、皮・肉・骨・脂・髓及び精の一切は焼き煮られて熾然たること、譬へば 佉陀羅炭を燒きて火聚山の如きに、投ぐるに生酥を以てしては之れを燒きて炎を起すが如く、是の如き身は猶し酥の持を之れに投げしが如くにて、死の苦も亦復是の如し。復佛・法・僧寶を念する能はず、現陰將に盡きんとするも心念相續し、一切愚癡の凡夫は心緣の念を以て相似して生を受くること印の印する所の如く、命終らん時に於て、現陰既に盡くるも心に生を受くること亦復是の如し。心の獼猴の因縁の力を以ての故に生死を受く。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、云何んが死時に風大調はずして人命を斷するや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て臨終の時を見るに、風大調はずんば一切の身分、一切の筋脈、一切の身界なる、所謂、皮・肉・骨・脂・髓・精・氣は皆悉く散壞し、燥乾きて膩無く、互相に割裂し、足従り頂に至りて分散して沙の如きこと、譬へば酥持の黒風に吹かれて散壞して膩を失ひ、虚空の中

【三】宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依り、雨を雨に作れり。

【四】佉陀羅(Khadra) 紫檀のこと。故に佉陀羅炭とは紫檀にて作りたる炭なり。

と爲り、七を滑蟲くわつちゆうと名け、肺風はいふうの殺害する所と爲り、八を下流蟲かみりゆうと名け、臍上行風しじやうぎやうふうの殺害する所と爲り、九を起身根蟲きしんこんちゆうと名け、穢門行風ていもんぎやうふうの殺害する所と爲り、十を憶念歡喜蟲おくねんくわんぎちゆうと名け、忘念風の殺害する所と爲る。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て、已すでにして無常・不淨・無我を見る。前に已に一蟲は肺過風の殺害する所と爲れり。是の如き比丘は内身を身に循ひて觀、無漏みれうの明を以て無始むじより流轉りうてんする闇黑を斷除し、畢竟して常に滅ほろす。世間相似の業を以て此の法を得るにて、其の久しく七種の念を修するを以て現前に見るが故なり。何等を七と爲す。一には佛を念じ、二には法を念じ、三には僧を念じ、四には戒を念じ、五には天を念じ、六には死を念じ、七には無常を念するなり。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、死の幾種は一切の業を壞するを觀るや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て死の四種を觀る。所謂、地大調はず、水大調はず、火大調はず、風大調はざるなり。云何んが地大調はずして人命を斷つや。若し地大調はずんば、身中の風氣は地大堅なるが故に身を擧げて皆閉ぢ、互相たひあひに破壊し、互相に逼惱ひつなうすること、譬へば二山の堅きこと金剛の如きに、二山の間に於て生酥なまの搏つかまを置き、大黒風有りて此の二山を吹くに、互に共に相ひ撃ちて生酥の搏を壓するが如く、地大・風大は彼の二山の如くにて、一切の身命、皮・肉・骨・血・脂・髓・精・氣を身の篋かは之れを盛りて猶し生酥の如く、地大・風大の爲に打壓うちおされ、加害かがいはれ、身界を破壊られて大苦惱を得、佛を念じ、法を念じ、僧を念すること能はず。現陰將げんいんしやうに盡きんとして中陰ちゆういんの繋つなぎ（所と）爲り、相續して斷ぜず、一切愚癡の凡夫の人は、心相似し相續し緣生するを以て（生るゝこと）印の印する所の如く、死も亦是の如くにして、現陰將げんいんしやうに盡きんとするも、相似の心を以て生も亦相似し、心の彌猴の因縁の力を以ての故に諸の生死を受く。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て命終らん時を觀るに、云何んが水大調はずして、我れ及

【三】無漏 (Aniraya)。漏は煩惱の異名。煩惱なきもの、煩惱を増長せしめざるものを無漏と云ふ。

る所と爲り、三を斷節蟲と名け、傷髓風の殺害する所と爲り、四を赤口臭蟲と名け、傷皮風の殺害する所と爲り、五を消骨蟲と名け、傷血風の殺害する所と爲り、六を赤口蟲と名け、傷肉風の殺害する所と爲り、七を頭非摩蟲と名け、八を食皮蟲と名け、傷骨風の殺害する所と爲り、九を風刀蟲（二七）と名け、害精風の殺害する所と爲り、十を刀口蟲と名け、皮皺風の殺害する所と爲る。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て尿中蟲を觀るに、命終らん時に臨みて何等の風の殺害する所と爲るや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て十種の蟲を見る。何等を十と爲すや。一を生蟲と名け、生力風の殺害する所と爲り、二を針口蟲と名け、汗風の殺害する所と爲り、三を白節蟲と名け、痲風の殺害する所と爲り、四を無足蟲と名け、傷汗風の殺害する所と爲り、五を散葉蟲と名け、破齒風の殺害する所と爲り、六を三焦蟲と名け、喉脈風の殺害する所と爲り、七を破腸風と名け、下行風の殺害する所と爲り、八を閉食消蟲と名け、上行風の殺害する所と爲り、九を黃蟲と名け、二傍風の殺害する所と爲り、十を消重食蟲と名け、轉筋風の殺害する所と爲り、是の風及び蟲は糞を乾燥かじめ、諸の界を惱亂し、互相に動發し互相に衝擊し、風皆上り行きては身界を惱まし已りて破壊して氣を斷じ、其の身を撈攪し、其れをして乾燥かじめ、力を奮ひて之を殺し、人死する時に大苦惱を受くることは法として喻ふ可き無く、一切の世人に皆當に死有るべきこと決定して疑無し。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て髓中の蟲を觀るに、命終らん時に臨みて何等の風の殺害する所と爲るや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て髓中を見るに、十種の蟲有り。何等を十と爲すや。一を毛蟲と名け、害髓風の殺害する所と爲り、二を黒口蟲と名け、似少風の殺害する所と爲り、三を無力蟲と名け、睡眠亂風の殺害する所と爲り、四を痛惱蟲と名け、不忍風の殺害する所と爲り、五を心悶蟲と名け、舌名字風の殺害する所と爲り、六を火色蟲と名け、緊風の殺害する所

【二六】 宋・元明三本及び宮内省圖書寮本に依り、七名の下に頭非摩蟲八名の六字を加補せり。

【二七】 同右、八を九に、九を十に換へたり。

【二八】 三本及び宮内省圖書寮本に依り、爲傷汗風之所殺害の下の五名……害の十四字を除き、六以下十一に至る記數を一數減じて五以下十とせり。

【二九】 三本及び宮内省圖書寮本に依り、傷を腸に作る。

【三〇】 同右、輔を轉に作る。

【三一】 三本及び宮内省圖書寮本に依り、爲の下に舌の一字を加へたり。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の蟲有りて風の殺す所と爲り、何の苦惱を得るや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て十種の蟲の住して肉中に在るを見る。何等を十と爲すや。一を生瘡蟲と名け、行風の殺害する所と爲り、二に刺蟲と名け、上下風の殺害する所と爲り、三を閉筋蟲と名け、命風の殺害する所と爲る。何故に之れを名けて以て命風と爲すや。若し身中を出づれば人は即ち命盡き、故に命風と名く。四を動脈蟲と名け、開風の殺害する所と爲り、五を食皮蟲と名け、亂心風の殺害する所と爲り、六を動脂蟲と名け、懨懨風の殺害する所と爲り、七を和集蟲と名け、視眴風の殺害する所と爲り、八を臭蟲と名け、九を汚蟲と名け、十を熱蟲と名け、閉風の、命終らん時に臨みて五閉風の殺害する所と爲る。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、云何なれば死時に白き汗流れ出で、是の如き諸の蟲は、癩中を行きて何の風に殺さるゝや。是の修行者は十種の蟲の癩黄中を行くを觀る。何等を十と爲すや。一を癩癩蟲と名け、壞胎藏風の殺害する所と爲り、若しは男若しは女の命終らんと欲する時此の風脈を斷つ。二を懨懨蟲と名け、轉胎藏風の殺害する所と爲る。若しは男若しは女の氣力を失はしめ、或ひは口中於り一掬の黄を出して猶し金色の如く、三を苗華蟲と名け、去來行住風の殺害する所と爲る。四を大語蟲と名け、五行孔穴黑蟲と名け、六を大食蟲と名け、七を暖行蟲と名け、壞眼耳鼻舌身風の殺害する所と爲り、是の如くに次第して八を大熱蟲と名け、刀風の殺害する所と爲り、九を食味蟲と名け、針刺風の殺害する所と爲り、十を大火蟲と名け、惡黄風の殺害する所と爲る。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て骨蟲を觀るに、命終らん時に臨みて何等の風の殺害する所と爲るや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て一切身分の骨内を見るに、十種の蟲有り。何等を十と爲すや。一を種骨蟲と名け、黃過風の殺害する所と爲り、二を齧骨蟲と名け、冷風の殺害す

【七】宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依り、食の一字を加ふ。

【八】同右、八名臭蟲の下に、九名汚蟲十名熱蟲の句を加へたり。

【九】癩の字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。以下の同字も之れに同じ。

【一〇】宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依り、齧を諳に作る。

【一一】同右、孔の下の蟲六名の三字を除けり。

【一二】同右、七より十一に至る記數を、六より十に至る記數に換へたり。

【一三】宮内省圖書寮本に依り、行熱の二字を暖行に換へたり。

【一四】宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依り、火の上に大の一字を加へたり。

【一五】同右、十二以下の十四字を除けり。

の殺害する所と爲り、八を交牙節蟲と名け、九を食涎蟲と名け、破足腕節風の殺害する所と爲り、十を食齒根蟲と名け、破脾骨風の殺害する所と爲る。

復次に、十種の蟲有りて咽喉を行き、下りて胸中に至りて風の殺す所と爲る。何等を十と爲すや。
一を噉食蟲と名け、二を食涎蟲と名け、破力風の殺害する所と爲り、三を消唾蟲と名け、四を嘔吐蟲と名け、五を十味流脈蟲と名け、行轉風の殺害する所と爲り、六を甜醉蟲と名け、害節風の殺害する所と爲り、七を嗜味蟲と名け、破毛爪甲尿風の殺害する所と爲り、八を杼氣蟲と名け、正跳風の殺害する所と爲り、九を憎味蟲と名け、破壞風の殺害する所と爲り、十を嗜睡蟲と名け、胞中風の殺害する所と爲る。

復次に、十種の蟲有りて血中に住し、風の殺す所と爲る。一を食毛蟲と名け、乾糞風の殺害する所と爲り、二を孔行蟲と名け、二傍風の殺害する所と爲り、三を禪都蟲と名け、六癩風の殺害する所と爲り、四を赤蟲と名け、斷身分風の殺害する所と爲り、五を蛔母蟲と名け、惡火風の殺害する所と爲り、六を毛燈蟲と名け、一切身分風の殺害する所と爲り、七を瞋血蟲と名け、八を食血蟲と名け、破健風の殺害する所と爲り、九を瘰癧蟲と名け、一切身動風の殺害する所と爲り、十を酢蟲と名け、熱風の殺害する所と爲る。血中に生れ、其の形短促く、團圓くして足無く、微細にして眼無く、能く身の痒きことを作し、慳慳として動き、其の蟲の味は鹹く、人の死する時に於て、是の如き等の蟲は風の爲に殺され已りて、血則ち乾燥きて其の人即ち死し、是の故に人は死人に血無しと説き、血乾かんと欲する故に大苦惱を得、命終らん時に臨みて心に大怖を懷き、大苦惱を受け、此の身を捨てんことを恐れて、異處に行きて親族・知識・兄弟・妻子・財物を捨離し、癡にして愛ありて智無く、愛の結に縛られ、救護有ること無く、善法の伴無く、唯獨一の身にて、一切の身分の血脈は乾燥き、身心に二種の大苦を受く。

- 【七】 宮内省圖書寮本に依り、一名の下に噉食蟲二名の五字を加へたり。以下の文の字句の加除は、多く前卷を参照して之れを行へり。強ひて訂正するを要せざるもの（略述せるものと見るべきもの）も、併し易き様別本を参照して前卷と同じき字句に訂正せり。
- 【八】 宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依り、原本の二以下九の記載に一數を増せり。
- 【九】 宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依り、唾の上に消の一字を加へたり。
- 【一〇】 同右、吐の上に嘔の一字を加ふ。
- 【一一】 同右、脈の上に流の一字を加ふ。
- 【一二】 同右、嗜の下に六の一字を除く。
- 【一三】 宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依り、食髮の二字を瞋血の二字に換へたり。
- 【一四】 同右、瞋の字を食に換ふ。
- 【一五】 同右、穢を健に換ふ。
- 【一六】 定まらぬかたち

實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、復何風有りて身中に住するや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て、垢濁を離れて清淨の所を緣じ、疑を離れ疑を度りて實の如くに疑はざるに、此の身中に於て更に異風無く、此の風聚集し、此の風和合し、かくの如く風流れて根界を緣じ、業煩惱と共に和合して住して能く身を持し、或ひは妨害を爲す。是の修行者、遍く一切の身内の諸風を觀じて見を具足し已らんに、欲心を厭離して愛も壞す能はず、魔境に入らずして涅槃に近き、智慧の目を以て無始より流轉する貪・瞋・癡の闇を破し、疑の曠野を離れ、色・聲・香・味・觸等に染まらず、境界中に於て實の如くに之れを見、一切の三界は皆悉く無常・苦・空・無我なるを實の如くに之れを見て、是の如くにして那羅帝婆羅門長者の聚落到修行せる比丘は、實の如くに之れを知りて樂みて、身念を修め、生滅の法を知り、餘の觀を念せずして一切の身を觀じ、一切の縛及以て解脱を知らん。

復次に、修行者は異法を以て是の身の失壞・盡滅を觀察す。云何にして此の身は當に失壞すべき耶。命終らん時に於て云何にして風と蟲は能く此の身を壞し、如何にして一切の界を惱亂し、幾時に命終り、云何にして上下して逆順の風吹くや。是の如き比丘は内身を身に循ひて觀、彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て臨終の時を見るに、一切の諸の蟲は先に惱亂を被り、蟲既に死し已りて人乃ち命終り、一切の 有爲は決定して失壞し、是の如き死法は當に此の堅牢なる大惡有るべし。是の如き比丘頭中を觀るに、十種の蟲有りて風の殺す所と爲る。一を頂内蟲と名け、足甲風の殺害する所と爲り、二を腦内蟲と名け、兩足傍風の殺害する所と爲り、三を觸腰骨蟲と名け、不覺風の殺害する所と爲り、四を食髮蟲と名け、破骨風の殺害する所と爲り、五を耳内行蟲と名け、行蹈地風の殺害する所と爲り、六を流涕蟲と名け、跟風の殺害する所と爲り、七を脂内行蟲と名け、破脰風

【五】 身念。身念處の略。四念處の一にして、身を不淨なりと觀じて妄執を離るゝなり。六十四卷の初の註を見よ。

【六】 有爲(Aniṅga)は、即ち因縁に依りて生滅變化するもので、無爲を除く一切の諸現象界の事物を云ふ。

ふ。若し調順てうじゆんはすんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て睡風有るを見るに、若し調順ならずんば見る所は顛倒てんたうし、流脈を擾亂して、其れをして動き變かはらしめ、一切の骨節に皆悉く疼痛あり。睡風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて持命ぢめいと曰ひ、住して身中に在り。若しは調ひ調はずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて損壞そんわい一切にして、能く身を持して識心に依るに、調はざるを以ての故に能く人命を斷つ。一切衆生の命根を依持して若し風調順てうじゆんはゞ、則ち命を失はず。持命風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて損壞そんわい一切身分しんぶんと曰ひ、住して身中に在り。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て壞身風を見るに、始め胎に住せし従り此の風力を以て其の身分を破壊し損傷せしめ、身は曲りて僂脊ろうせきにして、凸こぶき臆おそ、戻かへれる驢なり。若し風調順てうじゆんはゞ、則ち此の病無し。壞身風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て觀見るに、風有りて名けて攝皮せつひと曰ひ、住して身中に在り。何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て攝皮風を見るに、若しは外風の觸ふる、所と爲るに、若しは冷きも若しは熱きも、若しは香かほきも若しは臭くさきも、或ひは下るも或ひは上るも、或ひは大力なるも小力なるも、時に隨ひて來り觸るゝに悉く能く覺知す。攝皮風を觀じ已らんに

すして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて生力と曰ひ、住して身中に在り。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て生力風を見るに、若し調順はずんば復多く美饈・飲食を食すと雖も身は常に力無く、毒を壞ける身の如し。風調はざるを以ての故に此の病有り。若し風調順はど、則ち此の病無し。生力風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて生身心力と名け、住して身中に在り。若し調順はずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て生身心力風を見るに、若し風調順はど始め胎中従り心身漸く増し、心を強健ならしめ、風調ふを以ての故に作すと作さざるを知り、久しき時に作す所を皆能く念知し、去來にも、進止るにも、強健にして性れず、飢渴・寒熱・衆苦に耐へ、身體は充滿し、其の身の頭髮は非時に白からず。若し調順はずんば則ち此の法を失ふ。生身心力風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて妨咽喉語と曰ひ、住して身中に在り。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て妨咽喉語風を見るに、若し調順はずんば則ち身に病を生じ、餘調はざるを以て則ち音を失ひ、或時は耳聾ひ、或ひは手足は攣攣り、或ひは身曲りて偃僂となり、兩の目は明を失ふ。風調はざるを以て是の如き病を生ず。妨咽喉語風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて睡風と曰

ずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて臭上行しじやうぎやうと名く。若しは調ひ調はずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て臭上行風を見るに、身・鼻・口一切を皆臭からしめ、能く臭氣を毛孔まうこう從り出でしめ、熱藏ねつざう從り上りて生藏じやうざうを衝きては一切の身を堅かた鞭むちして大苦だいこあらしめ、食は消化せず、坐禪ざぜんする能はず、晝夜に善法を修行する能はず。若し臭上行風にして和順・調適てうてきならんに、則ち向に説く所の如きの病無し。上行風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて大便處だいべんじよと名く。若しは調ひ調はずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て大便風を見るに、若し調順てうじゆんはずんば、三肉さんにく飽あに於て則ち痔病しじびやうを成じ、下す所の血は赤豆の汁の如く、身體に燒熱あり、慳けんくして睡眠すいみんを嗜このみ、筋脈きんみやくは拘こきて急きふしく、食は消ゆる能はず、舌は味を得ず。若し風調順ふうてうじゆんはゞ、則ち此の病無し。大便處風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名なけて忘念ぼうねんと曰ひ、住して身中に在り。若しは調ひ調はずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て忘念風を見るに、若し調順てうじゆんはずんば念を忘失わすれしめ、習誦しゆじゆせるを多く忘れて憶持おくぢする能はず、四方の面に於て見る所は顛倒てんたうし、已に過あまてる事を忘失わすれて憶おくはず、食する所あるも速に飢うゑて而も食する能はず、身の毛は龜澁かみじやくにして爪甲つめがも亦然り、寒熱に耐へず、念する所を隨まひて忘る。若し風調順ふうてうじゆんへば、則ち是の如き説く所の病無し。忘念風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調は

【三】 不詳、肛門を指すなるらし。

卷の第六十七

身念處品第七之四

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて壞味と曰ひ、住して身中に在り。若し調順はすんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て壞味風を見るに、若し調順はすんば人の舌中の嗜味蟲を動かしめ、蟲動くを以ての故に一切の好食・美饌も食する能はず、食せざるを以ての故に身體は劣弱にして讀誦し、修學し、禪思し、及び善法を修する能はず、身調はざるが故に心は法を樂まず。名色の互相に因縁して住すること猶し束ねたる竹の相ひ依りて住するが如く、相ひ依る力の故に是の如き 名色は 各相ひ依り、是の如き 行聚は食の因縁にて住すること、水の勢に和するを名けて勢漿と爲すが如く、各各力有りて名色は住することを得。若し風調順はど、則ち向に説く所の如きの病無し。壞味風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて肺過と曰ひ、住して身中に在り。若しは調ひ調はずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て肺過風を見るに、若し調順はすんば、食の消えんと欲する時、夜に則ち患痛ありて酢氣を食せしめ、乃至食消ゆるも一切の身體は皆悉く力無く、脈は網の縛の如し。若し調順はど、則ち向に説く所の如き諸の病無し。肺過風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調は

【一】名色(Nāmarūpa)有情の身心を組成する。陰(蘊)のこと。

【二】行聚。行は行業、心身の様々な活動力をいふ。それ等の多くの力のあつまりの故に行聚といふ。

若し調順はされば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て睡眠風を見るに、若し調順はすんば法を聞く時に於て人を惰睡らしめ、不善の法を開きては心則ち樂み聞き、若しは晝若しは夜に正しく觀察せんと欲するも則ち爲に亂され、樂みて酒肆に至る。若し風調順はゞ、則ち此の病無し。睡風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて瞋風と曰ひ、住して身中に在り。能く調順はされば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て瞋慧風を見るに、若し調順はされば少因縁を以て大瞋を起し、瞋の爲に使はれて一切の世人に大瞋怒を起し、身の毛皆堅ち、心は松して動き亂れ、見る所は了ならずして近きを以て遠しと爲し、日月を見るも顛倒の心を生じて日を謂ひて月と爲し、月を以て日と爲す。若し風調順へば、則ち此の病無し。瞋風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて名字と曰ふ。若しは調ひ調はずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て名字風を見るに、若し其れ調順へば、能く言説有りて、心數法に緣り、舌風にて言説を心に隨ひて行ひて能く無量の名字・句義を説く。是の如き舌説名字之風にして若し調順はされば、則ち言少く言を誤まり、口は瘖にて語らず。舌名字風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

【二五】心數法。新譯には心所(心所有法)に作る。心王に従ひて起りて外境の別相を具さに認取し、又心を使役して身業、口業を發せしむる精神作用なり。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて轉筋と曰ひ、住して身中に在り。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て轉筋風を見るに、若し調順ならずんば手の筋、足の筋、大小便の筋、背の筋、遍き身の諸の筋を皆悉く捲き并さしめて合して一處と爲し、緊急・頑鈍にして覺知する所無し。若し風調順はゞ、則ち向に説く所の如き諸の病無し。轉筋風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて壞毛と曰ひ、住して身中に在り。若しは調ひ調はずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て壞毛風を見るに、若し調順はずんば一切の身分の所有る諸の毛は皆悉く墮落ち、身體は痿黃み設へ更に毛を生ずるも即ち隨ひて墮落つ。若し風調順はゞ、則ち向に説く所の如きの病無し。壞毛風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて似少風と名く。若し風調順へば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て似少風を見るに、調順へるを以ての故に、十時の風力にて形貌・色力・屈伸・俯仰は分に相似し、若し風調はずんば、心意の流脈は則ち擾れ動きて狂癡を發し、心亂れて正からず、若し其の心意の流脈調順へば則ち狂亂せず。似少風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて嗜睡眠と名く。

【二四】 不詳。

復次に、修行者は内身を循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて下行住じやうじゆ在身中と曰ふ。或ひは調ひ調はずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て下行風を見るに、若し調順てうじゆんはずんば食に過惡ががありて力少くして消えざら令む。飲食消ゆるが故に皮・肉・骨・髓・精・血増長し、若し食消えずんば風冷・黃病にて悉く調順てうじゆんはず。是の下行風若し調順てうじゆんならずんば則ち食力を失ひ、食力少なるが故に顔色憔悴る。若し風調順てうじゆんならんに、則ち向むかに説く所の如き病無し。下行風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて上行じやうじゆと曰ひ、住して身中に在り。何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て上行風を見るに、頂上に住し、若し風調順てうじゆんは頂ちやう従り出で、猶し煙氣の如くに上かみ従り出で、若しは日中ひなかに住するも若しは陰中いんちゆうに住するも、若しは晝若しは夜に常に出で、斷えずして凡人びん皆見る。若し風調てうじゆんはずんば則ち氣出でず、若し復頂氣斷たえ已りて三日出でずんば決定して命終る。上行風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、傍風ばうふう有りて住して身中に在り。若しは調てうハ調じゆんはずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て傍風を見るに、若し調順てうじゆんはずんば出入の息を閉ぢ、一切の筋脈を皆みな掣縮しやくしゆくらしめ、或ひは聚あつまり或ひは散ちり、或ひは牽ひき或ひは挽ひき、或ひは鼻び嚕る動き或ひは滂ほう流りゆうとして聲こゑを作し、後に大苦を得。若し傍風にして調順ならんに、則ち向むかに説く所の如き病無し。傍風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

【三】 鼻汁の流れる音。

調順てうじゆんはすんば常に淋瀝多くして意の如くなる能はず、身體力無く、其の出入の息は麁濁り調はず、身の色は痿黄み羸瘦せ憔悴る。若し風調順はゞ、則ち向に説く所の如き諸の病無し。淋風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて食相應と名く。若しは調ひ調はずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て食相應風を見るに、若し調順はすんば食する所の四分・五分の三分を嘔吐し、人をして心亂れしめ、食力を失ひ、視詢する能はず、風力を以ての故に意法定らず。若し風調順はゞ、則ち向に説く所の如き諸の病無し。食相應風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて壞牙齒と名け、住して身中に在り。何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て壞牙齒風を見るに、若し調順はすんば牙齒は疼痛みて毀壞れ墮落ち、齒中に血爛あり、唇口に瘡を生じ、上顎に瘡を生じ、鼻は塞ぎて通ぜず。若し風調順はゞ、則ち向に説く所の如き諸の病無し。壞牙齒風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて喉脈と曰ひ、住して身中に在り。若し調順はすんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て喉脈風を見るに、若し調順はすんば咽・項を痛ま令め、或ひは咽喉腫れ、或ひは其の勞鬱る。若し風調順はゞ、則ち向に説く所の如き諸の病無し。喉脈風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

背、若しは脇若しは乳、若しは咽若しは項、若しは肩若しは臂、若しは耳若しは眉なる一切の身分皆悉く皺み減り、其の身に深き皺ありて或ひは開き或ひは合し、其の足は戸び破れて、設へ油を身に塗るも尋いで即ち乾燥きて老人の如からしむ。皺風を觀じ已らんには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て觀見るに、風有りて名けて白髮と曰ひ、住して身中に在り。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て白髮風を見るに、若し調順ならずんば能く少年をして髮白く羸瘦せて猶し老人の如からしめ、若しは在家の人の所生の子は父の如くに速に老い、其の子病むが故に復子を孕むこと無く、風の力を以ての故に年少の者をして老の如くにして異なる無からしむ。是の白髮風は、惡劫に起り、諸の衆生の法行に順ぜざるに隨ひて風は則ち増長し、若し福德有らば風は則ち調順にして、若し福德無くんば風は則ち調はず。白髮風を觀じ已らんには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を循ひて觀るに、何等の風有り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて損賦と曰ひ、住して身中に在り。若しは調ひ調はずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て損賦風を觀るに、若し調順ならずんば飲食を憶はずして人をして衰弱せしめ、賦食を怠ばずして病起る所と(なり)、晝寢に因りて風調順ならずして甜き食を樂まず、苦・酢の味を嗜み、若し賦を食せずんば風は則ち調順にして身疲極れず。害賦風を觀じ已らんには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て淋風の人身中に住する有るを見る。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て淋病風を見るに、若し

【三】梵漢並びあぐ、惡き劫 (Kadim) 惡、時代、類廢期のこと。

し調順ならずんば脂を増長せ令め、身に麤肉を生じて高下して平ならず、堆阜ありて凹凸あり、或ひは堅く或ひは滑に、或ひは頑癭有りて覺觸する所無し。若し害脂風にして和順・調適ならんに、則ち上に説く所の如き諸の病無し。害脂風を觀じ已らんには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て害骨風を見るに、若し調順ならずんば骨を疼痛ましめ、其の聲は破散し、晝夜睡らず、項・頸疼痛み、一切の筋骨皆緩みて治らずして筋骨に力無く、身は常に疼痛あり、疲極れて苦惱し、起止する能はずして一念の樂も無し。若し風調順ならんに、則ち向に説く所の如き諸の病無し。害骨風を觀じ已らんには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて害精と曰ひ、住して身中に在り。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て害精風を見るに、若し調順はずんば人を誑惑し、若し人眠睡らんに、人を戲弄して人に種種なる諸の惡の念を示し、妄想心を以て非梵行を作し、風調はざるが故に夜行の鬼女あり、虚誑が實を破り、夢に其れを犯すことを爲し、食を憶はざらしむ。害精風を觀じ已らんには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて皺風と曰ひ、住して身中に在り。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て皺風を見るに、若し調順ならずんば若しは足の下足の上、若しは躡若しは髀、若しは腓、若しは

を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて害血と曰ひ、住して身中に在り。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て害血風の住して身中に在るを見るに、若し調順ならずんば肺中を行きて二種の過を作す。或ひは上り或ひは下り、若し血上行かんに眼・耳・鼻の血脈を調はざら令め、諸大安からず、大調はざるが故に身體力を失ひ、顔色は龜惡にして去來する能はず、鼻中常に臭く、同じ梵行の者も與に同じ行き同じきに處りて生ぜず、若し血下り行きて大小便に至らんに、流血して下りて三種の過を作す。一には痔病、二には苦惱、三には下血なり。若し害血風にして和順・調適ならんに、則ち上に説く所の如き諸の病無し。害血風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て觀見るに、風有りて名けて害肉と曰ひ、住して身中に在り。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て害肉風を見るに、若し調順はずんば人の身中に諸の癱病を生ぜ令め、臭惡身に過く、破れ已りては臭惡にして多く濃汗有り、冷・惡熱に耐へ、辛・苦に耐へずして輕・甜・冷に宜く、一切の身は動き、臭爛して流れ出づ。若し風調順ならんに、則ち向に説く所の如き諸の病無し。害肉風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て觀見るに、風有りて名けて害脂と曰ふ。若し調順はずんば何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て害脂風を見るに、若

ずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て、冷睡風を見るに、若し調順ならずんば口中の味甘く、其の心は忪忪として飲食を憶はず、若しは坐禪せんと欲するも則ち疑念を生じ、舌重くして語り難く、或ひは咽喉痛み、氣噓臭惡にして心中の臭氣上りて咽喉を衝き、氣溢りて出で難く、飢渴を覺えず、咽喉は閉塞ぐ。若し冷風調順はゞ、則ち上に説く所の如き諸の病無し。冷睡風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて傷髓と曰ひ、住して身中に在り。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て傷髓風を見るに、若し調順ならずんば身をして振動は令め、身は多く疲極れて遠く行く能はず、常に病疾多く、顔色は醜惡にして身體瘡癩み、多く語る能はず、其の心は怯弱え、是の人晝夜骨髓常に疼み、身の毛皆堅ち、諸の脈は劣弱にして常に頭痛に患む。此の風を以ての故に常に腦蟲を動かし、蟲動くを以ての故に猶し針の刺すが如し。若し風調順はゞ、則ち上に説く所の如き諸の病無し。傷髓風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て觀見るに、風有りて名けて害皮と曰ひ、住して身中に在り。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て害皮風を見るに、若し調順ならずんば我が身の皮をして其の色醜惡にして皆悉く龜澁ならしめ、身の皮は破裂し、設へ蘇油を以て其の身に塗るも速疾に乾燥き、身體手足皆悉く堅直くして屈伸みし難く、夢中に多く嶮岸より垂墮つるを見、暖かき飲食の味も口中に冷を覺え、舌の瘡破裂れて飲食する能はず。若し害皮風にして調順・和適ならんに、則ち上に説く所の如き諸の病無し。害皮風

が如きは十六分中其の一に及ばず。若し宿世に於て善業有る者は、命終る時に於て、是の針刺風は則ち大いに苦しめず。針刺風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に 修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て觀見るに、風有りて名けて惡黃と曰ひ、住して身中に在り。若しは調ひ調はずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て惡黃風を見るに、若し調順はずんば則ち黃病を生じ、口中は乾燥き、遍き身は皆黃にして、面目・爪甲も皆黃ばみ、腹は脹りて龜大にして、其の腹の上に青脈現はれ、其の身力無くして食は消ゆる能はず、口若く尿は黃にして身體羸瘦せ、目に衆の色を見るも皆青・黃と作し、起止する能はず、腹中常に脹る。若し黃風調はずんば則ち此の病を生じ、若し黃風調順ならんに則ち此の病無し。惡黃風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて破腸と曰ふ。或ひは調ひ調はずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て、破腸風を見るに、若し調順はずんば、若しは多く飲食して而も復頻に申ひんに能く其の腸を破り、或ひは骨を雜へて肉を食せんに、其の腸中に入りて其の腸を破りて食は則ち流れ出で、腹は大に増長して大苦痛を生じ、飲食する能はず、食力少なるが故に身體は微劣にして手足皆腫れ、下門に蒸熱あり、一切の身分に恒に熱ありて定まらず、口中乾燥き、常に惡夢を見、腹中に風動きては一念に任せず。若し破腸風にして調順、和適ならんに、則ち向に説く所の如き諸の病無し。破腸風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて冷睡と曰ふ。若しは調ひ調は

能く擲げ、上下し騎乗す。去來走擲風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て眼・耳・鼻・舌・身なる五根別風の業の作す所を見る。業風に吹かれて一風は眼と共に緣す。四大の中風力強きが故に、故に名けて風と爲し、是の風は能く眼根の四大を清淨にし、衆の色像を見せしむ。一風は耳の中にて能く聲を聞か令め、鼻の香、舌の味、身の觸も亦復是の如し。是の如くに五風を實の如くに之れを觀るに、若し風調順ならんには五境界に於て障礙する所無く、若し調順ならずんば則ち障礙多くして實の如くに境界を知る能はず。是の如くに眼・耳・鼻・舌・身の五種の風を觀じ已らんに、實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て刀風の住して身中に在るを見る。或ひは亂れ亂れずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、命終る時に刀風皆動き、皮・肉・筋・骨・脂・髓・精・血の一切を解截り、其れをして乾燥か令め、氣は閉ぢて流れず、身既に乾燥きては苦しみ惱みて死すること、千の炎の刀の其の身を刺すが如きも、十六分中猶一に及ばず。若しは善業有らんに、死に垂する時、刀風は微に動きて苦惱多からず。刀風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て針刺風の住して身中に在るを見る。或ひは調ひ調はずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、命終る時、風調順ならずんば遍き身の諸の節及び一切の脈、一切の筋中、一切の肢骨、一切の毛孔、一切の肉中、一切の骨中、一切の髓中は燒炎の針の身中に遍く、來りて人身に逼るが如くにて、百千の炎の針の皆其の身を刺す

くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて観るに、何等の風有り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、壞胎藏風住して身中に在り、若し人の初識の母胎に入るに、先業の因縁にて、歌羅羅の時即ち其の命を壞り、若し歌羅羅の時に其の命を壞らすんば、肉搏の時に至りて乃ち其の命を斷つ。冷風の胎に入りて其れをして破壊せしむるなり。若し肉搏の時に其の命を斷たずんば身分を具足して乃ち其の命を斷ち、若し身分を具足して其の命を斷たずんば諸根を具足して其の命を斷ち、其の宿世の殺業の輕重に隨ひて、胎藏中に於て其の命を斷つ。若し宿世に於て業生を殺さずんば、説く所の如き風は殺害する能はず。壞胎藏風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて観るに、何等の風有り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて轉胎藏と名け、住して身中に在り。或ひは亂れ亂れずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て轉胎藏を見るに、此の業生の先世の邪業を以て、若しは是の男子を轉じて女人と爲し、或ひは「黃門」を作し、或ひは胎中に死せしむ。惡業を以ての故なり。若し先世に於て惡業無き者には能く害を爲すこと莫し。轉胎藏風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて観るに、何等の風有りて住して身中に在り、何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て去來走擲風の住して身中に在るを見る。或ひは亂れ亂れずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て去來走擲風を見るに、若し調順はずんば手足は攀躄りて、身は偻み曲れる脊にて行來する能はず、飲食は他を仰みて自ら食する能はず、身根・智慧は悉く清淨ならず。若し風調順ならんに、身は則ち能く行き、去來し進止し、能く走り

【九】歌羅羅 (Kalala)。歌羅羅、飛遊藍、歌羅藍とも書く。雜穢、猥滑と譯す。父母の兩精初めて和合凝結せしもので、胎内五位の一、受生の初より七日間の間の位なり。

【一〇】肉搏の意、胎兒が肉體を形づくる時のこと。

【二】性不具足のこと。

く、冷たき觸に耐へず、若しは色相を見るも、病有るを以ての故に本の如く實の如くに色を見る能はず、身重くして攝め難く、身の毛は皆堅つ。若し風調順へば、則ち向に説く所の如き病無し。亂心風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて身中に住し、或ひは安く安からずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、亂風有りて住して身中に在り、若し調順はずんば、多く惡夢を見、睡眠るも驚き悟め、溫暖に住すと雖も、而も常に冷を覺え、若しは城邑・村落・人民を見るも見て空聚と爲し、或ひは黄色を見、言語少く、臥處を樂まず、本會て聞ける法を皆悉く忘失れ、四大は惱み亂れ、其の食する所の味は心中に住するも縁なくして厭ふことを生じ、妄りに丘聚を見る。若し風調順へば、則ち上に説く所の如き諸の病無し。亂風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て視胸風の住して身中に在るを見る。若し調適ならずんば目を陶くことを得ず、更に餘の風の此の如きより速なるは無く、視胸風は一切の處に行きて悉く諸根に遍く、若し調順はずんば則ち此の病を生ず。若し風調順ならんに、則ち向に説く所の如き諸の病無し。視胸風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて互相閉と名け、命終らんと欲する時、五風の起ること有り。或ひは調ひ調はずして何の業を爲作するや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、眼・耳・鼻・舌・身壞するが故に、自らの境界に於て色・聲・香・味・觸法中を緣了する能はず。若し風發らずんば命は則ち斷ぜず、發らば則ち命を失ふ。五閉門風を觀じ已らんに實の如

若し此の身を捨つる時、命と煖及び識を失ひて、更に覺知する所無きこと、猶し瓦・木・石の如し。

是れを則ち名じて第一惡と爲す也。若し調適はすんば第二業を作し、喘息にて龜重にして、調順なる能はず、一切の過ぎ身は苦惱に逼られ、之れに逼られて苦極しみては則ち身命を捨つ。是れを則ち名けて第二惡と爲す也。是の上行風若し調順はすんば第三惡を作し、既に諸根を惱まして一切の過ぎ身に惱亂を作し、身命を喪失はしむ。是れを則ち名けて第三の惡と爲す也。是の上行風若し調適ならずんば第四の惡を作し、或ひは大喘息なるか或ひは復微少なるにて、或ひは命終を致し、或ひは僣める身にて命を失はず。是れを則ち名けて第四の惡と曰ふ也。若しは睡眠の時、氣息出入して以て命根を 持す。是の如くに上下風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有り、或ひは安く安からずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て觀見るに、風有りて名けて命風と曰ひ、或ひは身を肥えしめ、或ひは羸瘦せ令め、心を審諦ならしむ。若し風調はすんば心は則ち軽く動きて知る所を皆失ひ、曾て聞きしをも亦忘れ、境を見るも了かならず、聲に於て聞かず、是の如くに鼻に香を知らず、舌に味を知らず、身に觸を覺えず、意は法を知らず、自他を識らず、命風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て亂心風の 心中に住するを見る。若しは調ひ調はずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て此の風を見るに、若し我が心に過あらんに、風は調順ならずして心の所行に隨ひ、或ひは動き或ひは頑く、乾き消え、癩にして亂れ、或ひは食する所の味は邪に流れて正からず、是の如くに其の心を惱亂し、善法に於て愛樂を生ぜざらしめ、汗を流し唾は多

【八】持の字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。

ひは安く安からずして何の所作を爲すや。彼れ開慧を以て、或ひは天眼を以て上下風を見るに、若し調適じうたつはずんば五處に行く。何等の業を作すや。出入の氣を作して、人は説きて命と爲し、心頂に行き、身中に過あやして自在無礙なり。是れを風力の第一分と爲す。若し風調はずんば能く身を破壊し、是の風は亦口くちに唾た多おほからしめ、身をして癯や瘦せせしめ、飲食は胃いに反さかきて逆嘔さかせられて出づ。是れを風力の第二分と爲す也。心胸に住しては何の所作を爲すや。若し氣心きしんに在らんに、或ひは憂うれへ或ひは喜び、若し氣咽喉きあな従り上りて頂に至り、下りて舌根ぜつこんに入るに、其の念する所に隨まひて則ち能く語有り、能く文字を説き、諸の義を思惟す。是れを風力の第三分と爲す也。復常に身を火にて惱亂なうらんすることを爲すこと有りて、身をして汗を流さしむ。是れを風力の第四分と爲す也。是の風は身に過あやく、險けん、眼視がんしの胸むねくまに一切の身を動かし、週身を思惟せしめ、男女の根こんに依りて能く子息を生ず。若し男女欲を行ぜんに、此の風力の如きは能く精・血を集め、能く女人の髓こしほね骨こほねの力を多からしめ、男女の精血和合し共に、鉀羅婆身かいらばを集む、薄精はくせいの時は風吹きて厚あつからしめて、肉團にくだんを作し、肉團にくだんを作し已りて次に、五胞ごほうを生じ、五胞ごほうを生じ已らんに、或ひは方或ひは圓まにて身の長短に隨まひ、識しも亦過あやく滿みちて身の長短に隨まふこと、譬たとへば人有りて酪ちやくを、鑽せんりて酥そを出すに、酪ちやく有り水みづ有り、瓮ぶつ有り鑽せんること有り、之を鑽せんりて沫うめを出し、其の已まに熟じやくするを知りて收とめ取りて酥そを生ずるが如く、是の如き風力及び業・煩惱ぼんごの能く集めて身を成すことも亦復是の如し。是れを第五の風力分と爲す也。若し飲食して味を噉くはんんに舌根ぜつこん中・咽喉脈あなうみ中に飲食は充滿ちゆうまんし、乃至毛根・爪甲つめがらに過あやく、氣力は増長して色・香・味あじを作す。若し風調ふうてうはずんば下風かぜは上あり行きて四種の惡あくを作し、氣寒きさむぎて出で難く、過あやき身に苦惱くたうあり。若し本の處ところを離るれば一切の諸根しよこん一切の識し中は皆惱亂たうらんを得て身命みんめいを喪失そうじつひ、既に身を捨て已りては三種さんしゆの法ほふを失ふ。一には命、二には煖、三には識しなり。是の故に傷やに言いく。

【四】 異本、鉀羅婆身、定かに知り難し。或は前後の關係から見て結胎五位の第一位羯邏藍かろらん (Kalandan) (膜) の誤寫か。
 【五】 結胎第四位の健南けんなん (Chandana) (瘰癧、又は堅肉) のこと。
 【六】 結胎五位中の第五餘羅奢法しやくは (Prasthan) (形位、又は支節) を指す。
 【七】 鐵てつの字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。

き十蟲は血中に生れ、其の蟲の形相は或ひは短かく或ひは圓く、微細にして眼無し。復十の蟲有りて苦痛の相を作し、肉中に生る。一を瘡味蟲と名け、二を癢癢蟲と名け、三を閉筋蟲と名け、四を動脈蟲と名け、五を食皮蟲と名け、六を動脂蟲と名け、七を和聚蟲と名け、八を臭蟲と名け、九を汗行蟲と名け、十を熱蟲と名け、是の如き等の蟲は肉中従り生ず。復十の蟲有りて黃中を行く。一を黑蟲と名け、二を苗花蟲と名け、三を大禰曲蟲と名け、四を蘇毘羅蟲と名け、五を烏蟲と名け、六を大食蟲と名け、七を行熱蟲と名け、八を大熱蟲と名け、九を食味蟲と名け、十を大火蟲と名け、是の如き等の蟲は 瘰癧中を行く。

諸の身分中に十種の蟲有り、一を舐骨蟲と名け、二を嚼骨蟲と名け、三を斷節蟲と名け、四を臭蟲と名け、五を消骨蟲と名け、六を赤口蟲と名け、七を頭頭摩蟲と名け、八を食皮蟲と名け、九を刀風蟲と名け、十を刀口蟲と名く。復十種の蟲有りて糞中を行く、一を生蟲と名け、二を針口蟲と名け、三を白節蟲と名け、四を無足蟲と名け、五を散糞蟲と名け、六を三焦蟲と名け、七を破腸蟲と名け、八を閉塞蟲と名け、九を善色蟲と名け、十を穢門瘡蟲と名け、其の色惡む可し。是れを糞中の十種の蟲と名くる也。復十種の蟲有りて脂髓中を行く。何等を十と爲すや。一を毛蟲と名け、二を黑口蟲と名け、三を失力蟲と名け、四を大痛蟲と名け、五を煩悶蟲と名け、六を火色蟲と名け、七を下流蟲と名け、八を起身根蟲と名け、九を憶念蟲と名け、是の如き等の蟲は、遍く一切身分の中を行き、意の如くに、能く一切の身の中を行き、一切の界に行き、其の行く處に隨ひて皆過惡を作す、是の集蟲風は一切の身中を意の如くに遍く行き、此の身を是の如き風の因縁を以て諸の蟲は流れ行く。集蟲風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて我が身中に住し、何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て觀見るに、風有りて名けて上下と曰ひ、住して身中に在り。或

【三】瘰癧の字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。

し。若し一切身瞶風調順へば、則ち上に説く所の如き諸の病無し。一切身瞶風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて我が身中に住するや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て熱風有りて我が身中に住するを見る。或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て或ひは天眼を以て見るに、此の熱風若し調順ならずんば、所食を口に入れて之れを咽まんには則ち焼け、是の因縁を以て四大調はず增長することを得ず、或ひは食する所の味は二流を作さずして濁穢・不淨なり。若し淨流有らば四大增長し、唯濁穢のみ有らば則ち病苦を爲す。若し熱風調はずんば、食する所は皆濁りて清淨を作さず、是の故に病苦を得。熱風調順ならんに、若しは清若しは濁の二種の食流あり、四大は平等にして、平等を以ての故に則ち病を爲さず。熱風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて我が身中に住し、何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて名けて集蟲と曰ひ、此の集蟲風は身分中に過く、能く集め能く散らし、上下を閉塞し、頂従り足に至る。十種の蟲有り、一を頭行蟲と名け、二を骨行蟲と名け、三を食髮蟲と名け、四を耳行蟲と名け、五を鼻内蟲と名け、六を脂内行蟲と名け、七を節行蟲と名け、八を食涎蟲と名け、九を食齒根蟲と名け、十を嘔吐蟲と名く。

復十の蟲有りて咽・胸中に在り。一を噉食蟲と名け、二を食涎蟲と名け、三を消唾蟲と名け、四を嘔吐蟲と名け、五を十味流脈中行蟲と名け、六を甜醉蟲と名け、七を嗜味蟲と名け、八を抆氣蟲と名け、九を憎味蟲と名け、十を嗜睡蟲と名く。復十の蟲有りて血中・肉中に生れて行く。一を食毛蟲と名け、二を孔穴蟲と名け、三を禪都蟲と名け、四を赤蟲と名け、五を食汁蟲と名け、六を毛燈蟲と名け、七を臙血蟲と名け、八を食血蟲と名け、九を瀝瀝蟲と名け、十を酢蟲と名け、是の如

身は白象の皮の如く龜澁にして瘡を生じ、或ひは復口の齒は希疎にして齧黒く、手足に瘡を生じて猶し工師の如く、疲極れて頓く乏しく、身に瘡癬を生じ、手足は常に熱して堅一觀・龜惡にして、或ひは瘡爛を生じ、爪甲は惡き色にて、鼻柱は萎倒み、眼喙は墮落ち、人に惡み賤められ、一切の施主に惡み見られ、衆くの蠅は封み著き、爪甲は墮落ち、若しは睡眠の時、氣息は悞濁り鼾睡の聲大なり、飲食を欲せず、或ひは食消えず、舌に味を得ず、是の如くに一切身分冷風は身を爛壞る。若し一切身分冷風にして調順ならんに、則ち顔色は愛す可く、細軟・滑澤にして、衆人に敬はれ、暖汗・津液は毛孔より出で、則ち上に説く所の如き諸の病無し。一切身分冷風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて我が身中に住し、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて破強健と名け、我が身中に住し、若し調順はされば心をして怯怖れ令め、一切の身分に皆悉く苦痛あり、或ひは身は挺直にして頻に申ひて樂まず、出息・入息は悉く安隱ならず、身體振掉ひて衣を服る能はず、苦しみ患へて頭痛み、若しは禪觀を習ふも一心なることを得ず、或ひは惡夢を見、心悶えて嘔吐し、好もしき色中に於て顛倒のを見を生じて近きを見て遠しと爲し、焦渴き憔悴る。若し破健風にして調順・和適ならんに、則ち上に説く所の如き諸の病無し。破健風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて我が身中に住し何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て身觸風の我が身中に住するを見る。或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、身觸風にして若し調適はされば耳中は鳴り喚き、臂の肉翳動き、一切の身分も皆亦翳動いて處處に逃走し、一處を樂まず。更に餘の病無

【一】觀の字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。

【二】嘔の字、宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依る。以下の同字も之れにおなじ。

復次に、修行者は内身を循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、何等の風は我が身中に住し、何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一風有りて斷身分と名く。若し調順はされば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て斷身分風を見るに、若し調順されば、手の指は則ち癢みて造作することを得ず、手足皆癢み、髀の筋は急に痛み、九の龜筋の脈は弦弦として急しく、身分は搖れ動き、疲極れて力無し。斷身分風にして若し調順ならんには、則ち是の如く説く所の諸の病無し。斷身分風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を循ひて觀るに、何等の風有りて我が身中に住し、或ひは安隱を作し、或ひは安隱ならずや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て内を見るに、風有りて名けて害火と曰ひ、住して身中に在り。何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、此の風力は能く火熱を除きて食を消えざら令め、食を消さざるが故に復食を憶はず、食する能はざるが故に則ち顔色無し。何故に色無きや。血乾燥くが故なり。血乾燥く故に肉則ち消盡き、肉消盡くるが故に筋は則ち卷縮みて復脂を生ぜず、脂を生ぜざるが故に骨も亦乾燥き、骨乾燥くが故に髓も亦乾燥き、髓乾燥くが故に遍き身の精盡く。心中の氣力は風吹くが故に動く。若し害火風にして調順・安隱ならんには、則ち上に説く所の如き病苦無し。害火風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を循ひて觀るに、何等の風有りて我が身中に住し、何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、風有りて名けて一切身分冷風と名く。何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一切身分冷風は身に臭き汗ありて堅澁く、惡き色ならしめ身體は皺み減り、羸瘦て毛堅ち、身に黒瘡を生じ、膿出で爛臭ありて搔抓きては汁流れ、或ひは赤瘡を生じ、或ひは大蒸熱あり、或ひは白瘡を生じて遍き身は龜大く、或ひは復其の

卷の第六十六

身念處品第七之三

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて我が身中に住し、或ひは安隱あんいんを作し、或ひは安隱ならずや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て乾糞風かんふんふうを見るに、若し我れ多く食せんに、風は則ち調とはずして能く苦惱くなんあら令め、身分の筋脈中に入りて糞ふんを乾燥かほか令め、或ひは二日、三日、四日、五日に乃ち一の便利ありて、乾燥かほける少穢せうたいにて而も甚だ苦痛あり。若し風調順とじゆんはど、則ち此の病無し。乾糞風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて我が身中に住し、或ひは安隱あんいんを作し、或ひは安隱ならずや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て兩傍風りやうぼうふうを見る。若し調順とじゆんはざれば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て兩傍風を見るに、身の側を行かば血は則ち乾燥かほき、血乾燥かほくを以て大痛苦を受く。若し風調順とじゆんならんに、則ち此の病無し。兩傍風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて我が身中に住し、或ひは安隱あんいんを作し、或ひは安隱ならずや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て觀るに、何等の風は我が身中に住し、何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て觀見るに、風有りて寒九孔さうくうと名け、住して身中に在り、若し調適とていはざれば能く九孔を閉塞して通ぜざらしむ。頭に有る七孔及び大小便の九孔既に寒さぎては身に則ち病苦あり、入息・出息は安隱なることを得ず。若し風調順とじゆんへば、身をして安隱あんいんならしめ、乃ち能く法を行じ、風を持するを以ての故に身は去來こらいすることを得。九孔風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、或ひは安隱を作し、或ひは安隱ならずや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、老風有りて住して身中に在り、風に隨ひて轉た増して漸く衰老に就き、去來する能はず、須臾にして起たと欲するも極めて心に從はず、行住・坐臥は疲極れて頓く乏しくして猶し他の身の如く、心は睡りて昏濁し。若し風調順ならんに、則ち此の病無し。老風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して我が身中に在り、或ひは安隱を作し、或ひは安隱ならずや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、寒胞風住して我が身中に在り、若し調順ならずんば身の肉は 咽動き、身は羸せ心痛み、屎尿は閉塞し、便利澁難にして修禪を妨げ、大苦惱を得、心意散亂し、識は安隱ならずして法を觀する能はず、身の苦を以ての故に法を念ずる能はず。若し風調順ならんに、則ち向に説く所の諸の病無し。寒胞風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

【三】咽は嚥くこと、今は羸字してふるひうごくこと。

ずして何等の業を作すや。彼れ開慧を以て、或ひは天眼を以て觀見るに、風有りて名けて節行惱亂と名け、住して身中に在り。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ開慧を以て、或ひは天眼を以て節行惱亂風を見るに、若し調順ならずんば人をして、癖を生ぜしめ、或ひは痔病を生じて便利に苦惱あり、四大は枯悴し、或ひは頭を痛ま令め、飲食は消えず、下風は通ぜず、身體は憔悴れ、諸の瘡病を生じ、或ひは熱病を生ず。若し行節風調順ならんに、則ち上に説く所の如き諸の病無し。行節風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して我が身中に在り、或ひは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ開慧を以て、或ひは天眼を以て觀見るに、風有りて破毛爪蕪と名け、住して身中に在り。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ開慧を以て、或ひは天眼を以て破毛爪蕪風を見るに、若し調順ならずんば諸根は瘦損し、或ひは復頭痛み、或ひは一耳・半面に疼痛あり、或ひは目に視ること眩眩、或ひは復鼻塞ぎて香臭を知らず、面色は萎え黄ばみ、咳逆にて唾を嘔き、不淨を見る時即便ち嘔吐し、其の心多く亂れて禪思する能はず。常に身心の無病・安隱ならんことを念するも、人身の中は、受・想・行・識なる四陰の住處にして、此の身の攝する所は一切無常なり。是の觀を作し已らば生死の法を知る。破毛爪屎風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して我が身中に在り、何等の業を作すや。彼れ開慧を以て、或ひは天眼を以て亂精沫風を見るに、小便中に於て能く其の人の精尿を俱に出でしめ、細きこと芥子の如く、尿與俱に出で、或ひは大便秘するに疼あり、是の如き病を作して其の心を惱亂し、專一なることを得ず。若し風調順ならんに則ち此の病無し。亂精風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

【二七】 不消化病。

【二六】 受、想、行、識、五陰の中色陰を除けるなり。受とは六識と六境和合して生ずる感覺を受入れる精神作用。想とは外界の事象を分別して想起する心所。行とは有部の説によれば、四十六心所中、受の二心所を除ける餘の四十四心所と、不相應行法の十四との五十八法の總稱。識とは認識作用を爲す眼識以下の六識の總稱なり。

【二五】 宋・元・明三本に依りて爪の字を加ふ。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て身行界風の住して身中に在るを見る。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て身行界風を見るに、調順にして安隱ならんには則ち氣力有り、氣行出入し、能く飲食を消し、身に顔色有り、眼・耳・鼻・舌・身皆安隱にして、食する所は消化す。若し調順ならずんば身の色は龜惡、五根は減劣にして、飲食消えず、顔色悦ばず、眼等の諸根は境に於て劣弱にして、子孕を産まず。是の如くに身行界風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て抽筋風の住して身中に在るを見る。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て抽筋風を見るに、若し風調順ならんに、諸有の所作の若しは眠り若しは住み、一切の身色に皆悉く光澤あるは、皆是れ筋風の爲作する所にして、若し調順ならずんば修作する能はず、若しは眠り若しは住む一切を施作する所有る能はず。筋風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て觀見るに、風有りて名けて往返と曰ひ、住して身の内に在り。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て往返風を見るに、若し調順ならずんば身の流脈を閉ちて淋病を作さしめ、一切の身分皆悉く疼痛み、腹痛み、身根は疼痛み、飲食する能はず、精血は竭盡きて子孕を産まず。若し風調適ならんには、則ち此の病無し。往返風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て觀見るに、風有りて名けて往返と曰ひ、住して身の内に在り。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て往返風を見るに、若し調順ならずんば身の流脈を閉ちて淋病を作さしめ、一切の身分皆悉く疼痛み、腹痛み、身根は疼痛み、飲食する能はず、精血は竭盡きて子孕を産まず。若し風調適ならんには、則ち此の病無し。往返風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

何等を爲作するや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て破節風を見るに、若し冷觸を得ば、二五 腓骨を疼ましめ、(疼は)身中に遍し。破節風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て破腓骨風の住して身中に在るを見る。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て破 髀骨風を見るに、若し調順ならずんば、其の腓内の汁流の脈をして洪龜にして甚だ壯三六ならしめ、脚を屈伸せ令め、兩髀を相ひ近き、肉の重 腿起る。破髀骨を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て節風三九の住して身中に在るを見る。何の所作を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て節風有るを見るに、兩肩に於て四節、咽喉に二節、額骨に二節、鼻骨に一節、頤骨に一節、牙齒の骨は三十二節有り、上顎に一節、四〇 交牙に二節、項に十五節、兩膊に二節、兩肘に二節、兩腕に二節、脊骨數は四十五節有り、胸に十四節、左右の脇肋に各十二節、兩脇肋の端に各跪骨の二十四節有り、横骨に一節、跨骨に二節、身根に一接、兩髀に二節、兩膝に二節、兩踝に二節、足跟に二節、足趺に二節、兩手・二足の上下を合して六十節有り、手足の爪甲は合して二十節にして、此れは是れ節風の依る所也。若しは我れ病有らんに、或ひは命を喪ふことを致し、或ひは苦惱を致す。節風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て髀頭風を見るに、若し調順ならずんば何の所作を爲すや。若し調順ならずんば屈伸する能はず、行來する能はず。病の過を以ての故なり。髀頭風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

【三】 腓は股のこと。

【三】 髀は股のこと。

【三】 腿は足の腫れること。

【三】 牙齒のこと。

脈に通じ、油を以て鼻に灌ぎ、油を以て足に塗らんに、眼をして明淨ならしむ。足下風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て不覺風の住して身中に在るを見る。或ひは調ひ調はずして何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て不覺風を見るに、皮の内に住して蹠を癢癢れしめ、風力を以ての故に、蹠皮の内を猶し蟻の行くが如からしめ、若し手を以て瘡を捺すに蟻蟲の如し。不覺風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を循ひて觀るに、何等の風有りて住して我が身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て觀見るに風有り、名けて破骨と曰ひ、住して身中に在り。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て破骨風を見るに、或ひは晝或ひは夜、或ひは行き或ひは住し、或ひは園林に在り、或ひは寺舍に在り、或ひは疲極るゝ時、破骨の苦痛にて睡眠することを得ず、手足は不便にて屈伸する能はず。破骨風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を循ひて觀るに、何等の風有りて何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、一つの風有りて名けて破行と曰ひ、住して身中に在り。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て破行風を見るに、若し調順ならずんば此の風發りて以て惱亂を爲し、行步・去來・進趣する能はず。破行風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て破踝風の住して身中に在るを見る。

我・淨を求むること有るも亦得可からず。是れを修行者内身を身に循ひて觀すと名く。是の觀を作す時、魔界を遠離して涅槃道に近き、愛も亂す能はず、及び餘の煩惱も礙を爲す能はず。是れを内身を身に循ひて觀すと名く。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て心轉風の住して身中に在るを見る。云何なれば心風は能く身を運轉するや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て心轉風を見るに、風調ふを以ての故に能く其の身を轉じ、或ひは行き或ひは住し、或ひは俯し或ひは仰ぎ、或ひは衆くの事を作し、風の力を以ての故に或ひは安く或ひは危し。心轉風を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。是れを内身を身に循ひて觀ると名く。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て爪甲風の住して身中に在るを見る。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て手の爪甲を見るに、風の因縁を以て増長することを得、乃至老い朽つ。是れを爪甲風を觀すと名く。是の如くに修行者は身の内の風を觀するに、風堅なるを以ての故に、手足の爪甲も亦堅實を成して速に増長することを得。比丘是の如くに身の爪甲を觀ぜんに、實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の風有りて住して身中に在り、若しは調ひ調はずして何等の業を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て足下風の住して身中に在るを見る。若し調順ならずんば何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、足下風にして若し調順ならずんば能く痒きを搔くことを生じ、既に痒きを搔くことを生じて能く瘡を生ぜしめ、或ひは行く時に於て地を踏むに聲有り、足の骨をして堅くして寒熱に耐へしめ、又此の足の筋は眼

得、心悶えて吐かんと欲し、顔色は弊惡にして飲食を欲せず、或ひは熱病にて心痛むこと猶し刀の割くが如く、外の蟲を見る時心悶えて吐かんと欲す。悶蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、諸の蟲有りて名けて下流と曰ひ、精の流脈中を行き、若し好き食なる欲を發す食を食せんには精を増長せしめ、此の如き蟲等は、尿の流脈中に於て精を引き出で令む。下流蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て起根蟲を見るに、住して胞中に在り、若し尿滿つれば胞蟲は則ち歡喜し、既に歡喜し已りて、尿の因縁を以て身根を起ら令む。此れは是れ一切愚癡の凡夫の不善の觀門なり。下流蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀、彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て憶念歡喜蟲を見るに、何の疾病を作し、云何なれば安隱なりや。若し蟲歡喜して力有らんに多く諸の夢の善・不善なるを見、蟲の過を以ての故に、蟲の心脈を流れ行くを以ての故に夢に衆相を見る。憶念蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。是の如くに那羅帝婆羅門長者の聚落に修行する比丘は、是の如くに觀じ已りて實の如くに身を觀するに、是の如き身は何者は是れ常に動かす壞せず、何者を樂と爲し、何者は我にして、何者は是れ淨く、何者は恃む可きや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て此の身中を見るに、若しは龜なるも若しは細なるも、一法として是れ常に動かす壞せず、若しは樂しく若しは淨く、若しは我ありて依恃すべきこと有ること無きは、譬へば人有ありて日中に闇を求むるに、若しは龜なるも若しは細なるも皆得可からざるが如く、身も亦是の如くにして、若しは其の常・樂・

【三】この聚落の名の因縁は不詳。

蟲と名け、八には起身根蟲と名け、九には憶念蟲と名け、十には歡喜蟲と名く。復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、髓蟲有り、名けて毛蟲と曰ひ、一切の身分に皆悉く毛を生ず。若し此の蟲瞋らんにには髓に傷害あら令め、既に其れ與り過ぎては便ち人の髓を食して人をして癩病ならしめ、顔色は醜惡にして骨髓に疼痛あり、皆氣力を失ふ。若し毛蟲順調にして瞋恚を生ぜずんば、則ち向に説く所の如き諸の病無し。毛蟲を觀じ已らんにには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て黒口蟲を見るに、髓中に住し、一切の身中を行きて障礙無く、若し蟲瞋恚りては能く髓を融けしめ、髓を傷るを以ての故に人をして色惡からしめ、曲れる脊にて身は偃み、行歩は便ならずして杖を柱として行き、顔色は憔悴れ身體は振掉ふ。若し黒口蟲順調にして瞋らずんば、則ち向に説く所の如き諸の病無し。黒口蟲を觀じ已らんにには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て少力蟲を見るに、住して身中に在り、此の蟲は髓を食し、若し髓足らずんば蟲は則ち力無く、蟲力無き故に人も亦力無し。復餘の蟲有りて亦人の髓を食し、強蟲の陵ぎ逼す所と爲りて人則ち苦惱す。無力蟲を觀じ已らんにには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て大痛蟲を見るに、髓中を遊行し、流轉して常に行きて諸の身界に遍く、此の蟲は能く諸の病の因縁を爲し、遍く諸の根中より膿汁を流出して睡眠る能はず。大痛蟲を觀じ已らんにには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て悶蟲を見るに、住して身中に在り、微細なる心の流脈中を行きて脈と妨を爲し、脈を妨ぐるを以ての故に心則ち病を

塞し、食の過を以ての故に流脈を傷害し、火大を傷け、食する所に於て腸脹・屈腸・戾腸を病ましめ、或る時は人をして心痛・腸痛ならしむ。閉塞蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀、彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て善色蟲の住して身中に在るを見る。此の蟲は云何にして疾病を爲し、云何なれば安隱なりや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て善色蟲を見るに、若し我れ食する時に好き肉を食し、或ひは惡き肉を食し、或ひは重き食を食せんに、蟲は身中に於て爲に安隱を作し、口中に味を取らんには走りて身中に遍くして病惱無からしめ、氣力を増長して諸の病を斷除す。住して身中に在りて、福德を以ての故に蟲大力有らんに、人は則ち色有りて氣力充足し、若し蟲力無からんに、人も亦瘦瘠て色貌は憔悴る。善色蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀、彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て下門瘡蟲の住して身中に在るを見る。云何んが我が爲に疾病を爲し、云何なれば安隱なりや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て下門瘡蟲を見るに、食相違するを以て、蟲は則ち瞋恚りて種種の瘡を生じ、或ひは濕瘡を生じ、或ひは乾瘡を生じ、或ひは前に瘡を生じ、或ひは後に瘡を生じ、或ひは熱瘡を生ず。若し蟲瞋恚らんに穢門を閉塞ぎ、糞流の脈、若しは血流の脈、若しは汗流の脈は、或ひは火少なるを以て飲食を消さず、火少なるを以て穢門に瘡を生じ、蟲瞋るを以ての故に種種の病を作す。若し蟲瞋らずんば、則ち向に説く所の如き諸の病無し。穢門瘡蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀、彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て十種の蟲の體中を行き、精中を行くもの有るを見る。何等を十と爲すや。一には毛蟲と名け、二には黒口蟲と名け、三には無力蟲と名け、四には大痛蟲と名け、五には頓悶蟲と名け、六には火色蟲と名け、七には下流

【三】 戾は曲、腸の一部を指す。

【三】 火大少の意、輕さ(溫度)の足らぬことの爲めに、即ち血行充分ならぬ爲めに不消化を起し又は痔病を惹き起す。

んには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て散汗蟲を見るに、住して身中に在り、食を消さんが爲の故に汗の流るゝ處に於て撥ひて分散せしめ、身分中に於て汗と俱に行きて乃ち足に至り、足従り頂に至る。一切の身分に汗遍く流るゝが故に衆人は之れを説きて以て好色と爲し、若し汗流れずんば、色は則ち醜惡なり。散汗蟲を觀じ已らんには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て三燼蟲を見るに、住して身中に在り、若し我れ熱病ならんに、蟲は垢を増長し、生藏は安からず、火は大いに増し動く。熱病を以ての故に蟲も亦熱病にして、遍まねき身を奔走し、熱に憐み自ら燃げ、蟲瞋るを以ての故に味流の脈は皆悉く乾燥き、渴病にて頭痛あり。三燼蟲を觀じ已らんには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀、彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て破腸蟲の住して身中に在るを見る。此の蟲云何にして疾病を作し、云何なれば安隱なりや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て破腸蟲を見るに、若し人多く飲食の味を食するが故に、諸の蟲は逼迫せられて蟲則ち瞋を生じ、人の腸を嚙み破り、或ひは心(臟)脹りて痛み、或ひは風脹ならしめ、或ひは熱脹ならしめ、或ひは冷腸ならしめ、是の如き等の種種の苦惱を得て、是の破腸蟲は人腸を傷害す。若し蟲順調ならんには、則ち向に説く所の如き諸の病無し。破腸蟲を觀じ已らんには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀、彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て閉塞蟲の住して身中に在るを見る。此の蟲云何にして人の疾病を爲し、云何なれば安隱なりや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て閉塞蟲を見るに、糞穢中を行き、若し我れ飲食せんに其の蟲も亦食し、食し已りて閉

【一九】風大即ち身體中の「動」(活動)譬へば脈搏を早からしむることを指すならん。

屎中を行く。何等を十と爲すや。一を生蟲しやうちゅうと名け、二を針口蟲しんこうちゅうと名け、三を白節蟲はくせつちゅうと名け、四を無足蟲むそくちゅうと名け、五を散汗蟲さんじやうちゅうと名け、六を三燼蟲さんぜんちゅうと名け、七を破腸蟲はちやうちゅうと名け、八を閉塞蟲へいさくちゅうと名け、九を善色蟲ぜんしきちゅうと名け、十を穢門瘡蟲ていもんそうちゅうと名け、其の色惡しよくむ可く、糞穢ふんたいの中に住む。何等の病を作し、云何なれば安穩あんゑんなりや。彼れ開慧かいゑを以て、或ひは天眼てんげんを以て生蟲しやうちゅうを見るに、若し蟲し燒熱しやうねつせんには我れも亦熱あり、若し蟲し冷病れいびやうならんには、我れも亦冷病れいびやうにして下痢げりし白き膿うみ(を下し)身をして損滅そんめつせ令め、顔色げんしきは萎わえ黄わうばむ。若し此の蟲順調じゆんてうにして暝めいらすんば、則ち向むかに説く所の如き病無し。生蟲しやうちゅうを觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を循しんひて觀る。彼れ開慧かいゑを以て、或ひは天眼てんげんを以て針口蟲しんこうちゅうを見るに、糞穢ふんたい中を行き、其の身は長大ちやうだいにして、熟藏じやくざう従り行ゆいて生藏しやうざうに趣おもむき、一切の諸の蟲は遮しやる能はず、復生藏しやうざう従り上ありて咽喉のどに至りて唾つばを吐くと俱ともに出で、或ひは心痛しんどうを作し、或ひは不安ふあんなら令め、火弱かじやくるを以ての故に須臾しゆゑんにして即ち死す。針口蟲しんこうちゅうを觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を循しんひて觀る。彼れ開慧かいゑを以て、或ひは天眼てんげんを以て白節蟲はくせつちゅうを見るに、糞穢ふんたい中を行き、身は短たんく白色はくしきにして多蟲相續たしちゆうしやうじやくり、冷れいくして大いに臭くく、人力を破壊はくわいし、糞ふんに隨したがひて俱ともに出で、衆蠅しゆじやうに封つみ愛あいはる。此の病有る者は糞穢ふんたい益やく多く、飲食おんじを憶おもはず。白節蟲はくせつちゅうを觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を循しんひて觀、彼れ開慧かいゑを以て、或ひは天眼てんげんを以て無足蟲むそくちゅうの住して身中に在るを見る。此の蟲如何いかなれば人の疾病しやうびやうを爲し、云何いかになれば安隱あんゐんなりや。彼れ開慧かいゑを以て、或ひは天眼てんげんを以て無足蟲むそくちゅうを見るに、食の過かを以ての故に蟲ちゆうは則ち瞋しん恚いり、一切の風氣ふうきを吹ふきて大小便たうせうべんを寒さき、若し生藏しやうざうを塞さいがんに、嘔吐おうとする能はず、亦噎えする能はず、癩しかに申まぶる能はず、疲極つかくて安やすからず、睡眠すいみんする能はず、飢渴きかくに耐たへず、蟲ちゆう 瞋しんるを以ての故に多く諸の病を生ず。無足蟲むそくちゅうを觀じ已ら

【七】嘔の字は、宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依り、以下の同字も之れに同じ。
【八】瞋の字は、宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依り。

り、耳中より膿を出し、或ひは髑髏上(一五)より膿を出し、刹利として行き、或ひは非時に頭白く、咽喉に痲病あり、非時に睡眠り、或ひは飲食を憎み、一處を樂まず、樂みて空地を歩き、心或ひは多く亂れて是非を狂ひ説き、蟲は皮を食するが故に一切の身分は腫裂き破壞り、塵土は身に塗る。若し蟲瞋らずんば、則ち向に説く所の如き諸の病無し。食皮蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て風刀蟲を見るに、骨中を行き、蟲瞋るを以ての故に或ひは疾病を爲し、或ひは安隱を爲す。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て風刀蟲を見るに、食の過を以ての故に、蟲は則ち瞋恚りて猶し蛇の螫すが如く、痛毒忍び難くして、所謂、頭頂・咽喉・心・胞・大小便處・手足の甲中も亦針の刺すが如し。蟲の齒を嚙むを以て鼻は則ち香を失ひ、舌は味を知らず、其の目觸動き、飲食を欲せず、蟲瞋るを以ての故に骨を行く蟲と共に其の身を害し、痛多きを以ての故に晝夜睡らず。若し蟲瞋らずんば、則ち向に説く所の如き病無し。風刀蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て刀口蟲を見るに、始めに母胎に於て始めて出生する時此の蟲初めて生れ、法勝るを以ての故に始めに胎藏を出で、母乳を飲むが故に是の時此の蟲は盡く餘の蟲を食し、後にて還りて雜食し、是の因縁を以て餘の蟲は還りて生る。

此の十種の蟲の骨中を行くを實の如くに之れを觀、實の如くに觀じ已らんに、眼は塵垢を離れ、凡夫の過を離れ、心に惡を厭ふことを生じ、我と我所を離れ、疑を離れて清淨にして、邪見を離れ、實の如くに身を知りて乃至涅槃(に到らん)。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、十種の蟲

【一五】刹利はこゝには刹那(刹利)の意、即ち直ちに、隣時の意。

【一六】齒の字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

て骨を壞れ爛れ令め、體に赤瘡を生じて優曇鉢羅果の如く、臭く爛れて惡む可く、其の瘡は大いに痒くして多く膿・血有りて瘡従り流れ出で、衆くの蠅は封み著き、蚊・蠶は啖り食ふ。若し爛骨蟲、順調にして曠らすんば、則ち向に説く所の如き病無し。爛骨蟲を觀じ已らんにには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身の身に循ひて觀、彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て赤口蟲の住して身の骨の中に在るを見る。何等の病を作し、云何なれば安隱なりや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て赤口蟲を見るに、食の過を以ての故に則ち曠慧を生じ、其の蟲は赤き色なること火の色に過ぎ、人の身體をして日夜に汗を流さ令め、血癖病を作す。若し赤口蟲、順調にして曠らすんば、則ち向に説く所の如き病無し。赤口蟲を觀じ已らんにには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て頭頭摩蟲の住して骨中に在りて骨中を行くを見る。云何なれば此の蟲は人に疾病あら令め、云何なれば安隱なりや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て頭頭摩蟲を見るに、食の過を以ての故に蟲は則ち曠慧りて、能く人の身の周遍に瘡を生ぜ令め、若し蟲行く時は人をして頻に申ひ令め、心動きて忪松として或ひは身を失ふが如く、或ひは身動搖し、睡眠すること能はず、身體に痒相ありて猶し蟲の行くが如く、目に視ること明かならず、寒熱の病を得、或ひは身體腫る。若し頭頭摩蟲曠らすんば、則ち向に説く所の如き諸の病無し。頭頭摩蟲を觀じ已らんにには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て食皮蟲を見るに、住して身中に在りて或ひは疾病を爲し、或ひは安隱を爲す。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て食皮蟲を見るに、食の過を以ての故に蟲は則ち曠慧りて、唇口及び眼に諸の瘡を生じ、兩脇に瘡を生ず。若し筋中を行きて或ひは復筋を嚼まんに、能く其の人の咽喉を乾燥か令め、或ひは復聾にて塞

【二四】癖は不消化の病のこと、今の胃潰瘍の如く血を吐く病のことか。

いに疼いたま令むむ。若し蟲むし瞋いららずんば、向むかひに説く所の如き諸の病無し。骨蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て嚙骨蟲を見るに、遍く一切の身の骨の中に住み、若し蟲骨を嚙かまんには諸の大は乾き消え、其の聲は破散し、下痢して調さとのはず、或ひは兩脇ふたはた痛み、鼻は塞ふさぎて歐吐し、飲食を憶おもはず。若し蟲一切の諸の骨を嚙かまされば、則ち是の如き等の病無し。嚙骨蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て割節蟲かっせつちゅうを見るに、食の過を以ての故に蟲則ち瞋いらりて身・身分・頭痛み心痛み、或ひは城邑・聚落の人多き處に於て謂いひて空廓と爲し、鼻は塞ふさぎ心惱み、痛み惱むを以ての故に色・聲・香・味・觸中に於て心愛樂せず。若し割節蟲順調にして瞋いららずんば、則ち向むかひに説く所の如き諸の病無し。割節蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て臭蟲しゅうちゅうを見るに、住して身中に在りて或ひは疾病を爲し、或ひは安隱を作す。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て臭蟲を見るに、食の過を以ての故に蟲は則ち瞋いらりて身をして重熱あら令め、或ひは赤色・黒色の癩瘡を生じ、身に汗多く出で、睡眠の能はず、即ち癩病を成し、一切の身分皆悉く爛たれて臭し。若し蟲瞋らずんば、則ち向むかひに説く所の如き諸の病無し。臭蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て爛骨蟲らんこつちゅうを見るに、住して身内に在りて或ひは疾病を爲し、或ひは安隱を作す。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て爛骨蟲を見るに、食の過を以ての故に蟲は則ち瞋いらり、或ひは一歳・二歳乃至は多年に、或ひは年少の時に被れる傷瘡の靈は、復除ふたごき差さゆと雖も老に至りて猶發す。是の如き爛蟲は久ひさくして乃ち發し

を以て熱蟲を見るに、人身中に住し、若し重き食を食せんには、食の過を以ての故に病垢増長して出入の息を妨げ、食の過を以ての故に身をして鹿大なら令め、或ひは咽喉を塞ぎ、大小便をして悉く皆白色なら令め、寒冷なるを愛せず、酸食を愛せず。熱蟲を觀じ已らんには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て火食蟲を見るに、住して身内に在り、行きて穢中に住し、此の蟲は寒き時には則便ち歡喜び、熱き時には萎弱す。寒きを歡喜ぶが故に人則ち食を憶ひ、熱き時と火の増さんとは飲食を欲せず、冬の寒き時に於ては陰は則ち清涼なれども、熱ければ則ち陰發る。火食蟲を觀じ已らんには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て大火蟲を觀る。此の蟲云何なれば人をして疾病あら令め、或ひは安隱なら令むるや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て大火蟲を見るに、若し人の性便はざる所を而も強ひて之れを食せんに、食の過を以ての故に蟲は則ち瞋恚りて身内を噉ひ、蟲は是の過を以ての故に人をして腸痛から令め、或ひは脚疼み手疼み、食する蟲の處に隨ひて則ち皆疼痛あり。若し蟲瞋らずんば、則ち上に説く所の如き諸の病無し。黃蘗蟲を觀じ已らんには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て骨中を觀るに、十種の蟲有り。何等を十と爲すや。一を舐骨蟲と名け、二を嚼骨蟲と名け、三を割節蟲と名け、四を赤口臭蟲と名け、五を爛蟲と名け、六を赤口蟲と名け、七を頭頭摩蟲と名け、八を食皮蟲と名け、九を風刀蟲と名け、十を刀口蟲と名く。是の如き蟲は云何なれば疾病あり、云何なれば安隱なりや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て舐骨蟲を見るに、骨の外に住み、骨多き處に住み、或ひは髀骨・脛骨・臂骨・脊骨、是の如き一切の骨中に住み、或ひは脈中に住み、食の過を以ての故に、蟲則ち瞋恚りて骨を疼痛ま令め、或ひは骨を動か令め、人をして色惡から令め、近き骨肉を食しては骨を大

し。若し蟲瞋らすんば則ち此の病無し。大瀉蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て黒蟲を見るに、住して身内に在りて、^三黄蘗中を行き、或ひは安く、安からず。食の過を以ての故に蟲は則ち瞋^{いか}悲りて人の面をして^三厭なら令め、或ひは多く^三驚を生じ、或ひは黒く或ひは黄に或ひは赤く、或ひは身をして臭^くから令め、或ひは雀目あら令め、或ひは口中に瘡を生じ、或ひは大小便處に瘡を生ず。若し蟲瞋らすんば則ち此の病無し。黒蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て大食蟲を見るに、住して身中に在り、或ひは安隱を作し、或ひは疾病を爲す。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て大食蟲を見るに、食の過を以ての故に則ち瞋^{いか}悲を生じ、陰黄中に住して食に隨ひて消し、身大なるが故に、一切の身及び身分なる眼・耳・鼻・舌は、自らの境界に於て皆悉く減劣にして見ることも明ならず、食の過を以ての故に根は不正を緣す。若し蟲瞋らすんば則ち此の病無し。大食蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て暖行蟲を見るに、常に暖食を愛して冷食を憎む。此の蟲云何なれば人に疾病を與へ、云何なれば安隱なりや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て暖行蟲を見るに、若し我れ冷きを食し、或ひは以て冷きを飲み或ひは食し或ひは味^{あじ}はんには蟲則ち瞋^{いか}悲り、或ひは極み或ひは重く、或ひは臚^きり或ひは睡り、或ひは心陰^{こころ}響^{ひび}くして、或ひは身の疼^{いた}強く、或ひは復多くの唾あり、或ひは咽喉を病む。蟲瞋らすんば則ち此の病無し。暖行蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀、彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て熱蟲^{あつちゅう}の住して身内に在りて陰中を行くを見る。何等の病を作し、云何なれば安隱なりや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼

【三】 癩黄と同じ。

は大詔蟲と名け、五には黒蟲と名け、六には大食蟲と名け、七には暖行蟲と名け、八には作熱蟲と名け、九には火蟲と名け、十には大火蟲と名け、此の諸の蟲等は 瘰癧中に住む。何等の蟲は人の疾病を爲し、或ひは安隱を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て 瘰癧蟲を見るに、食の過を以ての故に蟲は則ち瞋恚りて人の眼暖を食し、人の眼をして痒からしめ、多く眩・涙を出す。此の微細なる蟲、若し眼中を行かんには眼則ち多く病み、或ひは眼をして壞れ令め、若し精中に入りては眼は白 瞖を生じ、其の蟲赤色にして眼に病を生ずることを爲す。若し蟲瞋らずんば則ち此の病無し。瘰癧蟲を觀じ已らんには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て 瘰癧蟲を見るに、住して人身に在りて 瘰癧中を行き、一切の身中を行くに障礙無く、瘰癧にて身を覆ふ。此の如き蟲の若し骨中に入らんには人の身體をして皆大蒸熱あら令め、若し肉中を行きては晝夜常に熱ありて手足皆熱く、若し皮裏に入りては身則ち汗を出す。瘰癧蟲を觀じ已らんには實の如くに身を知らん。復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て 苗華蟲を見るに、行きて陰中に住し、利嘴・短足あり、身は火の藏の如く、食・飲を欲せず、若し食の過を以ては蟲異處に行き、所行の處に隨ひて則ち大熱爛あり、身血は増長し、其の身大熱ありて猶し煙の起つが如く、身・皮破裂して火燒の瘡の如し。若し蟲順行ならんに、則ち此の病無し。苗華蟲を觀じ已らんには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て 大詔蟲を見るに、住して身中に在りて 瘰癧黄中を行き、或ひは安く、安からず。食の過を以ての故に蟲は則ち瞋りて頭従り足に至り、行くに障礙無く、能く身中の一切の熱血をして熱瘡を生ぜ令め、若しは血若しは瘰癧を口中・耳中従り流出し、或ひは死し或ひは死に次ぎ、或ひは身は青黄(を病み)、熱病にて口苦

【五】瘰癧の字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依る。以下の同字も之れに同じ。瘰癧の字意味定かに知れ難し。瘰癧する所、病を背景とせる、又は連關せる五蘊の意味らしいつまり人間の心身に即せる欠陥を指すか。

【六】何等の下に是の次を欠けるは、宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

【七】瘰癧はしびれる事。

【八】瞖は他本には瞖、共に通常の字典には見當らず、瘰癧するに、こゝでは眼が白くかすむことをいふならん。

【九】瘰癧は病癰の意らしい。

【一〇】瘰癧中が黄色になることか。

【二】瘰癧黄はこゝには肝臟等を指すか。

【三】瘰癧はこゝには血以外の様々な吐瀉物を指すならん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て嚙脂蟲を觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て動脂蟲を見るに、住して身中脂脈の内に在り、若しは食に過有り、若しは多く睡眠らんに、此の蟲則ち瞋りて飲食を消さず、或ひは疥癬を生じ、或ひは無腫を生じ、毛根に膿を病み、或ひは癭病を得、或ひは脈脹る、病、或ひは乾き消ゆる病、或ひは身臭き病あり、或ひは食時に汗を流す。是の如くに動脂蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者の内身を身に循ひて觀て和集蟲を觀るに、我が身中に於て何等の業を作し、或ひは病み、或ひは安きや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て和集蟲を見るに、二種の身に集る。一には覺身、二には不覺の身なり。食の過を以ての故に蟲は則ち力無く、人も亦力無くして能く速疾に行來・往返する能はず、睡眠は靈膏として或ひは多く焦渴き、皮・肉・骨・髓・精は損減す。和集蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て濕行蟲を觀るに、住して肉中・屎・尿の中に在り、食の過を以ての故に蟲則ち瞋りて、身の肉・屎・尿・涕・唾皆臭く、鼻中は爛膿れ、或ひは眇・涙は爛れて臭く、蟲の行く處に隨ひて皆悉く臭穢れ、若しは衣若しは敷(も臭く)若しは食は齒中に住する蟲の臭を以ての故に食も亦隨ひて臭く、衣・敷盡く臭くして、舌上に多く白垢の臭穢有り、身の垢も亦臭し。臭蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て濕行蟲を見るに、背の肉中を行き、食を消すを知り已りて腰の三孔に入り、人の糞穢の汁を取りて則ち尿を成じ、滓を則ち糞と爲して下門に入ら令む。濕行蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て十種の蟲を觀るに、根中を行き、一切の人身は皆中従り生ず。何等を十と爲すや。一には癭瘰蟲と名け、二には懷懷蟲と名け、三には苗花蟲と名け、四に

【二】一種の病疽、肉中、豆の如く、又は栗の如き根ありて痛み四面腫れるに至る。
【三】頸の上の瘰。

【四】靈膏は目の暗きをいふ。こゝでは善く睡れず睡りが淺くして半醒半眠の状態をいふ。

卷の第六十五

身念處品第七之二

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て閉筋蟲を觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て閉筋蟲を見るに、或ひは龜筋を行き、或ひは細筋を行き、若し覺蟲行かんに筋は則ち疼痛み、若し不覺のもの行かんに筋則ち疼痛まず、一切の骨肉は皆消瘦し、筋中に疼痛あり。若し蟲瞋恚らんに人は、食する能はず、若し筋中に住して人血を飲まんに、人をして力無から令め、若し人の肉を食せんに人は人をして羸瘦せ令む。嚙筋蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て動脈蟲を觀るに、是の蟲過く一切の脈中を行き、其の身は微細にして、行くに障礙無し。若し蟲、人の食脈中に住せんに則ち病過有り、身をして乾燥か令め、飲食を喜ばず、若し蟲、住して水脈の中に在らんに則ち病の生ずること有りて、口をして乾燥か令め、若し肝脈に在らんに、人をして一切の毛孔に汗無から令め、若し尿管に在らんに人は人をして淋病なら令め、或ひは精を壞た令め、或ひは痛苦あら令め、若し蟲瞋恚りて下門中に行かんに、人の大便をして閉塞して通ぜざら令め、苦惱して死に垂とす。動脈蟲を觀じて已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て食皮蟲を觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て食皮蟲を見るに、食の過を以ての故に蟲則ち瞋恚りて、人の面をして顔色醜惡なら令め、或ひは惡胞を生じて或ひは赤く、或ひは黄に、或ひは破れ、或ひは復其の鬚爪をして墮落せ令め、人をして惡病なら令めて或ひは皮を斷ち壞ち、或ひは肉を爛らし壞つ。食皮蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

【一】汗の字、宋・元本及び宮内省圖書寮本に依る。

に則ち病苦を生じ、瘡・癬・熱・黃（を病ましめ）、疥・癩にて破裂し、若しは膿血蟲、膿毒を以ての故に血中を流れ行かんに、或ひは赤病を作し、女人は赤を下し、身體搔痒くして疥・瘡にて膿爛れ、若しは食血蟲の膿りて腦を病むことを生ぜんに、頭は旋廻轉し、咽喉中・口中に於て瘡を生じ、下門に瘡を生じ、若しは瘡瘡蟲の血中を流れ行かんに、則ち疾病を生じて疲頓れ困極み、飲食を欲せず、若し酢蟲・膿毒らんに、亦其の人をして是の如き病を得令む。是の如き一切の諸の蟲及び種類を既に觀察し已らんに、實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て、十種の蟲の瘡中を行くを觀る。何等を十と爲すや。一には生瘡蟲と名け、二には刺蟲と名け、三には閉筋蟲と名け、四には動脈蟲と名け、五には食皮蟲と名け、六には動脂蟲と名け、七には和集蟲と名け、八には臭蟲と名け、九には濕蟲と名け、十には熱蟲と名く。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、何等の蟲の我が身中に住し、或ひは疾病を爲し、或ひは安隱を爲すを觀るや。彼れ開慧を以て、或ひは天眼を以て瘡蟲を見るに、瘡有る處に隨ひて、諸の蟲に圍遶かれて此の瘡を噉食ひ、或ひは咽喉中に於て瘡病を生ず。瘡蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て、刺蟲は何等の病を作すやを觀る。彼れ開慧を以て、或ひは天眼を以て刺蟲を見るに、若し膿毒を生ぜんには人をして下痢せ令め、猶し火の燒くが如くに口中は乾燥き、飲食は消えずして其の身は利利たり、水熟藏に入りては晝夜睡らしめず、熟藏中に於て糞穢を擣攪し、尿冷等と尿と和合せ令め、是の如き處に下痢の病を作し、食を憶はず、劣弱にして健ならざら令む。若し愁え惱まんには蟲則ち歡喜し、人の血脈を嗜みて以て衰惱を爲し、或ひは赤血を下し、或ひは消さずして下痢せしむ。是の如くに刺蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀るに、彼の流脈の如きは唯れと本を爲して身をして肥悅せ令め、復は諸の蟲有りて處處に遍く行くや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、命流脈は心を其の本と爲し、隨順流脈は兩脇を本と爲し、水流脈は生臟と膀胱と心を以て根本と爲し、汗流脈は毛根及び脂を以て根本と爲し、尿流脈は根と胞を本と爲し、糞流脈は熟藏の下門を本と爲し、十流脈は咽喉及び心を其の本と爲し、汗流脈は肺を其の本と爲し、肉と脂の流脈は筋と皮を本と爲し、骨流脈は一切の續節を本と爲し、髓と精の流脈は卵及び身根を本と爲す。是の如くに行者、流脈を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は身を觀、身に循ひて觀るに、何等の蟲有りて何處に流れ行き、或ひは疾病を爲し或ひは安隱を爲し、髓骨從り乃至身に廻きや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、十種の蟲肝・肺に至らんに人則ち病を得。何等を十と爲すや。一には食毛蟲と名け、二には孔穴行蟲と名け、三には禪都摩羅蟲と名け、四には赤蟲と名け、五には食汁蟲と名け、六には毛燈蟲と名け、七には膿血蟲と名け、八には食血蟲と名け、九には瘡癩蟲と名け、十には酢蟲と名く。此の諸の蟲等は其の形微細にして足無く目無く、血中に行きて痛痒を相と爲す。

復次に修行者は内身を身に循ひて一一の諸の蟲を觀るに、身中に在りて何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、食毛蟲若し膿血を起さんには能く鬚、眉を嘔みて皆墮落せ令め、人をして癩を病ま令め、若し孔行蟲にして膿血を起して血中を行かんに、身をして龜漚・頑痺・無知なら令め、若し禪都摩羅蟲の血中を流れ行きて或ひは鼻中に在り、或ひは口中に在らんに、人をして口・鼻皆悉く臭惡なら令め、若しは其れ赤蟲にして膿血を起して血中を行かんに、能く其の人をして咽喉に瘡を生ぜ令め、若しは食汁蟲にして膿血を起して血中を行かんに、人の身體をして青癩瘻、或ひは黒或ひは黃癩瘻の病を作さ令め、若しは毛燈蟲の膿血を起して血中を流れ行かん

【三四】瘡はしびれること、身體のしびれる病の象徴か。

には實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て其の身中を觀るに、幾許の糞穢ありや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て其の身中を見るに、七掬の屎有り、六掬の唾有り。此の觀を作し已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て我が身中を觀るに、幾許の痰癘及び尿ありや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て其の身中を見るに、五掬の黄癘と、尿は四掬有り、其の病む時に或ひは増し、或ひは減するを降く。是の如くに觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て我が身中を觀るに、幾許の脂・髓と不淨なる穢精ありや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て其の身中を觀るに、十二掬の脂と、髓は一掬有り、精は一掬有り。是の如くに觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て其の身中を觀るに、幾許の風有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て身の空處を見るに、三掬の風有り。是の如くに觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て其の身中を觀るに、幾脈常に流れて飲食を消化するや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て其の身中を觀るに、十三の脈有り。若し脈流注せんに、身を以て肥悦せしむること、譬へば椶櫚の水を汲み、流注し漑灌して其れをして增長せしむるが如く、身脈の漑灌することも亦復是の如し。何等は十三なりや。一には命流脈と名け、二には胎順流脈と名け、三には水流脈と名け、四には汗流脈と名け、五には尿流脈と名け、六には糞流脈と名け、七には十流脈と名け、八には汗流脈と名け、九には肉流脈と名け、十には脂流脈と名け、十一には骨流脈と名け、十二には髓流脈と名け、十三には精流脈と名く。流脈を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

取り、是の義を以ての故に他人供養の利を得るを嫉ます、多言を樂まず、寺に住するを樂まず、身慢を起さず、色慢を生ぜず、衣服を恃みて嬌慢を生ぜず、袈裟と鉢盂を恃みて嬌慢を生ぜず、弟子を恃みて嬌慢を生ぜず、聚落を恃みて嬌慢を生ぜず、親里を恃みて嬌慢を生ぜず、獨一にして食無く、塵垢を遠離して寂靜の處に住せんに、涅槃に近くして、若しは美味を貪嗜りて味の海に没せんに、魔の攝ふる所と爲り、涅槃を去ること遠からん。是の修行者、諸の蟲を觀じ已らんに、味に於て遠離し、飲食を貪らざらん。

復次に、内身を身に循ひて觀、實の如くに脊骨を觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て其の脊を見るに、四十五骨有り、胸は十四骨、左右の脇肋は各十二骨にして、節も亦是の如く、胞骨も亦然り。是の如くに分別して骨節を觀じ已りて、復肩從り踵に在り、幾分の肉樹ありやを觀るに、是の如きは左右各十二樹なり。是の如くに觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て此の身を觀るに、幾許の筋有りて連續し繫縛するや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て左右の脇を見るに、皮肉を除きて一百の細筋以て纏縛を爲す。筋纏を見已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て此の身を觀るに、臍從り踵に至り、幾許の脂有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て自ら己身を見るに、食の因縁を以て脂は則ち増長し、食の因縁を以て脂をして損減せ令め、極めて羸瘦せる人なる。摩伽陀等は五兩の脂有り。已に觀察し已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て我が此の身を觀るに、幾許の水有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て自ら身中を見るに、十掬の水有りて毛孔從り出で、之れを名けて汗と爲し、諸根中に於て眼は則ち涙を出し、名けて漏界と爲し、食の因縁を以て脂血増長す。身の水を觀じ已らん

【三】 袈裟 (Kasaya)。染食衣、不正衣、濁染と譯す。出家の正衣にて、健陀色を用ひ、俗服に簡んで緇衣と云ふ。
 【四】 鉢盂 (Bhansa)。具には鉢多羅、鐵鉢、又は單に鉢と云ひ、應器、應量器等と譯す。僧の食器となす、鐵製の鉢なり。

【三】 摩伽陀 (Magadha)。中印度の大國の名、但し、今では摩伽陀人 (Magadhan) を云ふなり。

を憎み、蟲の嗜む所に隨ひて我れも亦之れを嗜む。舌端に脈有り、味に隨順して舌をして乾燥か令むるに、蟲瞋るを以ての故に舌癰瘡して腫れ、或ひは咽喉をして即ち瘵病を得令む。若し肺悲らすんば、咽喉は上の如き諸の病無し。憎味蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て嗜睡蟲を見るに、其の形は微細にして狀は鬚の塵の如く、一切の脈に住し、流れ行きて味に趣き、骨髓の内に住し、或ひは肉の内に住し、或ひは鬚の内、或ひは頰の内に在り、或ひは齒骨の内、或ひは咽骨の中、或ひは耳の中に在り、或ひは眼中に在り、或ひは鼻中に在り、或ひは鬚髮に在り、此の嗜睡蟲は風に吹かれて流轉し、若しは此の蟲病み、若しは蟲疲極て心の中に住せんに、心は蓮華の晝は則ち開張き、日光無き故に夜は則ち還りて合ふが如く、心も亦是の如くにして、蟲其の中に住して多く境界を取り、諸根疲極て蟲則ち睡眠り、蟲睡眠るが故に人も亦睡眠る。一切の衆生は悉く睡眠有り、若し此の睡蟲晝日疲れ極むに、人も亦睡眠る。睡蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀て見るに、腫蟲有りて身中を行き、或ひは頭中に住し、或ひは項中に住し、血中を行き、或ひは脂中を行き、其の身は微細にして、血を飲む處に隨ひて則ち腫の起ること有り、瘡瘡くして疼む。或ひは面上に在り、或ひは頂上に在り、或ひは咽喉に在り、或ひは腦門に在り、或ひは餘の處に在りて、所在の所に能く腫を生ぜ令め、若し筋中に住せんに則ち病苦無し。腫蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。是の如くに、那羅帝婆羅門の長者の衆落の比丘の修行者は蟲の種類を觀、頭の中從り舌・耳・腦門、毛孔・髮中、皮・肉・骨・筋・脈の中を實の如くに之れを觀、既に觀察し已りて舌味中に於て厭離の心を生じ、後に生るる處に於て復味を愛せず、無量無邊由旬の愛の縛と味の海に於て能く厭離を生じ、厭離を以ての故に食愛の惱亂する所と爲らず、復豪貴なる長者に親近せず、多欲を離れ、食は足ることを知りて身を支へ得るを

復次に、修行者は内身を觀、身に循ひて觀て、放逸蟲を觀る。云何にして此の蟲は我が病惱を爲し、或ひは安隱を作すや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て放逸蟲を見るに、頂上に住し、若し腦門に至りては人をして疾病あらしめ、若し頂上に至りては人をして瘡を生ぜしめ、若し咽喉に至りては猶し蟻子の如くに咽喉中に滿ち、若し本の處に住しては病則ち生ぜず。是れを放逸蟲を觀すと名く。放逸蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀、貪嗜六味蟲を觀る。云何にして病惱あり、云何にして安隱なりや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、六味蟲の貪嗜る所の者を我れも亦貪嗜り、此の蟲の嗜まざる所の者に隨ひて我も亦嗜まず、若し熱病を得れば蟲も亦先に得、是の如き熱病は、是の過を以ての故に病人をして食する所は美からざらしめ、食味有ること無し。味蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀、杼氣蟲の頂下に住するを觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て杼氣蟲を見るに、瞋恚を以ての故に腦を食して孔を作し、或ひは咽喉を痛くし、或ひは咽喉を塞ぎ、咽喉の風を噓して死苦を生ず。此の杼氣蟲は、咽喉中の一切の諸の蟲と共に皆悉く撩亂して諸の病惱を生ず。此の杼氣蟲は常に唾の爲に覆はれ、其の蟲短少なれども面有り足有り。杼氣蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀、彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て、憎味蟲の頭下の咽喉の根の中に住するを見る。云何にして此の蟲は我が病惱を作し、或ひは安隱を作すや。彼れ此の蟲を見るに、諸の味を憎嫉みて唯一味を嗜む。或ひは甜味を嗜みて餘の味を憎み、或ひは酢味を嗜みて餘の味を憎み、或ひは辛味を嗜みて餘の味を憎み、或ひは酸味を嗜みて餘の味を憎み、憎む所の味に隨ひて我れも亦之れ

【二〇】嗜の字、宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

めて吐蟲を憫すに、其の住處從り動きて上り行き、人をして癢を吐か令む。吐蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を觀、身に循ひて觀る。云何にして吐蟲は人をして唾を吐か令むるや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、人甜・冷・重食、膩滑の食を食し、或ひは食し已りて睡眠せんに、唾をして増長せ令め、唾増長するが故に唾蟲増長して咽喉の病を爲し、身をして沈重なら令め、則ち冷唾有り。吐蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を觀じ、身に循ひて觀る。云何にして吐蟲は雜吐を生ずるや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、輕冷にして無膩の食、辛・酢・鹹食、滑冷にして重膩なるを食せんに、能く吐蟲をして咽喉中に行か令め、是の三過を以て能く人をして吐か令む。吐蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に修行者は内身を觀、身に循ひて觀る。云何に蠅吐は人をして嘔吐せ令むるや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、蠅を食して不淨なるが故に蠅は咽喉に入り、吐蟲をして動か令めて、則ち大いに吐く。吐蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を觀、身に循ひて觀る。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、醉味蟲は舌端乃至命脈に行き、其の中間に於て或ひは行き或ひは住し、微細にして足無く、若し美食を食せんには蟲則ち悵醉を増長し、若しは食美からざれば蟲則ち萎弱す。此の蟲の食する時は、蜂の花を食して微細なる甜味を以て蜜を作すが如く、嗜味蟲の食するも亦復是の如くにして、然り其の食する所は復微細なりと雖も亦充足を得。若し蟲味を得んには我れも亦是の如くに味を得、若し蟲食を憶はんには我れも亦食を憶ひ、若し我れ食せずんば、是の如き醉蟲は則ち亦病苦ありて安隱を得ず。醉蟲を觀じ已らんに實の如くに身を知らん。

合し、喉中の涎蟲は共に此の食を食し、以て自ら命を活す。若し蟲増長せんには、人をして瘧病ならしめ、若しは多く膩を食し、或ひは多く甜きを食し、或ひは重食を食し、或ひは醋食を食し、或ひは冷食を食せんには蟲則ち増長し、人をして咽喉に疾病を生ぜしむ。涎蟲を觀じ已らんには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀じて唾蟲を觀るに、能く諸の唾を消し、或ひは能く病を爲し、或ひは安隱ならしむ。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て消唾蟲を見るに、咽喉中に住し、若し人上膩等の如きを食せざれば、蟲は則ち安隱にして能く唾を消し、十脈中に於て美味を流出し、安隱にして樂を受く。若し人唾多からんには蟲則ち病を得、蟲病むを以ての故に則ち冷沫を吐き、冷沫を吐くが故に胸中に病を成す。唾蟲を觀じ已らんには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀じて吐蟲を觀る。云何にして人をして安隱なるか疾病あらしめ、住して何處に在り、何等の食を食するや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て吐蟲の人身中に住するを見るに、十脈の流注する處に住し、若し人食する時、是の如き蟲は十脈中従り身を踏らして上り行き、咽喉中に至り、即ち人をして吐かしめ、人をして五種の嘔吐を生ぜしむ。何等を五と爲すや。一には風吐、二には瘧吐、三には唾吐、四には雜吐、五には蠅吐なり。若し蟲安隱ならんには、食は則ち順調に腹中に入る。云何にして吐蟲は風吐を生ずるや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、輕冷なるを食し、若しは膩無きを食さんには則ち風病を發し、人をして大小便利を通り難からしめ、眼は睡る能はず。風の咽喉に入りては風吐蟲を動かし、此の過を以ての故に風吐と名く。吐蟲を觀じ已らんには實の如くに身を知らん。

復次に、修行者は内身を觀、身に循ひて觀る。云何にして吐蟲は人をして瘧を吐かしむるや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、人辛を食せんには鹹と熱と和合し、人をして熱を發せ令

【五】瘧の字は三本及び宮内省圖書寮本に依れり、以下の同字も之れに同じ。

落せ令む。復耳蟲有り、住して耳中に在りて耳中の肉を食し、蟲瞋るを以ての故に人をして耳痛から令め、或ひは耳をして聾なら令む。復鼻蟲有り、住して鼻中に在りて鼻中の肉を食し、蟲瞋るを以ての故に能く其の人をして飲食を美からざら令め、腦涎流下しては蟲腦涎を食し、是の故に人をして飲食を美からざら令む。復脂蟲有り、生れて脂中に在りて脂中に住し、常に人の脂を食し、蟲瞋るを以ての故に人をして頭痛から令む。復續蟲有り、節間に生れ、名身蟲有り、住して交牙に在り、人をして脈痛からしむること猶し針の刺すが如し。復諸の蟲有り、名けて食涎と曰ひ、舌根中に住し、蟲瞋るを以ての故に人をして口燥か令む。復諸の蟲有り、牙根蟲と名け、牙根に住し、蟲瞋るを以ての故に人をして牙を疼ま令む。是れを内 観する修行者、身に循ひて身を觀すと名く。是の十種の蟲は頭中に住す。

復次に、修行者は身を觀じ、身に循ひて頭肉中を觀するに、幾骨有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て髑髏骨を見るに、頭に四分有り、額骨、頬骨を合して三分有り、鼻骨一分なり。交牙に二骨、頤に一骨有り、牙齒を合して三十二骨有り、齒根も亦爾り、咽喉は二骨にして、是の如き項中十五骨有り。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀す。云何んが頭肉は食を以て増長し、和合して覺有るや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て頭肉を觀るに、則ち四分有り。兩頬の二分と、咽喉及び舌の肉段なる一分と、上下の兩脣及び其の兩耳と皮肉(なる一分)にて、四分なり。其の舌根は名けて脈肉と爲し、上膳を貪嗜りて、六味を樂む。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀す。何等の蟲有り、住して何處に在り、何等の業を作して或ひは病み或ひは安きや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て初めに咽喉を觀るに、咽喉に蟲有り、名けて食涎と曰ふ。咀嚼して食する時は猶し嘔吐の如く、涎・唾和雜し、咽まんと欲する時は腦涎と

【七】 觀の字を加へたるは、宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

【八】 六味。苦、酸、甘、辛、鹹、淡の六なり。

雨ふる大火に上りて以て其の身を燒き、此の諸の餓鬼は、惡業に隨ふが故に是の如き苦を受く。

復次に、修行者は隨順して身を觀す。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て畜生道を見るに、彼れは無量の種種なる畜生を見る。略説するに三處あり。一には水を行く。所謂、魚等なり。二には陸を行く。所謂、象・馬・牛・羊・鹿・猪等なり。三には空を行く。所謂、無量の衆の飛鳥等なり。

復次に、修行者は隨順して身を觀す。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て畜生を觀るに、幾種の生有りや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て諸の畜生を見るに、四種の生有り。何等を四と爲すや。一には胎生にして、所謂、象・馬・水牛・牛・羊の類なり。二には卵生にして、所謂、蛇・蚯・鵝・鴨・鷄・雉、種種の衆鳥なり。三には濕生にして、蚤・虱・蚊・蚊の子の類なり。四には化生にして、長面龍等の如し。是の修行者實の如くに畜生を觀已るに、若しは天若しは人、若しは地獄・餓鬼・畜生にして、一處として恩愛別離の爲に惱されざるを見ず。一切の衆生は生死に輪轉し、或ひは怨家を作し、或ひは親友と爲り、一處として生ぜず滅せざること有ること無し。是の如き比丘は生死の處に於て愛心を生ぜず、是の如きを心に喜樂せず、是の如きを厭離して隨はず。是の如きは破壊し、是の如きは滅する法にして、久しく住す可からず、一切衆生の衆苦の處なり。是の故に比丘、生死の中は苦多くして味少く、無常にて破壊すれば、當に厭離すべし。生死を厭離せんには便ち解脱を得。是の如くに那羅帝婆羅門聚落の比丘の修行者は、内身を身に循ひて觀じて内身を觀るに、此の身中に於て分分不淨なり。實の如くに身を見、念念に思惟して頭從り足に至り、身に循ひて觀察す。是の修行者は初に頭頂を觀す。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て頭の髑髏を觀るに、以て四分と爲す。頭骨の内に於て自ら蟲の行く有り、名けて腦行と曰ひ、骨内を遊行し、腦中に生れて或ひは行き或ひは住し、常に是の腦を食す。髑髏中に於て復諸の蟲有り、髑髏中に住し、若しは行き若しは食し、還りて髑髏を食す。復髮蟲有り、骨外に住して毛根を食し、蟲臙るを以ての故に髮をして墮

彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て諸の衆生の作す所の業を見るに、不可愛の業・不喜樂の業・不善の業なる謂く三種の業にて、身・口・意に於て業を造集するが故に地獄中に墮ち、惡業を集むるが故に地獄の苦を受け、地獄中に於て諸の劇しき苦を受け、乃至惡業盡きずして、終に脱するを得ず。是れを修行者隨順して身を觀すと名く。

復次に、修行者は是の思惟を作す「何等の業を作して地獄に墮つるや」と。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て此の衆生を見るに、殺害に習近し、樂習し增長して、是の因縁を以て活地獄に墮つ。又衆生を見るに、殺生・偷盜に習近し、喜樂し習近して斯の惡を増長し、是の因縁を以て黑繩地獄に墮つ。又衆生を見るに、殺生・偷盜・邪淫に習近し、習近し喜樂して斯の惡を増長し、是の因縁を以て衆合地獄に墮つ。又衆生を見るに、殺生・偷盜・邪淫・妄語に習近し、習近し喜樂して斯の惡を増長し、是の因縁を以て叫喚地獄に墮つ。又衆生を見るに、殺生・偷盜・邪淫・妄語し、人に勸めて酒を飲ますに、是の因縁を以て大叫喚地獄に墮つ。又衆生を見るに、殺生・偷盜・邪淫・妄語・飲酒・邪見にて、是の因縁を以て焦熱地獄に墮つ。又衆生を見るに、殺生・偷盜・邪淫・妄語し、酒を以て人に飲まし、邪見にして信ぜず、或ひは比丘・比丘尼戒を破るに、是の因縁を以て大焦熱地獄に墮つ。又衆生を見るに、五逆の業を作して五種の惡業あらんに、是の因縁を以て阿鼻地獄に墮つ。云何んが五逆なりや。若しは衆生有りて、父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、和合僧を破り、惡心を以て佛身より血を出さんに、是の如き五種の大惡業の故に阿鼻地獄に墮つ。是の如くに地獄の業報を思惟し、諸の衆生に於て悲愍の心を起す。

復次に、修行者は隨順して身を觀す。云何にして衆生は餓鬼道に墮つるや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て無量の餓鬼を見るに、慳・嫉を以ての故に餓鬼中に墮ち、地下五百由旬に在り。無量の餓鬼は惡食なるか食無く、或ひは不淨を食し、互に相ひ食噉ひ、飢渴に逼られて大苦惱を受け、

【五】阿羅漢(Arahant)。又は阿羅訶、阿梨呵、阿盧漢。略して羅漢とも云ひ、應供、殺賊、不生等と譯す。灰身滅智の境に入りて再び生を受けず、煩惱の賊を殺して人、天の供養を受く可き聲聞四果の究竟位に入れる聖者を云ふ。

【六】和合僧(Śaṅgha)は群れ、集り、共にする人々。即ち和合の義、五人以上の出家集りて相ひそむることなきを僧と云ふ。

疾あせに行き、彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て諸の天身を見るに、大勢力有り。神通は微細にして、一手中に五百天を置きて手に在りて住おのく(せしめ)、各諸の天身をして妨礙せず、亦迫隘あつちやくならざら令むること、譬たとへば一室に五百の燈を燃すに、其の燈の光明は相ひ逼迫せざるが如く、諸の天の手中に五百の天を置くに亦復是の如くにして、迄いたらず妨げず。

復次に、若しは諸の天の大神に化するに無量由旬にして、若しは好うつくしく若しは醜みにくく、若し見るこ
と有る者、或ひは怖れ怖れす。

復次に、修行者は隨順して身を觀す。云何に速すみやかに行くと觀する耶。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て速に行くと見るに、一たび目を胸むねに能く無量百千由旬を行き、還りて本の處に至り、天の憶念する隨まに往く處に障礙する所無し。若し欲する所有らんに皆悉く具足して能く奪うばふ者無く、一切の處に於て得る所の物は皆悉く自在にして、他に於て畏おそれ無く、能く礙を爲す無く、天の境界の樂を念念に増長し、善業を以ての故に五欲の樂を受く。是れを行者隨順して身を觀すと名く。復次に、修行者は隨順して身を觀す。云何に三十三天の身を觀する耶。云何に境界を緣じて樂を受くるや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て三十三天を觀るに、四天王天の受くる境界の樂の如きは、三十三天の愛まき色・聲・香・味・觸を受くるに、四天王天に勝ること一千倍に足る。何を以ての故に、三十三天の作す所の業勝れ、大力の愛す可き樂を受くるが故に、四天王天の作す所の業に勝るゝが故に、三十三天の作す所の業勝るゝを以ての故にして、是の故に四天王天は上天に及ばず。是の如くに三十三天の受くる所の樂は勝れて、具つに説く可からず。是れを修行者隨順して身を觀すと名く。

復次に、修行者は隨順して身を觀す。云何に地獄を觀するや。地獄の衆生の受くる所の身は、謂いく、活な地獄・黑くろ蟬せみ地獄・蒙もう合ごう地獄・叫けう喚わん地獄・大叫喚地獄・焦せう熱ねつ地獄・大焦熱地獄・阿あ鼻び地獄(に在り)。

【三】受の字、元・明二本に依れり。

【三】活地獄等。六十一卷の註十三を見よ。
【四】蒙の字、宋・元・明三本に依れり。

て來り生るゝや不耶。業藏無きや、業無くして流轉するや、頗らくは欲法を行習せざること有りや。是の如き比丘、一人として業藏無き者を見ず。一人として業無くして生るゝこと有ること無く、一人として業無くして流轉すること有ること無く、一人として欲法を習せざる有ること無く、作す所の業の或ひは善、或ひは不善なるに隨ひ、業に隨ひて報を受け、一人として怨・親中の人に攝せらるゝ爲さざること有ること無し。是れを修行者隨順して身を觀すと名く。

復次に、隨順して身を觀ず。云何に業を集めて天身を得、云何に天中五欲の樂を受くるや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て諸の衆生を觀るに、四天王の天處に生れて天の五欲を受け、眼に美色を視ては厭足を知らず、或ひは細或ひは麁なるを、自ら天眼を以て見ること萬由旬にして、若しは化神通らんに能く無量百千由旬を見る。是の如くに修行者、天の無量の善業の勢力を觀するに、四天王天の見る所の色貌は皆悉く愛す可く、心に愛樂を生じ、惡色を見ず。

復次に、修行者は隨順して身を觀ず、云何に四天王天は耳に音聲を聞くや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て四天王天を見るに、若し天聲を聞かんに甚だ愛樂す可く、若し報の耳を以て三千由旬を聞き、若しは化神通らんに則ち能く二萬由旬を聞きて、聞く所の音聲は皆愛樂す可し。

復次に、修行者は隨順して身を觀ず。云何に四天王天は鼻に香を聞く耶。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て四天王天を見るに、自報の鼻根にて衆香を聞くこと二百由旬にして、若しは化神通らんに百千由旬の香を聞く。

復次に、修行者は隨順して身を觀ず。云何に四天王天は舌根充滿せるを觀するや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て四天王天を觀るに、舌根厭ふこと無く、亦愛せざる無くして業の得る所の如く、善業を以ての故に味に於て厭はず。

復次に、修行者は隨順して身を觀ず。云何に諸の天身を觀する耶。若しは麁若しは細、若しは速

人を見るに、眼識にて聲を聞くこと、閻浮提中の蛇・虺の類の眼中に聲を聞くが如く、瞿陀尼人も亦復是の如くにして、隔つる障礙の如くに衆の音聲を聞き、衆の色像を見ること亦復是の如し。法勝るゝを以ての故なり。

復次に、修行者は隨順して身を觀す。閻浮提人・弗婆提人の鼻識に香を緣する如く、瞿陀尼人も是の如きや不耶。瞿陀尼人の香を嗅ぐ法は異りて、眼等別に緣す。云何に瞿陀尼人は鼻識に香を緣するや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て瞿陀尼人を見るに、若し眼に色を見んには即ち亦香を知り、若しは眼に見ざるも亦其の香を聞く。法勝るゝを以ての故なり。

復次に、修行者は隨順して身を觀す。云何にて瞿陀尼人は舌識にて味を緣するや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て瞿陀尼人を見るに、稗子を食し、牛味を飲みては閻浮提人の甘蔗酒・蒲桃酒を飲むが如く、瞿陀尼人の牛の五味を飲みて能く昏醉せしむることも亦復是の如し。瞿陀尼人の稗子を食しては閻浮提人の麩の糧飯を食するが如くにて、充ち足りて飽滿なり。

復次に、修行者は隨順して身を觀す。云何に瞿陀尼人の身の量を觀する耶。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て瞿陀尼人を觀するに、其の身の長短は半多羅樹の葉の如くに相似する、自業の色身なり。

復次に、修行者は思惟して、何等の住處は性等相似し、意等相似し、行等相似するやを觀察し、互に對て觀察す。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て四天下の衆生の心意を見るに、一人として心意の相似すること有ること無く、一人として行等相似すること有ること無く、一人として身等相似すること有ること無く、一切に一人の相似すること有ること無し。是れを比丘隨順して身を觀すと名く。

復次に、修行者は隨順して身を觀す。云何んが四天下に頗らくは一人有りて、業無く因無くし

【九】 甘の字は宮内省圖書寮本に依り、蔗の字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依り。

【一〇】 昏の字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依り。及及び宮内省圖書寮本に依り。

にて能く衆の色を見るが如く、弗婆提人も亦復是の如くにして、夜闇中に於て、眼の境界の如きは、能く一切の龜細の衆の色を見る。

復次に、修行者は隨順して身を觀す。云何んが閻浮提の人を觀するや。前に説く所の如く、閻浮提の人の聞く所の音の如きは、弗婆提人も是の如きや不耶。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て弗婆提人を見るに、怖畏の聲を聞かんに、耳識の緣する所は一箭の道を盡くし、福德を以ての故に遠處の怖畏の聲を聞かず。

復次に、修行者は隨順して身を觀じ已りて、三天下の衆生の住處を觀す。閻浮提人・嚳單越人の鼻識の所緣の如きは、弗婆提人も是の如きや不耶。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て弗婆提人を見るに、晝に聞く所の香を、鼻識嗅ぎ已りて夜も亦是の如し。報勝るゝを以ての故なり。

復次に、修行者は隨順して身を觀す。閻浮提人・嚳單越人の舌識を知る味の如く、是の如き弗婆提人の得る所の味も是の如きや不耶。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て弗婆提人を見るに、一たび餘盧迦を食へば三日飢えず、弗婆提人は、乃至命終るまで身に病惱無し。法勝るゝを以ての故なり。若しは命終るに臨みても、病に遇ふこと五日にして爾り乃ち命終る。復次に、修行者は隨順して身を觀す。閻浮提人・嚳單越人の身の形相の如きは、弗婆提人も是の如きや不耶。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て弗婆提人を見るに、其の身圓滿にして尼俱陀樹の如し。復次に、修行者は隨順して身を觀じ、三天下に於て實の如くに觀じ已りて、第四の 瞿陀尼人所住の處を觀す。云何んが瞿陀尼人は身の境界を緣するや。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て瞿陀尼人を見るに、眼識の緣する所は山壁も礙無きこと、頗梨・琉璃の中に衆の色像を見るが如く、瞿陀尼人も亦復是の如し。復次に、修行者は隨順して身を觀す。閻浮提中・嚳單越中・弗婆提中の三天下の聲を聞く差別の如く、瞿陀尼人も耳識に聲を緣することは是の如きや不耶。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て瞿陀尼

【八】 瞿陀尼。具さに瞿陀尼耶(Godānīya)と云ひ、普通瞿陀尼と書き譯して牛貨と云ふ。須彌四州の一、西方の大洲の名なり。

是の比丘、實の如くに瞿單越人の耳に聞く所を觀するに、若しは近きも若しは遠きも、若しは大なるも若しは少なるも、若しは愛するも愛せざるも、報勝るゝを以ての故に皆能く聞くこと、譬へば日光の近きも遠きも、塵なるも細なるも、若しは淨きも不淨なるも、光明にて悉く照すが如く、瞿單越人の聞く所の音聲も亦復是の如し。

復次に、修行者は隨順して身を觀す。閻浮提の人の鼻根に聞く所の如く、瞿單越も是の如きや不耶。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て瞿單越人を見るに、報勝るゝを以ての故に但衆香を聞きて臭氣を聞かざること、譬へば水と乳を同じく一器に置くに、鵝王之れを飲まんには但乳汁を飲み、其の水猶存するが如く、瞿單越人も亦復是の如くにして、但衆香を聞きて臭氣を聞かず。

復次に、修行者は隨順して身を觀す。閻浮提の人の舌に得る所の味の如く、瞿單越人も是の如きや不耶。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て見るに、閻浮提の人には上・中・下の食あるも、瞿單越人は斯ち是の如からず。瞿單越人は、我所の心無く、常に自ら善を行ひ、自然の糲米にて其食一味なるも、閻浮提の人は則ち是の如からず。

復次に、修行者は隨順して身を觀す。閻浮提の人の種種の色の身の如く、瞿單越人も是の如きや不耶。彼れ聞慧を以て觀るに、閻浮提の人は種種の色の身あり、瞿單越人は則ち是の如からず。善業を以ての故に純一の色の身に於て、道等しく身等しく、其の色は猶し、閻浮檀金の如く、其の身は圓直・柔軟・端正にして、其の報は閻浮提の人に比からず。閻浮提の人は無量種の業ありて、其の行同じからず、是の故に則ち無量種の身、無量種の色有り。是の如くに比丘、二天下の人世界中に於て、隨順して觀じ已りて、次第して第三の、弗婆提國を觀す。閻浮提人・瞿單越人の有する所の諸入の如きは、弗婆提人の諸入の見る所と同じと爲んや不耶。彼れ聞慧を以て、或ひは天眼を以て弗婆提人を見るに、黑闇中に於ても亦衆の色を見ること、閻浮提中の猫・虎・兕・馬・角鶏の、光明無き所

【五】 我所。我所有の意。我ある人外物を我が所有と考へて執着するが、その所有觀念の對象となるものを云ふ。

【六】 閻浮檀金。閻浮檀(阎浮檀)に産する沙金。閻浮とは樹名。捺陀は江、蓋し、閻浮樹下に流るゝ河に沙金多きならん。

【七】 弗婆拏。弗利婆提訶(Purva vāḍā)。勝身と譯す。須彌四洲一なる東方の大洲なり。

風軽く動く。是れを眼根の内擗界ないまきがいと名くるなり」と。内風界に於て實の如くに觀察し、耳・鼻・舌・身を、隨順して觀察することも亦復是の如く、是の如くに觀じ已りて、愛す可き色に於て樂著らくしやくを生ぜずして、愛境の破壞する所と爲らす。

復次に、修行者は内身を身に循ひて觀じて「此の如き身は念念に生滅し、生・老・病・死あり、此の身は幻の如くに空にして所有無く、實無く堅無くして水の泡沫の如く、衆苦の集る處、衆苦の依る所、衆苦の藏たり。是の如き身中には少樂も有ること無く、一切は皆苦にして、一切常無く、一切は破壊する衰變の法にして、磨滅して淨からず」と。復次に、修行者は身を觀じ、身に循ひて觀じて「是の如き身は孰れを其の本と爲し、云何なるに順ひて行き、唯れか救護を爲し、云何んが住するや」と。是の比丘、實の如くに觀察して復是の念を作す「是の如き身は業を以て本と爲し、業に由りて順ひて行き、業能く救護を作して、若し善業を集めんには天・人中に生れ、惡業と相應せんには地獄・餓鬼・畜生に墮ち、是の如き身は淨からず堅からず、無常にして住せず」と。是の如くに比丘、實の如くに身を觀じて、愛欲中に於て復念を生ぜず。

復次に、修行者は實の如くに眼を觀ず。閻浮提むんぶだいの人の有する所の眼根の如きは、虚空の處有りて色像を見ることを得。餘方あまの見る所も是の如きや不耶。若し諸の弟子、或ひは我が所説を聞き、或ひは天眼の智慧を以て觀察するに、閻浮提むんぶだいの人の色を見る時、眼有り色有り、明有り空無礙有り、意念の心有り、五の因縁の故に色を見ることを得。鬱單越人うつだんごつじんは則ち是の如からず。設たとへ空處無きも亦色を見ることを得ること、猶し魚等の水中にて色を見るが如く、鬱單越人うつだんごつじんの、山障の外に於て、徹し見て無礙なることも亦復是の如し。

復次に、修行者、隨順して身を觀するに、閻浮提むんぶだいの人の耳に聞く所の愛・不愛の聲の如きは、近ければ則ち了了あきあきに、遠ければ則ち了了あきあきならず、大いに遠ければ聞えず。鬱單越人うつだんごつじんは則ち是の如からず。

【四】鬱單越(Uttarakuru)鬱單曰とも書き、北俱盧洲と云ふ。勝處、勝生、最上などと譯す。須彌四洲の一なり。鬱單越及び弗婆提の國土の莊嚴、國人の風貌等に關しては以下七十卷に至るまで所々に詳しく説叙せらる。

卷の第六十四

身念處品第七之一

爾の時、世尊、王舍城に遊び、那羅帝婆羅門の聚落に在して、諸の比丘に告げたまはく「我れ今汝の爲に身念處を説かん。初善く中善く後善く、善き義、善き味を純備へて具足する清淨の梵行なり。所謂、身念處の法門とは、汝今諦に聽きて善く之れを思念せよ、當に汝の爲に説くべし」と。諸の比丘言さく「唯然り世尊、願樂くは聞かんと欲す」と。佛、諸の比丘に告げたまはく「云何なるを名けて身念處の法門と爲すや。所謂、内身を身に循ひて觀す。比丘觀じ已然んには、則ち魔の境界に住せず、能く煩惱を捨つ。實の如くに身を觀じ、既に知見を得て是の如き法を證せん、我れ、是の人は涅槃に攝めらると説かん。是の如き比丘は實に身を見已りて、諸の惡の惱亂する所と爲らざるなり。能く眼・耳・鼻・舌・身・意の内染及び外なる色・聲・香味・觸法を斷じ、是の如くに循身觀にて能く涅槃に至る。是の如き比丘は眼に色を見ると雖も分別を生ぜず、染欲と歡喜の心を起さず、實の如くに身を觀じて「此の身は唯髮毛・爪齒・薄皮・脂血・筋肉・骨髓・生藏・熟藏・黃白・痰癘・冷熱・風病・太陽・小腸・屎尿・不淨・肝膽・腸胃・脂髓・精血・涕唾・目淚・頭頂・鬻護有り」と。是の如くに身を觀じ、隨順して念を係く。若し是の如くに念ぜんには、則ち色・聲・味・觸の外境界に著せざるなり。初に眼色を觀ぜんに、實の如くに眼を見て「但是れ肉搏にして、四大の成す所なり。云何んが行する者ぞ」と。實の如くに眼を觀じ、眼根を觀じて「此の肉の堅分は、内に覺法有り。是れを眼根肉搏の内境界と名くるなり」と。復眼根の肉搏の中を觀じて「内に覺法と目の淚濕等有り。是れを眼根の肉搏の中の内水界と名くるなり」と。復眼根の肉搏の中を觀じて「内に覺法有り、暖有り熱有り。是れを眼根の肉搏の中の内火界と名くるなり」と。復眼根の肉搏の中を觀じて「内に

【一】王舍城(Pataliputra)。中印度摩伽陀國の都城、今のラジニギルに當る。釋尊の最も多く傳道したまひし所なり。

【二】身念處。四念處(四念住)の一。四念處とは、妄見にて執著する對象となる身・受・心・法の四法を、能觀の智を以て不淨、苦、無常、無我と觀じて常、樂、我、淨の四顛倒見を破するにて、今身念處はこの第二にあたる。

【三】四大。一切の色法を構成する四種の要素。即ち地、水、火、風これなり。

蓮花池の岸に於て、復異樹有り、名けて鳥樂と曰ひ、樹の勢力を以て、鳥、樹上に在り。若しは天、池に入りて遊戯して樂を受け、五樂の音聲にて互に相ひ娛樂し、或ひは寶樹に昇り、或ひは天鳥に乗りて、天衆の愛す可き處を觀ることを爲すに、其の所念の隨に鳥其の前に在り、即ち鳥の上に於て大宮殿有り、多く流泉有り、衆の蓮花池、枝の蔭なる宮室を皆悉く具足す。復異鳥有り、諸の天衆の爲に偈を以て頌して曰く。

戒を持する人は安隱にして、戒を破らんには久しき壽勿し、寧ろ下賤の身を受くるも、地獄に入るを欲せざれ。智者は次第に行じ、漸漸念念に修め、我が見垢を淨め治むること、工匠の金を鍊るが如し。

莊嚴れり。是の如き種種雜蓮花池は、其の水は清涼にして其の味甘美く、甚だ愛樂す可くして、多く蓮花有り、天の色、妙なる香、衆の相を具足し、新生の天子は天女の衆と共に、五樂の音聲にて五欲の樂を受く。種種雜色蓮花池の岸に、諸の林樹有りて花池を圍遶き、樹の莊嚴を以て百倍に殊勝なり。其の樹は雜花の莊嚴を具足し、其の一切の花は、根従り條に至り、青・黄・赤・白・紺色の衆花を皆悉く具足す。其蓮花池は大光明を出して十由旬に滿ち、多く衆鳥有りて美妙の音を出せり。蓮花池の岸に復林樹有り、名けて宮殿と云ふ。天は善業の故に大勢力有り、若し天、樹に昇りて宮殿を生ぜんことを念はんに、念ふが隨に即ち成じ、善業を以ての故に七寶の花葉は化して宮殿と爲り、七寶にて莊嚴られ、多く河池・園林・山嶽有りて、處處に嚴飾せられたる宮殿有り、此の宮殿に昇り、衆寶にて身を嚴り、諸の天女と共に歌舞し遊戯して或ひは虚空に飛び、夜摩天の住する所の諸地を觀て意の隨に遍く觀る。是の如き等の花は、岸の樹の力の故なり。復種種雜色の花池有り、池の上復異樹有りて摩尼音と名け、種種の衆鳥は以て莊嚴を爲し、樹の勢力を以て、若しは諸の天衆花池にて遊戯せんに、微風吹動しては互に相ひ振觸れて妙なる音聲を出し、寶珠は花の如くに樹従り墮ち、光虚空に遍くして閻浮提の日月の光明の如く、虚空中の寶珠の光明も亦復是の如し。

蓮花池の岸に復異樹有りて授飲食と名く。若し諸の天衆花池に遊戯せんに、天の善業を以て、樹の果中従り天の美飲の色・香・味を具ふるを出し、天子之れを飲まんには十倍に悅を増し、醉亂有ること無くして、諸の天女と共に歌舞し遊戯す。復林樹有りて須陀食を出し、業の如くに得らる。池の岸邊に於て復異樹有り、葉歌音と名く。若し諸の天衆此の池に遊戯せんに、善業を以ての故に微風來り吹きて快樂を受け、風の樹葉を吹きては互に相振觸れて妙なる音聲を出し、天女の音の如くにして分別す可からず、一切の諸の樹の出す所の音聲も亦復是の如し。

【云】 曰の字、宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

龍も亦然り。酒を嗜み女色に著し、諸の境界を食る、躁擾き懈怠の心は、是れ放逸の根の芽なり。

是の如くに流水行鳥、放逸なる天の爲に是の如き偈を説けり。爾の時天衆、此の偈を聞くと雖も覺知らず、境界に害せられ、歌笑し遊戯して光明林に入る。其の林は愛す可く、枝葉遍く覆ひ、多く種種の樹林有り、鬱茂して甚だ愛樂す可し。時に諸の天衆、新生の天子と共に、五樂の音聲にて遊戯して樂を受く。園林中に於て、及び笏筭樹、種種の流水、蓮花の林池あり、種種の地處は樹枝に蔭覆せられて猶し宮室の如く、種種の林中に種種の意樹あり、種種の山谷に、七寶の光明にて種種に莊嚴られたる殊勝なる宮殿あり、昔未だ見ざる所にして、天衆之れを見て希有の心を生ず。況んや新生の天子をや。是の如きを新生の天子は皆悉く遍く觀て、天女の衆と林間に遊び、新境界に於て極めて渴愛を生じ、欲の火に燒かれ、放逸にて煙と爲り、天女に圍遶かれて、燒け已りて復燒け、園林中に於て處處に遊行し、無量の愛の力にて境界に燒かれ、久しく天女と圍遶かれて樂を受け、復種種雜蓮花池に向ふ。其の蓮花池は愛す可きこと比無く、所謂、種種の雜れる色にて、鉢頭摩花に毘琉璃の葉あり、眞金を莖と爲し、赤蓮花實は以て其の臺を爲し、白銀を鬚と爲し、青因陀實は以て衆蜂を爲して、花池を莊嚴れり。復蓮花有り、白銀を莖と爲し、青因陀實は以て其の臺を爲し、眞金を莖と爲し、青因陀實は以て其の臺を爲し、白銀を鬚と爲し、赤蓮華寶の蜂にて、以て莊嚴を爲せり。復蓮花有り、莖・葉・鬚・臺一切皆赤く、赤蜂ありて莊嚴れり。復蓮花有り、銀莖・銀葉・銀鬚・銀臺・銀峰にて莊嚴れり。復蓮花有り、一切青色にして青蓮花の如く、青葉・青莖・青鬚・青臺・青蜂にて莊嚴れり。

復蓮花有り、種種の雜れる色にて、一一の蓮花に七寶間錯り、種種の相貌、種種の妙なる香、種種の色にて以て莊嚴り、所謂、青・黃・赤・白・紺色にて莊嚴り、種種の衆くの葉、衆くの蜂にて

【三】龍(ノボス)。那伽と書く。

【三】竹に似た樹木か。竹を樹として、列べる竹を指すか。不明。

【三】華の字を加へしは、宋元・明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

生の天子は諸の天女に圍遶めぐらかれて諸の天衆を觀るに、種種に遊戯し、或ひは遊戯して榛の林に在る有り、或ひは山峯に在りて遊戯せる有り、或ひは天子有りて、諸の天女と共に種種に莊嚴り、虚空の殿に在りて遊戯し娛樂し、或ひは天子有り、手にて樹枝に攀たぢ、歌舞し戲笑して五樂の音聲あり。爾の時、新生の天子は諸の天衆の是の如くに遊戯するを見て心に歡喜を生じ、天女に圍遶めぐらかれて共に天衆に入り、和合して遊戯し、新生の天子は、諸の天女と共に遊戯して樂を受け、自業に相似して五欲の樂を受く。久しく樂を受け已りて林中りんちゆう從り出で、復種種の寶にて莊嚴かざられたる山に昇り、共に相娛樂し遊戯して樂を受け、或ひは流泉に在り、或ひは園林、種種の寶石にて莊嚴かざられたる山の、清涼なる泉水以て莊嚴かざを爲せるに在りて、其の中に遊戯す。時に諸の天衆、心に放逸を行ぜり。爾の時、一の天に遊戯せる鳥有り、流水行すいすいと名く。放逸なる天の爲に偈を以て頌して曰く。

種種の業を以ての故に、樂の果報を受くるも、天中にて報を受け已りては、業盡つきて當に還り退くべし。愚人は現に樂を得ては、怖畏を觀ぜざれど、後に衰惱の至ることを得んには、爾の時乃ち業を知らん。放逸の縛しる所ならんには、苦樂等くらくとしくして異なる無く、天業盡くるを以ての故に、後に大悔心を生ぜん。放逸は毒の害の如ければ、是の故に應に捨離しつりすべし、放逸諸の天を害さひては、將つりて地獄に入らん。和合せんには欣慶を生ずるも、離別せば則ち大苦あり、和合に必ず離有りて、一切の法は是の如し。世には一法として、生有りて壞せざる有ること無く、一切は生滅する法にて、出沒する法なることは是の如し。見る所の諸の天に隨ひて、天の樂を受くるも、放逸の毒に迷はされて、一切皆歸り滅せん。一切の放逸なる樂は、初に謂ひて愛す可しと爲すも、後衰惱の至るを得んには、乃ち大なる怨爲うたがるを知らん。放逸にて女色に著するを、智者は大なる怨と説き、色に著しては身命を喪はんこと、修羅しゆらも

【三】修羅。詳しくは阿修羅 (Asura)。前巻の註を見るべし。

邪淫を捨離し、「我れ先に女人と歌笑し舞戯せしも、是れを不善と爲し、當に惡道に墮すべし」と。是の義を以ての故に、本習ひし所に於て貪欲を生ぜず、覺觀の心にて本習ひしを念ぜず、歌舞し戲笑するも、若し心に念を生ぜんには、尋ねて即ち斷除す。是の因縁を以て、命終りては種種雜地に生れ、既に此の地に生れては、善業の果成りて五欲和合せり。天子生れ已らんには、善業を以ての故に、一切の天處に雜寶の光明自然に生ず。所謂、無量の金剛の山峯に種種の光色ありて、毘琉璃・因陀青寶・大青寶王・車乘・頗梨・赤蓮華寶及び餘の種種の如く、百千の光明天處に週遍くして、初めて是の如き種種の光明を見るに眼識樂著し、本未だ曾て見ずして、之れを見んには樂著す。種種の音聲、歌の衆の樂音は譬喩す可からず、復種種の天の妙なる香を聞くに、新生の天子は初めて是の如きを爲し、三種の境界は無等無比にして心に樂著を生ず。光明の林を退くに、諸の天女の衆、新生の天子を見て林中従り出づ。其の、林の種種の光明にて莊嚴れることも是の如し。天子は善業の價を以て買ひて天女を得。時に諸の天女は種種に莊嚴り、皆悉く端正にして、種種の妙なる色あり、種種に歌詠して天樂の音聲あり。爾の時天子、諸の天女の爲に、始め愛欲無きも、其の心を引く故に歡喜の心を生じて諸の天女に近く。或ひは天女有り、手に樂器を執りて衆の伎樂を作し、歌の衆の妙音あり、復天女有りて、妙なる花の香を聞き、愛眼に笑を含みて以て天子を視、復天女有りて地上に在り、手に樂器を執りて妙なる音聲を出し、復天女有り、手に妙花を執り、馳せて天子に赴き、復天女有り、手に種種の入味の天飲にして色・香・味を具へ、酔の過を離るゝを繋げ、天子の所に到りて、蓮華の葉を以て、天上の味の色・香・味を具ふるを盛るに、飲み已りては、悅を増すこと十倍に過踰ぐ。是れを心第四の境界に著すと爲す。先に妙色に著し、次に聲・香・味なり。又復身に種種の樂しき觸を受くること意の念ふ所に隨ひ、之を念はんには即ち得。是れを新生の天子五欲の樂に著すと名く。爾の時、新生の天子、諸の天女と共に一切隨順欲林に往詣る。爾の時、新

て懈怠けんたいなる人は、惡知識いんしやくしんに親近しんじんして、是の人命じんめいの果無くちきこと、種こを沙鹵さろに植うゑしが如し。法を見聞けんもんすることを遠離えんりせんに、是の人則ち盲人まんげんと爲し、若し人法じんぽうを遠離えんりせんに、非法ひぽうを行なひ是の人は藥やくを捨離しつりして、疾病しつびやうを攝取しやくしゆす。若し人善友ぜんゆうに近ちかかに、無量むりやうの法ぽうを増長ぞうぢやうすること、猶なほし大雨おほいを注そぎては、河流かへう皆增長けいぞうするが如し。法ぽうに順じゆんする寂靜じやくじやうなる行ぎやうを、夙つとに興きやうして法ぽうを念ねんぜんに、必ず定さだんで安樂あんらくを得え、放逸ほういつの爲ために誑たぶらかされず。既に智ちの功德こくどくを知りて、智者ちしやは應おつたに修行しゆぎやうすべく、是の無智むちに非あらざる者は、安樂あんらくを受うくることを得え。

是の如ごとくに善時ぜんじ鵝王がわう、諸しよの天衆てんしゆは善根ぜんこんを種こゑんが爲ための故ゆゑに、數數しゆしゆ爲ために利益りやくする法ぽうを説ときて、無利益むりやくを斷たじ、佛ぶつの經法きやうぽうを誑たぶらかけり。爾そのの時とき天衆てんしゆ、既に法ぽうを聞き已まりて敬重けいぢゆうの心こころを生おこじ、歡喜くわんぎの心こころを生おこじて放逸ほういつ薄少はくしやうなるも、天てんと同業どうごふの故ゆゑに、復また異處いじこに至いたりて天てんの樂らくを受うく。善時ぜんじ鵝王がわうは、既に迦那迦牟尼かになか牟尼の説ときたまふ所の經きやうなる名集なむじふ無量むりやう功德こくどく聞法もんぽう堅固けんこ經きやうを以もつて、諸しよの天衆てんしゆの爲ために具ぐに演說えんせつし已まりて復また異處いじこに至いたり、思惟しゆいして法ぽうを念ねんす。樂行らくぎやう地ぢの天てんは五樂ごらくの音聲おんせいにて五欲ごよくの樂らくを受うけ、乃至乃至善業ぜんごふを受うけ盡つくくしては、惡業あくごふを以もつての故ゆゑに地獄ぢやく・餓鬼がき・畜生ちよくせいに墮おし、若しは餘業よごふ有りて人と同業どうごふならんに、人中じんぢゆうに生うれ、大富たいふ安樂あんらくにして善ぜんく禁戒きんけいを持もじ、常じやうに法ぽうを聞きくことを樂たのみて第一だいいちに法ぽうに順じゆんじ、智慧ぢぢと正見ぢぢあり、或あるひは王者わうぢやと爲なり、或あるひは大だい臣ぢんと爲なる。餘業よごふを以もつての故ゆゑなり。

復また次に、比丘びくしゆ、業ごふの果報くわくぱうを知りて夜摩天やまたん所住しよぢゆうの地ぢを觀かんじ、彼かれ開慧かいぢを以もつて、夜摩天やまたんの種種しゆしゆ雜ざつと名なくる地ぢを見るみる。彼かれ見るみるに人有じんありり、善業ぜんごふを造作ぞうさくして身み・意い善ぜんく、正見ぢぢ・正命ぢぢにして遍あまく善行ぜんぎやうを行なひ、直心ぢぢにして實じつを樂たのみ、殺ころさず盜たうままず、邪淫じやいんを遠離えんりし、若しは夢中むぢゆうに在ありて女人にんぢゆうを見るみるも、心親しんぢ近ちかまず、實じつも亦また念ねんはず。濁心ぢやくしんの覺觀かくくわんならんに、『我が此こゝの身みの如ごときは、邪淫じやいんを捨しつつるを以もつて善ぜんき果報くわくぱうを得え、邪淫じやいんを離りるが故ゆゑに天上てんじやうに生うることを得えて、諸しよの天女てんぢゆうと圍遶ゐらうかれて樂らくを受うけん』とて、女人にんぢゆうを捨離しつりするも天女てんぢゆうを憐望れんがうみ、天女てんぢゆうを求もとむるを以もつて濁梵行ぢやくほんぎやうと名なく。天てんに生うれんことを望のぞむが故ゆゑに

【三〇】 植の字、宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

【三一】 受の字、宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

を作さず。法を聞かんには能く總持し、法を聞かんには惡を造らず、法を聞かんには業の果を知りて、終に涅槃を得ん。法を聞くが故に法を知り、法を聞くが故に佛を信じ、智者は法を聞くが故に、能く衆苦を解脱す。正法を聞くを以ての故に、能く眞法の相を知るなれば、是の故に智有る者は、當に勤めて正法を聽くべし。如來の法を説きたまふを聞かんには、能く生死を離れ、三種の愛を斷離して、無盡處に至ることを得ん。正法を聞くを以ての故に、四法の因縁と、及び諸法の生滅を知り、法を聞かんには皆能く知る。正法を聞くを以ての故に、陰・界・入を了知す。是の如き二種の相を、智者は應に修行すべし。第一の大力なる過は、一切の生死を縛り、正法を聞くを以ての故に、一切の皆能く知る。惡の大力を以ての故に、一切の生死を縛り、正法を聞くを以ての故に、一切の皆能く減す。一切の轉ずる相と、一切の轉ぜざる相に於て、勝れたる法を聞くを以ての故に、一切を皆能く知る。若し死時至らんと欲しては、大苦惱を受くるも、念じて法を聞くを以ての故に、死の苦も亂す能はず。智慧を聞くを以ての故に、諸の煩惱の樹を燒き、智の火燒くを以ての故に、滅し已りて復生せず。法を聞いて放逸ならざらん、則ち一切の樂を得、法を聞くが故に安隱なれば、是の故に應に法を聽くべし。正法を聞くを得已りて、智と及び耆老に近かんには、能く無上の處に到り、永く老病死を離れん。聞くが故に惡を造らず、聞くが故に法行に順じ、法を聞くが故に苦を離れ、法を聞くことは最も第一なり。正法を聞くを以ての故に、三業清淨なることを得るなれば、若しは清淨を求むる者、當に勤めて正法を聽くべし。聞法に依るを以ての故に、堅固にて勤めて精進し、是れ則ち速に廣大なる三界の海を渡る。聞法の財富は、世間に最も第一なり、多く財あるも義を知らざれば、智者は貧窮なりと説かん。師長を遠離せんには、正法を聞く財を失ひて、是の人命の果無く、惡の爲に破壊されん。放逸に

【四】總持。即陀羅尼(Dhāraṇī)のこと。譯して能持、能遮、總持と云ふ。善法をあつめ持して散失せしめざること。

【五】四法。或ひは四諦の苦、集、滅、道を指したるものならんか。

【六】陰(Khandha)。新譯には蘊に作る。五蘊(色・受・想・行・識)のこと。

【七】界(Dhātu)。六根、六境、六識の十八界のこと。

【八】入(Avāṅga)。新譯には處に作る。十二處(六根と六境)のこと。十八界中の六識を六根にをさめて十二處を立つるなり。

以上、一切の諸法を三通りに色心に分類したるものにて、之れを三科と云ふ。

【九】三業。身、口、意の三業。

を聞くことを得んには善業を行ふ故に、命終らん時に於て心に悔を生ぜず。聞く所の義に隨ひ、既に聞くを得已りて憶念オクニエン惟ニし、既に思惟シユイし已りて佛・法・僧に於て淨心を増長し、心淨シンジユウなるを以ての故に血則ち清淨、血清淨の故に顔色清淨なり。身心淨なるが故に、命終らん時に於て善道を見るに、白き光明の愛す可き天處有り、生處を見るが故に轉淨テウジユウ心を増し、其の淨心に隨ひて、佛・法・僧を信じて轉勝テウショウ處ニに生る。若しは四天王の業を作さんに、心淨信あるが故に、第二天ニに生れ、若しは三十三天の業有らんには夜摩天ヤマテンに生れ、若しは夜摩天の業有らんには兜率陀天トウソツダテンに生れ、是の如くに展轉して乃至ニ他化自在天タカシヤクテンにして、心淨なる力を以ての故に轉勝處テウショウジユウに生る。是の如きの一切は法を聞くことに由り、若し法を聞くことを離れんには終に得る能はず。若し正法を聽かんに、命終らん時に於て救を爲し歸を爲す。是れを第三十一の聞法の功德と名く。

復次に、第三十二の聞法の功德とは、何等の功德なりや。法を聞くことを以ての故に終に涅槃を得。聽法の功德は、一切の功德に於て最勝最上なり。何等は勝上なりや。所謂、涅槃なり。正法を聽くを以て、修習増長し説の如くに修行して、實の如くに成就し、其の人、能く煩惱を斷じて涅槃ニに到る」と。是の如くに善時ゼンジ鵝王ガウ菩薩ボサツ、夜摩天ヤマテンの放逸なる行を斷ぜん爲の故に、無等の音を以て眞法を説き、天衆テンシュウ皆希有キウウの心を生ぜり。爾の時ニ天衆テンシュウ、佛法を聞く故に心清淨を得、一切の天衆は白鵝王ハクガウに言さく「此の天中に於て汝は是れ天主なり。智慧と辯才の力有るを以ての故に。我れ等天衆は猶なほし畜生の如し。放逸を以ての故に境界を樂み、常に欲愛の爲に自ら心を害する故なり。鵝王の音聲は、我れ等の歌音の及ぶ能はざる所なり」と。爾の時ニ鵝王ガウ菩薩ボサツ、正法と相應する頌じゆを説きて曰く。

法を聞くを以ての故に、能く惡法を止め、惡法を離るゝを以ての故に、常に安隱あんいんの處を得ん。

正法を聞くを以ての故に、其の心清淨しんじやうじゆウなることを得、能く心をして安住あんぢゆせ令めて、衆の惡業

【二】念の字、宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。

【三】第二天。六欲天の第一を四天王と名け六欲天中最下に位し、第二を忉利天トウリテン（三十三天）第三を夜摩天ヤマテン、第四を兜率陀天トウソツダテン、第五を化樂天と名け、第六は他化自在天タカシヤクテンにて、六天の最高にあり、故に第二天とは三十三天のことなり。

【四】他化自在天タカシヤクテン（Paranirmita-svayambhuvanika deva）。六欲天の最高に在り、天主大魔王住せり。此の天は他人の樂人を自在じざいにかりて己が樂となす故此の名ありと云ふ。

し念にて、所謂死を念す。常に死を念するを以て則ち怖畏を懐き、怖畏を以ての故に惡業を作さず、設へ美色を見るも、念じて分別せず、諸の樂音を聞くも亦憶念せず、若しは樂香を聞くも、貪らず樂まず、亦憶念せず、若しは舌に味を得るも、貪らず樂まず、亦憶念せず、若しは身に觸を得るも、貪らず樂まず、亦憶念せず、意に思惟する法を貪らず樂まず、亦憶念せずして、是の如き一切の有網を斷離す。是の如き人は、死を怖畏る、が故に、諸の世間悉く堅固無く、一切皆苦にして、一切に我無く、一切皆空なるを觀じ、實見の人は、一切の處に於て、若しは天若しは人に著心有ること無し。何に況んや地獄・餓鬼・畜生にをや。五道の中に於て、悉く怖望を斷じて解脱を得、一切の生死の苦中に於て復欣樂せずして怖畏し厭離し、厭離を以ての故に解脱を得、解脱智を得ては「我が生已に盡くるも梵行已に立ち、所作已に辨じて後有を受けず」と。若し法を聞くことを離れんには、是の如き梵行立つ等の厭離の功德を得ず。是の故に應に勤めて正法を聽受すべし。師長に親近し供養して法を聽かんには、現在未來の二世を利益す。所謂、善知識に近き、正法を聽聞する此の二法を以て、安隱を得。是れを第二十九の聞法の功德と名く。

復次に、第三十の正法を聞く功德とは、何等の功德なりや。所謂、法を聞くを以ての故に死時に悔いす。死を念することを修むる者は、若し過の起ること有らば則ち能く速に斷ず。若しは三種の垢なる貪・瞋・癡起らんには、生死の因縁にして、死を念するを以ての故に則ち能く斷除し、三垢を斷ずるを以て、生れず死せず、退かず出でず。異法有りて、能く此の法を斷ずること無し。聞法の功德力を得るを以ての故に是の如き法を得、一切の安隱なる功德の中、聞法の功德は第一根本なり」と。爾の時、鵝王菩薩、迦那迦牟尼の説きたまふ所の經法を説き、天衆の爲に説きて正法と相應せり。是れを第三十の聞法の功德と爲す。

「復次に、第三十一の聞法の功德とは、何等の功德なりや。所謂、死時に心悔恨せず。若し正法の義

【10】 迦那迦牟尼 (Kanakasamuni)、前卷の終りに出でたり。金山人と譯し、過去七佛の第五なり。

に生れて諸の天身を受けん。是れを第二十五の開法の功德と名く。

復次に、第二十六の開法の功德とは、何等の功德なりや。所謂、如法の富樂なり。持戒を同ふせる者、豪富の人は悉く來りて親近し、持戒を同うせるが故に迭に相齋遣し得る所の財物は人を害して得るに非ず、他人を壓するに非ずして、法に順じて財を得、法行人に施して、其の人の布施の功德は上上に増長して二世を利益し、二世を安樂にす。開法を以ての故に此の功德を得。是れを第二十六の開法の功德と名く。

復次に、第二十七の開法の功德とは、何等の功德なりや。所謂、智慧にて懈怠を遠離す。正法を聽くを以て懈怠の過を聞くに、懈怠を以ての故に、諸の世間・出世間の法に於て義成就することを得ず。法を聞くを以ての故に懈怠を捨離し、一切の所作を常に勤め精進みて、正念にして亂れず。懈怠を離るゝ人は、一切の所作を方便にて疾く成じ、時の所作の如き、法の所作の如きの一切を成就して二世を利益す。若し懈怠を離れんには、常に勤め精進みて一切の所作を皆悉く究竟め、一切の發心せるを成辨せざる無し。若し本懈怠ならんも、正法を聞くが故に懈怠の過を知りて、速に之れを捨離すること刀火の如し。懈怠を以ての故に能く一切の世間の作業を破壊し、懈怠の過を聞かんには、一切の義利皆成就することを得。正法を聞く功德力を以ての故なり。是れを第二十七の開法の功德と名く。

復次に、第二十八の開法の功德とは、何等の功德なりや。所謂、次第に法を聞きて報恩の心を起し、他の恩分を知るなり。正法を聞く中、報恩を説くが故に報恩を思念し、報恩を知るが故に、一切の親友に悉く皆堅固にして、功德を以ての故に、一切の怨家に猶し親友の如し。若し人少恩を常に念じて忘れず、恩を知り恩を報ぜんには大功德を得。是れを第二十八の開法の功德と名く。

復次に、第二十九の開法の功德とは、何等の功德なりや。所謂、修行して死を念じ、第一の勝れ

聽く者、三業善なるが故に天・人中に生れて第一最勝の富樂を得、壽命は長遠にして既に涅槃を得。是の如き一切の諸の大功德は皆聽法に由り、餘の能く得るに非ず。是の故に法を聞くことは第一の安隱なり。是れを第二十二の開法の功德と名く。

復次に、第二十三の開法の功德とは、何等の功德なりや。謂はく、法を聞く者は一切の人に讃歎せらる。持戒の功德及び多聞、調伏、勝慧ありて、一切の世人に皆共に恭敬し、禮拜し、聞訊せらる。一切の人に於て美言直心にして、是の如き人は功德と相應し、微塵の惡に於て常に怖畏を生じ、衆に知識せられて一切に讃歎せられ、若しは惱亂を得るも衆人救護し、是の法を聞く者は世に讃歎せらる。是れを第二十三の開法の功德と名く。

復次に、第二十四の開法の功德とは、何等の功德なりや。所謂、諸天に護念せらる。法を聞く人は善業と相應し、身に善業を行ひ、口に善業を行ひ、意に善業を行ひ、此の功德を以て諸天に護らる。次の人を以ての故に衆人安隱にして、此の人命終らんには、無量の人衆利益を得ざれば、此の人を護る故に。魔衆は損減し、正法増長す。此の因縁を見て諸天は晝夜に守護し、常に其の後に從ひ、其の作す所に隨ひて一切を成就せしむ。天の恩力の故に、善業を以ての故に互相に因を爲して、彼れの作す所の業は既に成就を得、作す所の業に隨ひて、轉修めて増廣し、一切の善業を皆成就することを得て、是の如く次第に二世を利益す。是の如くに開法の功德は即ち是れ第一の安隱藏たり。是れを第二十四の開法の功德と名く。

復次に、第二十五の開法の功德とは、何等の功德なりや。所謂、一切の憶念すること皆成就を得。是の法行に順ずる智慧の人は、持戒、布施の現前の業報の一切を憶念するに、皆成就することを得、其の作す所に隨ひて皆成就を得て能く劫奪ふこと無く、若しは其の作す所は成就を得易くして法の如くに受用し、五種の難を離れ、正命清淨にして他の攝と爲らず、身壞れ命終らんには、善道

【九】魔。詳しくは魔羅(マラ)に引く。又末羅とも書き、殺者、能奪命、障、障礙、擾亂、破壞、惡者等と譯す。五魔等の種類あり。又欲界第六の他化自在天は良く人の心身を惱亂して善法を妨げ、修道の妨げを爲すを以て、之れを指して魔と云ふ。

ふまで常に當に父母の福田を供養し、正行正意もて一心に敬重すべし。是れを第二十の聞法の功德と名く。

復次に、第二十一の聞法の功德とは、所謂、業の果報を知るなり。業の果報を知るが故に異法を樂まず。正法を聞くを以ての故に能く業の果を知り、若しは不善を念ぜんには不善の念を知り、若しは心に善を念ぜんは心善を念ずることを知り、實の如くに業の果報を知る。若しは心縁じて不善の法を念ぜんに、不善の念の、後に不善・不愛の果報を得て地獄・餓鬼・畜生に墮つることを知り、是れを知るを以ての故に、復不善の心を生ぜず。此の不善を以て、定んで知るに、當に不愛の果報を得て地獄・餓鬼・畜生に墮つべし。是の如き惡業の縁を作すを以ての故に、我が身必ず當に地獄・餓鬼・畜生に墮つべし」と。此の三種の業を、正法を聞くを以ての故に了知するを得るにて、餘の能く知ること無し。是の故に智者は、乃至命を失ふまで常に應に法を聽くべし。若し常に法を聞きて善業を修習せんには、則ち不善の業を造作せざらん。是れを第二十一の聞法の功德と名く。

復次に、第二十二の聞法の功德とは、何等の功德なりや。所謂、能く長命の業を集め增長す。正法を聞く故に業の果報を信じ、殺生・偷盜等の業を作さず、何れの善業に隨ふも樂み修めて増廣し、天・人中に生れて壽命を延長す。正法を聞くを以て樂み修めて増廣し、是の故に復此の如き功德を得て壽命を延長するなり。此の聞法の因縁を以て天・人中に生れ、若しは天中に生ぜんに、餘の天衆に於て最も長壽と爲し、飲食し遊戯して第一の樂を受け、聞法を以ての故に、若しは人中に生ぜんに、種種の色・力・財富・長壽あり、好き國土に生れて常に正見を習ひ、正法を聞くを以て、樂習し増廣して必ず苦を出づることを得。若し人、能く善心を以て法を聽かんには、第一の福德にして、法を聽かんが爲の故に若しは一步を行くに皆賀福を生ず。正法を聽く者は、常に行きて法を聽きて善き身業を得、聞き已りて讀誦して善き口業を得、聞き已りて意淨くして意の善業を得、是の法を

一心に正法を聽受し、聞き已りて修行し修習して增長すべし。是れを第十七の聞法の功德と名く。復次に、第十八の聞法の功德とは、何等の功德なりや。所謂、正法を聞くが故に善友に親近し善人を供養し、愛重し尊敬す。思惟し籌量して善友に近くが故に大功德を得、若し悪友に近かんには多く過咎を招かん。餘の法有りて、善友に近くことを得ること正法を聞くが如きこと無し。正法を聞くが故に善友に近くことを得、是の故に第一の 梵行とは、謂はく善友に近くなり。是れを第十八の聞法の功德と名く。

復次に、第十九の聞法の功德とは、何等の功德なりや。所謂、正法を聞く故に能く姦・詐・慳・嫉の心を斷ず。若し善友に近づかんには、何の功德を得るや。善友に近づくが故に勝れたる功德を得、所謂、能く姦・詐・慳・嫉を斷ず。法を聞くを以ての故に、能く實の如く業及び果報を信すればなり。若し衆生有りて姦・詐・慳・嫉ならんに、身壞れ命終りては惡道に墮し、或ひは餓鬼に墮し或ひは地獄に墮す。若し本多く姦・詐・慳・嫉を行ぜるも、正法を聞くを以て即ち能く捨離し、之れを毀ちて行はず、先に作せし所に於て厭離して過を悔い、他の姦・詐を見しは勸めて作さざら令め、他をして厭離して本作せし所を悔い令め、善道に住せむ。正法を聞くを以て此の功德を得、人天中に於て第一に堅固なりとは、謂はく正法を聞くなり。是れを第十九の聞法の功德と爲す。

復次に、第二十の聞法の功德とは、何等の功德なりや。所謂、法を聞き已りて父母を供養す。業の果報を知り、福田を知るに、是の上功德の第一の福田は、所謂、父母にして、是の業の果報の因縁を知りて能く爲に種種に父母を供養し、多く敷具、病瘦の醫藥、須ふる所の具を設け、其の所作に隨ひて父母を供養せんには能く梵福を生じ、福德を以ての故に後に涅槃を得ん。又法を聞きて父母を供養せんに、衆人に愛せられ、現在世に於て一切の人の讚歎する所と爲り、命終りて後善道に生れて諸の天身を受け、聞法力の故に終に涅槃を得。是の故に智者は是の功德を知り、乃至命を失

【七】 梵行(Brahmचार्य)。五行の一。梵は清淨の義。清淨なる修行道のこと。

【八】 福田(Phupphaksetra)。田に稻を蒔けば收穫ある如く、佛比丘、父母等に供養せば、供養の報あり。依つてこれ等福德を生ずべきものを田に喩へたるなり。

じ、法を聞くを以ての故に非法を捨離し、法を聞くを以ての故に智慧を得。既に是の如き聽法の功德にて能く生死を出するを觀じ、應當に精勤し、乃至壽を盡くすまで勤めて正法を聽くべし。是の如き聽法は、第一の救護、第一の歸依にして、能く有海を出す。是れを第十五の聞法の功德と名く。

復次に、第十六の聞法の功德とは、何等の功德なりや。所謂、能く不善の因縁を避く。若し不善の縁生ぜんに、惡道の畏を觀じ、智慧の人は、觀じ已りて捨離して生死を怖畏る。若しは不善の縁生ずれば避けて行はず、生ぜざらんが爲の故に勤行・精進し、戒を持し智慧（をおさめ）、若しは貪心を生ずれば應に布施を行すべく、若し慳心を生ぜんに不貪もて之れを滅し、智慧の心を以て愚癡を破壊す。如實の見を以て不善の觀を滅し、正見の心を以て邪見を斷じ、正しき覺觀を以て妄分別を斷じ、若し樂覺を起さんに當に衆苦を觀すべく、若し實覺を起さんには當に空觀を修むべく、若しは我覺を起さんに當に無我を觀すべし。是れを如實の對治の覺觀と爲す。若しは因縁生ぜんに、之れを遠離して、若しは細若しは塵中、當に之れを斷滅すべし。一切の不善の因縁の生ぜし者も、正法を聞く故に能く遠く之れを避け、若し法を聞かざれば則ち避くる能はず。一切の聞法は安隱藏の如し。是れを第十六の聞法の功德と名く。

復次に、第十七の聞法の功德とは、何等の功德なりや。所謂、放逸の人、法を聞くを以ての故に惡覺觀を滅して、不放逸を行す。不放逸の人は能く諸根を攝めて、一切の善法皆增長することを得、不放逸の人は能く一切の不善の法を斷ちて、其の人則ち涅槃を去ること遠からず、一切の安樂を得。何の因縁を以て放逸を斷ずるや。謂く正法を聞くなり。正法を聞く故に放逸の過を知りて則ち能く遠く避け、正法を聞く故に能く五根を調へ、五根を調ふる故に則ち能く心を攝めて善念を増長し、惡覺觀を滅し、善觀を以ての故に第一の樂を得。一切の煩惱は放逸を本と爲し、亦一切善法中の如きは、不放逸心を以て根本と爲す。正法を聞く故に放逸を斷除す。是の故に衆生、常に應に

復次に、第十二の開法の功德は異なる方便有り、是の大功德は解脱の因たり。何等の功德なりや。所謂、邪見の者をして正見に入らしむ。無始より流轉して生死の中に在り、惡法を聞きて邪見を攝受し、邪見を以ての故に地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若し正法を聞き、樂習し親近し、修めて増廣せ令め、能く邪見を捨て、正法を修行せんには、正智を増長して、第一の樂なる無誑の樂を得、法を聽くを以ての故に、修習して増長するなり。

復次に第十三の開法の功德とは、何等の功德を習修して増廣するなりや。所謂、若しは微少の善念ならざる心を生ずるも、即ち能く除き斷つ。若し欲覺を生ぜんに、不淨觀を修めて之を斷滅し、若しは瞋恚を生ぜんには慈心觀を修め、若しは愚癡の覺は、應當に十二因縁を觀察して對治し斷滅すべし。開法を以ての故に、對治の法を知り、不開の法に非ず。開法を以ての故に、尙是の如き三不善根の微細の覺觀を減す。況んや 隨煩惱をや。是の故に開法に是の大功德あり。是れを第十三の開法の功德と名く。

復次に、第十四の開法の功德とは、開法を以ての故に不善の覺觀の心を減すること、猶し日光の闇雲を減するが如くにて、智も亦是の如くに能く一切の不善の闇を減し、法をして増長せ令め、煩惱を損減す。正法を聞くことを離れんに、則ち能く減せず。是れを第十四の開法の功德と爲す。

復次に、第十五の開法の功德とは、所謂、善心をして増長せ令む。此の開法の功德力を以ての故に、唯不善の覺觀を減するのみに非ず、復善觀を増し、善觀を増すが故に則ち智慧を得、譬へば少火を草木中に置くに、風吹くを以ての故に火則ち増長するが如く、少善根生ぜんには亦復是の如くにして、智慧を以ての故に増長を得。若しは正法を聞き、其義を聽受して一念の善を生ぜんに、能く無量百千劫の生死を減して復生れざら令む。既に是の如き開法の功德を知りて當に勤めて法を聞くべし。異法有りて、能く此の護を任すこと無し。正法を聞くを以て、大施主を作して布施を行

【六】 隨煩惱。枝末煩惱、隨惑、枝末惑とも云ふ。根本の煩惱に隨從して起る煩惱のことなり。

憍慢を離れたらんには、之が爲に解釋し、其所説に隨ひて、種種に分別して其れをして淺易ならしむ、是れを第八の聞法の功德と名く。

復次に、第九の聞法の功德とは、正法を聞く者は善根の子を種かんこと、譬へば稻田の、封畔を壞せず、故つに清流を以てし、下種して芽を生ぜしむるが如く、法師の所に往いて正法を聽聞し、善種子を以て耳の田、心の封畔に種かんことも亦復是の如くにして、熟する時に至りては多く果實を收めん。地獄・餓鬼・畜生の飢・儉・惡怖より救ひ、三惡より救ふが故に一切の衆の苦を皆斷滅して曠野に住み、一切の怖畏の處を解脱するが故に無上寂滅の處に入ることを得。説法に因るが故に涅槃に入ることを得、説法の人は猶し世尊の如し。是の故に聽法の功德は生死中を出で、最も第一と爲す。常に當に親近し、專心に法を聽き、聞き已りて修行すべし。是れを第九の聞法の功德と名く。

復次に、第十の聞法の功德とは、云何なる功德なりや。既に聞法の種子を種きては、常に善く護持して其れをして成熟せしむ。若し人法を聞きては、善根の種子を常に習行する故に則ち成就を得ること、譬へば稻田の、時を以て下種し、日光の照を以て、時至りて則ち熟するが如く、法を聽ける人は諸の善根を種え、智慧の日を以て成就を得しむること亦復是の如し。是の因縁を以て、常に應に説法の處に詣りて、正法を聽受すべし。是れを第十の聞法の功德と名く。

復次に、第十一の聞法の功德とは、何等の功德を是の如きは成就するなりや。心の善根を以て常に法會に詣りて正法を聽聞し、法を聞きては受持し、思惟し攝受するに、是の因縁を以て心をして調伏せしめ、能く煩惱を滅す。煩惱盡くるが故に則ち解脱を得、解脱を以ての故に有爲の法を厭ひて、應に是の念を作すべし。「我が生已に盡くるも、梵行已に立ち、所作已に辨じて後行を受けず。一切は皆聞法の功德に由るなり」と。是の故に應當に常に正法を聽くべし。是れを第十一の聞法の功德と名く。

ふ。思に隨へば則ち未曾有の義を得、義を得るを以ての故に則ち能く諸の煩惱・結使を滅して、悉く能く無量の功徳を攝受す。戒・施・智慧と深心勝るるが故にして、戒・施・智の故なり。是れを第四の聞法の功徳と名く。當に樂みて習行し、修習して増廣すべし。

復次に、第五の聞法の功徳とは、善く聞き善く擧め、三種の業にて自ら堅固ならんことを修し、法を聞いて安住し、若しは沙門・婆羅門、若しは在家の人、某善男子正法に安住すと説かんに、説の如くに修行す。是の如くに修行して能く自ら住することを知り、又法を攝受し、其の住する所に隨ひて、能く百千億【四】那由他【五】劫の百千萬億億億の生死を滅し、能く無量百千萬億の地獄・餓鬼・畜生の苦を滅す。是れを聞法の大功徳聚と名け、修習し親近せんには多くの利益を得ん。説法の人には人に涅槃を示して佛、世尊の如く、法中に住せ令む。是れを聞法の第五の功徳と爲す。正法を聽くが故なり。

復次に、第六の聞法の功徳とは、何等の功徳なりや。所謂、自ら法中に住し、他人を建立して法器を成ぜ令め、生死を厭は令め、安隱の處を示し、苦・集・滅を説き、自他の二身に俱に福徳を生ず。他を利益するが故に大功徳を得、聞く所の法に隨ひて轉轉増長し、隨ひて煩惱を滅することも亦復是の如く、煩惱滅するが故に涅槃を得。正法を聞くを以て此の功徳を得るなり。是れを第六の聞法の功徳と名く。

復次に、第七の聞法の功徳を修習して増廣す。何等の功徳なりや。所謂、若し衰惱に逢ふも其の心退かず。業報を聞くが故に、衰惱に逢ふと雖も心退没せず、惡業を作さず、惡口を作さず、惡思惟せずして、不壞の勇猛あり。是れを第七の聞法の功徳と名く。

復次に、第八の聞法の功徳とは、云何なる功徳なりや。或ひは他人を見、或ひは他人を知るに、來り從ひて法を求め、或ひは法を聞かんことを求め、或ひは從ひて戒を求め、或ひは智慧を求めて

【四】 那由他 (Ayuta)。十萬を一洛又とし、十洛又を一百度洛又とし、十度洛又を一俱胝とし、百俱胝を一阿由多とし、百阿由多を一那由他とす。想像し得べからざる數なり。

【五】 劫 (Kalpa)。長時と譯す。拂石劫、芥城劫等の論あるが如く、非常に長き時間のことなり。

きて人に示して畢竟利益し、濁らざる心にて説き、清淨の心を以て衆生を利益して智慧に通達せしむ。是の法を聞き已らんに、佛の利益したまふ如くにて、生死中に於て解脱を得ん。是の法を聞く者、無始より來の流轉の生死に於て、未だ會て法を聞かず、法師の所に於て、初めて聞くことを得已りて希有の心を發す。生盲の人の、良醫を决きては世間の種種の色像を見ることを得、本見ざる所の種々の妙色を見已りて歡喜する如く、是の如くに衆生、無始より來の流轉の生死に於て、癡力に盲せられしも、正法を聞くことを得ては、覺分地に於ける種々の善根、愛す可き四聖諦は本未だ會て聞かず、經義の光明は、之を見て歡喜すること生盲の人の色を見て歡喜する如く、覺分地を見て心に歡喜を生ずることも亦復是の如し。是れを聞法の第一の功德と名く。

復次に、第二の聞法の功德とは、法を聞くを以ての故に内心思惟すらく「法に何の義有りや」と。若し自ら解せずんば他に從ひて詰問すらく「是の如き法は何等の義有りや」と。是の法を聞く者、他從り法を聞きて復自ら思惟し、思惟を以ての故に修習増長し、法義を説くが故に前後相應し、至心に受持し、數數義を觀じ、觀察を以ての故に心則ち歡喜す。是の如く是の如く、思惟する所に隨ひて、憶念し觀察して深義に通達す。是れを聞法の第二の功德と爲す。

復次に、第三の聞法の功德とは、聞く所の法に隨ひて、聞き已りて思惟すらく「此の如きの義は何の意を説くと爲し、此の如きの義は何の因縁を説き、是の如きの義は衆生を調伏せんが爲に、是の故に宣説せり」と。復同心同行の人と共に思量し、前後を思惟して大利益を得、終に涅槃を得。是れを第三の聞法の功德と爲す。

復次に、第四の聞法の功德とは、前後の説法の義を思量し、了知して受く。了知して受くとは、名けて説く所の義の如しと曰ふ。身・口・意の業にて攝受し修行して、三善業を作し、修習増長し、説法を攝取し、清淨の心を以て既に受持し已りて句々を思量し、其の因縁を尋ね、其の思ふ所に隨

【二】覺分地。さとりに趣くべき因分の道地のこと。
 【三】四聖諦(Quadrivertarabrahmā)又は四眞諦とも云ひ、四諦のことなり。苦、集、滅、道、即ち之れ四諦にして、苦は現實の生死の苦惱、集は其の苦を集起する業煩惱のこと、滅は涅槃常樂の境地にして、正道なり。依て、前二者なる苦集は即ち迷の因果、後の滅道は悟の因果たり。聖者よく之の理を觀じて滅諦に悟入するなれば之れを四聖諦と云ふ。

卷の第六十三

觀天品之四十二

夜摩天之二十八

爾の時鵝王、諸の天衆に告げらく「常に當に法を聞くべし。放逸を行すること勿れ。當に善友に近くべし。能く他を利せん者には、之れに詣りて法を聽け。正法を聞き已りて、敬重するを以ての故に、是の人善心にして乃至涅槃漏盡の大樂あり。一種の人有りて梵福を生ず。一には善く觀察して持し、二には漏盡を求む。復二種有り。一には常に法を説き、二には常に法を聽く。是の如き法師は猶し父母の如く、説法の人は、法を以て布施する法の施主にして、他をして法を聞か令む。既に法を聞き已りては心清淨なることを得、直心にて敬重して、法を聞く人は三十二の功德を得。何等は三十二なりや。法師説法しては、法を聽く人に於て猶し父母の如く、生死中に於て猶し橋梁の如し。所謂、未だ聞かざる所を聞き、聞き已りて覺知し、知り已りて思惟し、既に思惟し已りて則ち修行に入り、既に修行し已りて則ち能く安住し、他人を安立せしめて彼と共に思量し、若しは衰惱を得るも其の心動かす、未だ善根を種えざれば能く善根を種え、思量し增長して根熟せる者をして解脱を得令め、邪見の者をして正見に入ら令め、若し不善の念生ぜんには能く斷滅せ令め、善心を增長し、不善の因縁を斷じ、放逸を行ぜず、善人に親近し、慳・諂・曲を離れ、父母を供養し、業の果報を信じ、長壽の業を集め、世人に稱歎せられ、諸天に護られ、念する所を成就し、如法の樂を得、懈怠を離れて勤・精進を發し、恩を知り恩を報じ、常に死を念することを修め、命終らん時に於て心悔恨らず、終に涅槃を得。是の如きは聽法の三十二の功德なり。説法の師は猶し父母の如く、法を説

【一】 以下は、直後の三十二功德を廣説する文と、いさゝか合離不同あり。

是の如き念を作さく『今正に是の時なり。放逸なる諸の天の爲に法を説くべし。我れ今當に美妙の音聲を以て偈頌を演説して、天子・天女の歌音を掩蔽すべし。天子・天女は欲に著し放逸にして、法を聞くことを得ざるも、我が音聲を聞かんには耳識愛樂し、必ず我が所に至らん』と、是の念を作し已りて、妙なる音聲を出し、佛の功德を念じ、慈悲心を起して七寶山に昇り、鵝衆に圍遶かるゝこと十由旬に滿つ。無等の妙音にて、偈を以て頌して曰く。

死時未だ至らざるに及び、應に福徳を修行すべし、自ら其の命に保むこと勿れ、後に於て悔恨を生ぜん。若し放逸を行ぜんには、是れを名けて死處と爲し、若しは放逸を行ぜずとは、第一の不死の句なり。若し放逸を行ぜんに、此の道寂滅に非ず、不放逸に依るが故に、智慧もて涅槃を得。天衆放逸なること莫かれ、放逸は寂滅に非ず、寂滅の行に非ざるが故に、則ち地獄に墮つ。若しは已に失ひ當に失ふべく、若しは今現在失ふは、皆放逸の過に由ると、如来は是の如くに説きたまへり。是の故に一切の時に、當に勤めて精進を加ふべし、放逸を遠離せんには、則ち寂滅の法を得ん。

是の如くに菩薩鵝王、彼の山上に昇り、美妙の音を以て此の偈頌を説き、天女の歌を皆悉く掩蔽して、其聲を美しからざらしむ。時に諸の天衆、鵝王の音を聞きて皆愛樂を生じ、遍く山上に於て、一切の諸の天、未曾有なることを得たり。謂く、此の歌音は、貪著の心を以て法を敬重するに非ざればなり。一切皆來りて山峯中に向ひ、鵝王の所に至る。爾の時菩薩鵝王、復偈頌を以てすること前に説く所の如し。時に諸の天衆・天子・天女は其の音聲を聞き、心に皆隨順す。是の如き鵝王は、人中時に於て、大長者の子にして優鉢羅達多と名け、迦那迦牟尼佛の所に於て正法を聞くことを得、來りて此に生れ、今妙音を以て敷揚宣説し、勝妙無等なり。天子・天女、一心に諦に鵝王の所説を聞けり。

の大苦と爲す。是の如きを天衆は覺らず知らず。放逸に誑され、貪心に壞たる」と。善時鵝王、一心に思惟して方便を設んと欲し「我れ當に何の方便を以て、天の爲に說法して善業を得せしむべきや」と。爾の時善時鵝王、久しく思惟し已りて、他を利せんが爲の故に、偈を説きて頌して曰く。常に戒・施を行じ、諸の衆生を哀愍まんには、一切の事を成就せん。是の故に應に戒を持すべし。慈と悲を和合せしめ、稀望を遠離して、諸の衆生を利益せんには、所作必ず成就せん。戒勇猛にして虚誑無く、常に法施を行じ、慳と嫉妬を遠離せんには、所作必ず成就せん。戒を持せる寂滅の人は、師を尊重し供養し、應に作すべきと作さざらんを知りて、所作必ず成就せん。詭曲・憎嫉ならず、常に愛語を説き、誠實にして虚誑ならんば、所作必ず成就せん。處を知り及び時を知り、作す可きと作さざらんを知り、力有ると力無きを知らんには、所作必ず成就せん。

是の如くに鵝王、法を知り、修行して説法師と爲り、法の成就せるを以て、衆生を利益せり。「此の天放逸なり。我れ當に云何んが之れが爲に法を説きて放逸を離れしめん」と。久しく思惟し已りて本生を憶念すらく「我れ往昔に於て閻浮提に生れ、迦那迦牟尼世尊の所に於て曾て聞ける法を、我れ今應に説くべし。我れ爾の時に於て、閻浮提の大長者の家に生れ、長者の子を作して優鉢羅達多と名く。彼の佛・如來、我が命終りて夜摩天樂行の地に生るを知りたまひ「願くは鵝王に生れ、當に放逸なる諸の天子等の爲に、我が法を宣説すべし」と。今正に是の時なり。當に爲に宣説すべし。爾の時鵝王、是れを思惟し已りて、清淨の心を以て天衆を利益し、慈悲心を以て阿耨多羅三藐三菩提心を念ずるが故に、往みて天衆の五欲を受くる處に詣る。諸の鵝衆に、圍遶かれて住し、彼の天衆を見るに、山林に遊戲し、或ひは花園に遊び、或ひは枝葉に蔭覆せられたる宮室に遊び、或ひは虚空に於て寶宮殿に坐し、或ひは天子有りて、諸の天女と共に須陀味を食す。爾の時菩薩鵝王、

【三三】宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依り、願偈言を偈頌曰に變へたり。

【三六】嫉の字、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

【三七】迦那迦牟尼世尊(Kan-nakammuni)金山人と譯す。過去七佛中の第五。

【三八】阿耨多羅三藐三菩提。前卷の註を見よ。

望(ある)に非ず得るに非ず、宥滅の因と爲すに非ず。諸根は塵境に於て、迷著して各差別し、愚人は欲樂を愛して、是の故に地獄に墮つ。若しは癡と共に樂を受けんに、受くるに隨つて苦惱を得、此の怨詐に親善(した)からんには、能く一切の人を害はん。

是の如くに善時(ぜんじ)鵝王、放逸なる諸天の爲に是の如き偈を説けり。時に諸の天衆は欲の爲に迷はさせられたる香淨き室に於て、無量百千の衆蜂の妙音あり、天衆・天女各共に歌舞し、妙なる音聲を出して譬喻す可からず。復天衆有り、天の寶地に坐し、愛す可き蓮華の池を觀じて自業の果を受く。遍く天衆を觀じて、菩薩(ぼさつ)鵝王、是の思惟を作さく『此の諸の天衆は心識無き耶、必定して大苦惱を受くるを知らず。天中より退かんと欲して五の怖相有り。何等を五と爲す。一には、一切の愛す可く樂みて愛重す可き天女を得るも、天と同業にして復和合せずして愛別の大苦あり。是れを初の苦と爲す。二には、愛す可く樂む可き天の境界と復和せずして之れと離別す。是れを第二の退没の大苦と爲す。三には、退く時、異なる天衆の遊戲して樂を受くるを見、自ら己身を觀るに燈の將に盡きんとするが如く、業風に吹かれて何れに趣くやを知らず。心に苦惱を生ずること地獄に過ぐ。是れを第三の退没の大苦と名く。四には、退没せんと欲する時、所生の處に隨ひて或ひは地獄・餓鬼・畜生に生るゝを了了(りょうりょう)に自ら見、生まるゝ處を見るが故に心に大悔を生じ、悔の火に燒かれて無量の苦を受く。是れを第四の退没の大苦と名く。五には、退く時、大苦を受けて是の念を作す「我れ本曾て知識の説法を聞きしも、放逸を以ての故に境界に貪著して、聽受せず、亦修行せず。放逸を以ての故に境界に貪著せるが故なり」と。復是の念を作す「我れ惡法を作して法を聽受せず、禁戒を持せず、智慧を集めず、我れ生れて從り來放逸に誰(たれ)され、今悔の火我が心を燒く。業の繩は繫縛し、我れを將ゐて去らん。放逸に由るが故なり」と。是れを諸天の退没する時に於ける五種

味を飲み、諸の天女と共に戯笑し歌舞せる有り、或ひは蓮華林中に入りて、遊戯して樂を受くる有り、或ひは須陀味の食を食せる有り、或ひは天子有りて、諸の天女と飛びて虚空に昇り、或ひは天子有りて、諸の天女と共に、七寶殿に昇りて樂を受く。是の如くに天衆、蓮華池に於て五欲の樂を受け、境界中に於て厭足を知らず。愛心を以ての故に厭足を知らずして、酥に火を投ぜしが如く、乾ける薪を焼くが如く、愛欲の境に於て厭足を知らざることも亦復是の如し。時に蓮華池に多く衆鳥有り、一鵝王有りて、名けて善時と曰ふ。是の大菩薩、願力を以ての故に夜摩天に生じて、無量百千の鵝衆に圍遶かる。閻浮提の滿月の空に處て衆星に圍遶かる、如く、是の如くに善時鵝王の衆鳥に圍遶かることも復亦是の如し。天衆を利せんが爲に偈を以て頌して曰く。

是の如くに去り來り住し、遊戯し歌舞して笑ふは、無比最大の惡にして、死の至らんと欲するを覺らざらん。其の所至の處に隨ひて、死の怨は避く可からざるを、是の如き愚癡の人は、而も猶覺知らず。貧富を擇ばず、少壯きも及び老年なるも、若しは在家・出家も、死壞を爲さざる無し。樂む人も及び苦む人も、功德あるも功德無きも、戒有るも及び戒無きも、死壞を爲さざる無し。若しは戒を持するも戒を破るも、智慧あるも及び愚癡なるも、諸王も及庶民も、皆死の爲に壞たれん。若しは天も若しは地獄も、若しは餓鬼も畜生も、放逸なるも放逸ならざるも、皆死の爲に壞たれん。若しは欲界・色界・無色界に生ずるも、是の如き三界中は、皆死の爲に壞たれん。業の綱と老とに壞たれ、病苦は大力有り、是の死は夜叉の如くにて、攝へて諸の衆生を縛る。是の如き死の怖畏は、第一に大暴惡なるも、天は欲の爲に迷はされ、泣く塵を而も更に笑ふ。是の如く欲に習近せんに、欲は苦惱の因と爲り、習近の縛を増長すること、酥油に火を投ぜしが如し。欲は能く善法を壞ち、初に味は後安からず、欲は衆苦の因を爲し、後に大衰惱を得ん。欲は初に安穩無く、中・後も亦是の如し、怖

【三】閻浮提(Cambrudipa) 檠洲、檠樹城、勝金洲、好金土等と譯。須彌四州の一、須彌山の南方に在り、もと印度のことを名けたるも、後、吾人の住する世界とす。

【三】欲界、色界、無色界。これを三界と名く。欲界とは五趣有情及び六欲天の總稱にて、此界の衆生は多く欲に著する故この名あり。其の上位置するを色界と云ひ、初禪天より四禪天に至る十八天をふくみ、此界は猶清淨なる色質あるを以て色界と云ふ。無色界は色無く唯識のみ有り、空無邊處、識無邊處、無所有處、非想非々想處の四天あり。

【四】夜叉(Yaksha)。又は藥叉、閻叉と云ひ、暴惡、勇健等と譯す。八部衆の一、天夜叉、地夜叉、虛空夜叉の三あり、能く人を啖食すと云ふ。

れ、他に拂せらるゝことを離れ、念ずる隨に行ひて第一の樂を受け、音聲もて遊戯し、歌舞して意の如く、念ずる所の須陀食は上味美飲にして、第一に歡喜し、遊戯し娛樂して白業の樂を受く。是の如く久しき時に天の樂を受け已りて喜見池に向ふ。其の蓮華池は長さ十由旬廣さ五由旬にて甚だ愛樂す可く、多く衆鳥有り、鵝・鴨・鶯・鶯池中に充滿し、金色の蓮華は遍く池水を覆ひ、一切皆青毘琉璃・青因陀羅寶・大青寶・赤蓮華寶を以て、以て池底を砌めり。此の池の岸に、周遍く樹を生じ、黃金を葉と爲し、白銀の枝葉あり、或ひは青寶の枝にて赤蓮華の葉なり、毘琉璃樹ありて、頗梨を枝と爲し、黃金を葉と爲し、大青寶樹は、白銀を枝と爲し、黃金を葉と爲し、青寶を枝と爲し、金・毘琉璃以て其の樹を爲せるは、大青寶の枝にて、眞金・碓磝の二寶を葉と爲す。或ひは金樹有り、金の葉、金の枝にて、日光に勝れ、或ひは金樹有り、毘琉璃の枝、毘琉璃の葉にて、猶し雲の聚の如くにして莊嚴愛す可く、或ひは金樹有り、金の枝、金の葉にて、猶し火の聚の如く、或ひは銀樹有り、銀の枝、銀の葉にて、光明端正なること月の盛滿なるが如く、或ひは青寶王樹は、青寶王の枝、青寶王の葉あり、沈める水煙の如くにして、色相端嚴なり。或ひは寶樹有り、種々の枝條以て莊嚴を爲し、或ひは白銀の枝に青寶を校飾し、復寶樹有りて、金・銀を校飾し、復寶樹有りて、金・銀・頗梨の三種を校飾し、復寶樹有りて、赤蓮華寶・白銀を校飾せり。復寶樹有り、種々諸の色の衆花を具足し、曼陀羅花・俱賒耶舍花以て莊嚴を爲せり。復果樹有りて、果汁の味は、天の上味の酒も及ぶ能はず。復花樹有りて、熏百由旬なり。復聲樹有り、微風吹動するに、其の音は乾闥婆の音に勝る。復寶樹有り、之れを見るに悅樂し、其樹の色相は彩畫の莊嚴も及ぶ能はざる所なり。復寶樹有り、名けて香煙と曰ひ、種々の香煙樹従り出で、諸天嗅ぎ已りて皆大歡喜す。多く是の如き種々の寶樹有りて喜見池を遮れり。時に諸の天衆、此の池を見已りて未曾有なることを得、或ひは其の果を食し、或ひは果汁を飲み、或ひは天女と共に華を採りて莊嚴り、或ひは天の園林中に入りて上

【三】須陀食。須陀(すだ)は又は首陀、修陀、蘇陀に作る。樹より出す妙味の液汁なり。

或ひは歌舞する有り、或ひは無量の天女に圍繞かれ、天上の味の醉亂を離るゝを飲み、既に上味を飲みて轉歡喜を増せる有り。是の如き等の二種を所轉の境界の火は焼くと爲す。歡喜は煙の如し。爾の時鳥有り、名けて實智と曰ふ。諸の天衆の放逸なる樂を受くるを見、偈を以て頌して曰く。

五の炎遍く熾然るは、愛の風に吹かれ、諸の欲に迷惑されて、放逸の火焚焼けばなり。故の業將に盡きんと欲して、而も新業を作さざれば、業盡くるが故に還り退かん。諸天皆是の如し。

若し退かんと欲する時に至り、苦惱心を破壊せんにも、能く救ふ者有ること無く、唯だ善業を除くなり。富貴を喜樂し、常に諸の天女を愛せんには、自の心に誑されて、當に大惡處に至るべし。無常の爲に壞たるゝを、云何んが覺知らざるや、終に命盡くるに至りては、一切皆別離せん。心境界を貪るを以て、自業の爲に誑かされて、天命念々に過ぐる

は、愛の心を破壊するを以てなり。譬へば畫壁の滅するが如く、彩畫も皆亦亡び、其の業盡くるを以ての故に、天の報も亦隨ひて失せん。五根境界を貪りては、未だ曾て厭足有らず、酥油に火を投ぜしが如くにて、熾然りて厭足無し。

是の如くに實智鳥、天衆の放逸心を斷ぜん爲の故に偈頌の法を説けり。時に諸の天衆、放逸を以ての故に迷惑して受けず。放逸の心を以て、諸の天女と共に或ひは虚空に飛び、或ひは大普光明山に昇れる有り。彼の山に昇り已るに、其の身の光明は百千の日に勝れ、其山先に七寶の光明有るも、天光を以ての故に山轉殊勝にして、山中の無量の衆寶、園林も天光を以ての故に十倍に轉勝れたり、復餘の天有り、園林中、或ひは蓮華中に在り、或ひは枝葉に蔭覆せられたる宮室の、衆寶の光明もて莊嚴られたる處に在りて、遊戲し歌舞して天の樂を受け、此の光明を見て未曾有なることを得たり。爾の時天衆、園林中に於て既に遊戲し已りて、一切皆樂蓮華池に向ひ、遊戲して樂を受け、互相に愛樂して嫉妬を起さず。安詳に七寶光山に昇り、歌舞し戲笑して怖畏を離れ、瞋・愛・悲を離

【二〇】 貴の字、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

【二一】 酥の字、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。後文の同字も之に同じ。

【二〇】 妬の字、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。後文の同字も之に同じ。

捨て、異天に趣かず、命終らば乃ち去る。四天王天、三十三天は邪淫を離れず。未だ命終らざる時、天女は背叛きて、之れを捨て、去ること晝の燈を捨つるが如くにて、往いて餘天に趣き、新生の天子と共に娛樂し、歌舞し遊戯す。時に彼の天子、諸の天女の背叛きて他に趣くを見、心に嫉妬を生じ、大苦惱を生じて地獄の苦の如く、心贖るを以ての故に地獄に墮つ。夜摩天中は邪淫を離るゝが故に此の果報無し。是の因縁を以て、先きに退ける天子、諸の天女等に皆共に往いて新生の天子に詣り、到り已りて圍遶き、大林中に入りて欲樂を受けん爲に諸の天衆に向ふ。時に諸の天衆、新生の天子を見て心皆歡喜し、諸の天衆及び諸の天女と、或ひは萬或ひは億、往いて園林中に詣る。其の園林中は如意の樹以て莊嚴を爲し、多く無量種種の衆樹有り、無量百千の蓮華もて莊嚴り、鸞鳴、鷓鴣池中に充滿す。無量百千の功德の大池あり、久しく此の池に於て天の伎樂を作して五欲の樂を受け、久しく樂を受け已りて、境界中に於て厭足を知らず。復新生の天子と普光明山に向ひ、遊戯して樂を受け、歌舞し戲笑す。一一の華池、一一の園林、一一の流泉、一一の山峯、一一の山原、一一の山谷、一一の榛林、一一の花林、一一の河中、一一の山洞、一一の如意林中、一一の樹枝にて蔭覆せらるゝ宮室にて、一切の天衆は五樂の音聲にて五欲の樂を受け、喩を爲す可からず。其の自業と相似相應するを以て、一切往いて普光明山に詣り、歌舞し遊戯し、互相に娛樂し、境界に於て厭足を知らず、一切歡喜し、諸欲を具足して普光明山に向へり。爾の時、山中に舊より住せる天有り、歌の音聲を聞き、希有の心を生じて諸の天衆を觀る。時に諸の天衆、即ち皆普光明山に昇れり。舊の天は之を見て皆大歡喜し、初めて來れる天衆は皆虚空に昇り、無量に莊嚴りて威徳の光明あり、互相に瞻仰せり。一切の天衆は此の愛す可き山峯の中、河泉・流水・蓮池・園林、七寶の光明もて莊嚴られたる宮殿、林樹の莊嚴に於て、諸の樂行天は快樂を受けて或ひは華池に在り、或ひは河岸に在り、或ひは林中に在り、或ひは如意林樹の間に在り、或ひは虚空に在りて飛びて異處に至り、

【三六】 四天王天。欲界六天の最下なる四王天に住し、三十三天主たる帝釋天につきて佛法を護り、出家を護持する四王。東方提桓咄吒天王（持國）、南方、毗留勒叉天王（增長）、西方、伊留博叉天王（北方、毘沙門天王（多聞）の稱。【三七】 三十三天。忉利天（Tavatimsa）のこと。六欲天の第二にして、須彌山の頂に帝釋の住する喜見城天を中心として、四方の衆に各八天あり、合して三十三天となる。

を持し、殺さず盜まず。前に説きし所の如く復邪淫を離れ、若しは素畫の女人を見るも邪觀を生じて見ず、捨つることを勸むることを作して、持戒に住せしむ。常に衆生の爲に數數説法して法中に住せしめ、一切衆生の爲に邪淫の過を説き、業の果報を説きて「若し人邪淫ならんには、甚だ下賤と爲し、身壞はれ命終りて地獄に墮ち、是の業報を以て大苦惱を受けん。是の觀を作し已りて、應に邪淫なるべからず。後悔すること勿れ。邪淫の罪は、報を受けては大に苦まん」と。諸の衆生の爲に是の如き法を説きて正行に住せしめ、惡道の行を救ふ。是の如き人は自らを利し他を利し、戒を持し戒に依り、形を盡すも戒を持し、戒を破らさず、戒を缺かず戒に穿す、外實内容ならずして、身壞はれ命終らんには善道の夜摩天中の樂行と名くる地に生れ、彼の天に生じ已りて無等の樂を受けん。一大池有りて、名けて樂行と曰ひ、縱、廣五百由旬あり、其の池清涼にして、湛然として清淨なり。復、偷甜美飲樹有り。周遍く皆是れ毘琉璃樹にして、眞金を葉と爲し、青寶玉の枝にて、此の池を圍遶くこと五百由旬なり。蓮華充滿して遍く池水を覆ふ。其の諸の蓮華は眞金を葉と爲し、毘琉璃の莖にて、琉璃を鬚と爲す。復、蓮華有りて七寶もて莊嚴り、種種の蓮華遍く池中を覆へり。種種の衆鳥は七寶もて莊嚴りて妙なる音聲を出し、無量百千の天子・天女ありて此の池を圍遶き、一の天子には、無量百千の天女、以て眷屬と爲りて、此の天子と娛樂して樂を受く。自らの善業の故なり。復池邊に於て七寶の林有りて名けて心樂と曰ひ、此の林中に於て種種の鳥有り、一百の流水ありて以て莊嚴り、無量の衆寶其の林を莊嚴れり。天子・天女或ひは樂池に在り、或は此の林に於て五根中に境界の樂を受く。善業を以ての故に此の天中に生れ、聞く歌に牽かれて岸の林に向へるなり。復、餘天有りて、此の天中に於て命終りて没没す。諸の天女有り、天衣もて莊嚴り、新に生れたる天子を見ては速に馳せて行き趣き、給事を爲さんことを求む。是の諸天衆は、殺さず盜まず邪淫を行はざる善業の果報にて此の天中に生れ、邪淫ならざるが故に、命の未だ終らざる時、天女は

婆羅門は應に心を信すべからず。爾の時、孔雀王菩薩偈を以て頌して曰く。

深く速にして垢無からんには、遍き一切の衆生に、是の心猶し王の如からん。諸の世間に流轉して、見難く甚だ畏る可く、輕躁にして惡業を造るも、若し人能く心を攝めんには、則ち第一道に至らん。能く將めて善處に至り、亦惡道に至る。若し調伏して垢を離れんには、則ち涅槃に至らん。心は能く苦樂を作し、心の勢力は流轉して、能く種々の業を作すも、調伏せば則ち樂を得ん。是の故に應に心を護るべし。心を護らんには則ち樂を得ん。若し人境界に於て、諸の根・心寂滅ならんに、生・死・憂・悲を脱して、則ち無住處に到らん。

是の如くに孔雀王、諸の天衆の爲に、迦迦村陀如來の眞法を説けり。

爾の時諸の天衆は皆悉く歡喜し、敬心もて圍遶して是の如き言を作さく「善き哉善き哉、大士快く妙法を説きたまひて初・中・後善く、天衆の爲に説きて能く涅槃に至らしめたまふ」と。

爾の時孔雀王、復天衆の爲に是の如き言を説かく「我れの迦迦村陀如來の所に於て聞ける二十二法は、義を以て天・人を利益し安樂にし、能く涅槃に至らしむ。我れ此の法を以て天衆を利益せんとて、是の故に宣説せり」と。時に諸の天衆、歡喜し讚歎し、合掌敬禮して孔雀王菩薩を供養す。既に禮拜し已りて夜摩天衆は蓮花林に入り、遊戯して樂を受け、兜率天衆は虛空に上昇して兜率天に歸れり。

爾の時夜摩天衆は園林中に於て遊戯して樂を受け、乃至受くる善業盡きて、其の自業に隨ひて地獄・餓鬼・畜生に墮し、若しは餘業有りて人中に生じて大種姓に生れ、常に法行に順じ、顏貌端正にして財富を具足し、好き國土に處て、或ひは王、大臣たり。餘業を以ての故なり。

復次に、比丘業の果報を知りて夜摩天所住の地を觀するに、彼れ地有るを見、名けて樂行と曰ふ。衆生何の業にて彼の地に生ずるや。彼れ見聞して知るに、若し人大心もて善を行ひ、直心にて戒

【五】受の字は、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

りて親友と爲すも、此の如き境界は悉く能く一切の衆生を繫縛す。爾の時、孔雀王菩薩、偈を以て頌して曰く。

若しは實に境界を知りて、鐵鉤を以て持するが如かれ。馳せ散じ軽く動くが故に、諸の不利益を作せばなり。 悵望みて境界に迷ひ、分別心を樂まんには、死の綱縶は至らんと欲し、能く衆生の命を斷たん。 境界の牽く所と爲りては、人心を躁擾ならしむるも、愚癡の爲に誑されては、覺知る能はざらん。 境界は定實無きこと、乾闥婆城の如くにて、能く衆苦を増長し、地獄の因縁と爲す。 境界の火に燒かれ、愚癡と欲とに誑されんには、輪轉して停息らず、其の身を燒くを覺らざらん。 念に因るが故に欲を生じ、欲に因りて瞋恚を生じ、瞋恚人心を覆ひては、死すれば則ち地獄に入らん。 是の故に智有る者は、欲を離れ瞋恚を滅し、速に愚癡を遠離して、則ち能く涅槃に到るなり。 境界の怨の如くなるを知り、之を遮りて樂まず、智者は境界を厭ひて、畢定して涅槃に到らん。

是れを、孔雀王菩薩、諸の天衆の爲に佛の經法を説けりと爲す。

復次に、第二十二法は大利益を得。何等の法なり耶。所謂、心を信ぜざるなり。若しは沙門・婆羅門及び餘の善人は、乃至命盡くるまで應に心を信すべからず。是の如き心は輕躁にして攝め難く、自性曲戾にして、一境に住せず、異境を樂む。一切の愚癡の凡夫は、此の心を以ての故に地獄・餓鬼・畜生に流轉す。此の心の一切に親友たる可からず。輕く躁きて境を緣じ、一切愚癡の凡夫を迷惑し、其れをして流轉して地獄・餓鬼・畜生に在らしむ。常に流轉すと雖も厭離せず、此の如くに惡習して、生死中に於て大苦惱を受く。是の故に應に此の惡心を信すべからず。乃至未だ聖印に印せらるゝことを得ず、須陀洹を得て惡道の門を閉ぢず、若し是の如からずんば、遍く諸道を行きて一切の諸苦を受け、一切に繫縛られ一切に縋縛され、諸の使和合して甚だ調伏し難し。是の故に沙門・

【三】 乾闥婆城、前卷の註を見よ。

【四】 須陀洹(Srotāpanna)預流、入流、逆流と譯す。預流向因道に對する果位にして、聲聞四果の初果。見惑を斷じて初め一聖者の流類に入りし位にて、見道より修道に入るる果位なり。

切の香に於て樂著を生ぜず、著を斷ずるを以ての故に安樂を得。是の如く實の如くに境界を知らんには、則ち實の如き安隱の處を得ん。若し能く是の如く實の如くに香を觀ぜんに、鼻に香を聞くと雖も香に於て樂まさらん。若しは沙門・婆羅門、舌に味を得る時若し不善の食欲を生ずれば、實の如く念じて舌に因り味に因りて舌識を生ずることを知り、是の念を作す時、味に於て樂まず、貪らず、著せず。實の如くに舌識を知り、若しは舌識の味を喜愛することを知らば、識に於て脱るゝことを得て第一の樂を得ん。是の如く是の如く實に境界を知らんに、是の如く是の如く無上の樂を得、喜愛の壞す所と爲らざるなり。舌味中に於て實の如く觀じ已りて、復身の觸を觀ず。身に因り觸に因りて身識を生じ、三法和合して觸を生じ、觸と共にるを以ての故に、愛・想・思を生ず。若しは沙門・婆羅門、實の如く觸を觀するに、此の觸は無常にして動壞し變易す。若し不善の覺觀を生ずれば無利益を得て安樂を得ず。實の如く觸を知りて善念もて觀察せんに、喜愛の惱亂する所とならずして境界を樂まさらん。諸の方便を以て身の觸を觀じ已りて、復意法を觀ず。云何んが生ずるや。意に因り法に因りて意識を生じ、或ひは善・不善、或ひは無記なり。若し不善を緣じて不善の念を起さば、實の如くに了知して『我れ不善を緣じて意識を生じ、我れ喜愛を生ぜり。利益を得ず、惱亂せられて安からざらん』と。是の如く思惟して法の出沒を觀ぜんに、則ち法行に順じ、法行に順するが故に實の如くに一切諸法の自相と同相を見て、喜愛の惱亂する所と爲らざらん。愛の薄きを以ての故に解脫を得、解脫を以ての故に第一の樂を得。一切の法は皆悉く生滅することを知り、能く是の如く諸の境界を觀するを以て、則ち正智を生じて能く一切の諸の結・煩惱を滅し、煩惱を盡くすが故に、無漏智を得、無漏智と相應することを得るを以ての故に第一の處を得。是の故に沙門・婆羅門は境界を信すること莫かれ。一切の境界は猶し怨家の如く、一切衆生の境界は蛇の如し。若し人未だ無漏の智慧を得ずんば境界を信すること莫かれ。境界は輕く動きて猶し怨賊の如く、詐

【一】 愛、想、思。いづれも大地法の一、五遍行の一にて心所の名なり。愛は前註の如く根と境と識と和合して生じたる感覺のこと。想は客觀界を分別し知する精神作用。思とは心をおこし使役して種種の動作を作さしむる精神作用なり。

【二】 善、不善、無記。之れを三性と云ふ。無記とは非善非惡の性、善、不善いづれにも記別すべからざるより無記と云ふ。

【三】 自相、同相。自相とはそれのみに具する特異性。同相とは共通して具する共通性。木を對象として觀察するは同相を見るにて、一の松の木等を觀察するは自相を見るなり。

【四】 官内省圖書寮本に依る。【五】 無漏智。有漏智に對し、煩惱有漏を盡滅せる清淨なる智慧を云ふ。

實の如く色の境界を觀す。眼の色を緣じて眼識を生ずるが如く、意識決して分別し觀察するに、若し境界の來らんには食欲を生ず。是の如き食欲の境界は來りて我れを惱亂す。當に恐怖を生ずべし。若しは境界を見るも欲・貪・愛を斷じて觀視せず。分別する所の如く、意も亦是の如くにして、或は貪り或は瞋るも皆實の如くに知り、若しは煩惱起らんには如實の觀を起す。無利益を得、現在未來に、此の煩惱を以て安樂を得ず。一切の衆生は次の煩惱に由りて利益を得ず安樂を得ずして、此の如き煩惱は、悉く能く繫縛す。一切の衆生・沙門・婆羅門にして、若し能く是の如くに境界を觀する者は、貪欲の心生するも一切を能く滅し、或は薄少ならしめん。是の如く、實の如くに眼識を觀じ、復耳を觀す。因緣和合して耳識を生じ、耳に因り聲に因りて念を生じて或は苦受を生じ、或は樂受を生ず。是の如く識を觀するに、或ひは復多く貪・瞋・癡を生じ、或は餘の識を生ずること、猶し然たる燈の如し。不善の念を觀じ、我れ不善の念を生ぜんには不善の念を知り、不善の念の緣從り生ずるを知りて當に之を斷滅すべし。若しは不善を斷ずれば善法を満足し、實に境界を觀じて善念を増長しては、不善の念の喜愛と共に生じ有愛と共に生ずるを皆悉く滅せしめん。滅除するを以ての故に清淨なることを得。濁惡の垢を離れて一切の樂を得。是の故に沙門・婆羅門及び餘の世間は、初に境界中を觀じて若し惡欲を生ずれば即ち應に斷滅すべし。善法を觀じて諸の不善を滅し、是の如く耳聲中に於て、實の如くに了知して、應に善念を生ずべし。

復次に、若しは沙門・婆羅門及び餘の世間の鼻に聞く所の香は、云何にして識を生ずるなりや。鼻に因り香に因りて鼻識を生ず。若し不善の念生ぜんに不善の念を知りて、若しは沙門・婆羅門、是の如き念を作さく『我れ今若し不善の念を生ぜんには利益を得ず、安樂を得ざらん。今當に斷滅すべし。實の如くに觀察せば、則ち能く不善の念を斷滅せん』と。是の念を作し已りて實の如くに香を觀じて善念を生じ、善念を以ての故に則ち能く喜と共に生ずる愛を滅す。是の如くに觀じ已りて一

【七】 苦受、樂受。受とは即ち根、境、識の三者和合して生ぜる觸を領納する感覺のこと。三受、五受などの分類あり。

して敗壞する變易の法なり。是の如き觸は空にして所有無く、堅無く實無く、先に無くして今有り、已に有りて還りて無し。若し能く是の如く實の如くに觸を觀ぜんには、過去の觸に於て係念を生ぜず、愛せず樂まず、何等の觸に隨ふも來りて其身に觸れんことを求めずして、觸に貪欲なることを離れん。是れを足ることを知ると名く。

復次に、若しは沙門・婆羅門は意法の愛以不愛を觀ず。實の如く思惟して法を觀ぜんに、無常に於て敗壞し變易し、空にして所有無く、堅無く實無し、此の法、無常・苦・空・無我にして、先に無く今有り、已に有りて還つて無く、一切磨滅す。是の如く愛・不愛の法を憶念せんには則ち止足を知りて、愛せざる法に於て憎嫉を生ぜず、愛す可き法に於て喜樂を生ぜず、過去の法に於て心念を係けず、亦味著せず。是の如く善く意の樂む所の法を觀じて一切の意法を念ぜず味はず、愛せず樂まず。諸の沙門・婆羅門、知足を以ての故に、六愛中に解脱を得。爾の時、孔雀王、偈を以て頌して曰く。

若し能く觀じて足ることを知り、六愛の境界を脱して、念はず希望まざらんに、是の人常に樂を得ん。若しは正念の心を以て、實の如く色を觀ぜんに、其の人の色愛に於て、其の心を亂す能はざらん。鼻と境と相ひ應ずるも、若し能く貪著せずんば、其の人の意清淨にして、鼻の過は亂す能はざらん。智者は舌味を得るも、正しく觀じ貪著せずして、其の人の味の過に於て、其の心を汚す能はざらん。身に種種の觸を受くるも、之を得て貪著せずんば、其の人の觸を知るが故に、常に安穩の樂を得ん。愛・不愛の法に於て、其の意貪著せずして、善く住するごと大山の如からんに、是の意世に讚えられん。

若しは沙門・婆羅門、知足の法を行ぜんに、能く是の如き六種の愛を離れて佛に讚歎せられん。是の如く孔雀王菩薩は夜摩天・兜率陀天衆の爲に斯の眞法を説けり。復次に、若しは沙門・婆羅門は

して、眼に色を貪らず、無量の色に於て希望を生ぜず、亦分別せず、若しは色相を見るも心憶念せず、過去の愛すべき色を求めず、愛せず樂まず、亦怖求せず、欲心を生ぜず、亦念を生ぜず、味著を生ぜざらん。若しは沙門・婆羅門、是の如く足ることを知らんに、常に安樂を得ん。是の如くに耳に愛す可き聲を聞くも愛せず樂まず、亦心に念はず、過去の境界に於て若しは貪欲を起して心に分別せず。實の如く之れを觀ぜんに、此の聲は常に非ず、樂に非ず我あるに非ず。但分別有りて諸の衆生を害ふ。愚癡の凡夫は妄念の分別ありて、聲・耳根に至りては心をして憒亂せしむるも、實の如く之を觀じ、是の如く善く觀じ、實の如く足ることを知り、實の如く聲を觀ぜんに空にして所有無く、堅無く實無く、但分別のみ有り。是の如く觀察して一切の愛らしき美妙の音聲、一切の愛境に於て貪著を生ぜず。足ることを知るを以ての故に是の如き樂を得。若しは沙門・婆羅門及び其餘の人、鼻に聞く所の香に分別を起さず、惡覺を起さず、亦思惟せず。鼻に香を聞き已りて實の如く之を觀ぜんに、此の如き香は無常にして敗壞し、變易して實ならず、空にして所有無し。若し此の香に著せんには、惡覺・亂心を脱する能はざらん。是を知足と名く。若しは沙門・婆羅門、鼻にて愛樂せず。是の如き境界を皆悉く觀察し、足ることを知るを以ての故に則ち第一の清淨なる樂を得、修習し増廣しては第一の樂を得ん。

復次に、若しは沙門・婆羅門、及び其餘の人、舌味中に於て心貪著せず、念ぜず分別せず、過去の味に於て、念ぜず思惟せず、善く憶念せず亦怖求せず、足ることを知らざるに非ず。實の如く味を觀ぜんに、此の味は常無く、敗壞し變易す。但分別を以て貪著を生じて、謂ひて取る可しと爲すも、若し實の如く觀すれば、味に於て樂まず、心貪著せず、味愛を生ぜず。若し能く是の如くに味に於て足ることを知らんに、則ち安樂を得ん。

復次に、沙門・婆羅門及び其餘の世間は實の如く觸を觀す。此の如き觸は、自性有るに非ず、無常に

【六】 自性 (Tathata)。數論派にて神我に對して物質的本源を表はす語で、その組成要素たる三徳が未だ分化せぬ自主獨立、唯一不分別の位を云ひ、これに神我 (Jivatma) が作用を及ぼし、以て一切の現象世界を生ずると云ふ。

若しは怨・親中に於て、其の心常に平等にして、法の如くに偏黨ること無けん、牟尼は智慧を説きたまへり。若し人心清淨ならんには、過の爲に汚されずして、獨り林樹の間に行かんと、牟尼は無貪を説きたまへり。心垢を掃望むこと無く、一切の濁を遠離し、諸の境界を樂まざれと、牟尼は寂靜を説きたまへり。一切の無常等を、實の如く諦に觀察して、世間の明闇を知れよと、牟尼は勇猛を説きたまへり。世間の法を厭はずして、善法を修行し、苦樂に於て平等なれと、牟尼は離垢を説きたまへり。心常に止足を知り、常に諸の欲を遠離して、重供養を怖まざれと、牟尼は清淨を説きたまへり。惡親友に近かず、義に非ざる處に行かず、獨行きて自ら心を堅くせよと、牟尼は正業を説きたまへり。喜及び畏を遠離せんに、愛の力も壞す能はずして、諸根悉く寂靜ならんと、聖は掃望まざるを説きたまへり。平等平等の心もて、境界は常に平等なれば、一切に於て平等なれと、牟尼は智慧を説きたまへり。一切の法の、善・不善の業果を了知するも、善・不善をも捨てよと、牟尼は人の爲に説きたまへり。精進して諸の惡を斷じ、常に身念處を修め、實の如くに生を受くることを知れよと、牟尼は爲に智を説きたまへり。若し人生死を畏れんには、時處常に業を作し、法語もて諸根を攝へんと、牟尼は寂滅を説きたまへり。

是の如く孔雀王菩薩は夜摩天・兜率陀天衆の爲に無量種の方便を以て法を説けり。時に諸の天衆、一心正念にして諸の欲樂を捨て、柔軟の心を以て説法を聞けり。

時に孔雀王、諸の天衆の心調伏せるを知るが故に、復爲に説法す。復次に、若しは沙門・婆羅門及び餘の世間、心に當に法を念すべし。何等の法を念するや。所謂、第二十の知足の法にして、足ることを知る法は利益し安樂にす。若しは沙門・婆羅門、身・心足ることを知り、知足を伴と爲し、知足を救と爲さんには安樂を成就せん。知足の人は一切の處に於て追求する所無く、第一に安樂に

【一四】身念處。四念處（四念住）の一。身、受、心、法を觀する中、身を不淨なりと觀じて妄見を破する製法なり。
 【一五】宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依り、説爲を捨て爲説を取れり。

て流轉し、業の作す所の或ひは善・不善なるが如くに皆悉く成就す。善業を以ての故に人・天中に生れ、惡業を以ての故に地獄・飢鬼・畜生に墮つ。若しは沙門・婆羅門及び餘の人・天、是の如くに修行せんには、心則ち清淨、心清淨の故に血則ち清淨、血清淨の故に顔色清淨、顔色清淨の故に一切の衆生は愛樂瞻仰し、身壞れ命終りては善道に生れて諸の天身を受け、必ず涅槃を得ん。心清淨の故に、一切の衆生に於て平等心を起して、是の如き果を得るなり。

復次に、沙門・婆羅門に復異法有りて、一切の衆生に於て平等心を修む。何等の異法なりや。所謂、一切の衆生は共愛別離し、一切の衆生は生死に攝せられ、一衆生として愛別離するに非ざる無し。此の愛別離は甚だ大惡と爲す。是の如くに修行せんには、心則ち清淨、心清淨の故に血則ち清淨、血清淨の故に顔色清淨、顔色淨の故に端正無比にして、端正を以ての故に一切の人は見て心に清淨を得、愛樂し瞻仰す。一切の衆生に於て平等心を起すを以ての故に現の果報を得、身壞れ命終らんには善道に生れて諸の天身を受け、餘業を以ての故に後に涅槃を得ん。復次に、若しは沙門・婆羅門及び餘の人は復異法を以て、一切の衆生に於て平等心を修す。何等の異法なりや。所謂、是の心輕くして轉じ、速に行きて住せず。若しは欲心起らんには不淨觀を修め、若しは瞋心起らんには慈心觀を修め、若しは癡心起らんには當に十二因縁を思惟し觀察す。是の三種の心を三法もて對治して、一切の衆生に於て平等心を起し、怨・親中に於て平等心を修む。意清淨の故に一切の行く處に心疑慮無く、則ち第一の清淨なる樂行を得、覺めて安く臥して安けく、諸天に護られ、(魔も)能く便を得ること無くして大威徳有り。心淨なるを以ての故に血則ち清淨、血清淨なる故に顔色清淨、顔色淨なるが故に端正無比にして、一切の衆生は愛樂し瞻仰す。一切の衆生に於て平等心を起して現の果報を得、身壞れ命終らんには善道の天世界中に生れて諸の天身を受け、是の業を以ての故に終に涅槃を得ん。爾の時、孔雀王菩薩、偈を以て頌して曰く。

【二三】十二因縁。六十一卷の註を見よ。

は沙門・婆羅門及び以餘の衆、若し平等心を起さんに、第一の樂を得て一切の衆生に愛敬せられ身壞れ命終らんに善道の世界中に生れん。云何んが一切衆生に於て、平等心を起すや。若しは沙門・婆羅門、諍論を捨て、人と諍はず。既に諍亂を捨てんに、一切衆生に於て平等心を得ん。是の故に沙門・婆羅門、能く諍論を捨つれば則ち一切の衆生に於て、平等心を得。復次に、法有りて、能く沙門・婆羅門をして、一切の衆生に於て平等心を得しむ。一切の衆生の皆衰惱を得るを觀じ、怨家を觀じて猶し親友の如し。此の諸の衆生は生死に攝せられ、生死不斷なり。生有るを以ての故に、老・病・死・憂悲・苦惱・寒熱・飢渴・打縛・鞭撻・怨憎會苦・愛別離苦有り。是の如くに苦惱の衆生の大衰惱を得るを觀じて、怨親中に於て平等觀を修む。若しは沙門・婆羅門是の如く觀じ已らんに、一切の衆生中に於て平等心を得ん。若しは沙門・婆羅門、復是の念を作さく『此の諸の衆生は衆苦に惱まさる。所謂、疾病に惱める諸の衆生は、身心の疾病にて、病の衰惱を以て大苦惱を受く』と。怨親中に於て、是の如く思惟し、是の念を作す故に心清淨なることを得、心淨なるを以ての故に血則ち清淨、血淨なるを以ての故に顔色清淨にして、一切の諸根皆亦清淨なり。是の如く觀察せんには現の果報を得て、一切の衆生に樂み見、愛敬し瞻仰せられ、是の因縁を以て、身壞れ命終りて天上に生れん。復次に、沙門・婆羅門は復異法を以て、諸の親友を觀ること猶し怨家の如し。一切の衆生は、死せざること有ること無く、生死を離れずして、生じ已りて復死す。是の如き衆生は、自業を以ての故に地獄・餓鬼・畜生に墮ち、此れ等の衆生は諸の苦に惱まさる。是の如くに思惟して一切の衆生を利益せんに、心則ち清淨なり。心清淨の故に血則ち清淨、血清淨の故に顔色清淨、顔色淨なるが故に端正無比にして、一切の衆生は愛樂瞻仰し、現の果報を得、身壞れ命終らんに善道の世界中に生ぜん。是の如くに比丘は大善業を修めて、諸の衆生に於て平等心を起す。復次に沙門・婆羅門及び餘の世間、復、異法を以て平等觀を修む。此の諸の衆生は、業と業藏と因縁に

【二】起の字を補へるは、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

【三】縁の字、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

切を皆滅し、或ひは薄少ならしめん。爾の時、孔雀王菩薩、迦迦村陀如來の經偈を以て頌を作して曰く。

若し人有りて、常に色・姓・財富の慢を起さんには、是の人醉象の如くにして、嶮惡の岸を見ざらん。一切の諸の僥慢と放逸とは諸根を亂し、現在の人に輕ぜられ、命終りては惡道に墮ちん。若し人僥慢を起し、色・富の慢に育せられんに、其の人則ち樂無く、命終りては惡道に墮ちん。若し色・富を恃みて慢らんに、實の如くに見ると爲すに非ず。愚癡にして智慧無く、苦海を渡る能はざらん。色・種姓・財富及び諸の樂具は、一切皆無常なれば、智者は信ず應らず。若し施・戒・智を離れんに、則ち種姓有ること無く、若し施・戒・智有らんには、是の種姓最も勝れん。愚者は富むと名けず、善道の種姓に非ず、是の故に智を因と爲し、智を離るれば種姓は無けん。若し淨戒を持つること有りて、猶し清涼なる池の如からんに、斯の人大種姓にして、是れを勝種子と名けん。布施・戒及び智、勇猛なる實の精進、能く此れと相應するを、是れを勝れたる種姓と名くなり。若し正法を離るれば、剃髮の種姓に非ざるを、之を名けて沙門と爲し、名けて婆羅門と爲す。若し正法を修め、施・戒・智慧有らんには、乃ち名けて沙門と爲し、乃ち婆羅門とぞ名けん。老は能く壯の色を奪ひ、死能く命根を斷ち、財物は必ず散壞し、一切の法は是の如し。病能く強健を壞し、衆生をして流轉せしむ。若しは智慧有る者は、應に色・財の慢を離るべし。是の如きの惡を知り已りては、唯か僥慢を起すこと有らん。是の故に色・財の慢は、智人の捨離する所、善法を修行するを以て、則ち諸の苦惱無けん。

是の如くに孔雀王菩薩、諸天衆の爲に、是の如く説法せり。

復次に、沙門・婆羅門に復行法有り。謂く、第十九にして、一切衆生に於て平等心を起す。若し

【二〇】迦迦村陀如來。前卷の註を見よ。

に、此の功德有りて、其の人下姓の中に生ずと雖も、大種姓と名く。何を以ての故に。功德有りて勝れたる種姓なるを以ての故にして、非生の種姓なる功德の因縁あり。非生の因縁は、若し功德無くんば則ち因縁無し。是の故に沙門・婆羅門、應に種姓の憍慢を起すべからず。

復次に、色慢を觀じて、若しは沙門・婆羅門及び餘行の人は我が此の色を觀す。嬰兒の時に於ては、色貌有りとし雖も面を昂て動かす、動く時の色に非ず、動く時の色は匍匐の色に非ず、乃至少年は中年の色に非ず、中年の色は老年の色に非ず、老年の色は死時の色に非ず、新しく死せる色の如きは久しきに死せる色に非ず。我が死屍の如きは、衆くの蠅に喰食され、蛆蟲に咬はれ、風に吹かれ日に曝され、雨に漬り濕り爛れ、一切破壊し、分散狼藉れて塚間に滿つ。此の身分散しては無量分となり、骨節分張し、髑髏は處を異にし、咽喉・肩・臂・手指・爪甲あり、諸の節處を異にし、脊骨・髓骨・髀骨・脛骨・踝骨・足骨・指骨あり。斯の實の如くに色を觀するを以ての故に色慢を離る。云何にして實の如くに財富の慢を觀じ、觀じ已りて一切の世間を遠離するや。實の如くに一切の世間を觀知するに、皆自在無く、無量種の法は皆自在無し。云何んが此の法、當に自在有るべけんや。一切有爲の諸法は、因縁に縛らるゝを以ての故に自在を得ず。因縁より生ずること譬へば屋宅の如し。集めたる衆くの材木・埴塹の和合し、互に相依止せる、之を名けて屋と爲す。身も亦是の如く、皮・肉・脂・骨・筋・髓和合せる、之を名けて身と爲し、自在有ること無く、是の色身の相も亦作者無し。是の如くに沙門・婆羅門は實の如くに色慢・種姓の慢・財富の慢を觀察して一切を皆滅し、或ひは薄少ならしむ。復次に、不實の觀を以ての故に種姓の慢を起す。若しは實の如くに觀する是の如き種姓は、但分別有り、無智の人は妄りに憶念を生ず。若しは布施・持戒・智慧・淨行・正見の和合する是の如き種姓は則ち殊勝と爲し、愚癡の如くに妄りに慢心を起して、種姓の勝るゝを念するに非ず。若し沙門・婆羅門及び餘の人、若し能く實の如くに種姓を知らんには、種姓の慢に於て一

【八】和合の二字、元、明二本に依る。別本に合和に作れり。

【九】智の字、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

に、逃避の處有ること無けん。死を念ずることは最も殊勝れ、諸の念與に等しきこと無く、修行せんには寂滅を得て、永く諸の塵垢を離れん。若し死を念じて畏ること有らんに、則ち心惡を起さずして、心は一切の過を離れ、當に寂滅の處を得べし。不放逸の勝たる果を、世尊は是の如く説きたまへり。若し常に死を念じて畏れんに、則ち諸の不善を離れん。

時に孔雀王菩薩、諸天衆の爲に斯の如きの法を説けり。復次に、第十七法は能く多く沙門・婆羅門を利益す。何等の法有りや。所謂、色慢・種姓の慢、及び財富の慢を離る。若し色慢・種姓の慢、及び財富の慢有らんに、是の愚癡人、口に惡業を行ひ、身に惡業を行ひ、意に惡業を行ふ。此の因縁を以て、身壞はれ命終らんに地獄・飢鬼・畜生に墮ち、彼の生れし處に於て處處に輪轉し、無量の生死あり、大苦惱を受けて稱説す可からず。既に過を知り已りて色慢・種姓の慢及び財富の慢を起さざれば。若し人有りて、能く色慢・種姓の慢及び財富の慢を離れんには、當に知るべし、是の人則ち身口の惡業を造作せず、實の如くに色の無常・苦・空・無我にて、空にして所有無く、堅固有ること無きを見る。是の不淨器は髮毛・爪齒・皮肉和合し、無量の骨鎖・筋髓・脂肪・屎尿・膿血其の中に充滿す。我が此の色身は初も亦不淨、中も亦不淨、後も亦不淨にして、無量の業煩惱の因縁の生ぜし所、堅無く常なく、實なく我なし。今我が此の身若し死時に至らんに、我が伴爲ること乃至一步ならず。塚間に棄てられ、或は火を以て燒かれ、或は雕・鷲・鳥・鴉・狐・狗の啖食ふ所と爲る。若し人は是の如くに思惟し憶念せんに、色慢中に於て或は滅し、或は薄からん。

復次に若しは沙門・婆羅門、種姓の慢を起して、自ら我が種姓は勝ると言ふ。若し實觀を以てするに、眞諦中に於ては種姓有ること無し。但妄分別あり、愚癡を以ての故に妄に分別を生じて此の種姓は勝れ、此の種姓は如かずとす。實の如きは然らず。何を以ての故に。生有るを以ての故に是の故に姓有るも、是の如きは變易す。何等の人に隨ふも、實の布施・持戒・智慧・定心の調伏有らん

を修行すべし。久からずして死至り、一切衆生の命を壞さん。若しは沙門・婆羅門是の如くに心を係け、死相を念じて所作空ならざらんには、必ず涅槃を得ん。復次に死を念ず。所謂、此の身は唯無常有り。一切の諸行は皆悉く無常・苦・空・無我にして念念に變壞し、速疾にて停らざる破壊の法なり。空にして所有無く、堅固の法に非ず、旋火輪、乾陀婆城の如し。一切の諸行も皆亦是の如く、我の身命も亦復是の如くにして堅固有ること無く、猶し水沫、乾闥婆城の如し。是の如くに死法は一切に皆有り、畢定して來至し、甚だ怖畏る可し。是の故に當に堅固の法を修め、三善業を攝し、三不善を捨つべく當に是の如くに死想を念ずることを作すべし。若しは沙門・婆羅門、自心に念ずることを修めんには、是の念を修むる故に大利益を得ん」と。爾の時、孔雀王菩薩、先佛の偈を以て頌を作して曰く。

此の六惡の怨家は世間を破壊し、老・病・死の不斷なるは、三毒に由るが故なり。五境界なる大賊は、能く善財を劫ふ。此の怨詐に親善からんには、嶮惡の處を行かん。放逸なる不善の心は、堅く境界に著し、能く衆生を將めて、疾に三惡道に至る。若し能く苦等の眞實諦を覺知ること有らんには、是の人則ち能く安穩なる寂靜の處を得ん。諸の毒根を拔斷し、功德の行を増長し、應に懈怠の心を離るべし。惡知識に近くこと莫かれ。若し比丘精進し、勤めて念じて死を觀ずることを修めんには、則ち無上の處を得て、永く老・病・死を離れん。若し能く實の如くに根塵を覺知して、正しき智慧に依止すること有らんには、則ち能く有海を渡らん。死を念じて常に怖を生ぜんに、慢及び懈怠を離れん。智慧人に親近まんには、衆惡も心を汚さざらん。精進して心柔軟に、法を修めて衆惡を離れ、正見にして心動かざる、此の人に應に親近むべし。若し惡知識に近かに、則ち善法を得ず、若し勝者に近かに、則ち衆過を畏れざらん。一念及び須臾も、晝夜常に離れずして、智者常に死を念ぜん

【四】三毒。食欲、瞋恚、愚癡の三煩惱のこと。

【五】五境界。五識の對象なる色境、聲境、香境、味境、觸境のこと。五境に執着することに依り、善法を失ひて有道に流轉するを以て大賊にたとへしなり。

【六】三惡道。又は三惡趣。地獄道、餓鬼道、畜生道を云ひ、六道の中、惡業の因にて趣き住する所故三惡趣と云ふ。

【七】根塵。塵とは境のこと。五根と五境を云ふ。

することを修めんに、是の人則ち、持戒・智慧を樂み、是の如くに修行せんに、是れ則ち善業を増長し、不善を消滅せしめん。善業を以ての故に人天の樂を受け、後に涅槃を得。若しは男、若しは女は此の功德を知り、若しは在家・出家、若しは沙門・婆羅門は常に應に死を念すべし。死を念するを以ての故に其心怖畏し、一切不善の業を作さずして、心に是の念を作さく、「一切の衆生は皆應に死すべし。天・人・地獄・飢鬼の境界は、處として死せざる無し」と。若し能く是の如くに修行して死を念ぜんに、未來世を畏れて其の心色・聲・香・味・觸に著せず。是の如き境界は常不變に非ず、不壞法に非ず。常に無常・苦・空・無我を念す。若し心死を念ぜんに、諸の惡の惱亂する所と爲らず。常に當に數數不淨觀を修むべし。善觀を増長して數數死を念じ、修習し增長して無常を係念す。常の處にして破壊せず、變ぜず滅せざるもの有ること無し。愛す可き山峯の百千萬億乃至、須彌山王も、劫火に燒かれて皆當に摧滅すべし。況んや人・天の身をや。大海の無邊なるも、一切の大河、一切龍王の所住の處も、一切の諸龍及び、阿修羅の七日既に出でんには則ち皆乾き竭る。何に況んや我身をや。要を擧げて之を言はんに、欲界・色界・無色界なる一切の三界は、無常にして變動し、皆當に破壊すべし。況んや我命は當に是れ常住・不動不破壞の法なるべけんや。若し能く是の如くに心意常に念じ、意善く觀察し、是の如くに心を修めんに、處として樂む可き無く、處として食る可き無く、處として瞋る可き無し。貪・心・淨きが故に癡も亦隨つて滅し、三過を離るゝが故に第一の處を得て老いず死せず、盡さず滅せず。是の如くに死を念ぜんに、所緣念無し。是の故に死を念することは一切の念に於て最も第一と爲す。死相を念することを修むるに復功德有り。若しは沙門・婆羅門是の如くに修行し、諦に此の身を觀じて、猶し虎檻の如からん。云何んが苦を觀するや。我此の身の如きは身・心病み惱み、老の爲に壞され、死王將の去り、死の綱に縛らる。何の所作と爲すや。布施・持戒及び智慧を修行する能はざればなり。是の故に應に死の未だ至らざるに於て、施・戒及び智慧

【二】須彌山(Gumery)。王とは須彌山を人格化して呼べるなり。修染樓、須彌樓、蘇迷盧、迷盧と云ふ。妙高山と譯す。世界の中央、金輪の上にあり、海に圍遶せられ、四方に各と一大洲有り、水面よりの高さ八萬由旬、四面各一色にして、東は金、南は琉璃、西は白銀、北は毘琉璃より成り、日月之れによりて廻り、諸天之れに依りて住し、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天の六道これに住し、四生、二十五有みな之れに住せり。

【三】阿修羅(Ashura)。又は阿素洛、阿素羅、阿須倫、修羅と云ふ。非天、非類、不端正と譯す。天に似たれど天より劣り、其の相貌醜惡にして、山中又は大海の底に住し、性得猛にて常に三十三天と戰ふ。其の狀、本經にしばしば出でたり。

卷の第六十二

觀天品之四十一

夜摩天之二十七

時に孔雀王菩薩は天衆の心を知り、復爲に第十六の法を宣説して諸天衆に告げらく「復善法の愛樂すべき法有りて、能く放逸を制すること猶し鐵鉤の如し。應に念じて修行すべし。何等の善法なるや。所謂、死を念ず。若し人、死を念じ、常に勤めて修習して、休まず息まず。「死等の大惡は一切の諸の衆生等を惱亂し、能く逃避することなく、決定して免る無し。生有らんには必ず死あり、能く一切の恩愛を別離せしめ、人をして喪滅しては畏處に生ぜしむ。或ひは樂從り苦處に生ずる有り、業の繩に繫縛られ、自業に資けられて地獄・餓鬼・畜生に墮し、命終らん時に於て伴侶有ることなし。唯善業及び不善業有りて以て同伴と爲る。作す所の善業は猶し父母の如くにて、將ゐて樂處に至り、不善の惡業は猶し大怨の如く、將ゐて地獄・餓鬼・畜生に至る。是の義を以ての故に、應に善業を修め、諸の惡を捨離すべし」。若し能く是の如くに修行して死を念ぜんには、其の心則ち境界に著せず、貪欲・瞋恚・愚癡に著せず、死を怖畏るゝ故に、妻子眷屬の因縁の爲に不善の業を作さざらん。一切の在家若し此の念を修めんには、尙寂靜を得ん。何に況んや出家をや。若し沙門有りて死を念ずることを修めんには、則ち戒を犯さず、境界を樂まず、憤間に處す。若し憤間に處んには心則ち散亂し、多言の本にして、多く女人を見ては能く一切貪欲の處を生ず。應に捨離し、思惟して死を念すべし。若し憤間に處んには、心意不善にして、命終らん時に於て當に一切の無利と衰惱を得、安樂を得ざらん。死に臨むの時刀風・劍風に解截され、歸ることなく救無く、業の繩に縛られ、將ゐて餘世に至らるゝも、父母・兄弟・妻子・眷屬の能く救護する所に非ず。若し能く是の如く死相を念

【一】死の字、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

して、此の使を皆滅す。此の結使の大力の因縁を以て諸道に流轉し、三界に攝せらる。若し心散ぜず、一心に見道・修道を念ぜんに、皆悉く能く滅す。若しは沙門・婆羅門、若しは復餘の人安穩を得んと欲せば、一切の善・不善の法は心を根本と爲す。是の故に宜く應に精進・修道すべし。有の過を怖畏れ、心を攝して正念ならんには能く煩惱を滅せん。餘法の能く是の如き無始より流轉する煩惱の稠林を滅すること、正念の心の如きもの有ること無し。爾の時、孔雀王菩薩、一切智の偈を以て、頌を説きて曰く。

一心に現前を念じて、諸の惡を怖畏れんには、能く無漏の法を生ぜんこと、猶し畦に稻を種く如からん。一心に現前を念じて、精勤て道を修習せんに、不善の法を斷除せんこと、日の闇冥を除くが如からん。若し一心に現前を、常に正しく念じて寂滅ならんに、則ち衆過を畏れざることを、金翅鳥王の如からん。是の如き散亂心は、風の大力有るが如く、智者は能く調伏して、猶し調象師の如し。戒と三昧と智慧とは、猶し大猛火の如く、風と共に和合して、諸の惡林を焚焼く。是の故に應に智を修むべし。愚癡を斷除し、老死の患を離れて、無上の勝處を得ん。若し能く勤めて心を攝し、精進を修行せんには、其の心を攝するを以ての故に、能く一切の惡を斷たん。心常に境界を緣じ、勇猛に能く攝持せんには、諸欲も壞する能はざること、毒藥の手に在るが如からん。是の如く勤め精進み、能く其の心を調伏して、三道の大なる愛河を、速に度りて停住ること勿れ。

是の如く孔雀王菩薩・夜摩天衆・兜率天衆を利せんが爲に善行を説けり。時に諸天衆、是の法を聞き已りて生死を怖畏れ、一切の境界の樂を捨離せり。

【五〇】三界。三有とも云ふ。欲界、色界、無色界の稱なり。

【五一】王の字、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

の海を度らざる。一切の衆生の命は、電の施火輪の如く、

乾闥婆城の如くにして、速に過

ぎ、暫も停らず。是の身は念々に壞す。常に老い死し、速に滅して堅住する無きを畏れ

んには、云何んが身慢を起さん。此の身は病の城と爲し、是れ大憂悲の處、善・不善の地た

り。是の故に名けて身と爲す。若し人、施戒・智もて、自ら身を莊嚴らんに、人中に於て

最も勝れ、善き果報を成就せん。若し人、七真有らんに、其の人は佛と等しくして、施・戒・

智もて精進し、悲・忍もて善く調伏せん。若し人、無量の數ふ可からざる時劫に於て、六波

羅蜜を修めんには、斯の人を名けて佛と爲す。若し人、欲を捨離せんに、三界に最第一たら

ん。諸欲を捨つるを以ての故に、常に大安樂を得。若し人、欲に貪著せんに、衆苦常に現

前せん。欲は衆苦の因たり。是の故に應に捨離すべし。

是の如く孔雀王菩薩・兜率陀天・夜摩天衆の爲に、是の如きの法を説けり。爾の時孔雀王、復天衆

の爲に第十五の利益する法を説く。若しは沙門・婆羅門及び餘の世間、心散亂せずんば則ち利益を得

ん。若し散亂心ならんに、善く心意を攝して心をして正しく住せしめ、常に同じき梵行の者に親近

するを樂み、常に勤め精進みて以て安穩を求め、諸の惡道を遠離す。若し比丘心散亂せざらんに、

六根を折伏して境界に著せず、生死を怖畏れて一切不善の法を捨離し、一切不善の法を捨離する

故に常に安樂を得ん。若し比丘有りて、色・聲・香・味・觸の法中に於て心散亂せずんば、是れを比丘

の心意正念なりと名け、心正念の故に善法を増長す。正念の人は生死を樂まず、常に勤め精進み、

樂みて三昧を修め、正念を以ての故に則ち能く道を得。既に道を得已りて、勤めて衆行を修め、

勤めて道を修むるを以て衆行を發起し、正しく憶念する故に道果を得、心常に正念にて道を修習す

る故に衆結を斷除し諸使を滅す。何等の結を斷するや。所謂、愛結・恚結・無明結・慢結・妬結・慳結

【註】乾闥婆城(Gandharva)。

摩竭國、摩竭國城とも書き、

摩竭國、摩竭國城とも書き、

の如くに於て實なきに譬ふ。西

城の樂人(乾闥婆)多く幻作を

作し、巧に樓閣を幻作して以

て人に見せしめたるより、こ

の化現のものも乾闥婆城と云

ひしものか。

【註】六波羅蜜。波羅蜜(Per-

fect)は舊譯に度、新譯に

到彼岸と譯す。生死の此岸を

度し、涅槃常樂の彼岸に到る

意にて、菩薩の大行を云ひ、

檀那(布施)、尸羅(持戒)、羼

提(忍辱)、毗梨耶(精進)、禪

那(靜慮)の六これ也。

【註】六根。眼根、耳根、鼻

根、舌根、身根の五根に意根

を加ふ。感官を指す、但し意

根は記憶經驗等意識の作用に

係らず感官の作用をなすもの

をいふ如し。或は現今にいふ

第六感をも含むが如し。

【註】三昧(Samādhi)。三摩

地、三摩提、三摩帝、三摩底

とも書き、定、等持、一境性

と譯す。心念を定め、又心掉

舉を離れて散亂せず、良く一

境に安住せしむる義なり。

ことなく、亦壞すること無けん。覺觀其の心を亂さんには、處々に生死を受けん。一念の縁と相應する、【四】三昧力は能く持せん。是の故に此の勝れし道は、能く涅槃の城に至り、一心に念するを以ての故に、能く魔王の軍を破す。堅固なる智の光明は、心の逸馬を繫縛して、第一の彼岸なる、無垢清淨の處に到らん。第一に勇健なる者は、修行して彼岸に到り、一心に念を係くるを以て、能く不壞處に至らん。

是の如く孔雀王菩薩、諸天衆の爲に無量に法を説きて利益し安樂にす。復、兜率陀天、夜摩天衆の爲に、不斷に説法して能く涅槃に至らしめ、諸天衆に告げらく、「一切の善法中第一の眞法は、所謂、第十四なり。獨行の比丘は好みて善業を行ひ、林樹の間に行きて善く寂滅を行す。所謂、獨行の比丘は寂靜に調伏し、心畏るゝ所無く、一切の處を樂みて若しは山谷に在り、若しは山窟、若しは草積の邊に在りて心偏著することなく、其の心正直なり。獨行の比丘に七法の利益あり。何等を七と爲す。一には足ることを知りて心常に歡喜す。二には心常に清淨なり。三には世間に敬はれ諸天に護らる。四には、【五】諸の塵垢を離る。五には善法を増長す。六には一心正念にして身・口・意を淨くし、解脱は現前す。七には垢法を離れて白法を成就す。獨行を以ての故に、能く無量無始より流轉する煩惱の怨家を破る。獨行の比丘は一心正行にして、煩惱を怖畏れ、微少の惡に於て心怖畏を生じて常に勤精進み、威儀寂靜なり」と。爾の時、孔雀王菩薩、諸天衆の爲に偈を以て頌して曰く。

輕擾にして堅牢たる惡は、大力も調伏し難きを、勇健に心を調伏せんには、則ち第一の樂を得ん。是の如き三種の過は、諸の世間を破壞す。智水もて能く除滅せんには、則ち第一の樂を得ん。若し入法を愛せずんば、人なりと雖も人に非ず。眞道に住せずんば、涅槃の城に至らざらん。既に此の人身なる、功德の所依處を得たらんに、云何んが椓に昇りて、諸の有流

【四】 三昧力。三昧(Samādhi)に依りて得る力。三昧とは定のことなり。

【五】 諸の字、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

に至りて心樂著することをせず、睡りて安けく覺めて安けし。樂著せざるが故なり。清淨く正行なること猶し耆老の如くにて、靡も便を得ず。色・聲・香・味・觸に著せず、亦供養の利を樂はず。已にして不善の覺と觀を捨つることを得ば、精勤で斷除して其れをして生ぜざらしめ、若しは惡き覺生ぜんに、尋ねて即ち除滅して心を惱まさらしむ。是の如き比丘、尙能く精勤で不善の覺を滅す。況んや復龜過にして斷除せざらんや。三種の法有りて應に修行すべし。何等を三と爲す。所謂、已に生ぜし不善の法は悲心を妨ぐ。斷除せん爲の故に勤行精進む。未だ生ぜざる不善の法は、生ぜざらんが爲の故に勤行精進む。已に生ぜし善法は、念じて當に精勤修習ひて増廣すべし。若し比丘有りて、心樂著せず、正意清淨にして、愛の盡くるを求めんと欲し、厭離を求めんと欲し、安樂を求めんと欲せんに、樂著を得ること無けん。若し比丘有りて、心樂著せざらんには、則ち第一最勝の樂を得ん。

爾の時、孔雀王菩薩、偈を以て頌して曰く。

常に禪定を修め、心樂著する所無くんば、心常に清淨の故に、意正くして錯亂れず。若し人、正しく憶念せんには、諸惡も染むる能はず。能く諸の過を離るゝを以て、是れを安隱を得と名く。一心に正しく憶念して、覺觀を能く亂すこと莫かれ。惡覺觀を離るゝを以て、是れを善き安住と名く。若し人意寂靜にして、常に涅槃を樂まんには、其の人の諸根中、諸の不善を遠離せん。若し修行者有りて、禪三昧の樂を得るは、皆一心に念するに由り、修行の得る所なり。若しは樂む獨の比丘の、樂の内心より生ぜるは、此の樂、諸の樂に於て、第一にして等倫なし。一心に念に係くる者は、其の心則ち清淨にして、諸の過の網を脱するを得、心意常に寂滅なり。常に一心に念に係け、五根を攝持する、斯の人の智慧の水は、能く愛の毒火を滅す。愛の縛を解脱せし人は、常に清淨の樂を得て、現前に勝處を得、盡くる

【四二】 偈。新譯に尋と云ふ。心所の一種にて尋求する精神作用なり。

【四三】 觀。何と云ひ、覺の處なる分別心たるに對し、より細なる分別心を云ふ。

は能く樂を得ん。善は則ち苦の因に非ざればなり。善に近かんには功德を増し、惡に近かんには増すこと尤も甚し。功德及び惡相は、今、是の如くに略説せり。常に善人に近かんには、則ち善き名稱を得、若し不善人に近かんには、人をして速に輕賤せしめん。常に善人に親み、惡友を遠離すべし。善人に近くを以ての故に、能く諸の惡業を捨つ。

時に孔雀王菩薩、復諸天の爲に是の如き言を説かく『若し比丘有りて、七功德有らんに、則ち惡名を離れん。何等を七と爲す。一には衆人を離る。二には供養の利を樂まず。三には足ることを知り、能く施主をして清淨の心を得せしむ。四には山谷の靜處に住して、諸の善業を攝するを樂む。五には多語を離る。六には若し聚落に入らば酒家に至らず。七には販賣・貿易を作さず。比丘若し是の如き功德有りて正行と相應せんに、則ち惡名無くして衆人に敬はれん。是の故に惡名を畏るゝ者は最も第一と爲す。若し比丘有りて惡名を畏れずんば、得る所の過惡は白衣に過ぎ、意に隨ひて作し、意に隨ひて説き、破戒する所に於て心慚愧なし。是の破戒の人、身壞はれ命終らんに地獄に墮ちん。惡名を畏るゝ者は空閑の處を樂み、聚落・城邑に近くを樂まず、足ることを知るを以ての故に他の信を壞せず、一切の憍闍の處を遠離し、微少の過に於て心常に怖畏る。是の如き惡名を怖畏るゝ比丘は世間の善を得ん』と。

復次に、第十三法は、能く利益する所多し。何等の善法なりや。所謂、法に樂著せざるなり。此の法は愛す可し。若し比丘有りて著を離れて清淨く、意純にして著を離れ、閑所を樂みて淨命に住せんには、憂惱を離れて第一安穩ならん。心を一處に攝して、若し苦厄に遭ふも心怯怖す、若し他に罵辱せらるゝも瞋恚を起さず、喜に逢ふも喜ばず、畏に於て畏れず、宗族に親みて自ら利益を失はず、作す所の事に於て皆悉く究竟む。先に作せし所の諸惡の業に於て喜樂を生ぜず、遊戲し歌舞するを觀看るを樂まず、一聚落より一聚落に至り、城より城に至り、邑より邑に至り、家より家

【四】其の字、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

ぞしめ、第一に安穩なり。唯願くは我が爲に次第に宣説したまへ。我等當に共に一心に聽受して、自利、利他すべし」と。時に孔雀王、是の語を聞き已り、諸の天衆の一心に樂み聞くを知りて、踊躍歡喜し、其の心怡悅び、第一利他にして、美妙の音聲にて諸天衆に告ぐらく、「若しは沙門、婆羅門及びひ餘の衆、心に法を念じ、既に法を念じ已りて勤めて怖畏を修む。何等の法を修むるや。所謂、惡名を畏るるなり。若し比丘有りて惡名を畏れんには、則ち諸の過を離れん。所謂、女人の戲笑する處に入らず、酒肆に入らず、沽酒に近かず、與に語を共せず、酒を嗜む人に近かず、亦與に語らず、賊人に近かず、先に大惡を作せし人に近かず、鬪を好む人に近かず、惡を陰ひ毒を懷く人に近かず、恒無く數道を捨つる人に近かず、博戲する人に近かず、伎樂人に近かず、小兒に近かず、女色に繫縛らるる人に近かず、輕躁の人に近かず、口を護らざる人に近かず、貧人に近かず、販賣して欺き誑す人に近かず、巧に僞る市道世所の惡賤人に近かず、河池を決堀る人に近かず、黃門の女人と路を同じしては一步も近かず、象を調する人に近かず、魁膾人に近かず、馬を調する人に近かず、斷見の人に近かず、無戒の人に近かず。是の如き惡人は、比丘、一切親近すべからず。何を以ての故に、是の如き人に近かんには比丘の法を失ひ、世間の人は是の如き念を作さん」是の如き比丘は是の如き人に近き、必ず與に同く行く。是の如き人と習近して共に行かんには、一切の人は是の如きの念を生ぜん」と。是の故に比丘、當に惡名を畏るべし。應に此の不淨業の人と、路を同じして一足の地を行くべからず」と。爾の時、孔雀王菩薩、如來の偈を以て頌を説きて曰く。

若し人、不善に近かに、則ち不善人と爲らん。是の故に應に惡を離るべし。不善の業を行すること莫かれ。何等の人に近き、數數相ひ親近するに隨ひて、近づく故に其行を同じし、或ひは善、或ひは不善ならん。一切の人、善を求むれば、當に善人に近くべし。是の如き

【四〇】黃門。(Mānāsikā) 五種不男を指すと云はれてあるが、こゝでは性不具の婦人を指すならん。

の過を遠離せんに、是の人、涅槃に到ること、遊戲處に至るが如からん。常に涅槃を求め、常に生死を怖畏るゝ、是の如き清淨心は、則ち非處を樂まず。

比丘、是の如く、非處に住すれば衆多の過を得。是の故に比丘、應に非法の處を捨離すべし。若し比丘有りて非處に住せんに、凡俗と異なることなく、若し俗人有りて非處に住せんに、無量の惡を得、何に況んや沙門をや。在家に近くが故に一切の善法と相違す。是の故に應に非處を遠離すべし。時に孔雀王菩薩、復、夜摩天衆及び兜率天の爲に、迦迦村陀如來の第十一法を説けり。是の如き善法は甚だ愛樂す可く、能く涅槃に至る。何等の善法なるや。所謂、住心にして、若し比丘にして住心有らんに、能く善法を持して人に讚歎せられん。住心の法は一切の惡を離る。無始より流轉する心の過なる羅網の結使は、周遍く繫縛すること堅固にして、是れ、少時、少精進、小定の能く斷するに非ず。若し比丘有りて、住心薄少ならんには、則ち心地の過網を斷する能はず。異法の能く生死を斷すること、住心の法の如きこと有ること無し。唯だ修行者に住心の法有らば、若し不善の法起らんに心を攝して伏せしめ、惡業を樂まず、精勤して斷除し、勇猛に精進して不善の法を斷す。若し貪心起らんに、不淨觀を修む。是れを相應と名け、是の惡欲心を不淨は能く斷じて樂まず、著せず。若し瞋恚起らんに、心を攝めて慈を修む。若し癡心起らんに、心を攝めて十二因縁を觀す。爾の時、孔雀王菩薩、偈を以て頌して曰く。

若し住心を樂まさらんには、樂に隨ひて諸の愛を起し、若し愛の爲に縛られんには、二世の利を失はん。

是の如く、孔雀王菩薩、夜摩天、兜率陀天の爲に不住心の無量の過惡を説けり。爾の時、天衆、二世の利を聞き、樂み聞きて厭くこと無く、是の如き言を作さく『孔雀王は未曾有なり。乃ち能く我が爲に深法を演説したまへり。初・中・後善く、能く涅槃に至らしめ、種々の生死に於て能く厭離を生

【七】迦迦村陀如來。過去七佛中の拘樓孫佛(Krakucchanda)の事。

【三】結使。煩惱の異名、結は心身を纏縛する意、使は驅役する義なり。

【九】十二因縁(Dvādaśīṅga-pañcīya-samutpada) 十二支、十二緣等と云ふ。現實の生死より出發して其の根本原因をたづね、十二の階梯を経て無明を見出す、無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死之れなり。世尊は菩提樹下に於いて證前證後とも之を順觀逆觀し玉ひしこと多くの佛傳に見えたり。

説して、某沙門・某婆羅門及び餘人と云ふも、非處に住することを樂まんには、在家と名けず、出家と名けず。山林阿蘭若の處を樂ます、財物を貯蓄し、俗人を見ることを樂み、在家に親近して猶し奴僕の如く、諸の白衣の輕賤する所と爲る。是の故に此の人を在家と名けず、出家と名けず。非處に住する故なり。設令、過無くして他の爲に誇らるゝも、一人の非處に住すること有ること無からんには、施主の輕賤する所と爲らず。數白衣を見、或ひは在家に近かに、輕慢せずと雖も、或は異過を生ぜん。若しは沙門・婆羅門、非法の處に住まんに、非處に住するを以て無利益を得。是の故に沙門・婆羅門は破壊の處に住す應らず。常に住處を樂み、常に獨處を樂み、樹下に住することを樂み、靜處に住することを樂みて、以て禪默を修し、或ひは山谷に在り、獨一にて行じて乃至命を盡す。應に非處を避くべし。一切非法の處を捨離せんには能く解脫を得、非處に住する者は解脫を得ざらん。爾の時、孔雀王菩薩、頌を説きて曰く。

比丘、非處に住せんには、人、視ること僮僕の如く、之を輕ずること草芥の如くにして、亦自らの利益を失はん。比丘、非處に住せんには、在家、出家に非ず。禪、誦の法中に於て、其の心喜樂せず。比丘、非處に住せんには、財物を貯積へ畜み、貪心に財寶に著して、死時至るを覺知らざらん。身命は念念に盡くるも、能く覺知る能はず、作す所の業を知らずして、能く未來の報を受く。比丘、非處に住せんには、常に樂みて俗人を見、常に非處に行き、死すれば則ち惡道に入らん。心樂著する所無く、一切を捨望ます、能く一切の貪を脱すれば、是れを名けて沙門と爲す。若しは山樹の下に在りて、常に禪觀を修習せんに、則ち清淨の智を得て、一切の過を遠離せん。一切の貪を遠離して、境界に惑ことを爲さざらんには、則ち能く煩惱を滅せんこと、火の乾ける薪を焚くが如からん。獨り修行する比丘の、五根を攝持し、實の如くに身相を知らんには、則ち涅槃道を得ん。常に念じ、勤め精進み、一切

【三〇】 白衣。昔印度にて位官あるものは彩衣を纏ひ、俗人の位官なきものは白衣を著せり。又僧の黒衣なるに對し、俗人を凡て白衣と呼ぶことあり。

【三一】 五根。眼根、耳根、鼻根、舌根、身根のこと、即ち感官を指す。

るは)定んで果報を受く。

復次に、業の果報を信す。思惟して解し難き微細の業果あり。三種の惡業に於て、作し已りて懺悔して復更に作さざるに、不定業を以て畜生中に生じて、是の如くに思惟すらく『若しは地獄の業、若しは餓鬼の業にて畜生の身を受けたり。悔心清淨にして、能く重業を破せしならん』と。心力を以ての故に、或は一切を滅し、或は少分を斷す。若し應に畜生を受くべき惡業あらんも、心悔能く滅し、自業を能く滅し、長命なる畜生の身を受けず、大苦を受けざらん。或ひは勝心を以て惡業を斷す。此の因縁を以て當に業果を信すべし。若しは沙門・婆羅門・及び餘の人、業の果報を信すれば則ち能く生死の彼岸に到らん。何を以ての故に。一切の生死は、五道の中に、善・不善の果報を以ての故に有り。是の故に、應に實なる業の果報を信すべし。一切の衆生は、一切の業果の因縁の故與なり。是の故に、若しは男も若しは女も、應に勤精進むべし。晝夜に業の果報を思惟せんには、生死中に於て、第一に堅牢ならん。

復次に第十にして、若しは沙門・婆羅門及び餘人、應に思惟すべし。何等の法を思ふや。所謂、住所に害はるゝなり。若しは沙門・婆羅門及び餘人の智慧少き者は住處に害はれ、其の心樂著し、情戀うて捨てず、或ひは僧伽藍、或ひは僧の住處、或ひは聚落在に在り、或ひは國土に住し、或は城邑及び異處に住し、常に懈怠を樂み非處を樂み、寂靜なる阿蘭若の處に至らず、異處に行かずして在家と名けず、出家と名けず、非法の處に於て乃至命終らん。是の如き人は、何の因縁にて出家を行することを爲すや。一切の應しき所の山林阿蘭若處に至らず、乃ち非處に於て身命を盡す。禪を修せんが爲の故に出家を行じ、山林寂靜の處に入らずして非處に住す。若し沙門・婆羅門・非處に住せんに、諸の施主の輕んじ毀り、親近することを樂はず、供養を修めず、見ることを樂はざる所と爲らん。若し非處に住んに、過失は彰顯にして、諸の凡俗の輕笑する所と爲る。互に共に論

【三】五道、予趣とも云ふ。地獄、餓鬼、畜生、人、天のことなり。衆生の善惡の業にて趣き住する所。

【三】僧伽藍(Sangharama)。單に伽藍とも云ひ、衆園、僧房と譯す。寺院のことなり。

【四】阿蘭若(Āraṇya)。又は阿蘭那、阿練若、閑靜處、寂靜處、無聲處、意樂處、無諍行等と譯す。閑靜なる修行に宜しき比丘の住處。是れに三種あり。達磨阿蘭若、摩登伽阿蘭若、撞陀伽阿蘭若にして、是れを三處阿蘭若處と云ふ。

知り、身の惡業に於て習ひて増長せず、愛せず樂まず。其の果を得るを以て、地獄・餓鬼・畜生の惡境界に在らんが故なり。是の如く、口の惡業に於て習ひて増長せず、愛せず樂まず。其の當に地獄・餓鬼・畜生の惡果報を受くべきを以ての故なり。是の如く、意の惡業に於て習ひて増廣さず、愛せず樂まず。其の當に地獄・餓鬼・畜生の苦を受くべきを以ての故なり。若しは沙門、若しは婆羅門、先に作せし惡業を念じ已りて悔を生じ、止めて更に作さず、師長に親近して其より法を聞き、「云何にして惡業の果報を脱することを得るや」と。是の如き師長、智の調伏ありて、爲に因縁を説き、方便を以て説きて、作せし所の過去の惡業を悔いしめん、則ち盡滅すと爲す。其の是の如く善業を念ずるを以ての故に惡業を作さず、業の因縁を觀じて、何れの所より起るやと、是の如くに之れを觀じて惡業を作さざれば、能く一切の不善の業をして漸く消滅することを得しめ、或ひは、現在に作す所の身・口・意の惡不善の業を輕薄ならしめん。心に輕するを以ての故に、作し已りて速に悔い、復更に作さず。是の如き悔心は、若しは業にて成就せる一切の惡業を皆悉く消し滅す。若しは沙門・婆羅門及び餘の世間、是の如くに業を知り、是の思惟を作す「我れ、惡を習ひしを以て、當に身・口・意の惡不善の業を作したるべし。報熟の時には地獄・餓鬼・畜生に墮せん。彼の未だ生ぜざる惡不善の業に於て、正しき方便を以て其れをして生ぜざらしめん」と。若し能く是の如くに業の果報を信ぜんには、設ひ地獄の惡業を成就せることあらんも、應に久しく地獄に在りて大苦惱を受くべきこと、或ひは薄少なることを得、或は皆消滅せん。復次に、勤精進の故に、若し惡業の應に餓鬼に墮すべきものあらんも、久しく餓鬼に在りて飢渴の大苦あらんこと、或ひは少時受け、或ひは皆消滅せん。是の如く、沙門・婆羅門及び餘の衆生、若し應に畜生に墮すべき惡業あらんも、久しく畜生に在りて互に相ひ食啖ふこと、或ひは少時受け、或ひは一切滅す。唯、作り習ひて、決定して成就せるを除く。何れの道に墮するも、若し地獄・餓鬼・畜生の境界の中に於ては、決定して成就せ

聚積せず。邊方危怖い處に行かず、服飾を異せず、請喚を樂はず、偏に一家に往返するを樂はず。是れを第五調伏の法と名く。

復次に、第六の調伏とは、草木を斷じ、及び生地を堀らず。雜色の革屣、雜色の衣服を著けず。若しは他の破戒を誇らず説かず。心に王者の儀を怖望はず。闕を意む比丘に親近ます。是れを第六調伏の法と名く。

復次に、第七の調伏とは、若しは比丘あらんに、意を同うし法を同うして應に親近利益すべし。常度あらしめ、魔境を棄て、寂滅ならんことを欲し、調伏して諸根を守り攝めん、此の如き比丘には應に親近すべし。若しは山窟に於て、若しは山澗、樹下の露地に於て、常に空・無相・無願を修行す。是れを第七調伏の法と名く。若しは比丘ありて、能く是の如くに行ぜん、則ち、能く一切の諸縛を捨離れて解脱を得ん。爾時、孔雀王菩薩、諸の天衆の爲に偈を以て頌して曰く。

調伏の法と相應し、智の境界を修行し、生死の過を怖畏んには、則ち、空の出家たらざらん。學處を毀缺す、本の樂を念はず、常に諸陰を觀じて、應に靜なる林中に住すべし。軟語にて寂滅なる人は、現に涅槃に趣かん。持戒もて身を莊嚴らんに、出家と相應せん。自他の法中に於て、若し能く迷惑せず、業報、非業報亦然り、惡業の行を離れ、苦樂を怖畏れざらん。に、寂に於て解脱を得、衆苦も縛る能はざらん。

是の如く、孔雀王菩薩、調伏の無量の功德を説きて、諸の天衆をして、皆、信解を得しむ。一切の天衆、一心に諦に聽けり。爾の時、孔雀王菩薩、夜摩天衆、兜率陀天衆の爲に説法して、心休息せず。諸の天衆の法を尊重することを知るが故に、復、第九の無垢なる淨法を説けり。云何んが名けて無垢淨法と爲すや。若しは沙門・婆羅門及び餘の世間、業報を信ぜん、業報を信するが故に大法を得ん。若しは沙門・婆羅門及び餘の世間、業の界報を信すれば、此の人則ち能く身の惡業を

【二八】 請待供養の事。

【二九】 空・無相・無願を三解脱門又は三空門、又は三三昧と名く。解脱を得る三種の法なり。即諸法空にて相なしと觀じ、願求を離れて解脱するなり。

【三〇】 學處、戒のことなり。比丘、比丘尼の學ぶべき處の意なり。

【三一】 除(Standhu)、新譯にて禪と云ひ、積集の義なり。これを色・受・想・行・識の五陰に分つ。心身のこと。

人の棄つる所の衣の若しは塚間に在るものと、死人の衣有りて死屍に壓せらるゝとは則ちまさに取り
るべからず、若しは塚間に於て破壊衣を得ば、則ち應に受用すべし。是れを袈裟調伏の法と名く。

復次に第二の調伏とは、若し聚落に入らば地を觀じて行き、一尋を前視し、佛の影像を念じ、一
心正念にして諸根亂れず、出入の息を數へ、心身に念を保く。聚落に入りては、一切の須ふる所の
具を觀ず、種々の器物を觀ず、亦、他の莊嚴、幃帳を觀ず。女人と言論語說せず、小兒を抱かず、
數く足を動かさず、亦、臂及び其床座を動かさず、手にて頭を摩さず、數く衣を整へず、袈裟を抖擻せ
ず、手を按摩せず、亦、彈指せず。是れを第二調伏の法と名く。

復次に、施主の家に入るに、飯食時に於ては、腕を齊へ手を濯ぎ、若し食を受けん時、大に手を
舒さずして、當に前の一肘なるべし。口に食を滿さず、亦、太だ少からず。若し食時に於ては、輕
弄せず、調戲せず。謂く、足ることを知らざれば、他の淨信を失ひ、他をして輕んじ慢らしめん。
當に他心を觀すべし。若しは飯を揣る所は、大からず少からず、大いに口を張らず、聲あらしめず、
大いに氣を出さず、應しき所の食にして、但、二分を食し、食は止足を知る。他の鉢を觀て貪心を
生ぜず、受くる所の飲食にて他の心を壞せず、自ら其の鉢を觀て左右を顧視す。食し已らんに鉢
を離し、澡漱ぎ清淨にして諸根を守り攝め、正心に說法し、心に審諦を念じ、遲からず速からず、
曲ならず直ならず、非時に説かず、多からず少からず、施主の心を護りて其の信を壞さず。是れを
第三調伏の法と名く。

復次に、第四の調伏とは、若しは食時に於て、若しは聚落に於て、或は城邑に於て、先に見し所
の食に心念を生ぜず。數言說せず、亦、受くる所の敷具を憐望はず、法の如くに受け畜へて上勝
を求めず。是れを第四調伏の法と名く。

復次に、第五の調伏とは、一切の所作は倚らず著せず、身命を惜まず、用ふる所の具に於て多く

す。若し人有りて能く其の心を柔軟にせんには、其の人一切定んで涅槃を得んこと、譬へば麻性の油を出し、日性光明あり、月光の性は冷にして、火は熱く地は堅く、風は動き水は濕ひ、四大各々自相は倒れざるが如からん。軟心の人其の心を調伏し、信心し精進し、顛倒の見ならずして因果を信ぜんには、則ち涅槃に於て現前に在るが如からん。爾の時孔雀王菩薩、佛經の偈を以て頌を説いて曰く。

若し人にして心柔軟ならんには、猶し成く鍊れる金の如からん。斯の人内外善く、速に衆苦を脱することを得ん。若し人、心器調はんに、一切皆柔軟にして、斯の人善種を生ぜんこと、猶し良き稻田の如からん。一切の諸の衆生も斯の藏を盡す能はず。能く貧窮、及び多くの誑詐を破す。利根寂靜なる人は常に禪定を修行し、放逸境に著せずして、永く諸の苦惱を離る。

是の如く、孔雀王菩薩の偈を説く時、夜摩天衆、兜率天衆は樂み聞きて厭くことなく、復法を聞かんと欲して、合掌恭敬して白して言さく「大聖よ、願はくは我等の爲に具に二十二法を説きたまへ。我等他を利益せんと欲する爲の故に、當に至心に聽くべし」と。爾の時、孔雀王菩薩、諸天衆の爲に二十二の最勝の法門を説きたまへり。已にして七法を説けり。今當に次第して第八法を説くべし。若しは沙門・婆羅門及び餘の善人ありて、心に思惟を生ずるに、何等の法ありや。謂く、調伏の法にして、能く一切に與して法を莊嚴することを作す。一切の調伏は毘尼と相應す。若しは沙門・婆羅門、若しは復餘の人、在家なるも出家せるも、若しは老いたるも若しは少きも、調伏と相應せんには、此の莊嚴を以て能く端正ならしむ。若し調伏を離れんに、野牛・烏・鴉・鷲の如からん。出家の人は、云何にして調伏するや。出家の人は、初に袈裟を以て自ら調伏す。當に七事を行すべし。何等を七と爲すや。一には其の國法の如くにし、糞掃衣を受け、住む所の國に隨ひ、在家の

【三】 毘尼(Vinaya)。離行、滅、調伏等と譯す。三藏中の律のことなり。
【七】 糞掃衣(Pamsakūta)。汚物を清めたる布片と同様のものにて作れるもの故糞掃衣と云ひ、鼠嚙、火燒、産婦用の布片を以て衣とせる衲衣なり。五種衲衣の一、又は衲衣の總稱ともなり、又十二頭陀行の一とも定めらる。

已りて、後、涅槃を得ん。悲心なる清淨の池は、牟尼の讚歎したまふ所なり。能く一切の過を斷じて、悲の財は窮盡無し。功德もて勝れて莊嚴り、能く一切の過を斷ずるは、牟尼の悲潤の心たり。故に不滅の處に至りたまふ。悲の因の所在に隨ひて、蜜と乳と和合せしが如くにて、瞋恚及び熱惱は、其の心に住する能はず。既に悲心の根に昇り、哀矜の心勇健にして、能く有海の三毒の大洞を渡る。功德勝れたる營邑も、此の莊嚴に勝ること無けん。善人の愛する所、故に名けて悲心と爲す。

是の如く、孔雀王菩薩、天の爲に說法して、初・中・後善く、寂滅と相應せり。一切の天衆、樂み集まりて聽受せり。

復次に、彼の佛世尊、第七法を説きたまへり。謂く、何等の法之れと相應して解脱を得るや。放逸を斷ずるなり。何等の業を以てするや。謂く、柔軟の心にして、輕躁の過を斷じ、諸功德を攝むるなり。若し人、能く柔軟の心有らんには一切の垢を離れ、涅槃・解脱は猶し手に在るが如からん。軟き心の人は心白鐵の如くにて、善業を修行し、衆人に信ぜらる。龜犢き心は金剛石の如くにて、恒に怨結の心を忘れず、行調伏せず、衆人に憎まれ、愛せず信せず、若し悪心を起しては堅く執りて捨てず。心安樂せず、禪・誦を樂まず、善人に近かず。善法を生ぜざることは、沙鹵地に種子を生ぜざるが如く、又沙中に麻油を出さざるが如し。龜犢き心の人も亦復是の如くにして、善法を生ぜざること構角に乳の如く、月中に暖の如く、石女に兒の如く、空中に花の如し。龜犢き惡業あり、誑詐、無智にして自らを誑し他を誑し、五有に没せられ、善人に近かず、三寶を捨離す。此の生盲の人は正法明慧の目を視ず、甚だ哀愍むべし。生・老・病・死・憂・悲・苦惱の衆苦の聚にして、大曠野に入つて無量の苦を受け、柔軟、甘露の味を遠離す。是の如き惡人は苦海に没し、涅槃を得ること遠し。何を以ての故に、涅槃道の因行を行ぜざるが故なり。是の義を以ての故に常に樂を得

【三】池の字、宋、元、明三本及宮内省圖書寮本に依る。

【二】構(構)角。

【五】五有。五道又は五趣の事。

悲心を以て諸の衆生を念するが故なり。衆生を悲念するに、三惡道の大苦惱の處に於て、最大惡業の果の地に於て悲心を興し已りて、復、六欲諸天に於て悲心を興す。六欲天に於ては、天の樂を受けて譬喩ふ可からず。種種の山谷・山峯・園林ありて快樂を受け、蓮華林池にて諸天女と共に遊戲して百千種の樂を受く。既に樂を受け已り、業盡き、還り退きては生れて苦處に在りて大苦惱を受け、地獄・餓鬼・畜生に墮す。此の生死の處は衆生を戲弄し、愛の鎖に縛れて東西に馳走し、迷へる。故に知ること無くして、大苦惱を受く。是れを諸天の苦を觀じて悲心を起すと名く。

復次に、若しは沙門・婆羅門及び餘人、人中を觀じて悲心を起す。種種の業を以て、人中に生じて苦樂の果を受け、上・中・下の衆生ありて種種に業を作し、種種の心性にて種種に信解す。或ひは貧窮なるものありて他人に依恃り、憎憊み妨礙げ、他の輕賤むを畏れ、追求して業を作し、以て自ら活を存す。是の如くに人世間を觀じて悲心を起す。是の如き悲心は第一白法にして能く涅槃を得。是の如くに五道の衆生の五種の苦を觀じ已りて悲心を興す。是の如き人は勝れたる安穩を得、則ち涅槃を得。爾時、孔雀王菩薩、迦迦村陀如來の頌を説きて曰く。

若し人、心柔軟にして、悲心もて自ら莊嚴らんには、一切の護る所と爲りて、衆人に稱歎られん。是の如き柔軟の心にて、諸根常に悦豫べる此の正見の善人は、涅槃を去ること遠からざらん。若し悲心もて莊嚴らんには、則ち人中の天爲らん。若し人にして悲心無くんば、是れ則ち常に貧窮なり。若し人、柔軟の心もて調伏して眞金の如く、若し悲、心中に在らんに、此の寶窮盡無けん。若し人、常に精進し、恒に正法を修行せんに、此の人の心智の光は、猶し大明燈の如からん。若し人、晝夜に於て、心常に法に住せんに、斯の人の悲心は、晝夜常に離れざらん。其の人の心清淨にして、諸の衆生を利益せんには、既に安樂を受け

界初禪天のこと。梵衆、梵輔、大梵三天の總稱。
【二】六欲天。欲界の六種の天、即ち四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天にして、欲樂を主とするを以て此の名あり。(經集部九通頁四の註參照)
【三】故の字、宮内省圖書寮本に依る。

【二】迦迦村陀如來。過去七佛中の拘樓孫佛(Krūkoṣhan-ṭha)のことなり。

【三】豫の字、宋、元、明三本及宮内省圖書寮本に依る。

心の怨家の造作する所に由りて喩ふ可らざる種々の大苦を得るや。鐵鈎・鐵杵・融銅は熾然り、惡蟲に噉はれ、度り難き瀑河は衆生を漂し没し、鵬・鷲・鳥・鵠に啄食する。劍樹林及灰河中に入つては、種々の苦を受けて具に説く可からず。所謂、活地獄・黑繩地獄・衆合地獄・叫喚地獄・大叫喚地獄・焦熱地獄・大焦熱地獄乃至阿鼻地獄及び其の隔處大地獄等一百三十六處あつて、衆生中に墮ち、圯ち裂かれ、劈き坼かれ、斷ち截たれ、燒き煮らる。自らの心に誑され、業の網に縛られ、愛の火に燒かれ、救なく歸ることなく、東西に馳走し、哀を求めて自ら勉め、以て救護を求む。我れ當に何れの時にか此の大苦惱の海を度ることを得べきやと。此の衆生に於て悲心を起す。若し是の如き悲心の種子を種かんには、則ち天王と爲り、或ひは轉輪聖王と作りて、一切の衆生に愛重せられん。悲心の人は善業を愛樂す。是れを、地獄の衆生の大苦惱を受くるを觀て悲心を起さんに、則ち無量の梵福を増長することを得と名く。

復次に、若しは沙門・婆羅門及び餘の善人は、衆生を利益し、諸の餓鬼を觀じて當に悲心を起すべし。云何にして衆生、餓鬼中に墮して種々に飢渴し、自ら其身を燒きては燒ける叢林の如く、四面に馳走して互に相ひ摑突り、炎火焚燒つて遍體熾然り、救無く歸ることなく、處處に遍く走りて以て救護を求むるも能く救ふ者無きや。此の諸の衆生は、何れの時にか當に種々の苦惱を離るべきや。何れの時にか當に飢渴の苦を斷すべきや。是れを餓鬼の苦を觀じて悲心を起すと名く。

復次に、若しは沙門・婆羅門及び餘の善人は、畜生を觀じて悲心を起す。畜生の中には無量の苦惱ありて互に相ひ殺害す。畜生に三處あり、所謂、空行・水行・陸行なり。死法無量にして、互ひに相ひ殘害ひ、互に相ひ食噉ふ。此の諸の衆生、何れの時にか當に脱すべきや。是れを餓鬼の苦を觀じて悲心を起すと名く。若しは能く是の如きの念を生ずることあらんに、則ち梵天に生ぜん。

【一三】活地獄等。地獄(Naraya)無幸處と譯す。地下二

萬由旬に無間地獄あり、其上に重なりて大焦熱、焦熱、大叫喚、叫喚、衆合、黑繩、

等活の七地獄あり。此の八熱地獄に各四小地獄あり。合し

て百三十六地獄となる。阿鼻地獄とは無間地獄のことなり。

各地獄に就ては第一卷に詳し説けり。

【一四】勉の字、宋本、宮内省圖書寮本に依る。

【一五】轉輪聖王(Cakravartin)王位に即く時感得せる輪寶を轉じて、四天下を統領する故此の名あり。輪寶の種類により四王の別ありて、各三十二相を具へ、自在に空中を飛翔し、千子あり、無量の福德を具ふと云ふ印度人の描ける理想の天子なり。

【一六】苦の字、宋、元、明三本及宮内省圖書寮本に依る。

【一七】畜生の二字、元、明本に依る。

【一八】梵天(Brahma)。此處では欲界六欲天の上に在る色

後に悔ゆとも及ぶ所無けん。處々に愛着を生じて常に欲樂を求め、恒に妻子を貪愛して死の來り至るを覺えず。念々に諸惡多くして種々の過に亂され、心、衆生を縛するを以て將に三惡趣に趣かんとす。是の惡は調伏し難く、常に天人の便を求むるも、是の心は信すべからずして、衆生の大怨たり。善見善聞を以て無量種に修習し、法を以て心を調伏せんには、馬の銜勒を得たるが如からん。

是の如くに第一深厚なる福田は善功德を具ふ。應に供養を修めて、天衆を利益すべし。是の如き法を説き、及び業道を説きて、説法の師を尊重讚歎せり。孔雀王菩薩、願力を以ての故に、彼の天に生じて諸天を利益す。時に諸の天衆、既に法を聞き已りて心清淨を得、皆悉く一心に其の説を聞きて是の如き言を作さく「此の孔雀王の所説は相應し、相應せざるに非ず。兜率陀寂靜天王の所説と相應し、異なることなく、別なることなし。此の法を思惟するに初・中・後善く、第一に清淨にして第一の善法、第一に安隱なり。一切の天人を利益し安樂にし、寂滅を得せしむ」と。

爾の時、孔雀王、兜率陀天の是の語を説くを聞き已りて、心淨歡喜し、一切悲心にて安忍し、一切の天衆を利益し、乃至涅槃せしむ。復、第六の深く勝れたる法門にして、能く涅槃に至るを説く。是の如きの法は第一の安穩にして第一に最も勝れ、衆人に愛せらる。所謂、悲心にして、一切の人を愛し、人をして信を生ぜしめ、生死を怖畏るゝ衆生を安慰し、心安穩ならざるに安穩を得しめ、救無き者に於て爲に救護を作す。若しは悲心有らんに、是の人則ち涅槃を去ること遠からざらん。悲心柔軟なれば欺誑の心無く、龜癩き心無くして、能く瞋心を斷ず。悲潤の心の故なり。又、悲心とは大莊嚴に名づく。五道の衆生に於て若しは悲心を起さんに、能く瞋惱を破せん。云何なるを地獄の衆生に於て悲心を起すとすや。此の諸の衆生は、云何にして自業のために誑かされ、

【一〇】 三惡趣。又三惡道とも稱し、六趣の中の地獄趣、餓鬼趣、畜生趣の事。趣はおもむき住む所の意なり。

【二】 軟の字、宋、元、明三本及宮内省圖書寮本に依る。
【三】 五道、五趣の事。以下に説くが如く、地獄、餓鬼、畜生、人、天のことなり。

何を以ての故に、法を聞くを以ての故に心調伏を得、調伏を以ての故に能く無知流轉の闇を斷ずればなり。若し法を聞くことを離れんに、一法の能く心を調伏することあること無けん。如し説法を聞かんに、四種の恩ありて、甚だ報じ難しとなす。何等を四と爲すや。一には父、二には母、三には如来、四には説法の法師なり。若し此の四種の人を供養することあらば無量の福を得、現在には人の讚歎する所となり、未來世に於ては能く菩提を得ん。何を以ての故に、説法の力を以て、憍慢の者をして調伏を得せしむるが故に、貪著の者をして布施を信ぜしむるが故に、兪癩い者をして心調柔ならしむるが故に、愚癡の者をして智慧を得せしむるが故に、法を聞ける力を以て、因果に迷へる者をして正信を得せしむるが故に、法を聞ける力を以て、邪見の者をして正見に入らしむるが故に、法を聞ける力を以て、殺生・偷盜・邪淫の業を聚む者をして遠離を得せしむるが故に、此の説法調伏の因縁を以て涅槃を得。令む。此の因縁を以て説法の法師は甚だ報じ難しと爲す。父母の恩は報ずることを得べきこと難し。生身を以ての故に、是の故に父母は報ずることを得べからず。若し父母をして法中に住せしめんには、少しく恩に報ぜりと名く。如来・應・等正覺は三界に最も勝れ、生死を度脱したまへる無上の大師たり。此の恩報じ難きも、唯一法ありて能く佛恩に報ぜん。若しは佛法に於て、深心にして不壞の信を得ば是れを報恩と名く。此の供養を以て、亦、自ら利益す。爾時、孔雀王菩薩經偈を説きて曰く。

説法の因縁を以て、安穩涅槃を得。能く一切の縛を斷つ衆生の大師たり。寂靜の法を説くを以て、能く愚癡の網を斷つ。是の如き勝れたる導師は、能く衆生道を示すなり。

若しは法にして衆生をして諸の有海を超度しめんには、此の法最も殊勝れ、世法能く及ぶこと莫けん。若し人能く此の四種の福田を供養せば、斯の人善果を得ん。導師是の如く説けり。既に諸根を具することを得たらんには、亦佛法を聞くことを得ん。若しは非法を行すれば、

【五】無上正遍智と譯し、新譯には無上正覺と云ふ。平等の眞理に於て知らざる所無き圓滿なる佛の覺智を云ふ。

【五】菩提(Bodhi)。舊譯に道と云ひ、新譯に覺と云ふ。佛の覺智を云ふ。

【六】令の字、宋、元、明三本及宮内省圖書寮本に依る。

【七】如来(Tathagata)。佛十號の一。眞如より來生せるもの意。

【八】應。應供(Arahant)の略。右に同じく、佛の十號の一。應に人天の供養を受くべき者の意なり。

【九】等正覺(Samyaksambuddhi)。同じく佛の十號の一。正遍知とも云ふ。平等の理を覺りたまへる者の意。

卷の第六十一

觀天品之四十

夜摩天の二十六

復次に、第一 五法は一切の人天を利益し安樂にす。何等の法を謂ふや。所謂、説法にして、一切布施の法を説き、諸の善法を説くなり。一切の尊きが中に法を聞くこと最も勝れ、能く一切憍慢の根本を斷つ。所謂、説法は能く憍慢を調へ、法を説き、法を聞かんには、尊び敬ひて法を重せん。法を信ずることを説き、法を受持することを説き、修行人は法を離れざらんことを説く。諸佛如來は法を以て師と爲したまふ。何に況や 聲聞、緣覺をや。説法に十の功德ありて、利益する所多し。何等を十と爲すや。時處を具足す、分別して解し易し。法と相應す。利養の爲にするに非ず。心を調伏せんが爲なり。説法に隨順す。施に報ありと説く。生死の法は諸の障礙多しと説く。天は退没すと説く。業の果ありと説く。若し説法人に此の十法有らんには、法を聞く者をして多くの功德を得せしめ、利益し安樂にし、乃至涅槃を得(しめ)ん。是の法を聽く者及び法を説く人は、作す所の願に隨ひて各成就することを得。一切種種の布施の中、法施最も勝れ、乃至能く一切衆生をして涅槃の樂を得せしめん。

復次に、開法の功德ありて深心を成就し、信根清淨にして、一向淨心に三寶を信じ、法を聽く處に詣り、正法を聞かんが爲に隨ひて一足を擧ぐるに皆梵福を生ず。若し人、説法の法師を供養せん、當に知るべし是の人は即ち現在の世尊を供養すと爲す。其の人、是の如くに供養する所に從ひて願ふ所を成就し、乃至 阿耨多羅三藐三菩提を得ん。能く説法の師を供養するを以ての故なり。

【一】五の下に開の字なきは、宮内省圖書寮本に依る。

【二】聲聞(Sravaka 梵)。佛の小乘法中の弟子にして、佛の教誨の聲を聞きてさとする人の意。

【三】緣覺(Prajñakhandhā 梵)。舊譯に辟支佛、辟支迦羅と云ふ。十二因緣を觀じて覺るが故に緣覺、因緣覺と云ひ、師無くして證果を得るが故に獨覺とも云ふ。

【四】阿耨多羅三藐三菩提 (anuttara-samyak-sambuddhi)

非ざる無し。既に此の功德を知り、精進みて諸根を調へ、意に勤精進を發さんには、精進と等しきもの無からん。

是の如くに孔雀王菩薩は兜率陀天衆・夜摩天衆の爲に、本生に持ちし所の經法を説けり。時に、諸の天衆、皆悉く聽受して、放逸を離れ、諸根調伏へ、一心に諦に聽けり。時に、孔雀王、諸心の心に大歡喜を生じ、勤精進を發すを知り、清淨心を以て、之が爲に法を説き、安隱なる寂滅涅槃を集めしめ、一切の諸天を利益し安樂ならしむ。一切の菩薩の法は衆生を利す。

精進は第一にして、此の二法を以て、同伴を爲すが故に、諸の善法をして堅固ならしめて、壞れざらしむ。果報を得て、正心と稱進の功德力の故に、終に涅槃を得。若しは沙門・婆羅門及び餘の善人、此の功德を知りて、當に勤めて精進むべし。世間中に於て、精進は最も勝る。若しは世間の業、勤修を以ての故に、堅固を得、勤修を以ての故に、果報を得、久しく世に住するも、他壞す能はず。若し人、精進まんには、命の終る時に、其の心清淨にして、亦、怯弱えず、心散亂れず、恐れず、怖れず。衰憊を得ると雖も、休まず、息まず。常に勤め修習め、諸善を増長さんに、怨も壞すこと能はず。人の能く其の過惡を説くもの有ること無し。作せし所の業の隨に、具足し成就せん。是の如く世間の善業を精進まんには、智者に讚へられん。何に況んや、出世の正智を精進まんには、勝妙ならざらんや。是の故に、一切法、一切時、一切智は、智と和合すること有りて、現前に精進して、時を知り、處を知り、正見にて勤修して精進を發すが故に、一切の業を得ん。若し顛倒を行はんには則ち利無く、衰憊と憂患を得ん。若し智慧無くして、復、勤苦すと雖も、精進と名けざらん。爾の時、孔雀王菩薩は偈を以て頌して曰はく。

時と處に相應ふが故に、作業を増長さしめ、法の如く勤め精進めば則ち善の果報を得ん。

三、法處にて業を作すと雖も、正法を捨離せんには、作業成就せず、精進を離れしを以ての故なり。法の如く勤めて精進まんには、智慧、涅槃を得て、空中に戟を投ぐるが如く、即ち天上に生れん。若し人、勤めて業を作し、修行め精進まんには、作す所皆和合して、廣大の成就を得ん。若しは世間の義、若しは出世間の義に於て、皆、精進の力に依りて、一切の成就を得ん。若し精進の力を離れ、及び正法を離れんには、彼の人、富樂無きこと、月中に垢を求むるが如からん。賢聖は三分道を念じて、能く守護を爲す。精進大力の人は能く第一の道に到る。精進は菩提を得、精進の故に、天に生る。一切の諸道の果は精進の得しものに

【三】 佛道修行の法則に叶うた場所の意。
 【四】 八分道。八正道 (Arya-āṣṭāṅga-mārga) のこと。又八支、八聖道、八正道支、八正道分と云ふ。八種の良く邪非を離れて涅槃に至る道。
 一、正見 (Samyag-dṛṣṭi)。
 二、正思惟 (Samyak-saṅkappa)。
 三、正語 (Samyag-vāk)。
 四、正業 (Samyak-karmanīya)。
 五、正命 (Samyag-ājīva)。
 六、正勤 (Samyak-vyāyama)。
 七、正念 (Samyak-smṛti)。
 八、正定 (Samyak-samadhi) の稱なり。

ることは、燈の能く闇を除くが如くにして、忍は正道を示す。若し正法の財を離れんには、五道に流轉せん。若し忍の財物有らんには、世に於て最も豪富なり。瞋恚の大曠野は、黑闇にて甚だ度り難し、忍の資糧を具足へんには、能く過ぎて、留る難無けん。若し正法の路に迷はんには、忍は能く正しき導を爲し、惡道を怖畏れる者に、忍力は救護を爲す。常に衆生をして樂ましめて、能く苦惱を滅し、常に安隱の樂を得て、永く諸の怖畏を離れん。善人に愛されて、能く信の功德を生じ、善き吉祥を和集め、不善の法を捨離てん。人に正しき解脱を示して、能く生死の畏れを滅し、天に昇る階陞にて、地獄の火を滅除く。餓鬼・畜生界にて、忍は能く救護を爲し、忍は能く功德を滿し、衆生をして寂滅ならしむ。吉祥ある樂を得んと欲せば、當に忍辱を修行むべし。

是の如き忍を第一の法と名け、修行するを以ての故に、現在・未來常に安樂を得、身壞れ、命終らんには天上に生れて、後に涅槃を得ん。是の故に、不放逸と爲す、天・人中に生れんには、當に忍を修行すべし。

復次に、第四の善業は能く放逸を離る。若しは沙門・婆羅門及び餘の善人、何等の善業を作すや。所謂、精進みて善法を勤求め、善と相應し、道法に精進み、正しき時と相應し、時と處と寂靜にして、世間・出世間の法を修習め、寂靜と相應ひ、相應はざるに非ず。若しは沙門・婆羅門、世間・出世間の法に於て、初夜・後夜、時を知りて、止息し、時を知り、處を知り、方便を知る。是の如くんば則ち安隱を得て、精進に住し、能く一切の懈怠を破らん。若しは沙門・婆羅門、煩惱を破らんが爲に、勤修め精進み、既に精進を生じ、色・聲・香・味・觸の境界に於て、著心を起さず。若しは因縁を得て、心を持って住せしめ、正心と精進との二法を伴と爲し、心を攝めて、一切の境界を離れしむ。若し不善の力起らんには、精進みて之れを遮へしめ、正念にて斷除く。一切の法中にて、

【三〇】慮りを息め、心を凝すこと。

の畏を離れ、怨憎を離れ、惡の名稱を離れ、憂惱を離れ、怨家の畏れを離れ、惡人の惡口・罵詈を離れ、悔の畏れを離れ、惡聲の畏れを離れ、利無き畏れを離れ、苦の畏れを離れ、慢の畏れを離る。若し人、能く是の如きの畏れを離れんには、一切の功德を皆悉く具足し、名稱普く聞え、現在・未來の一世の樂を得、衆人の之れを視ることは猶し父母の如からん。是の忍辱の人に衆人は親近む。是の故に、瞋怒は猶し毒蛇の如く、刀の如く、火の如し。忍を以て、之れを滅せんには能く皆盡きしめん。能く瞋恚を忍ぶを、是れを名けて忍と爲す。若し善人有りて、善を修行せんと欲せんには、應に是の念を作すべし。忍は賣の如し。應に善く之れを護るべく、是の如き忍は能く瞋恚を破る。正法の忍光は猶し炬火の如く、能く瞋の闇を滅し、盲者の眼の如し。正法に負き者の財賄にして、邪見の貧窮を除く。猶し父母の其の子を利益するが如く、瞋恚に没溺れんには、忍を大船と爲し、惡道に墮ちし者を、忍は救拔を爲す。忍は大水の地獄の火を滅するが如くにて、忍の力は能く餓鬼の慳嫉・飢渴の惱を斷つ。若し畜生に墮ちて互に相ひ殘害はんには、忍力は則ち能く其の身に命を施さん。應に樂みて忍を行ひ、常に習ひて捨てざるべし。若し惡道を畏れんには、當に勤め精進みて忍力を思惟すべし。爾の時、孔雀王菩薩は偈を以て頌して曰はく。

若し人、忍にて莊嚴らんには、諸の莊嚴中にて勝れたり。財物は劫盜みう可くとも、忍は則ち失ふ可からず。若し人、忍を修行せんには、一切衆に愛され、後時には安隱を得ん。

忍を第一の戒と爲す。若し人、忍を修行して、一切の瞋恚を捨てんには、現在及び未來常に安隱の處を得ん。忍辱・戒・智慧、是の如きは三種の財にして、此の財は最も第一なり。珍寶にして能く譬ふるもの非し。若し人、忍を修行せんには、一切應に供養すべく、善人に讚歎せられん。是の故に應に忍を行ふべし。忍の藥を第一と爲し、能く瞋毒を除く。忍は能く瞋恚を滅して、其れをして復生せざらしむ。闇に覆はれし愚癡の人に、忍は勝れし光明爲

諸の過を解脱して則ち能く安隱に、有の彼岸を度る。是の故に、應當に常に惡道を畏るべく、當に是の如く學ぶべく、一切の天人、若し此の法を愛せんには、能く涅槃に至らん。

復次に、彼の佛世尊は説きたまふらく『放逸を離れんには能く涅槃に至りて、一切の天人を利益し安樂にせん。我れ失世の人中に於て聞くことを得、憶念して忘れず、我れ今、當に諸の天衆の爲に説くべし。云何なるを名けて第三の忍の法と爲すや。是の如き忍は第一の善法・第一の清淨にして佛の讚歎したまふ所なり。忍に二種有り、一は法忍、二は生忍なり。云何なるは法忍なりや。法の道行を緣じて、白法を思惟す。忍は堅固の法にして、善道を思惟すること、勝るるが故に、能く忍ぶ。故に名けて忍と爲す。譬へば、大地の如し。諸の世間・山河・園林・無量の種類を忍び、之れを忍びて疲れず。一切法も亦復、是の如く、能く涅槃に到る。一切の法忍は堅固なること最勝にして、白淨の善法なり。涅槃道を攝むるが故に、法忍と名く。是の如きの人は堅固なる世間の忍の故に、能く涅槃に至る。

復次に、第二の忍とは、所謂、若しは沙門・婆羅門、若しは復餘人、瞋恚を起さんとし、忍びて起らざらしむるなり。瞋の過を知るが故に、是の思惟を作さく『若し瞋恚を起さんには、自ら其の身を燒き、其の心毒に嘍み、顔色變異り、他人に棄てられ、皆悉く驚き避け、衆人は愛せず、輕毀せられ、鄙賤して、身壞はれ命終らんには地獄に墮ちん。瞋恚を以ての故に、惡として作さざる無し。是の故に、智者は瞋を捨つること火の如し。瞋の過を知るが故に、能く自ら利益す。自利して他人を利益せんと欲するが爲に、應當に忍を行ふべし。譬へば、大火の屋宅を焚くに、勇健の者は水を以て之れを滅するが如し。智慧の人の瞋恚を忍の滅すことも、亦復、是の如し。能く忍ぶ人は第一の善き心にて、能く瞋恚を捨て、衆人に愛され、衆人見るを樂み、信受され、顔色清淨にして、其の心寂靜なり。心躁動からず、善く淨にして、深く心に身・口の過を離れ、心の熱惱を離れ、惡道

畏るべく、甚だ、大惡を爲さんには、地獄・餓鬼・畜生を成就せん。放逸を行ふ人は少智の人にして、若し能く、是の如く惡道を畏れんには、放逸を作さず、身・口・意の三種の惡業を作さざらん。是の如き人は常に善業を修めて、不善業を捨つ。是れを惡道を畏ると名く。譬へば、人有りて自他之力を知り、毒蛇及び火の、能く人命を斷つことを畏るるが如く、惡道を畏るる者の、惡業を怖畏すること、亦復、是の如し。是の如き人は微細の業を捨てて作さず、放逸を行はず。放逸を捨るが故に、天人の中に生れて、大富樂を受け、富樂を受け已りて後に涅槃に入る。勝れし樂を以ての故に、死無く、變無く、退くこと無く、盡くすること無し。是の故に、常に應に惡道を怖畏るべし。若しは沙門若しは婆羅門及び餘の行者有りて、能く是の如くに行はんには、無上の處を得ん。彼の時、世尊は此の偈を説きて言はく。

若し人、惡道を畏れんには、應に放逸の垢を捨つべし。善を修め、功德を求めんには則ち涅槃城に到らん。若し人、惡道を畏れんには、其の人の心正直にして、其の正しき心を以ての故に、樂より樂しき處を得ん。若し、惡道を畏れざれば則ち多く惡業を造り、惡火の爲に燒かれて、將に地獄に入らん。譬へば、微小なる火の如し。小なりと雖も亦能く燒く。惡道も亦是の如くにて、劫を経て猶ほ報を得ん。若し人、樂を得んと欲せば、應に惡道を畏るべく、怖畏は惡道を救ひて則ち能く安樂を得ん。

是の如き法中にて、若しは天、若しは人、若しは沙門、婆羅門、及び餘の善人、若し惡道を畏れ、少しの不善を、尋ねて即ち過を悔ゆ。心に隨喜ばず、亦、思惟せず、心に地獄・餓鬼・畜生の怖畏の苦果を念ず。念じ已りて、三不善道を畏れ、十惡業を捨て、止めて作さず、他をして作さしめず、亦、隨喜ばず、是の如き惡業の人に近かず、善業を修行して一切の惡を捨て、行は淨く垢無く、放逸を捨離し、一切の惡を止め、不善法の流轉する有の中にて解脱を得、一切法に於て解脱を得已り、

【九】十惡業。殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、愚癡の稱。

他人の不善の身・口・意業を造作し、他の身業を作すを見て、之れを呵毀り、應に悔心を生ずべく、共に同じく住せず。若し因縁有りて、自ら不善覺觀の心を起さんには、生ずるに隨ひて即ち捨て、憶念を生ぜず、味はず、著せず。内心に慚愧を生じ、他人の勤修め精進むにも、其れをして生ぜざらしめ、覺觀を受けず、心に惡覺觀を呵す。譬へば、大坑の中を滿せる糞・屎尿・死狗の不淨あり、清淨の人有りて中に入り、淨を求むるに、既に坑中に入りて、不淨咽を沒せんに、爾の時、其の人、心に厭惡を生ずるが如く、若し不善の覺觀を起すこと有らんには、其の心に悔を生ずることも、亦復、是の如し。譬へば、異人の常に淨行を求め、知らざるを以ての故に、誤りて糞穢を食ひ、或は強力の怨家有り、強ひて糞を食はしめ、食已りて惡賤し、心に悔恨を生じ、後更に食せざるが如し。若し善業を行ふ人有らんには、慚愧して不善の覺觀を呵毀することも、亦復、是の如し。勤修め精進みて覺觀を斷除す。是れを初法と名く。放逸を生ぜず、放逸を斷除き、放逸を破壊る。是の故に、天人は應當に學を修むべし。若し、善人有りて眞諦を求めんとせば生死を怖畏るべし。若し微少なる不善覺觀を生ぜんには、應に悔心を生じて、願心を生ぜず、放逸を生ぜざるべし。不放逸の人は能く悔心を起す。放逸の人は則ち悔む能はず。是の如きの一法は是れ諸の善業の根本なり。所謂、不善の覺觀を斷除して悔心を生ず。是れを初法と名く。

復次に、第二の善法は善法を増長す。所謂、惡道を畏るることにして、大出法と名け、放逸を滅し、能く放逸を斷つ。一切の天人は惡道の行を畏る、若しは沙門・若しは婆羅門・若しは復餘の人、若し惡道を畏れて、惡業を作さず、若しは他の作すを見て、亦、隨喜せず、不善業は地獄・餓鬼・畜生に墮るを知り、是の故に、惡・不善業を作さず。惡業の因にて、惡道に墮つ。何を以ての故に、少しの惡業を習ひ近き、喜樂まんには、惡をして増長さしめて、地獄・餓鬼・畜生に墮つ。是の故に、沙門・若しは婆羅門及び餘の惡道を畏るる者は、應に是の如く學ぶべく、常に應に不善の果報を怖

の所に於て、此の法を聞くことを得て、生れ生れし處にて、願力を以ての故に、常に忘失れずして、他人の爲に説けり」と。爾の時、兜率陀天は孔雀王の是の語を説くを聞き已り、空中より下り、正法を敬重ひ、山峰中の大衆と共に、山峰の中に會へり。無量の蓮華池・無量の流泉は無量の寶性に於て、無量の衆鳥は妙なる音聲を出せり。摩尼の間錯れる山峰の中に於て、孔雀王を圍遶りて四面に住し、威徳は殊勝れ、色相を具足へ、一切の光明の夜摩天より勝れしことは、夜摩天を閻浮提人に比するが如くにて、兜率陀天の夜摩天より勝れしことも、亦復、是の如し。時に、夜摩天は兜率天を見て、色の慢及び自在の樂を破壊り、往きて孔雀王菩薩の所に詣る。遊戲を樂みて林中に入り、未だ曾て兜率天を見ざるものあるが故に、瞻仰みて住し、或は山頂に上りて、遊戲を求めんとす。復、諸天有りて、孔雀王を圍遶きて、四面に住せり。

爾の時、孔雀王菩薩は諸の天衆に告げらく「二十二法有り、我れ今、當に説くべし。我が敬ひ習ふ所にして、天人を利益し、第一安樂にして、一切衆生をして正行を得しむ。此の二十二法は、天人を利益し安樂にする愛法、現在・未來の天人の愛法にして、能く放逸を斷ち、滅して生ぜざらしむ。若し諸の天人、能く放逸を離れんには、常に安樂を得、乃至涅槃せん。此の法の利益は父母の利益の及ぶ能はざる所なり。何等を二十二とするや。一は悔む心、二は惡道を畏る、三は忍、四は精進、五は説法、六は悲心、七は轉心、八は調伏、九は業を信ず、十は壞處に住せず、十一は心に住す、十二は惡名を畏る、十三は樂に著せず、十四は獨行、十五は心散亂せず、十六は死を念ず、十七は色・富財・種姓の嬌慢を離る、十八は轉語、十九は一切衆生に平等の心を起す、二十は足を知る、二十一は境界を畏る、二十二は不信心を捨つ。此の二十二法は、若しは天、若しは人、如實に修行せんには、惡道に墮ちずして、速に涅槃を得ん。云何なるを悔と名くるや。云何に悔み已りて安樂を得るや。既に悔を生じ已りて、不善の法を斷つ。云何に悔を生ずるや。若し

と説きたまへり。若し人、身・口・意に三種の不善を作さんには、是の如き無智の人は則ち地獄に墮ちん。若し是の如き因を作さんには、果を受くることは則ち差はざらん。穀を種ゑて穀を得るが如く、善惡の業も是の如し。此の衆多の人を見るに、生死の苦の因を作す。

是の如き愚なる天衆は、而も猶覺知らず。放逸は初め樂なりと雖も、後は則ち大苦惱なり。若し法、後時に苦ならんには、智者は應に捨離すべし。乃至、未だ解脫せざれば、終に少しの樂も有ること無けん。若し解脫を得る者は、常樂を成就することを得ん。無常なる放逸の樂を、智者は説かざる所にして、若し常の樂を得んには、智者は説きて樂と爲したまへり。

上下次ぎて相續し、諸の業は皆是の如く、其の果も亦是の如くにて、上下斷たず。既に業の果を知り已らんには、應に放逸を捨つべく、當に智慧心を起すべし。此の樂を無上と爲す。是の如き孔雀王菩薩は種々に方便して天の爲に法を説き、放逸を斷除き、種々の無畏の美妙の聲にて、悉く諸天の歌詠の音を蔽へ、善業を以ての故に、其の聲は二萬由旬に遍滿し、聞く者は悦樂みて、法の樂と相應せり。

爾の時、諸の天衆は樂を求むるが爲の故に、空中にて旋轉り、四天王の天等を行使用して、或は去り、或は來るが如く、此の諸の天衆も亦復、是の如し。

爾の時、兜率陀の諸の天衆は、此の聲を聞き已りて、七萬の天衆、上より下りて、正法を敬重し、放逸薄きが故に、夜摩天の種々莊嚴孔雀王の所に向へり。時に、種々莊嚴孔雀王菩薩は兜率陀天を知り、心に歡喜せるを以て、諸の天子に告げらく「善く來れり、眞の天、放逸少きが故に、能く來りて此に至りて、未來の果を求む。若し種々の法の要を聞くことを得んと欲せば、汝、當に速に下るべし。我が聞きし所の寂靜の法の如くに、當に汝の爲に説くべし。我れ已に修集めて、能く涅槃に至れり。我が往昔聞きし所の法は、一切の師等の本より聞かざる所にして、我れ

【二】下の字、宋・元・明三本に依れり、原本上に作れり。

【七】迦迦村陀佛。拘樓孫佛（Kinkuochandā）のこと。所應斷已斷と譯す。過去七佛中の第四、種は婆羅門にして、人壽四萬歳の時出生し、尸利沙樹下に成道して法を説きたまへりと云ふ。

【八】迦の字は宮内省圖書寮本に依れり。原本羅に作れり。

すも、愚者は覺知らず。種々の調伏を以て、種々の利益を説くとも、天衆は樂に迷はされて厭離を生ぜず。善き語にて、法と相應せんには、二世に安樂を得ん。愚者は攝受せずして、後に則ち大悔を生ぜん。多くの法を以て調伏へ、眞の義を語り、亦、明なるも、而も天は放逸に著して、眞の利益を知らず。死の怨は天命を害ひ、大力にして能く救ふこと無く、大力にて速に馳奔せ、死時來り至らんとせば、諸の天・龍・夜叉・乾闥・毘舍闍も一切能く敵すること無し。是の故に、死の力は大多なり。若し力の無力なるを知らんには、是の人眞に業を知りて、惡業の爲に汚されずして、惡道に行かさらん。常に諸善を修行めて、不善の境界を離れ、是の如くに業を作す人は、則ち衆の苦惱無からん。法行に隨順ひ、信を増長し、精進めて、三昧・力と相應せんには、母の子を利益するが如し。善法は五道に於て、一切能く救護ひ、父に非ず、母の力に非ずして、能く彼處に行く。正法に信順して、能く惡道の苦を救ひ、其の所至の處に隨ひて、信は常に大力有り。燈の能く闇を除くが如く、病の良藥を得るが如く、盲者の眼を得るが如く、貧人の財を得るが如し。水の溺れし人を漂はすに、信は大きな船楫と爲るが如く、若し人の放逸の行も、信能く除滅さん。死時に信を得るが故に、能く有の海に生るることを除きて、則ち寂滅の處を得んと、古世に牟尼は説きたまへり。信力を得るを以ての故に、正智を修行すと名く。信及び不放逸、精進、止足を知り、智を集め、善友に近くは、此れ六の解脱の因にして、施・戒・善き寂滅、慈心にて衆生を利し、及び悲・喜・捨を行ふ。此の法は因縁を得ん。輕躁にて、惡友に近き、龜獮して妄語を喜び、邪見にて放逸を行ふ。此の法は地獄の因にして、慳・嫉にて苦み、惡語し、放逸を行ひて善を離れ、心常に他物を貪るを、衆は餓鬼の因と説きたまへり。

癡に近づき、智慧を離れ、愛欲にて正法を遠かり、食を貪り、睡眠を樂むを、佛は畜生の因

【一三】 Pīṣaṇa 嗾精鬼なり。

【一四】 三昧(Samādhi)。定のこと。

【一五】 足ることを知ること。
「止」字は足と熟する軽い意味にとるべきなり。

を利益し、及び孔雀を利し、天の爲に法を説きて、放逸を斷除く。

爾の時、天衆、新に生れし天子を見て、心に歡喜を生じ、放逸なるを以ての故に、善法の語を心に信受せず。或は歌ひ、或は舞ひ、遊戲して樂を受け、五樂の音聲は山峰の園林に於て無量種有りて、譬喩すべからず。金の光明の窟・如意林は此の山を莊嚴り、無量の衆鳥・百千の山河・華林にて莊嚴り、諸の天女と共に、一切の欲を具し、天樂を具足して、無量に遊戲す。是の如き天衆は遊戲して次第に雜摩尼の間錯る山に昇る。此の山上に、七寶の樹・如意の林有りて其の山を莊嚴り、縱廣、五百由旬にして、其の林の中に、孔雀王有りて、種々莊嚴と名け、住みて此の林に在り、天の爲に法を説く。天子・諸の天女等をして放逸を離れしめんが爲の故に、説法を愛するが故なり。園林中・蓮華林中・種々の雜林・河泉・流水・山峰の中に遊び、實にて莊嚴れる處・百千の衆鳥の妙音の處・一切の天衆にて莊嚴る處・諸の天女の衆にて莊嚴る處に、多く天子・天女有り、和合して樂を受く。此の孔雀王は則ち其の所の至り、善業を以ての故に、種々の樂を受け、一切遊戲し、是の如く遊戲し、無量に差別して譬喩すべからず、念するに隨ひて皆得。

爾の時、孔雀王は摩尼の間錯る山峰の中に於て、諸の天衆の放逸の樂を受くるを見て、天衆をして放逸を離れしめんが爲の故に、偈を以て頌して曰はく。

現在若しは未來、色境に厭足無く、憶念の火に燒かれて、數々境界を求む。天上に生ることを得しと雖も、生れ已りては還り、滅に歸せん。業の網に縛らるるが爲に、復、地獄に墮ち、出でては鬼畜の生を受けて、無量の苦惱を受く。衆生の五道に行くは、業の因縁を以ての故なり。衆生の種々の業は、甚だ多くして、量るべからず。故に種々の果を得て、天中に於て無量に樂む。業盡くるが故に還り退き、生有らんには則ち滅有らん。眞諦を見る者は、能く天の退き滅するを見ん。此の死時至らんとするや、其の命則ち破壞し、一切は能く懶亂

【三】眞諦を諦かにせるもの、即ち正法をいふ。

天衣・五境界の樂を目にて視るに愛す可し。此の山上に昇りて、快樂を受けんと欲せり。上りし所の山峰を名けて山谷と曰ひ、甚だ愛樂むべし。彼の山上には、復、餘天有りて、天鬘・天衣を以て自ら莊嚴れり。金山より下るに、天衆圍遶きて遊戯して來り、百千相隨ひて下る。新に生れし天子、諸の天衆を見て、天女に問ひて言はく『彼の天衆の諸の天女と共に遊戯して樂を受くるが如くに、我れも亦、是の如くに遊戯して樂を受けん』と。諸の天女言はく『願くは其の意に隨はん』と。時に、初めて生れし天子、天女の心を知りて、諸の天女と共に圍遶して遊戯し、第一に歡喜し、五樂の音聲を以て歌頌を爲し、二衆共に集りて遊戯し、樂を受けて、厭足を知らず。山上に鳥有り、名けて山冠孔雀王と曰ふ。諸の天衆の爲に、傷を以て頌して曰はく。

世間は業にて莊嚴り、天も亦業にて莊嚴れり。天處は無常なるが故に、業盡きては還り、破壊れん。世間は和合を愛して、別離を愛せず。和合は必ず離るゝこと有り、世間法も是の如し。心に諸の樂を愛樂み、境界の爲に誑かされんには、諸天の命速に盡ることは、心の生滅するが如からん。老・病・死に破壊られ、一切の人に離別れ、常に此の死法有るも、愚者は覺知らず。老の使、次第に來り、死時、至らんとし、病軍の爲に能く破られんも、愚者は覺知らず。六種にて人身を失ひ、五根能く破壊れて、人の正道を失ふが如く、處々に皆障礙あり。若し人、因果を念じ、常に念じて失はずんば、是の事實の果を見て、後に悔を生ぜざらん。若し人境界に於て、實に見て貪著せずんば、此の人、愛境に於て則ち能く、速に脱るることを得ん。若し愛の網を脱れて則ち惡曠野を度り、能く放逸の火を遠げんには、是の人は大智慧なり。五種の大怖畏は一切世間を壞し、其の自の業を以ての故に、老・病・死にて離別せん。

是の如き山冠鳥なる種々に莊嚴れる孔雀王 菩提薩埵は願力を以ての故に、孔雀身を受け、他人

【一〇】老死にて人身の破壊すること。六種は六根のことであらう。六識の所依として六塵に入る。老死はこの機能を破る故に人身の失ふことをこゝにかけて云ひしものならん。五根の破れることも同じ意味にて、五の感官の滅ぶることを述べしなり。

【一一】菩提薩埵 (Bodhisattva) 菩薩のこと。こゝに菩薩の願力を説き自行化他することを述ぶるは注意を要す。

名く。衆生は何なる業にて、彼の地處に生るるや。彼れ開惡を以て見るに、善人有りて持戒して、殺さず、盜まざることは前に説きし所の如し。復、邪姪じやいんを捨てて、邪行を犯さず、第一の難きを持し、能く捨てて作さず。若しは禽獸の牝牡めつ和合せるを見るとも、心に念を生ぜず、捨てて見ることを欲せず。亦、思惟せず、邪行の報に、怖畏の心を生じ、是の故に捨離つ。邪行の者を見んに、勸めて作さざらしめ、邪行の報を説きて、善道に任せしむ。此の因縁を以て、是の如き法を説きて言はく、「是の邪姪は愛せざる報を得て、畢定して地獄の報に墮ちん」と。既に自ら作さず、他をして作さざらしむ。是の如き人は自利し、他を利し、身壞れ命終らんには、善道の夜摩天の一向樂の地に生れん。善業を以ての故に、樂常に斷たずして、無量の諸の樂皆悉く增長く。此の地中に、諸の園林ありて之れを見んには愛樂まん。如意の林にては、一切の欲樂念するに隨ひて皆得、園林中に於て愛樂して樂を受く。新に生れし天子に、諸の園林有り。一を光明樂くわうめいらくと名け、二を流水樂るいすいらくと名け、三を山聚樂さんじゅうらくと名く。蓮華池有りて、名けて雜池ざつちと曰ひ、名谷の流有り、復、園林・山・池有り、復、異る山有りて、天の功德を無數に具足す。林・池は、愛す可く、新に生れし天子は遊戲して樂を受け、千倍の功德あり。所謂、摩尼まにの欄楯らんじゆんの池にして、次を衆鳥音樂しゅうおんがくちと名け、次を天歡喜池てんくわんぎちと名け、次を常遊戲池じやうあそびちと名け、次を受樂池じゆらくちと名け、次を無濁池むじやくちと名け、次を寶有池ほういうちと名け、次を見當有池けんたうちと名く。此の池の周圍まわりに、諸の天衆有りて、妙なる音聲を出し、色量を具足して、池中に充滿せり。如意の樹は池の側に徧く、無量の功德を皆悉く具足せり。善業を以ての故に、無量の天女と、五欲の樂を受く。諸の天の色は、念するに隨ひ、行くに順ひて樂觀離れず、次第に之れを觀て五欲の樂を受く。其の持戒して善業を集めしを以ての故に、是の如き報を得、華池の中に於て、遊戲し歌舞して五欲の樂を受く。是の如き五欲の渴愛かつあいの刺の林は復、天女を以て自ら圍遶とりけり。摩尼まにの莊嚴じやうげんの間錯まごれる池より、復、往きて餘の蓮華池れんげちに詣り、莊嚴じやうげんの山にて遊戲して樂を受く。天璽てんじ・

他化自在天宮の魔波旬の所に至り、到り已りし時に、一切の魔、使臣に問ひて言はく、『汝の作せし所の事、憶念ひし如きにや、不や。事、究竟せりや、不や』と。時に、三大臣是の語を聞き已りて、魔王に白して言さく、『大王、我れ勢力を失へり。夜摩天王牟修樓陀は大智慧有り、正法中の乃至一句も動轉すべからず。及び其の天衆も亦復、是の如くにて、我れ亂すこと能はず』と。時に、魔波旬、此の語を聞き已りて、是の如き念を作さく、『放逸を行ふ天は、我れ能く其れをして欲中に住せしめん。大力有りと雖も、放逸なるを以ての故に、我が境界に住せん』と。是の念を作し已りて、魔衆に告げて言はく、『後に却れ、我れ能く夜摩天を破らん。汝、急速なること勿れ、我れに大力有り、悉く能く一切の天衆を壞亂し、後に當に之れを破るべし』と。時に、魔波旬、是の語を説き已りて、復、等しきもの無き六欲の樂を受け、放逸地に於て、轉た無量に成就せる大樂を増せり。夜摩天王は善時鵝王、及び法を説く鳥衆と共に、無量種の法を説き、魔軍は放逸にて既に退き還れり。時に、諸の天衆は作す所を已に辦ぜり。

爾の時、新に生れし天衆は遊戲び、歡娛みて、園林中より來り、天王の法を説く處、及び善時鵝王、法を説く鳥衆に向へり。

爾の時、夜摩天王は此の天衆を見て、善時に告げて言さく、『汝、是の如き放逸を行ふ天を觀よ、今や來りて、此に向へり。我れ今、當に寂靜園林に遊ぶべし』と。是の語を説き已り、虚空を飛昇して、寂靜林に入れり。此の諸の天衆は、放逸にて遊行し、五欲を具足し、園林の池中にて娛樂み、乃至、愛業の集めし所の業盡き、業に隨ひて流轉し、地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若し餘業有らんに、人中に生れて財富を具足へ、世の大人と爲り、或は大王と爲り、或は大臣と爲り、大樂の處にて衆人に愛さる。餘業を以ての故なり。

復、次に比丘、業の果報を知る。彼れ聞慧を以て、夜摩天の住する所の地處を見るに、一向樂と

摧くに智金剛を以てすることは、日光の闇を除くが如し。此の所説の中に於て、功德と及び過を知れ。放逸の果は苦を受け、放逸の無き果は樂なり。是の如く夜摩王は無量に分別して、放逸の過惡と不放逸の功德を説けり。老・病・死の諸苦・愛別・怨憎會の無量なる諸の衰惱は、生死の中に遍滿せり。若し人、方便を知らんには、未來の苦を遮へん。惡業は是れ苦の因にして、惡業を作さざるは樂なり。煩惱を滅するは、最も樂なり。智者は是の如くに説き給へり。此れは是れ涅槃道にして眞智の演説し給ひし所なり。調伏して放逸ならず、閑靜の處に住み勇猛しく貪心を離れんには、涅槃を去ること遠からざらん。怨と及び親友を離れ、有の欲を滅除し、境界にて放逸ならずんば、涅槃を去ること遠からざらん。若し人、惡を捨離し、慈悲心を修行し、生死を怖畏する者は、涅槃を去ること遠からざらん。智を以て煩惱を斷ち、智慧心清涼にして、懈怠の垢を度せんには、涅槃を去ること遠からざらん。四諦と相應して、三種の過を斷ち、諸根自在ならんには、涅槃を去ること遠からざらん。阿那般那を知り、二種の相を修行し、智の所知を解了せんには、涅槃を去ること遠からざらん。若しは過の畏を脱れ、若しは樂も心を縛らず、以て能く彼岸に度る。是の故に牟尼と名く。

是の如く夜摩天王は法を説く鳥衆・善時鵝王の爲に、迦葉如來の正法の經典を説けり。放逸を離れし故に、是の如き無量の正法にて調伏し、妙音にて勇勝しく法を説けり。爾の時、魔王の軍衆、放逸大臣は正法を聞き已りて、是の如き念を作さく、『我れ今、夜摩天王の此の如きの法を轉動すこと能はず、知り難き深法を迴轉すべからず』と。是の念を作し已りて、具に同伴に告げらく『今、此の牟修樓陀は此の法道中にて、乃至一句も轉動すべからず』と。是の如くに、魔臣は共に思惟し已りて勢力劣弱へ、本、破壞を念ぜしも、大威徳を失へり。飛んで虚空に昇り、須臾の頃に還りて、

【八】 四諦(Catvāri-āryaṇa-
tvaṇi)・四聖諦・四眞諦とも云
ふ。諦は眞實にして虛妄なら
ざる義。四諦とは苦・集・滅・
道、之れにして、苦は三界・六
趣の苦報、集とはあらゆる善
惡の業を云ひ、苦報を集起す
るに依て名く。滅とは惑業を
滅して得る寂靜涅槃にして、
道とは涅槃に到達すべき行な
る八正道を云ふ。依て前の二
は迷の因果、後の二は悟の因
果なり。佛成道して最初に五
比丘に説きたまへるものにし
て、佛教全般の根本的な教義
を爲せり。

【九】 阿那般那(Ānāpāna)
安般法とも云ふ。入出息觀の
こと。「佛說大安般意經」は
之を廣説せるものなり。

放逸の根本は、皆利益無く、能く放逸を成す。譬へば大地に依るが故に一切の藥艸樹木・叢林・流水・河池・隄防・城邑・聚落・園林・及び須彌山王有りて、皆、大地に依るが如く、一切の地獄・餓鬼・畜生も亦復、是の如くに皆放逸に依る。是の故に、智者は應當に捨離すべし。爾の時、夜摩天王は偈を以て頌して曰く。

老人の身皮は皺みて、力無く、杖に拄りて行き、老いて而も法を知らざるは、皆放逸に由るが故なり。病を以て身を破壊り、牀席に偃臥して、厭離を生ぜざるは、皆、愚癡に由るが故なり。若しは飢渴に遇ひ、若しは險惡しき道に入りても、厭離を生ぜざるは、皆、放逸に由るが故なり。若しは愛別離を得て、苦惱を生ずることは、一切放逸の故にして、如來は是の如くに説き給へり。若しは五道の中に於て、具に種々の苦を受け、衆生の常に苦惱することは、其の愚癡を以ての故なり。嗚呼、厭離を生ぜざる、生死の諸の世間には、諸の業の大輪轉り、循環りて暫くも停まらず。三界は皆樂無く、亦、少の常有ること無けれども、是の如き愚癡なる人は、厭離を生ずることを知らず。境界は皆虚空しくして、三界は猶し夢の如く、一切は皆悉く苦なるも、目無くんば、見知らざらん。是の如き愚癡の人は、放逸の爲に害なはれ、死の畏、至らんとする時は、能く遮り救ふもの有ること無し。善く觀ざるが爲に、其の心意を惱亂し、死王將に至らんとせらるも、覺知らず。死王の將に至らんとするや、人の命を保つ心を奪ひ、三種に利益無く、諸の衆生を惱害す。老・病・死等の苦は放逸を以ての故に生じ、追求して人中を惱まし、放逸は諸天を害す。飢渴は餓鬼を惱まし、地獄は苦に惱まされ、畜生には愚癡多く、迭互に相ひ殘害ふ。是の如き衆の苦惱の諸の衆生を惱害すことは、非法の行に順じ、放逸にして愚癡なるを以ての故なり。猶し大地に依りて諸の藥艸等を生ずるが如く、放逸も亦、是の如く諸の煩惱を増長す。此の魔王の軍衆・第一の大臣等を、

物、二は貧しき師尊なり。復、二種有り、一は貧しき親族、二は貧しき親舊なり。一切の貧窮は皆輕毀つべし。若しは男、若しは女、云何にして斷つや。所謂、布施なり。一切の貧窮を布施は能く斷つ。譬へば燈明の能く諸の闇を滅するが如く、一切の愚癡を智能く之れを滅し、一切の異見を正見は能く斷ち、是の如き非法を法は能く之れを斷ち、第一最勝にして一切の智者の愛攝する所、衆の惡道を斷ち現在・未來の二世は安隱なり。云何に布施するや。施に多種有り。所謂、智施・戒施・法施・安慰施・正道を示す施・道路を失ひし者に道路を示す施・道を行く者に示すに水を以てする施・命施・資具施・無畏施・實語施・疑を斷つ施、五戒の施、出家戒の施・具足戒の施・病醫藥の施。眼目等の施なり。是の如き等の種々の布施は能く現在及び未來世を利することは、猶し父母の如く、常に思修し已りて、諸の貧窮を斷ち、惡道を斷ち、天人中に於て安樂を受け、既に樂を受け已りて、終に涅槃を得ん。是の如くに布施は能く貧窮を斷つ。是の故に、智者は應に布施を行ふべし。復、次に第十一の闇法は能く生死を縛り、闇は諸法を障ふ。何等は闇法なりや。所謂、無智なり。無量の無知乃至無明の闇は一切の生を縛り、一切の闇の聚を以て其の頸を縛る。無知は刀の如く、火の如く、毒の如く、無知は、亦、一切無明の如く、一切の無明は因縁にて起り、一切をして地獄・餓鬼・畜生に流轉せしめ。能く衆生を縛り、其れをして流轉せしむ。是の如き怨垢を云何に斷除するや。謂く無漏智にして、猶し明燈の如くにて救を爲し、歸を爲し、諸の衆生には父の如く、母の如く、猶し醫師の如く、亦、良藥の如く、無知の縛を斷ちて更に衍生れざることは、樹の根を斷ちて樹則ち生ぜざるが如く、火の薪を燒きて復更に生ぜざるが如く、亦、流水の復更に返らざるが如し。無漏の智を以て、無知を燒くことも亦復、是の如くに復更に生ぜず。是の故に應當に一切時に勤修め精進みて、無漏の智を以て無知を斷除すべし。此の如き説く所の十一種の法は、放逸を根本とし、放逸に隨逐し、放逸の故に生ず。是の故に、應に一切の放逸を斷つべく、一切の

【四】 五戒。在家の人の持すべき、不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒なる五を指す。

【五】 比丘の二百五十戒、比丘尼の五百戒を具足戒とす。

【六】 無明(Avidya)。十二因縁の第一にて、盲目的、無自覺的な根本惑を云ひ、又六煩惱の一にてすべて理に闇き精神作用を云ふ。

【七】 歸依所のこと。

空しき義無き語を斷つや。所謂、正語なり。正語に二有り。何等を二と爲すや。一は默然にして、二は四種の正語なり。何等を四と爲すや。一は妄語ならず、二は惡口ならず、三は兩舌ならず、四は破壞の語ならず。是れを正語と名く。在家・出家にして、若し能く是の如くんば則ち輕毀せられざらん。在家・出家に六の因縁有りて、速に人の爲に輕んぜらる。何等を六と爲すや。謂く、義無き語、人家に突入し、他の食を貪愛り、尊き處に坐し、虚しく説き、實無し。是の如きの六法は、人に輕笑せらる。在家・出家は應に此の法を離るべし。

復次に、第九の垢染を白法は能く斷たん。云何なるは白法にして、垢法を斷つや。謂く、正しく住することは能く輕掉の法を斷たん。輕掉の法とは一切法を障へ、心性輕掉なり。掉動するを以ての故に、信ぜず、覺らず、世間の作す所を知らず、言語を知らず、時節を知らず、善友に近かず、輕掉にして放逸なるを以ての故に、世間法を了達すること能はず。是の如き輕掉なる惡垢は能く現在及び未來世を敗り、利益を得ず。在家・出家は應に正しく白法に住するを以て輕掉を斷除すべし。在家・出家、若し身・口・意に掉を離れて正しく住せんには、衆人に供養され、正戒・正智・正意にて、魔の境界を離れ、善法を満足して終に涅槃を得ん。世間の法に於ては智者に讚歎され、世間の作す所を皆能く成就し、衆に供養され、所至の處にては常に安樂を得、作す所を成就せん。是の如き在家・出家は輕掉を離れて、一切人に讚歎せらるる所と爲らん。

復次に、夜摩天天王牟修樓陀は法を説く鳥衆、善時鵝王・及び魔王の放逸大臣等の爲に、本と曾て舊天子の所より次第に傳聞せし迦葉佛の經を以て、天衆の爲に説けり。

復次に、第十の垢法は輕んず可く、毀つべく、智人の捨つる所なり。何等を垢法とするや。所謂貧窮なり。貧に二種有り。一は貧しき戒、二は貧しき智なり。復、二種有り、一は貧しき施、二は貧しき慧たり。復、二種有り。一は貧しき種姓、二は貧しき見なり。復、二種有り、一は貧しき寶

れ、或は畜生に生れ、出家と爲りし所を皆悉く退失す。既に地獄・餓鬼・畜生に墮ちて、大苦惱を受けんには、親里・知識も能く救護すること莫けん、是の故に、一切の比丘、若し地獄・餓鬼・畜生を畏れんには、應に生れし處・親里・及び諸の知識を見ることを樂むべからず。此れに近くを以ての故に、無利益を得。愛を盡くす義を念するが爲の故に、出家を行ひて愛網を斷除するなるに、愚癡を以ての故に愛網に習ひ近く。人の火を畏れ、之れを捨て、逃れ走り更に大火に入るが如く、是の如くに家を畏れ、家を捨てて出家し、還りて畏る處に入ることも、亦復、是の如し。親里を捨離して林樹の間に入り、還りて復、習ひ近く。是れを眼無しと爲し、知無く、閉ぢし所にして、諸根調はず。是れを染法と名く。云何にして斷つや。若しは智慧を以て斷除すること能はず、或は遮へること能はず、或は持すること能はずんば、應當に長久く遠ざけて之れを避遮くべし。若し智無き人は餘の方便を以て愛を斷つこと能はざらん。當に遠く之れを避くべし。一切人は愛を見ざるを以ての故に、一切を斷つ。愛法を皆當に別離すべく、死時に至りては、人の能く救ふもの無けん。唯、善業を除く。無量百千の生るる處にては、善法の業を最も能く救ふと爲す。諸の親里は能く人を救ふに非らず、亦、兄弟に非らず、是の如き比丘は親屬を捨離して、獨り閑居に處りて能く垢法を斷つ。老・病・死の時は、諸の親里の能く救護するに非らず。比丘は是の如く思惟して一切の愛を斷つ、或は微薄なることを得。是れを比丘の親里の愛を斷つと名く。復、次に、在家・出家は第八の染法を斷つ。何等を染法とするや。所謂、義無き語なり。正語を以て之れを斷つ。若し在家の人、^三空しき義無き語ならんには衆人に輕賤めらるること、艸芥の如からん。義有る言は第一の財物にて、諸の餘の財物も及ぶこと能はざる所にして、義無き言は復、富樂なりと雖も、猶、貧窮と名く。空しき義無き語は空にして實無く、人に輕賤めらるることは猶し白羊の言無きが如く、財を説くは、智人之れを視ること猶し畜生の如くにして、第一に是の如き等の法を輕毀める。云何にして

【二】逃の字は、宮内省圖書寮本に依れり。

【三】くだらぬ語。たわいのない言葉。

卷の第六十

觀天品之三十九

夜摩天之二十五

復、次に夜魔天王、善時鵝王、及び法を説く鳥衆現前れて、魔王大臣の放逸等をして調伏を得せしめんが故に、迦葉如來の「修多羅を説けり。昔より天子傳聞して説き、已に六種の白法を説きて、塵垢を斷除せり。我れ今、當に第七の垢法を説くべし。白法は能く何等の垢法を斷つや。所謂、本生れし處を見て、樂心を生じ、親里を見ることを樂む。遠く離れて之れを斷て。知識・親里を、心に常見んことを樂み、常に親近を念じて晝夜離れず、禪を修め業を習ふことを樂まず、善き師に近きて三寶を供養せず、未來の業を念ぜず、三業中に於て、他の爲に説かず、亦自ら作さず、但親里を念じ、親里・知識・親舊を見んと欲す。云何にして生業を修理し、何を以て自ら活きんや」と。是の念を作し已りて憂愁に覆はれ、解脱の爲に林樹の間に住むと雖も、隨順の行をせず。是れを無智と爲す。心、憂の海に入り、既に憂の海に入りて復、等こと無き生・老・病・死の大憂の海中に入り、親里・親舊・知識を見んと欲して、魔の網の中に入る。親里を見るが故に、愛心を増長し、家々に食を請ひ、便もて貪心を生じ、俗の作す所に隨ひ、在家の者の言説する所有るを聞けば、心則ち樂みて著す。心に樂むを以ての故に、其の作せし所の如くに自らの利益を失ふ。愚癡の故に退き、未來の惡道の苦を畏れず、亦、地獄・餓鬼・畜生及び餘の生るる處を思惟せず、亦、現在の怖・老病死の苦・愛別離苦・怨憎會苦を思惟せず、亦、一切の愛する所と皆當に別離すべきことを思はず、親里・知識・親戚を怖るるを以て、出家を行ひ、還りて復、習ひ近き、親里・知識・親舊を樂み、他の飲食を愛し、數他門に至り、身壞はれ命終らんには惡道に墮ちん。或は地獄に生れ、或は餓鬼に生

【一】修多羅(śūtra)。又は修妬路・修單羅等に作る。契經・直説・法本經等と譯す。一般に聖教を指して修多羅と云ひ、又教典の原始的分類なる十二分教の一にて、長行に依りて教義を直説せるものを云ひ、又三藏中の經藏を云ふ。經と譯せるは、線にて花をつらぬきて環を作し、良く散失せしめざるが如く、經は言説にて一切の理をよく攝めて散失せしめずとの義譯なり。又世間の席經にえらんで之に契の字を加へて契經と譯す。

著せるもの有らんには、天及び世間の無間の大惡にして、病の如く、賊の如し。足ることを知りし比丘の諸根は色・聲・香・味・觸の境界の中に行かず、露地に住して則ち能く一切の衆生を利益し、心意を攝持め、身法を修め、心念處を受け、心意を攝持め、生死中に於て諸根を守護す。足ることを知るを以ての故に、名けて比丘と爲す。若し比丘有らんには欲行少欲なり。放逸ならざるが故に則ち能く少欲なり。放逸を以ての故に則ち多欲を生ず。在家・出家皆亦是の如し。爾の時夜摩天王は偈を以て頌して曰はく、

若し放逸ならずんば、則ち解脱の果を得ん。若し其れ放逸ならんには、則ち地獄に墮ちん。
 放逸と不放逸と、此に其の勝れし果を説かんには、若しは月、若しは闇冥、若しは解脱、若しは縛なり。
 放逸と不放逸と、其の義も亦是の如くにて、少欲は則ち安樂にして、多欲は則ち苦惱なり。
 斯の如き苦樂の相は、智者の説く所にして、若し多欲の衆生ならんには、其の心常に火の如からん。少欲は涼しき池の如く、澡浴しては貪を離れし人なり。火の乾きし薪を得ては、之れを焼くことは厭足なきが如く、多欲の人の財を貪りて、厭無きも亦是の如し。貪る人は晝夜常に安樂有ること無し。其の多く欲を樂むを以て、愛の箭は其の心を射、過去無量の王、財を貪りて厭足無し。未來も亦是の如くにて、一切は皆磨滅びん。是の故に、智者は少欲を最も樂と爲すと説きたまへり。

是の如くに夜摩天王は蓮華臺に住し、善時鵝王、法を説く烏衆・魔王大臣の放逸と名くる等の爲に、迦葉如來の第六の經法を説けり。

【三】欲の字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。原本樂に作れり。

是の如くに説けり。

是の如く牟修樓陀は善時鵝王・法を説く鳥衆、魔王大臣の放逸と名くる等の爲に、此の大過を説けり。云何に斷除くや。當に白法を以てすべし。云何なるは白法なりや。所謂、少欲なり。夫れ少欲を名けて一切安樂の法と曰ふ。若し人少欲ならんには安樂を得ん。其の人は王賤・水火を畏れず、多欲の人は財物を愛するが故に、他家に親近み、以て財物を求め、小人に近づきて以て財物を求む。若し人、少欲なれば則ち惡人の門下に至らず、妄語を作さず、虚誑を作さず、歌舞し戲笑して綺語を作さず、惡業を作さず、財を貪りて欲火に燒かるゝことを爲さず、他の樂を得るを見て、憂惱を生ぜず、財を貪るが爲に惡知識に近づかず、疑慮を生ぜず。若しは道路を行くに盜賊を畏れず、怨家を離れて、人に便を求めず、罰戮を畏れず。在家の人、若し能く是の如くんば則ち畏る所無く、諸の怖畏を離れて、一切安隱ならん。何に況んや出家に於てをや。過の畏を遠離れ、在家の法を離れ、林樹の間に住む。若し復、來りて在家人の所に至り、多く求むる所有らんに、當に知るべし、是の人は吐を食すると異ること無し。沙門中の第一の供養は所謂少欲なり。少欲の比丘は足ることを知り、清淨にして、名稱善く聞え、唯、一食を受け、唯、糞掃衣を著、唯、獨りにて侶無く、山谷・巖窟・艸聚に遊び、唯、塚間に處り、食を三分して唯、其の二のみを食し、若し乞食する時は知識を遠離し、親里に近づかず、唯、一鉢を畜へ、錫杖を執持ち、供養を得るに隨ひて智を以て思惟し、之れを捨て去る。若し道路を行きては前一尋を視、左右を顧みず。美味を捨離て、宿の飯を食せず、聚落中に於ては三宿に至るを限り、城邑の中に於ては乃至七宿し、寶にて飾りし莊校の座に坐せず、木の親里・眷屬・知識は之れを捨て、往かず、王者の甘味・美饌・牀褥・臥具を念ぜず、勝れし姓を説かず、善友に親近み、性行の同類にして同じき戒の者と言談り語論る。是の如き比丘は惡を離れ、濁を離れ、少欲にして足ることを知り、能く魔の縛を斷つ。若し多欲にして破戒の比丘の袈裟を

【二九】糞掃衣 (Purīṅkaṭṭha)。
火燒の布・鼠嚙の布・月水に穢れたる布等を清めて補綴して以て法衣を爲せるに名く。十二頭陀行の一なり。

【三〇】表面からでなく、本性から實行する同類の意からん。

欲ならんには、一切に輕毀められん。若し比丘有りて、意に欲する所多く、常に財物を怖はんには、是の如き比丘、善法中にて心清淨ならざらん。心、淨からざるが故に、諸根淨からず、行も亦淨からず、若し懦弱を以て、僧地を經行、乃至一步すれば則ち地獄に入らん。何に況んや臥具、病瘦の醫藥において罪過無からんや。純ら地獄の行なり。若し戒を破り、多欲にて惡法を行はんには、實に沙門に非ず、自ら沙門と稱するとも、猶し野干にて師子の皮を著けしが如く、虚偽の寶の如く、聲は蠱の聲の如く、内は空にして物無く、若しは多欲の比丘、自ら我は是れ迦葉如來の聲聞弟子と稱す。迦葉如來の法の中にては出家にて多欲に燒かるゝは大火に過ぐとす。多欲の迷悶せしむるは毒の身に入るより過ぐ、多欲の人を傷くることは衰老より過ぎ、多欲の利刀の善樹を伐ることは刀の害より過ぎ、多欲の患は惡疾より過ぐ。多欲の心の常に人の便を求め、人命を斷たんと欲することは怨家より過ぎ、便を求めて、人を害す。是の故に、當に知るべし。此の多欲の過は二世を破壊す、應當に此の多欲の垢穢を捨つべく、晝夜思惟し終に樂を得ざらん。爾の時、夜摩天王牟修樓陀は迦葉如來の説き給ふ所の偈を説きて言へらく、

多欲は利刀の如く、愚癡の人を斬害す。之れを捨てよ、刀劍の如くに盲冥の人を斃害す。

多欲は大いなる惡瘡にして、若し心中に生ぜんには、其の人、貪欲なるが故に、晝夜樂を得ざらん。欲の火、憶念の薪、愛風に吹かれ、猛火は大熾然として衆生の心を焚燒す。貪を以て心を覆ふが故に、人心をして輕動かしめ、財物に愛著するが故に、其の身命を喪ふ。若し

は人、世間に於て諸の惡業を造作するは、皆、貪慢に由るが故に、智者は是の如くに説けり。

若しは人、心勇決く、能く大火の中に入るは、皆、貪心に由るが故に、自ら無利益を作さん。

若しは刀の惱亂する苦、若しは種々の鬪諍は皆、心の因縁に由り、愚人に親近む故なり。當

に知るべし。此の衰惱は皆、貪の過に由るが故なり。應に貪に親近むべからず。智者は

【二六】 僧伽の地、教團に屬する地。佛法修行の地。

若し愚人有らんには、智慧薄少にして、第一義の樂を捨て、有漏の樂を求めん。相似せる樂と名け、其の人は則ち光明を遠離して黑闇を求むることを爲す。癡人は退没して其の功德と過の相を知らず。是の故に、應當に聚落・城邑の樂を捨て、常に獨り阿蘭若の處に住すべし。是の如くに聚落・城邑を離れて、林樹の間に住せんには、無住の樂を得ん。是れを第五の白淨の法を以て垢業を斷つと名く。若し樂を求めんと欲し、魔境を離れんと欲せば、白淨の法を以て垢法を斷除け。是の如くに牟修樓陀は說法する鳥衆の其の心調ひ、善く善時菩薩の他心を利益せるを知り、爲に迦葉佛の經の昔より天子次第に傳聞せるを説き、魔王大臣の放逸等の爲に十一法を説く中に、已に五法を説けり。餘に六法有り、今當に次に説くべし。汝、一心を集めよ。今、正に是の時、汝、今已に難の具を離るゝを得たり。若しは法を説かず、若しは法を聽かずんば、是れ大いなる欺誑なり。是の故に已に難の具足を離るゝを得、諸根を具足したれば、當に爲に法を説くべし。三種の惡道の地獄・餓鬼・畜生の中にて、云何に法を説くや。云何に法を聽くや。畜生の中にては互に相ひ殘害ひ、餓鬼は飢渴きて地獄の苦に逼らる。云何に法を聞くや。若し人、天中にて不放逸を行はずんば則ち能く法を聞かん。我れ放逸を離れたり。汝、善く信心し、汝、今諦に聽け、當に汝の爲に説くべし。法は聞くことを得難く、難の具足を離るゝも、亦復甚だ難し。復、次に第六の垢濁に欺誑さる。云何なるは垢法なりや。所謂、多欲なり。夫れ多欲は第一の垢染・惡貪の住む處なり。云何に滅するや。當に足ることを知るを以て則ち能く之れを滅すべし。若し多欲ならんには、在家・出家安樂を得ざらん。若し在家・出家にして、其の心多欲ならんには、常に晝夜、安樂を得ず、若しは物を得已りて心寂靜ならず、得し所の財物に厭足を知らざらん。在家にして多欲ならんには、未だ足らずして妨を爲すことは、出家の人の如し。若し出家して多欲ならんには、在家と名けず、出家と名けざらん。云何なるは名けて出家人と爲すや。憍慢・嫉妬・多欲を斷除く。要を以て之れを言はゞ、若し多

【七】本文「得難難具足」。難の具足とは、具足せる難、眞にむつかしい修道上の難過の意。

く人を繫縛り、一切の利益を失ひ、或は欲心を生ず。何を以ての故に。女人は、火の如くにて、之れに近かんには轉た近づき、若し女人に近かんには、漸く心をして亂れしめん。是の義を以ての故に、比丘は應に聚落城邑の中に入りて、若しは丈夫と共に言語・談説すべからず。一切の自利の事を失ひ、無漏の法に於て、心清淨ならず。是の如き比丘は自ら其の法を壞す。復、次に、若し比丘有りて、聚落及び城邑に入ることを樂まんには、多くの過咎を得ん。何等の過を得るや。他家に入るを以て、心をして惱亂せしめ、白衣の舍の富樂の飲食・牀褥・臥具を見て、心に貪著を生ずることは、猶し吐を食ふが如く、阿蘭若を離れ、人間に遊び、道を捨て、俗に入り、閑靜の樂を捨て、家の爲に縛られ、貪・瞋・癡を行ふ。是の過を以ての故に、復、地獄・餓鬼・畜生に墮つ。何たる因縁を以て、是の如き苦を得るや。其の城邑・聚落に入るに由るなり。是の故に、比丘若し地を得んと欲せんには、應に此の過を離るべし。

云何に捨離するや。阿蘭若に住するを以ての故に、能く一切無住の功德を攝め、住するところ無く、攝むる所は第一の安隱なり。若し比丘有りて、獨り阿蘭若の處に住せんには、諸根寂靜にして、其の心清淨なり。意は鍊金の如く、第一寂靜にして、善く諸根を護り、怖畏を離れ、垢汗を離れ、第一安隱にして、無漏の樂を得、六欲天中の一切の欲樂は、善業を作せしが故なるも、一天の樂の愛す可きことは等しきもの無く、況んや復、六天の一切の諸の樂に於てをや。若し漏を盡くすことを得んには、一念の樂も、分ちて譬喩する無く、一切の思量・算數も譬喩すること能はず。是の故に、若し第一義の樂を求めんには、應に憒闇を離るべく、聚落に入らず、以て禪定を求め、三昧・正受して常に獨り山谷・巖窟・阿蘭若の處に行き、若しは艸葉の邊にて獨一にて行ひ、無漏の樂を求め、知識・親里・眷屬を遠離し、當に知識・親里の樂の無常にして住すること無きを觀すべく、是れ別離の法にして、無住の處に非ず、濁垢・惱亂して自在有ること無く、多く怖畏を懷く。是の故に、

精進を伴侶と爲すを以ての故に、能く貪欲・瞋恚・愚癡を斷つ。正しく觀察して斷ち、諸有を受けず。怨家を殺し已り、閻浮提中にて虚空を觀するに、淨くして雲翳無く、日月の清淨なる光明の顯耀たるが如く、其の人の清淨なることも亦復是の如く、病みて差を得るが如く、貧にして財を得るが如く、猶し盲人の大曠野を行きて正路を失ひしに、道を得、眼を得るが如く、其の人は是の如くに禁戒を持して正しく修行するを以ての故に、修行して現に證れり。「我が生已に盡き、梵行已に立ち、作す所已に辦じ、後有を受けず、是の如くに塵垢を離れ、一切の縛より解脱を得、彼岸に度り、智慧勇猛にして塵垢を離れたり。一切皆精進を伴とせるに由るが故なり。是の故に、大精進を發して、能く懈怠及び放逸の生死の諸の縛を斷つべし」と。爾の時、夜摩天王牟修樓陀は迦葉佛の偈を以て、頌を説きて曰はく、

精進の念を發し、常に獨りにて靜なる處を樂まんには、惡業を脱るゝことを得、智慧もて涅槃を得ん。精進を發して伴と爲し、懈怠の垢を離れんには、曠野の怖を脱るゝことを得て、是の人は常樂を得ん。懈怠及び放逸は能く一切法を障ふ。此の大過を以ての故に、衆生をして苦惱せしむ。若し現、未の樂を求めんには、應に懈怠を離るべし。放逸にして懈怠なる人は狗の如くにて、等しくして異なること無し。

是の如くに、夜摩天王は善時魏王、法を説く烏衆・魔王大臣の放逸・欲迷等の爲に、彼の迦葉如來の經典を説き、昔より天子の傳聞せるを説けり。

復、次に第五の白法は能く惡法を斷つ。何等を惡法とするや。所謂、城邑・聚落に入るを樂み、常に慣闍を習ひ、阿蘭若の處に住するにを樂まず、沙門の法を壞す。云何に法を壞すや。是の如き比丘は修禪及び讀誦を離れ、或は聚落に入り、或は城邑に入り、處々に白衣の家に住することを樂み、或は男子と共に、或は女人と共に、多くの言説有り、若しは女人と共に言語・談説し、能

【三】驛の字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり、原本、賢に作れり。

無く、諸の大力の人も破壊すること能はず、善友を伴と爲し、知識増長し、善友多きが故に、大勢力有りて、多く安樂を受け、所行の處に隨ひて、若しは異なる方に至るとも、常に安隱を得、若しは餘方に遊びて善人に親近み、所有る人に隨ひ、其の人に親近みて、敬して供養を致し、禮を以て之れを待つ。懈怠を離るゝが故に、是の如き等の無量の功德を得、大に堅固なる精進の鎧を被、懈怠の垢を離れて、能く魔軍を破り、能く生死を出で、一切の善人に愛敬され、精進を發動して同伴と爲すが故に、復、出世間の無漏、無垢を得、初、堅牢なるも、惡しき塵垢の處にて緩めんには脱れ難からん。此の家宅を以て、諸の世間を縛り、妻子・眷屬・姊妹・兄弟・奴婢・田宅・財物の倉庫は大愛の瀑河なるも、精進を伴と爲せば、則ち能く生死の怖畏を離れん。家を捨て出家し、三法衣を服し、精進を伴と爲し、家の縛の中に於て、勤精進む故に、出離を得、無住の道を得、禪定を勤修め、正法を習誦ひ、涅槃に入りて解脱を得んと欲し、時の所應きを知り、勤精進を發し、如實に身・口・意の出沒を知り、諦に自相を知り、陰・界・諸入の生滅等の相を知り、晝夜息まず、精進して懈らず、善き師に親近み、智方便を以て勤精進を發し、道を習ひて過を盡くし、無始より流轉せる生死の縛を斷つ。是の如くに懈怠は一切利無きことは、猶し闇冥の如く、一切の衆生に利益せざる事なり。是れ堅固なる惡にして、精進を以ての故に、則ち能く之れを滅す。其の人、是の如く得る所の道に隨ひ、其の得る所に隨ひて、勤精進を發して則ち能く一切の和合を散滅し煩惱の染縛の境界を樂まず。一切の愚癡の凡夫を誑惑する愛の詐りの親善は、是の色・香・味・觸の境界の中は、猶し惡賊の如くにして、善法の財物を劫め、善法を破壊し、能く一切の利益無き事を作し、愛の果報にあらず、愛の財物に非らず、一切の愚癡なる凡夫を惱亂し、能く迷亂せしむ。是の故に應當に境界を捨離すべく、應に味に著すべからず、解脱道を修め、心をして清淨ならしむべし。心の清淨なるに隨ひて、則ち能く精進し、正念にて疑無し。正しく修行するを以て、怨家を破壊す。復、

り。若し善根を種えて、善友に親近し、性の重き戒を破らんに、善友に近づくが故に、生死を脱るゝを得ん。何に況んや戒を離るゝに於てをや。是の故に、智者は應當に勤め求めて善知識に近づくべし。三は一法を捨離するなり。云何なるは一法なりや。所謂、懈怠なり。懈怠を捨離し、勤行精進せよ、若し能く精進すれば則ち能く一切の懈怠を滅す。猶し放逸の一切法に於て能く無益を作すが如く、一切の善法は善友に親近むを以て根本と爲す。

復、次に第四の白法は能く垢法を斷つ。何等を白法とするや。勤めて精進を以て、懈怠を斷つことは、譬へば光明の一切の闇を滅するが如く、勤精進を以て、懈怠を斷除くことも、亦復、是の如し。夫れ懈怠は一切の法を害し、懈怠を生ずるに隨ひて轉々増長して、能く世間・出世間の法、現在未來の無量の諸法の稱説すべからざるを壞す、懈怠の人の勢力は薄少にして、人に輕賤められ、亦復、家業を修理すること能はず、貧窮下賤にして、營作み、生を治めて貿易し耕田種殖すること能はず、及び、餘事を悉く作すこと能はず、善友知識に親近むこと能はず。懈怠を以ての故に、人に輕賤められ、皆共に指ざし笑ふ。智慧を學ばず、癡にして知る所無く、時處を知らず、自の力を知らず、他の力を知らず、若しは時節に依りて、應に作す所有るべく、現在・未來の一切の應に作すべきを皆成就せず。若し人、精進めば則ち能く是の如き懈怠を斷除き、衆人に愛され、衆に敬重され、初夜・後夜、心疲倦せず、睡と雖も覺め易く、時を知りて起き、時を知りて臥し、時を知りて相應し、思惟して作し、堅固に精進し、精進を伴と爲し、精進の水を以て、懈怠の垢に澡ぎ、一切の作す所は垢を離れて成就し、作す所の業に或は衰惱を得ること有らんも、精進して退かず、怯まず、倦まず、問はず、息はず。若し大事を作さんには、精進を伴とするが故に、則ち能く成就して毀壞れず。凡ての造作す所を他人に假さず、好惡の人を讖り、自他の力を知り、善人に讚へられ、衆人供養し、或は王、大臣に供養され、大富・大力にして、一切の鬪諍には厭ふて敵を爲すもの

【四】 雖の字は宋、元、明三本に依れり、原本離に作れり。

【五】 轉嫁せずの意ならん、即ち自分の爲す所は自分の責任として引き受けるの意。

さず、衆僧は導を示し、道を聞くことを得るが故に、復、更に作さず、三惡道を畏れて、破らず、緩めず。是れを則ち名けて善時鵝王の道を説きて盡く行ふと爲す。

云何なるは破壊の行なりや。盡形は慢緩にして、禪誦を離れ、心に愛樂せず、天廟中に遊び、衣服・飲食を求めんが爲に、處々に遊行し、施主の家に於て俗人に親しみ、其の爲に驕使はれ、以て安樂を求む。是れを破壊の行と名く。是の如き比丘は身壞はれ、命終らんには地獄に墮ちん。

善時よ、云何なるは一切行なりや。一切法の毘尼を信じ、他人の爲に説き、輕き戒の中に於て、或は一切二戒を持すこと能はず、或は性を以ての故に、或は習ふこと無きが故に、具に持すること能はず、敬重せざるには非ず、作し已りて過を悔ゆ。善時よ、是れを一切行と名け、其の惡薄少なり。若し比丘・比丘等、少惡にして、戒を破るは、一切皆、放逸の過に由るが故なりと。

是の如くに夜摩天王は蓮華臺に住し、善時鵝王、法を説く鳥衆、魔王大臣の放逸と名くる等の爲に、是の如き法を説けり。爾の時、夜摩天王半修樓陀は偈を以て頌して曰はく、

放逸の爲に首にせられ、放逸の毒を飲み、放逸に縛られて、將に地獄に入らんとせり。若し

人、放逸を行はんには、世間に輕賤められ、現に利益を得、命終りては地獄に入らん。癡人は晝夜、或は住し、或は道を行き、一切の放逸なる者は、一念の樂をも得ざらん。其の放逸を以ての故に、欲界に流行し、五道中に輪轉し、或は禪の中より退かん。若しは世間の定

を得て、無色の處に生れ、諸有に輪轉するは、皆、放逸に由るが故なり。一切の三界中は愛を綱縊と爲し、放逸に縛らるゝとも、癡人は覺知らず。

是の如くに夜摩天王、往昔の時に、舊天子より次第に迦葉佛の經を聞くことを得、善時鵝王、法を説く鳥衆、及び魔王放逸等の爲に、十一の法を説く中に、已に三法を説けり。何等を三と爲すや。一は調伏にて憍慢を斷つ、二は正心にて亂れず、三種の破戒を斷除す。一は性戒、二は離戒な

【三】「盡形」は一身をあげての意、どこもかもといふこと。

「慢緩」はゆるみて締りのないこと。

【三】禪は禪定、誦は經典を誦すること、前者は定心による實習、後者は散心による實習。

【三】神々の神殿。

若しは沙門等、若しは放逸を行ひ、輕戒を毀破し、還りて、復、過を悔ゆ。是の如き沙門は一行の戒を破る。或は一、或は二、或は三、輕戒を破り已り、我に還りて過を悔ゆ。是の如くに數作し、數悔ゆ。是れを惡戒を捨離すと名け、法を敬重するに非ず、放逸を離るゝに非ず、心常に散亂す。是れを戒を破りて過を悔ゆと名く。云何に行に順ふや。放逸を増長し、輕心・輕戒にて、勇猛に戒を學ばず。破戒の因縁を能く知り、能く説き、實と實ならざるとを知り、戒法の中に於て、重戒を破らんには大重罪を得るを知り、堅く持して、犯さざるも若し縁に難き有りては、輕戒を破りて、持せず、敬せず、正法を重ぜずんば、是れを戒を破りて過を悔ゆる比丘と名く。

若しは沙門・沙門等は云何にして、半の行なりや。唯、戒法を學びて、重を知り、輕を知り、或は持し、持せず、其の心に思念して、餘の戒衆を護り、是の如くに心を攝めて、半の戒を行ひ、餘戒を行はず。是れを半の行と名く。比丘放逸なる行を行ひ、放逸に使はれ、放逸の境に住し、速に涅槃を得ること能はず。

云何に多く行ふや。若しは比丘・比丘尼、或は沙彌・沙彌尼・優婆塞・優婆夷、持戒を具足し、是の如くに、法に順ひて多く行ひ、多く持し、戒を離れて缺かず、穿たず、空せず、堅く固持すと雖も、盡く護ること能はず、是れを多行と名く。

若しは沙門・沙門等、云何に輕く犯して速に悔ゆるや。是の如き比丘、或は放逸の故に、或は惡友に近づき、戒に於て慢り緩なれども速に悔ひて淨からしむ。或は地獄の惡道の苦を畏れ、尋いで即ち過を悔ひ、心をして清淨ならしめ、僧の前に於て、我が不善を作せしを説き、心に覆藏せず、悔ひ已りて作さず。是れを比丘犯し已るに隨ひて悔ゆと名く。云何にして比丘は道を説きて盡く行ふや。若しは比丘・比丘尼等、或は重戒の中に於て、或は破り、或は緩かにして、或は放逸を以て、或は惡友に近づくも、速に師に向きて悔い、或は布薩の時に、衆僧に向ひて説き、心に覆藏

【六】沙彌 (Sramanera)。勤策男・息慈と譯す。比丘となるまでの出家して修行せる出家のこと。比丘の二百五十戒なるに對し、十戒を持す。

【七】沙彌尼 (Sramanerika)。勤策女と譯す。比丘尼になるまでの出家して未だ熟せざる女性のこと。比丘尼の二百五十戒を持するに對し、十戒を持す。

【八】優婆塞 (Upasaka)。近善男・近事男等と譯者す。又清信士と云ふ。四部弟子の一にて、佛道に入れる在家の男子を云ふなり。

【九】優婆夷 (Upasika)。近善女・近事女等と譯し、清信女と云ふ。優婆塞の對にて、佛法に歸依せる在家の女人を云ふ。

【一〇】布薩 (Posatha)。淨住・增長等と譯す。比丘等毎月十五日間、犯戒を懺悔して、以て清淨の梵行を修し、惡法を斷除するに名く。

を調伏す。調伏の法は是の如し。憍慢は調伏の法を以て之れを斷滅す。一切の憍慢は、放逸の故に生じ、放逸を本と爲し、諸の功德に於て、皆利益無し。是の故に涅槃を求めんと欲せば、應に放逸を斷つべし」と。是の如くに夜摩天王牟修樓陀・善時鵝王は、魔王大臣の放逸と名くる等の爲に、現前に爲に説けり。往昔、天子迦葉如來、三藐三佛陀より次第に傳聞し、魔衆の爲に説けり。云何るは第二の間答なりや。所謂、持戒せざるに正念現前れんには、而も之れを斷滅するなり。戒に二種有りて、世間、出世間なり。略して説かんに、心を能持と爲し、戒に多種有り、略して二種を説かん。一は性重き戒、二は惡を離るゝ戒なり。若し、性重き戒を破らんには則ち迦葉如來の弟子に非らず、性重き戒とは、所謂、殺生し、梵行に非らず、偷盜し、三鉢梨沙槃を具滿るなり。或は佛の物を盜み、或は法物を盜み、盜み已りて、之れを食し、心に過を悔いず、亦、還償はず、覆藏して説かず。是の如き比丘は則ち迦葉如來の弟子に非らず、腐爛れ敗壞れ、法器と名けず、但、妄語を以て衣服を莊嚴るのみ。是れを性重き戒を破ると名く、放逸を以ての故なり。是の故に、迦葉如來は、諸の比丘に告げたまはく「應に放逸を離るべし」と。是の如くに夜摩天王は善時鵝王菩薩、法を説く鵝衆、及び魔王の衆の放逸臣等の爲に、蓮華臺に坐し、牟修樓陀は是の如き法を説けり。復、次に第三の惡を離るゝことあり、略して九種を説かん。何等を九と爲すや。一は淨く一行を修む、二は常に速に過を悔ゆ、三は順じ行ふ、四は半の行、五は多く行ふ、六は軽く犯して即ちに悔ゆ、七は道を説きて盡く行ふ。八は破壞の行、九は一切を行ふなり。是れを九種の離戒と名け、一切の愚癡なる凡夫・或は沙門・沙門等を放逸を以ての故に、學ばざる者と名け、智無き者にして惡・不淨を行ふと名く。云何なるは一行なりや。云何にして惡を離るゝや。輕き慢・惡見にして、放逸なるを以ての故に、輕戒を毀破し、破り已りて復悔ゆ。所謂、地を掘りて、艸を斷つなり。是れを一行と名く。

【三】 三藐三佛陀 (Samyaksambuddha) 正遍知と譯し、佛の正覺を指す。轉じて佛を指してしか云ふなり。

【四】 Sampraharṣa 喜悅・慶喜か。如何に探究するも、この語の外に類音知れ難し。若しこの語とすれば、かゝる性罪を犯すものは、心から喜んで何の疑も恐れもなく犯すものといふ意なるべし大方學者の示教を俟つ。

説き、法ほふと相應して説き、説くが如くに行ひ、女人を觀ず、彈指して入り、時の出入を知り、亦、其の相を知り、衣を抖擻かげず、臂を掉おりて行かず、高き唾を作さず、大音聲せず、美語にて説法し、問を待ちて説き、他の語を斷ことばたず、少言・美語にして、法を以て語説す。是れを毘尼びにと名け、橋慢けうまんを斷つ。復、次に第二の調伏てうぶくは能く橋慢を斷つ。云何に調伏するや。所謂、比丘、及び比丘尼等、他家に入りて、若しは歌妓を聞きき、樂を作して戲笑し、遊戲中に他の言笑するを聴かず、樂まらず、味はず、願はず、多語を作さず。他の惡を説かず、自ら嚴飾かざりて他家に至らず。數々入らず、常に乞求めず。是の如き比丘は、他家、若しは本の施主に入り、若しは異家に至るに、此の調伏を以て橋慢を斷つ。復、次に、第三に比丘、施主の家に至りて、説法の語を離れ、世俗の語を説き、國土論を説き、生天論を説き、遊戲・歌舞の論を説き、過去の染愛の事を説き、女人に近きて坐し、雜色の衣を著して他家に入り、若しは比丘等、是の如くに橋慢熾然として增長す。何等の毘尼は能くこれに斷滅するや。所謂、若し比丘・比丘尼等、他家に入らんに、出家の法を説き、布施の論を説き、持戒の論を説き、智の功德を讚へ、無常敗壞の法を説き、老を説き、病を説き、愛別離を説き、自の業の作すことを説き、死の離別を説き、知足の法を説き、調柔の法を説き、苦を説き、集を説き、滅を説き、道を説き、他の進退を説き、破戒の過を説き、厭離の法を説き、慳を斷つ法を説き、色橋慢の人の爲には、色の過を説き、爲に食の過を説き、無常に破壞されて少壯の過必ず老壞に歸せんことを説き、人の深き心を觀、相應して説く。是の如き比丘は、調伏を以ての故に、橋慢を破壞す。復、次に第四の調伏は橋慢を斷除のき、數、多くの諸の飲食を受けず。若しは、更らに、人有りて食味に貪著して、厭足を知らず、喜びて他家に至るには亦親近おんじんまず、其の得る所の衣服・飲食・臥具・醫藥の若しは多、若しは少に隨ひて、足ることを知り、畜を受け、他の樂を念ぜず、亦、味に著せず、覺觀を生ぜずかくくわんに一心に行き、調伏して行き、威儀を正くして行き、比丘及び比丘尼等

【10】毗尼(Vinaya)。滅・調伏等と譯す。律のことなり。

【11】他の字、宋・元・明三本に依れり。原本地に作れり。
【12】姿色の優秀を誇ることを。

【13】畜養の意味であらう。即ち他からの扶養を受けること。

は布施にて貧窮を斷つ。十一は智慧にて無知を斷つ。是の如き十一の垢染し法は人を縛り、放逸の樹枝に著す。魔境を離れんと欲せば、應當に斷滅すべし。生死を畏るる者は應に放逸を斷つべし。夫れ放逸は是れ生死の本にして、放逸ならざるは是れ解脱の因なり。爾の時、迦葉如來は一切の諸の衆生等をして、生死を離れしめんと欲するが故に、是の如き法を説けり。我れ昔、先舊の天子より、此の法を説くを聞き、是の如き天子も亦、迦葉如來より此の如き法を聞きて我が爲に宣説し、次第に傳聞せり。我れ汝の爲に説かん。何等の法を以て、憍慢を調伏するや。調伏せる人は一切衆生に愛重され、調伏に住するが故に、此の憍慢にして兪惡なる法を斷つ。憍慢に五あり。何等を五と爲すや。所謂、若しは聚落・城邑に入り、或は道路を行くに、其の行、速疾にして、威儀を愼まず、或は道路を行き、或は非道を行き、或は衣を抖擻げ、或は伴りて跋行し、正しき心の人之れを見て瞋を生ず。云何して此の人は不順の法を行ふや。醉の爲に狂と爲る。是れを則ち名けて第一の憍慢と爲す。是の如き憍慢を云何して斷つや。應に正直に行くべく、轉ぜず、顧みず、一尋を直視し、威儀を齊整へ、衣を抖擻す、高く足を擧げず、限りて四指を齊くし、肩を通して衣を被らず、袈裟は齊等し、行きて臂を掉らず。此れは放逸ならずして、能く放逸を斷つ。復、四種の放逸有り、諸の比丘・比丘尼等は應當に斷ち離るべし。所謂、益無き語を説き、心に思念せず、多少を知らず、施主の家に至り、喚ばずして、突に入り、亦、彈指せず、上に在りて坐し、無量の義無き言を説きて覺知らず、靜坐の處に於て大音聲を發し、衆の女人を觀、緣無くして瞋り、左右を顧視して前後を觀ず、眷屬に憍慢にして、盜みて他家に入る。是の如き比丘を一切の世人は皆悉く愛せず、寂靜に行く者は、此の比丘を説き、名けて憍慢なりと爲す。在家・出家も亦是の如し。斯の如き等の過を云何して斷除するや。若しは施主、及び餘人に於て、正法の語を説き、前後相應し、人を觀て説き、心を觀て説き、時・處に依りて説き、相違して説かず、軟語にて説き、解し易すからしめて

【七】尼の字は宋・元・明三本に依る。

放逸を遠離し、禪定を修む。及び餘の天子も放逸を遠離して、亦、禪定を修む。牟修樓陀は既に此の事を知り、奔りて大池に向ふに、無量百千の天女は圍遶き、虛空に偏滿く、歌舞して樂を作し、衆の妙なる音を出し、天王に近づく。放逸ならざる天は歌はず、舞はず、答へ難き時に、忽念として至れり。爾の時、牟修樓陀は鴉王の一切の傷頰を説くを聞き憶念して知り已はる。『魔王大臣を名けて放逸と曰ひ、三人は同侶なり。我れ餘天より其の此に至りしを聞くに、一を放逸と名け、二を歡喜と名け、三を欲迷と名く。癡なる人の所に於ては増長し、重く惑はず。我れ當に此の放逸大臣の爲に、十一法の答へ難き法門を説きて、此の魔衆を破るべし』と。

爾の時、夜摩天王は此の事を思惟し、善時鴉王と共に、嚮量へ已り、空従りして下り、蓮華臺に坐し、無量の放逸を行ふ天と、自ら圍遶て、此の十一種の勝上なる答へ難き法門を説き、諸の天衆に告げらく『汝、今諦かに放逸の過を聽け、我れ往昔より曾て放逸無き天子を見るに、名けて安隱と曰ひ、我が爲に宣説して、我れをして此の如き法を聞くことを得しむ。乃ち是れ迦葉如來の演説し給ふ所なり。汝、今、諦に聽き、善く之れを思念せよ、一切の天衆、法を説く鳥衆、善時鴉王、及び魔王の衆よ。放逸大臣は顛倒を説く者にして、諸の世間の爲に無利益を爲し、魔の伴黨と住す。一切諦に十一の問ひ難き勝上の法門を聽け。所謂、十一の白法は十一の垢染の法を斷ち、眞實を求めんと欲し、涅槃を求めんと欲し、魔界を離れんと欲し、生死の縛を畏れ、寂靜なる阿蘭若の處に住し、獨一にして侶無く、實諦を求めんと欲し、黑闇を滅せんと欲す。一心に諦に聽け、何等を十一の勝上し法門にして十一法を斷つや。一は調伏を以て憍慢を斷つ。二は正心にして亂れず、二種の破戒を斷除く。三は精進にして能く懈怠を滅す。四は白法にて能く垢法を斷つ。五は白法にて能く惡法を斷つ。六は足ことを知りて能く多欲を斷つ。七は遠く離れて住するを以て、親里に近づくことを斷つ。八は正語を以て義無き語を斷つ。九は正しく住して輕掉を斷つ。十

【七】 迦葉(Kāśyapa)。過去七佛の第六。尼拘樓陀樹下に成道したまへる、釋尊の前佛なり。

【八】 阿蘭若(Āraṇya)。寂靜處、閑靜處等と譯す。比丘の修行に適する寂靜の處を云ふ。

に、威徳は勇健にして、勝れし相にて畏ること無く、其の聲もて調伏し、諸の天衆の爲に、偈頌を説きて曰はく。

此れ放逸の時に非らず、應に歡喜を生ずべからず。此の二法は癡を生じ、死する時に、大力有らん。喜の煙・放逸の火は無量の大衆を焼き、境界に迷惑さるるとも、目無くんば、覺知らざらん。能く相續と衆生の行を斷つ。境界の爲に迷はされて、利益を覺知らず。

時に、三大臣、是の語を聞き已りて、偈を説きて言はく。

放逸は最も歡喜なり。一切の樂は縁にて轉じ、放逸の故に愛生ず。云何にして是の如く説くや。

と。善時鵝王は偈を以て答へて曰はく、

放逸無きは歡喜なり。一切の樂は縁にて轉ず、放逸は苦惱を生ず。故に蓮華池を説けり。

と。時に、魔大臣の放逸は、復、偈を説きて言はく。

樂及び境界に於ける放逸なる諸の天女、及び諸の技術は第一に愛す可きと爲す。

善時鵝王は、復、偈を以て答へらく、

若し法、放逸を生ぜんには、一切皆是れ苦にして、能く諸の善根を失ひ、三惡道に行かん。

爾の時、放逸は、復、偈を説きて言はく、

或は園林中に處り、若しは蓮華池に在り、或は重閣の處に於て、放逸なるが故に、樂を受く。

善時鵝王は、復、偈を以て答へらく、

山・園林中、曠野の寂靜の處に於て、放逸無くして寂靜なれば、能く魔の縛を斷つ。放逸は

地獄に入り、或は畜生中に墮ち、復、餓鬼に生る。放逸にして癡なる心の故なり。

是の如くに善時鵝王は是の偈頌を説きて、放逸に答へたり。時に、牟修樓陀は、金窟中に於て、

【六】 放逸と歡喜を指す。

とを覺らす。智者の輕笑する所なるも、而も天子は之を行ひて羞無く、人の罰する無きも、放逸の爲に害せられん。心、遊戯を樂み、亦、常に歌舞するを樂み、境界を厭はずんば、天處より退失せん。放逸の爲に誑らかされ、怖しき處を笑ふことは、猶し盲冥の人の如くにて、道と非道とを知らず。

是の如き善時菩薩鵝王は他を利益するが故に、天衆を觀じ已り、第一の愛す可き法を説き、鳥の衆の中に住して、調伏の偈を説くも、諸の天衆、其の説を聞くと雖も、聽受せずして、歌舞し戲笑して五欲の樂を受け、池を遊りて住し、樂みて境界を觀ず。夜摩天中に三大士有りて、常に放逸を行ふ天・夜摩の天衆の爲に、法を演説す。何等を三と爲すや。一は夜摩天王牟修樓陀、二は善時鵝王菩薩、三は種々莊嚴孔雀王菩薩にして、是の三大士は常に他を利せんが爲に法を演説し、或は聲聞をして菩提を得せしめ、或は緣覺をして菩提を得せしめて、是の如き大士は魔の境界を超えたり。時に 魔波旬は是の如き念を作さく『此の諸の大士は我が境界を空にし、我れを捨て去らんと欲せり、人中の沙門・四天王中の四大天王・三十三天中の橋尸迦・夜摩天中の牟修樓陀・善時菩薩・種々莊嚴菩薩・兜率陀天の寂靜天王・及び其の眷屬、此れ等の諸人は、我が境に住むと雖も我に屈せず。六天及び人を我れ能く敗除せしめ、化樂天は我が境界なりと雖も、大力有りて、我れ亂すこと能はず、我れ今、當に智慧の大臣を遣はして夜摩天に至らしめ、往きて其の法を亂させむべし』と。是の念を作し已りて、即ち大臣と共に籌量らく『汝、當に往きて夜摩天王牟修樓陀・善時菩薩・種々莊嚴菩薩の所に詣り、之れを敗壞せしむべし。汝等三人は善能く言語し、善能く變化して大勢力有り。其の三人とは、一を歡喜と名け、二を放逸と名け、三を欲迷と名く。汝、去りて當に夜摩天王牟修樓陀・善時菩薩・種々莊嚴菩薩の所に至り、法を説きて之れを敗るべし』と。時に、三大臣、是の語を聞き已りて即ち下り、往きて夜摩の天衆に詣り、善時鵝王の所に至る。到り已りて此の鵝王を見る

【一】聲聞 (Śrāvaka)。小乘法中の弟子にして佛の説法したまへる聲音を聞きて、斷惑證理する人の意。佛の言教・遺教に依り、三生・六十劫を経て阿羅漢となる聖者を云ふ。
【二】魔波旬。魔 (Māra) と波旬 (Brahma) なり。波旬は惡、殺者と譯す。惡法を成し、僧をみだす魔王の名なり。
【三】六天。六欲天のこと、即四王天・忉利天・夜摩天・兜率天・化樂天・他化自在天の稱にして、此の六天は欲界に在りて、欲を主とするが故に六欲天と名く。
【四】化樂天。詳しくは樂變化天と云ふ。此の天に在るものは自ら欲を變現して樂を受けるに依り、此の名あり。

卷の第五十九

觀天品之三十八

夜摩天之二十四

爾の時、菩薩鵝王を名けて善時と曰ひ、諸の鵝衆を攝め、正念の心を以て一切の衆生の心を利益し、諸の鵝衆の心に快樂を受くるを觀、獨り一窟に在りて思惟し、法を念す。是の如き善時鵝王は法を念する樂を受け、他の爲に法を説くを以て悅樂と爲せり。復、餘鵝有りて、亦、法を思念す。爾の時、天衆は歡喜の心を以て、樂を求むるが爲の故に來りて此處に向ひ、此の大池を觀るに、周遍は愛す可く、一切時に樹は華果を具足し、天衆は之れ及び天女の衆を觀て、歌舞し遊戯して樂を受け、百倍に増長き、大池を圍遶せり。爾の時、菩薩鵝王は天衆を見已り、慧を成就せるを以て、頌を説きて曰はく。

智者は放逸ならずして、能く放逸を斷つ。則ち智慧の臺に昇りて、無上安隱を得ん。若し放逸を斷たんには、勝れし寂滅の道を得ん。此の廣大なる道に入り、智慧もて涅槃に到らん。放逸は能く道を障へ、心の過をして相續せしむ。是の放逸を以ての故に、法の橋梁を破壊る。能く善き念を壞はして、解脱の道を失ひ、是の放逸を以ての故に、將に人は惡道に至らんとす。放逸を以て心を亂しては、時の利益を覺らず、作法を語るを知らず覺らざることとは死人の如し。天身に住すと雖も、畜生の如きと異ること無く、放逸の癡に壞はされ、或は舞ひ、或は歌笑す。或は生れ、或は退沒き、當に生れ已りては復滅し、三界の衆生は放逸の故に、轉じ行ふ。一切の過を造作り、惡業に縛られ、一切の法に迷惑ひ、放逸の怨に轉ぜらる。放逸に害はるるを以て、內法を知らず、亦、外法を知らずして、其の心を失ふこ

【一】受の字は宋・元・明三本に依れり。原本愛と作れり。

の船に昇らんには、安隱あんいんの彼岸ひがんに到らん。智慧の山峰さんぽうに昇り、持戒の谷やにて莊嚴じょうげんらば、無量の智眼ちがんを以て、悉く諸有しよいうの過を見ん。若し人、法ほふを遠離しよんせんには、斯この人は内、外空がいくうなり。若し人、法ほふを樂らくますんば、堅かたからずして、水の沫なまの如し。若し、人有りて堅實けんじつにして、内・外金剛こんごうの如ごとからんには、法ほふを以て寂靜じやくじやうを行ひ、他の衆生しゆじやうを益利えきりせん。若し放逸ほうじつの泥でいに没もつして、境界きやうがいの樂らくを樂らくまんには、境界きやうがいの蛇へびに螫さかまれて、常に諸しよの辛苦しんくを受けん。是この故ゆゑに、樂らくを求むる者は、應まさに放逸ほうじつを行ふべからず。若し放逸ほうじつを脱だつれし者は則すなはち無量むりやうの樂らくに近づかん。若し智慧ちゑの人有らんには、放逸ほうじつを信ませざらん。若し放逸ほうじつの爲ために螫さかまれんには、五道ごだうに流轉りゅうてんせん。

是かくの如ごとき鵝が鳥てうは、諸天しよてんを調てうへんが爲ために、此この偈頌ぎを説とけり。時に、諸しよの天衆てんしゆ、欲樂こくらくに著ちやくするを以て、聽受りやうじゆせず、亦また、攝取しやくしよせずして、復また、歌舞かぶを作つくし、遊戯りゆぎして樂らくを受うく。

光明を出し、其の音は美妙にして、蓮華を食し、雄雌相ひ隨ひ、以て自ら娛樂む。菩薩鵝王を名けて善時と曰ひ、多く此の池に住めり。夜摩天王牟修樓陀は多く此の山窟の中に住みて、天の爲に法を説き、鵝王、池に在りて、鳥の爲に法を説けり。爾の時、諸の天衆は遊戲して歌舞し、分ちて二分と爲し、一分の天衆は善業を以ての故に、此の池の所に至り、一分の天衆は放逸林に入りて、遊戲し歌舞し、歡娛て樂を受く。善業有る者は往きて大池に至る。鵝は爲に法を説き、諸の天衆を見、爲に偈を説きて言はく。

若し人、法を説くと雖も、説くが如く行ふこと能はずんば、此れ愚人にして、空しく説きて、常に諸の苦惱を受けん。若し但、他の爲に説くのみにて、説きしが如くに行ふこと能はずんば、語堅くとも、義無く、名けて空無の心と爲す。放逸なるが故に、欲を生じ、欲に因るが故に瞋を生ず。斯る人は惡道に入り、馳せて地獄に赴く。若し樂已に過ぎ去らんには、現前に得可きに非ず、若しは現に受け、當に受くべしとも、是れ亦樂と名けず。

愚人は放逸を樂み、現在の樂を愛し、自の業果に誑らかされて、則ち地獄に入る。三世、愛に誑らかされ、常に利益無きことを作す。生死は衆生を縛る。智者は應に信すべからず。

愚者は親む所の友に、害を被らすことは大なる怨の如く、世間の衆生を縛る。智者は應に信すべからず。若し枷鎖の爲に縛られんには、猶尙、斷壞つ可し、常に欲愛を求むる人は愛の縛を斷つこと能はざらん。若し人、愛の縛を斷ち、而も常樂を愛せんには、斯の人は愛境を離れて、智慧の境界に行かん。智觀は光明を樂しみ、愛の大いなる闇苦を説く。智者は光明を持ちて、則ち能く諸の闇を破らん。智慧の利刀を以て、愛樹を斫伐り、能く愛樹を伐る人は、無上の樂しき處を得ん。愛の過の林及び多くの流泉を斷伐し、既に愛の林樹を斷たんには、諸有を脱ることを得ん。三道は大なる愛河にして、放逸の水洄濶れり。若し智慧

【一七】義の字は元・明兩本に依れり。原本我に作れり。

の如く、意の如の樹を以て莊嚴と爲せり。天衆は之を見て希有の心を生ぜり。其の山の一面は毘
瑠璃寶、其の第二面は眞金にて成ずる所にして、其の第三面は因陀青寶、其の第四面は大青寶王な
り。四面の嚴飾は皆悉く平等にして、平正の處峰・谷に梵林を皆悉く具足せり。若し觸の樂を念じ、
遊戯せんと欲する時には、便ち此の林に上る。百々千千の一の天子に千の天女有り、以て眷屬と
爲し、天の五樂の音の無量の音聲は無量に和合し、歌舞し遊戯し、百々千々、新に生れし天子と共
に、園林中の華池、流泉の所に於て、勝上なる百千億の樹を以て莊嚴と爲せしを見るに、七寶の光
焰の蓮華林の笏なり。此の諸の天衆は此の諸處に於て歌舞し、戲笑し、安詳に徐に歩いて、彼の大
山に向へり。互に相愛樂み、善業を伴と爲し、善業を資とする所にして、善業を以ての故に、骨肉
及び垢汗有ること無く、共に須陀を食する河の上に遊び、及び飲河に遊び、善業を以ての故に、
色・香・味・觸を皆悉く具足し、天子は之れを食し、五境界を樂み、之れを食して欲を發し、處々に樂
を受け、衆欲を具足し、等きこと無き無量の樂を受く。彼の山に昇らんと欲し、其の大山の殊勝な
る處を見て、未曾有と歎じ、久しくして乃ち此の大山の頂に至り、山處にて遊戯す。甚だ愛樂べく、
此の山の頂には多く無量の遊戯の處有りて、衆寶にて林樹・河池を莊嚴り、拘物頭華は香林に遍く、
滿山の頂上には諸欲を具足し、心に念ずる所の隨に、無量種の愛を皆得、意の如に皆愛樂す可く、
他は攝むること能はず。是の如き天子は久しく天樂を受け、是の如くに樂を受けて、處々を遍く觀
復、往きて七寶の山谷に詣るに、七寶の枝に覆はれ、光明にて善く樂み、衆の天鳥の妙なる音聲
を出すを見る。寂靜の窟は華池にて圍遶き、池を寂靜行處と名け、先世に持戒を具せざるを以て、
此の池中に生れ、先世の時に、其の心堅固にして、法要を説きしも、身に説く如く修行すること能
はず、猶し伎兒の業の果報を説くが如し。地獄・餓鬼中より出でて、此の池中に生れ、多く鵝鳥
と作れり。木生れし處にて寂靜の行なるを以ての故に、寂靜の池に生れ、七寶を翹と爲し、身より

【二五】樂の字、宋・元・明・及び宮本に依れり、原本は樂に作れり。
【二六】賤しい智識のない伎兒が口先丈で業因縁の道理を説くやうなもので、いはゞ商賈のやうに説法することを意味するならん。

峰を莊嚴れり。天子之れを見て、復、天女と共に山峰の中に入り、山峰の中に入るに隨ひて、林の轉た勝れしを觀る。歌の音は齊等ひ、漸く近づくに轉た勝れ、此の歌音を聞きて速疾に往き詣る。昔より未だ見ざる所にして、斯くの如き天衆は目を舉げて之れを視る。復、愛す可き笈笏の林樹を見るに、毘瑠璃の樹、青因陀の樹にして、皆悉く端嚴なり。新に生れし天子は復、七寶の蓮華の笈笏の中に入り、此の林中に、多く天子及び諸の天女有りて、妙色を具足し、身を嚴る具は念ずるに隨ひて生ず。一一の天衆は各各住を異にし、諸の天女と共に、天の上味を飲みて醉亂を離れ、種々の寶林、笈笏の中にて遊戯して樂を受け、七寶の池に入りて、諸の天子と共に、五樂の音聲にて歌舞し、戲笑し、歡喜て樂を受く。愛を以て心を覆ひ、厭足を知らずして、樂みて五欲に著す。蓮華林に入るに、蓮華の葉を以て、天の上味を飲み、醉亂せず。復、天子有りて、心に色・聲・香・味・觸等を楽しむ。復、天子有りて、河の兩岸に住して共に遊戯す。新に生れし天子、復、寶の殿を見るに、笈笏は林の如く、毘瑠璃寶を以て、欄楯と爲し、皆同じき欲心なり。上・中・下の善業の力を以ての故に、上妙の色を得、五樂の音聲にて、等もの無き樂を受け、賢喩ふべからず。

爾の時、新に生れし天子は、未だ曾て此の如き天衆の遊戯して樂を受くるを見ず。既に此れを見已り、天女の衆と歡喜の心を以て、天衆の所に向ふ。爾の時、天衆は此の天子の衣服にて嚴飾の上妙なる色の身を見て、未だ曾て有らざる歡喜の心を生ずることを得て、亦、天子に向ふ。二衆和合して、心に妨礙無く、天女の衆と共に。一一の笈笏・一一の金峰・一一の華池・一一の酒河・一一の流水にて、是の如き愛樂は具に説くべからず。是の如くに一切の天衆は樂を受く。

時に、諸の天衆は久しく樂を受け已りて、復、一切堅固の山に向ふに、其の山は七寶の無量の河池・流泉を具足せり。新に生れし天子は天女に圍遶れ、諸の天衆と共に常に音聲を樂み、山河・流泉の周に廻く充滿し、無量百千の笈笏の宮殿は甚だ愛樂す可く、周匝は蓮華を以て圍遶きて、猶し燈樹

見る所の隨に、種々の境界は轉々増長き、蘇油を以て大火に灌ぐが如く、厭足を知らず。厭足を知らずして、云何に樂有らんや。樂に非らざるを以ての故に、亦、寂滅に非らず、愛心の者は寂滅の心を得るに非らず。得る所の樂に隨ひて、愛心増長し、愛、増長すに隨ひて、厭足を知らず、厭足無きを以て則ち近づきて苦に入らん。苦の中に於て樂しき想を生ずるを以て、愛火に燒かる。復、林の中に入りて、山谷中を見るに、無量の林樹は無量種の光にて、之れを見て、諦に視、五の境界の欲火の中に於て、厭足を知らず。復、摩尼寶石の池に入るに、眞金・玻璃色にして、觸は柔軟にして、五種の柔軟なり。水衣有ること無く、衆鳥の音聲は澄靜にして、淵深し。復、異處を見るに、蓮華池有り、玻璃色の水其の中に充滿し、周匝は寶石を以て四面を砌り、光明普遍く、鵝鴨・鶯鶯を以て莊嚴と爲し、蓮華にて林樹の圍遶を嚴飾り、林中に多く美音の鳥有り。是の如く種々に其の池を莊嚴れり。新しく生れし天子、此の池の中の種々の衆蜂を見るに、七寶を翹と爲し、岸に香樹を生じ、色貌を具足し、以て莊嚴と爲せり。新に生れし天子、復、前て林に入り、大河有るを見るに、須陀充滿せり。新に生れし天子、復、異なる處を見るに、乳粥の河、清淨なる飲河有り、河流の聲は琴樂の音の如く、或は百、或は千、處々に流行し、多く衆鳥有りて、上味の酒を飲み、妙なる音聲を出せり。

時に、新に生れし天子、復、陸地の種々の衆華を見るに、色貌を具足し、香蜂は衆華の中に遍滿して、大林を莊嚴れり。其の林は先に香あり、華の香を以ての故に、轉じて百倍に増せり。新に生れし天子は諸の天女と、復、林中を見るに、大山峰有りて、衆の寶にて莊嚴り、無量の流水を以て嚴飾と爲し、樹枝は陰覆て、猶し宮室の如く、種々の寶の光、無量百千の衆鳥の妙音ありて、之れを見んには愛す可く、俱翹雜の音あり、無量百千の衆の華は普く熏り、光明は端嚴にして、闍浮提の日月の光明の如く、虚空には無量の光明在りて天處を莊嚴り、光明は殊勝にして、無量の光明もて山

種々の色の華を以て樹枝を蔽れり。復、異る樹を見るに、青寶を樹と爲し、眞金を枝と爲し、毘瑠璃の葉の無量の衆蜂は種々の色、貌にして、美妙なる音を出し、以て莊嚴と爲し、之れを見ては悦樂む。時に、新に生れし天子は、復、寶華を見るに、猶し目を開けるが如くにして、之れを觀んには、愛す可く、華の中の衆蜂は妙なる音聲を出せり。復、黄金の枝葉にて蔭覆れしを見るに、猶し宮室の如く、百千の衆蜂は其の音美妙にして、甚だ愛樂すべし。復、毘瑠璃の枝を見るに、青寶を葉と爲し、宮室を蔭覆ひ、第一の寶珠の種々の色の鳥を以て莊嚴れり。其の地は柔軟にして、寶を鈿めて莊嚴り、熏するに天香を以てせり。多くの天女有り。

新に生れし天子、復、虹の色を以て其の地を蔽りしを見る。之れを觀するに愛す可く、覆ふに七寶を以てし、平正にして愛す可く、及び天女を見る。新に生れし天子の見る所の諸色は皆悉く愛す可く、聞く所の音聲は皆愛樂む可し。其の聞く所の香に無量種有りて、皆、亦愛す可し。得る所に隨ひて味は心をして愛樂ましめ、無量種の味にして、天味を具足す。其の觸る所に隨ひて、無量の諸の觸は心をして愛樂ましめ、其の念する所の隨なり。種々の諸法は念するが隨に即ち得。是の如き天子は一切の欲に縛られ、樂を欲して斷たず、無量の愛す可きもの無量の寶地には寶を鈿めて莊嚴り。天鳥の音聲を聞き、諸の天女と共に大林中に入る。復、華地を見るに、種々に莊嚴り、分に差別し、或は蓮華有り、毘瑠璃の莖にして、眞金を莖と爲し、金剛を鬚と爲し、青因陀寶を以て其の臺と爲し、華は皆柔軟なり。復、蓮華有り、眞金を莖と爲し、毘瑠璃の葉にして、白銀を臺と爲し、赤蓮華寶を以て其の鬚と爲し、種々の衆蜂は妙なる音聲を出せり。復、蓮華有り、七寶もて合し成り、眞金を葉と爲し、七寶にて 厠細め、以て其の臺と爲せり。所謂、因陀青寶・赤蓮華寶・毘瑠璃寶・紅蓮華寶・禰磈の寶・大玉寶王にして、是の如き種々の衆色の光明を以て、其の臺と爲し、一の華臺の如く、無量の華臺は皆亦、是の如し。天子、之れを見、觀じて、厭足無く、其の

【三】 蜂の字は宮内省圖書寮本に依れり。

【三】 厠は雜ふること故に細と熟して「ちりげめ」とせしなり。

に應に心を護るべし、輕動に魚獵して、常に境界に著せんには、愛境に覆はれん。心諸の境に馳せて、衰惱を覺らず、衰惱既に至らんには、乃ち業の果を知らん。既に、此の業、及び境界の過を知らんには、常に應に世間の諸の縛を捨離すべし。

是の如くに、放逸鳥は、此の偈頌を説くとも、而も此の天子は聽かず、受けず、天女の衆と共に欲樂を受く。此の諸の天女は生死の因縁にして、大苦を生ずる因なり。識無き者は之れと共に遊ぶ。常に險惡を行ひ、愛心停らずして、常に男子を求め、心は惡毒の如く、惡險岸の如く、一切の男子の心に火を然やす。是の如き等の畏るべき天女と共に、天の樂を受く。愚癡を以ての故に、遠く避けず。若し智者有りて、生死を怖畏れ、樂を求めんと欲する者は、諸の天女を離れん。愚癡ならんには迷惑せん。欲にて心を覆ふが故に、女人に因りて苦惱を得ることを知ると雖も、捨離すること能はずして、諸の采女と共に、欲樂を受け、貪欲・愚癡にして、瞋恚に覆はれ、生死の泥に没し、諸の天女と遊戲して樂を受く。無量の利益を攝受して惡道を遮へず、心誑らかさるるが爲に法を覺らず、園林にて遊戲し、正しく行はざる諸の天女の衆の、愛の網にて樂を受く。復、異地に語るに、金、毘瑠璃・青因陀寶・大青寶王にて周徧を莊嚴り、無量の處に遊ぶ。歌詠する音を聞きて、其の章句を解し、言の音は美妙にして、五樂の音聲は勝れし徳を具足し、比無き妙音にして、昔より未だ聞かざる所なり。新に生れし天子は既に此の音を聞き、諸の天女と馳せ往きて林に趣く。其の林は無量の寶樹を具足し、林を大歡喜と名け、長さ百由旬、廣さ三十由旬なり。是の如き大林は衆寶を具足し、大功徳を具し、無量の天衆は百々千々に歌舞し、遊戲し、娛樂して樂を受く。

時に、新しく生れし天子、此の大林の毘瑠璃の樹を見るに、大光明、無量の香華・功徳の華鬘・無量種の色・種々の相貌有り。此の事を見已りて、復、異なる樹を見るに、毘瑠璃樹は眞金を葉と爲し、青寶を枝と爲し、白銀を果と爲し、皆た悉く天味の功徳を具足し、青因陀寶にて、其の樹を校飾り、

亦、他の作せしを我れ報を受けしに非らず。因縁を以ての故に、果報を生じ、業果を成就せり。是の持戒の人には、心に念ずる所の隨にして。愛心にて、天の衆の妙色・天の細色・中色を憐望するに近遠の時に生じ、遠時、中時、念ずるが隨に、無量の樂しき法を成就す。是の丈夫は善く持戒せしを以ての故なり。是の如き天衆、其の心六欲の境界に著し、欲河に漂はされて遊戯を行ひ、一一の園林、一一の山峰は七寶にて莊嚴り、園林、流泉は妙なる音聲を出し、白色の衆鳥は、衆の異音を出せり。是の善業の者は其の中にて遊戯し、種々の妙色、種々の相貌、種々の功德、種々の嚴飾にて、欲火を生ぜしめ、天女は種々の山峰を圍遶き、天鬘・天衣にて其の身を莊嚴り、塗香・末香を以て其の身を嚴り、諸の天女と共に、山峰中に於て遊戯して樂を受け、其の念ずる所に隨ひて、無量の欲を生ず。復、天女と與に往きて、等しき、等しからざる地に詣るに、其の地は愛す可く、眞金・白銀・青毘瑠璃・青閃陀寶・磤磧を地と爲し、鈴の綱の音聲、衆の鳥にて莊嚴れり。爾の時、鳥有り不放逸と名け、此の天子の放逸を行ふ處を見、偈を以て呵責せり。

但だ故の業のみ受けて、新しき業を作さずんば、業盡くれば則ち墮ちん。諸の法は是の如し。業將に盡きんとし、壽命は念々なり。死の來るや卒かにして暴くとも、愚者は覺らず。天子、天女は欲樂を覺らずして、欲を念じて時を過し、退く時將に至らんとして、得て失うことの多く返るは、欲の境界に因る。衰惱の中に於て、云何んが惡意なるや。汝、善業を成就せるを以て、樂を受け、復、善業を作して、將に善道に至らんとせり。若し境界を樂まんには則ち有の海に没せん。若し境界を離れんには則ち解脱を得ん。境界の波の力は愛河より起り、智者は捨離てて、涅槃の城に趣かん。勇しき人は欲を捨てて、眞諦を求め、能く愛境の三有の洞瀆を知る。境界を捨離して、心に念を生ずること勿れ、甄波迦の如く、果報は甚苦し。人の心は樂に著し、貪りて境界に馳せ、不善の業を集め、惡道に流轉す。常

【三】得る返報に失ふことが來るの意。

姫の果を應に習ひ近くべからず、寂滅の道に非らず、愛樂すべからず。善を行ふ人は應に喜樂むべからず」と、他の爲に、微細の果を宣説し、持戒、梵行し、微塵の惡をも、之れを見んには怖を生ず。是の如きの人は身壞はれて命終らんには、善道天世界中の増長法の地に生れん。彼天に生れ已りて、善業を行ふが故に、愛果を成就せん。所謂、園林、金の山峰中の流泉、河池は衆寶にて莊嚴り、衆の鳥は妙へなる音にして、其の池の四岸は七寶にて莊嚴れり。青毘琉璃・青因陀寶は其の地に間錯り、多く衆蜂有り、種々の色、聲にして、相類は各異り、之れを見んには愛す可く、其の聲は美妙にして、之れを聞きては悦樂み、園林中に於て愛樂を増長す。復、異處に於ては、金剛・青寶・玻璃を石と爲して、山谷を莊嚴り、光明の山に於ては、流水の音を聞きて快樂を受け、意の作す所の如く、皆悉く自在にして、比無き欲を受く。無量百千の天女は圍遶き、常に欲樂を受け、欲樂を増長し、無量の差別を受け、樂噓ふべからず。種々の金山、毘琉璃峰、虛空中を行き、種々の衣服にて、其の身を嚴飾り、戲笑し、歌舞し、種々の妙色の諸の天女等を以て、圍遶を爲し、天の五欲を具せり。若しは天色の無量に差別せるを見て、等もの無き樂を生じ、意の隨に遊戲す。是れを色欲と名く。若しは音聲を聞き、其の念する所の隨に、諸の天女と共に戲笑し、歌舞して、聞く所の諸の香は、無量に差別し、風は華池を吹き、蓮華の香、及び類の異なる華を山谷の風吹き、種々の華香を以て、其の鼻を悦しむ。舌に無量種々の天味を得、念するが隨に鹹・淡・苦・甘・辛・酢等の味を具足し、無量種の馨噓すべからざる意の如の味有り。是の如き身の觸は無量種の業にて意の如し、即ち冷・煖・溫・涼・柔軟・細滑の衣を得。絨毳無く、種々の色寶を以て莊嚴り。無量の光は十山句、二十山句、乃至百山句を照らし、光明の寶珠にて觸の樂を受け、天の園林中には、或は華香有りて、天子、之れを聞く。善業を以ての故に、樂の希有なるを受くるにて、作さざるに生ぜしに非らず、因無くして生ぜしに非らず。作せし所は失はず、是れ意の生ぜしに非ず、是れ他の與へしに非らず。

べく、若し善業を修行せんには、此れは是れ勝れし資糧ならん。

是の如くに夜摩天王牟修樓陀は、是の偈を説き已りて、諸の天衆に告げらく『今自ら已に去りて、色・聲・香・味・觸に貪著するが爲の故に、放逸を起し、園林にて遊戲すること勿れ』と時に、諸の天衆、此の語を聞き已り、天王に白して言へらく『願くは我れ未來に彌勒佛・無上士・調御丈夫・天人の導師の世に出興するを見、我れ人中に生れて、彼の世尊を見、初の會數に在りて、法を聞くことを得已り、諸の有漏を盡くさん』と。復、天衆有りて、阿耨多羅三藐三菩提を求むることを願す。是の願を作し已りて、佛・法・僧に歸し、七萬の天子、及び餘の天衆は必ず人中に生れ、彌勒佛を見、法を聞くことを得已りて、諸の漏、永く盡きん。復、餘天有り、先に佛塔を見て阿耨多羅三藐三菩提の願を發す。復、餘天有り、緣覺の心を發し、一切皆、當來に果を得んことを願す。爾の時、夜摩天王は是の如き念を作さく『我れ已に他の爲に大利益を作して、諸の天衆をして放逸の行を離れしむ』と。時に、夜摩天王は諸の天衆の意善く調伏へるを知り、各を宮に還らしむ。時に、諸の天衆、恭敬して夜摩天王を圍遶き、池を捨てて去りぬ。夜摩天王牟修樓陀は諸の天衆の爲に利益を作し已り、復、餘地に詣り、餘の天衆の爲に利益を作せり。

夜摩天の常樂の地の第八牟修樓陀天の化せる經を具足し竟んぬ。

復、次に比丘、業の果報を知り、夜摩天の佳する所の地を觀す。彼れ聞慧を以て夜摩天處を見るに、增長法と名く。衆生は何なる業にて、此の地に生るるや。彼れ見るに、若しは人の、善心にて持戒し、殺さず、盜まざること、前に説きし所の如く、復、邪姪を離れ、微細なるをも亦捨て、乃至、畫きし男女を見るとも、憶念を生ぜず。是の如きの人は觀ぜず、念ぜず、味はず、著せず、濁らず、心に念じて淨行を犯すことを恐れ、亦、思惟せず、不善を念ぜず。心の過を遮へ、他人の爲に、邪姪の業果を説き、以て其の心を遮へて、其をして喜ばず、愛せず、樂しまざらしむ。此の邪

【五】彌勒(Maitreya)。慈氏と譯す。南天竺の婆羅門にして、釋迦如來の佛位を繼ぐ補處の菩薩となりて、釋迦に先ちて入滅して兜率天に上生し、現に兜率の内院に在り、人壽八萬歳の時に出世して龍華樹下に正覺を成じ、此時三會に衆生を濟度すと云ふ。詳細は彌勒六部經に出でたり。
【六】無上士(Anuttara)。佛十號の一。無上なるもの意。
【七】調御丈夫(Phussaḍḍam-purīṇathī)。佛十號の一。良く丈夫を調へて法に歸せしむるもの意。
【八】天人師(Sarīṇī-lova-m-anuṣṭhānari)同じく佛十號の一。天、人の師たる意。
【九】阿耨多羅三藐三菩提(Anuttara-samyak-sambodhi)。無上正遍智、無上正等覺等と譯す。佛の覺智なり。
【十】覺覺(Pratyekabuddha)。十二因縁を觀し、外縁に依りて無常を知り、外縁にて良く斷惑證理するにより、依これ縁覺と名く。又師に依らずして獨語する故獨覺とも名く。

爲す。若し人、常に憶念して、涅槃に趣向せんには、爾乃、天と名くることを得ん。欲樂を樂む者には非らず。若し常に、一心に念じ、禪定の業を樂みて修めんには、此の樂は能く有を離る。欲樂に著すると謂ふに非らず。既に、此の有の過を知らんには、欲に於て厭離を生じ、精勤みて涅槃を求む。是れを眞實の天と名く。

是の如くに、夜摩天王は、無量種を以て、諸天を利益し、諸の天衆をして、心に清涼を得、惡道を斷除せしむ。爾の時、天衆は天王に白して言はく、「天王よ、天王の説き給ふが如く、我等現に、色力・形貌の十倍勝れし者も、皆衰憊を受くるを見たり。況んや、我等に於てをや」と。夜摩天王、此の語を聞き已り、之れに告げて曰はく、「汝の見る所の此の諸の天衆の如きは衰憊少し。汝等夜摩の天衆は、當に地獄・餓鬼・畜生に墮つべく、此れより百倍も過ぎたり。汝、天衆は非法を行ひ、放逸を行ふを以ての故なり。若し、諸の天衆の法に隨ひて行ひ、放逸を遠離せんには則ち、一切の惡道の門を閉ざさん。常に天・人は種々の樂を受く。當に、憂悲・老・病、死の苦を離れ、常に住する處を得べくんば永く上に説く所の如き諸の苦無けん。是の因縁を以て、放逸を行ふこと勿れ。是の如き欲樂は、無漏の智・禪定の樂に比して、百千分の其の一にも及ばざらん」と。爾の時、天衆は、天王の説き給ふを聞き、現に諸の過を見て、復、是の言を作さく、「天王は法を説き給ひて、我等を利益せり。我れ今、攝め受けて、我れをして是の如き生死の衰惱の苦を受けざらしめん」と。爾の時、夜摩天王牟修樓陀、偈を以て頌して曰はく。

若し自ら業を作すこと有らんには、是れ他人受くるに非らず。若し自ら善く調伏せんには、是れ則ち常の處を得ん。若し異なる業を作ること有らんも、善業に及ぶ者無く、この異業にては、無量百千たび生れて、業は常に隨順して行はん。廣く諸の福德を作し、善法を修行せんには、則ち最勝の處を得て、永く老・病死を離れん。是の如き自の善業を、天衆は應に思惟す

ずること、地獄に出過ぎ、此の苦は説くべからず。飢渴の自ら身を焼くことは、猶し猛火の
 燄の如く、能く身心を壞はす。此の苦は説くべからず。常に他の爲に輕賤られ、親里及び
 知識は憂悲の苦を生ず。此の苦は説くべからず。人は老の爲に壓せられ、身羸せ、心意劣
 り、僮僕にて杖に拄りて行く。此の苦は説くべからず。人は死の爲に執へられ、此こより
 他世に至る。是の死は大苦を爲し、宣説することは得べからず。衆生は能く見ること莫き
 も、諸の業は遮ふること能はずして、能く諸の衆生を壞はす。是の故に名けて死と爲す。
 大力にして、堪へ忍び難く、能く諸の衆生をして獨り行きて大いに怖畏しむ。是の故に名け
 て、死と爲す。衆生は畢竟有にして、時火避くべからず、能く衆生の命を斷つ。是の故
 に、名けて死と爲す。死王に破壊され、能く人の命根を斷ち、陰・界・入を盡くす。是の故
 に、名けて死と爲す。生には必ず別離有り、知識・兄弟と別れ已らんには、復合はず。是の
 故に名けて死と爲す。及び、死の未だ至らざる時に、應當に善行を修むべし、死の惡は慈愍
 無し。未だ至らざるに應に善を修むべし。是の死は甚だ卒暴く極惡して、慈愍無し、未だ至
 らざるに能く善を修めんには、乃ち天中の眞と爲らん。若し法中に慧を生ぜんには、是れを
 善き命の人と名く。若し法を離れざらんには、是れを命中の命を爲す。若し人、心に佛を
 念ぜんには、是れを善き命の人と名く、佛を念ずることを離れざるが故に、是れを命中の命と
 爲す。若し人、心に法を念ぜんには、是れを善き命の人と名く。法を念ずることを離れざ
 るが故に、是れを命中の命と爲す。若し人、心に僧を念ぜんには、是れを善き命の人と名
 く。僧を念ずることを離れざるが故に、是れを命中の命と爲す。若し人、心に實を念ぜん
 には、是れを善き命の人と名く。實を捨離せざるが故に、是れを命中の命と爲す。若し人、
 心に道を念ぜんには、是れを善き命の人と名く。道を捨離せざるが故に、是れを命中の命と

【三】時間小變異せしめらるることを火に譬へて云ふ。
 【四】陰、界、入、新譯に蘊、處、界に作る。五蘊、十二入、十八界のことなり。後卷の註に詳し。

人中に於て、樂を欣ぶ心を起すこと勿れ。復、次に、第十六に人中にて無量種に生を受く。生れんには則ち苦有らん。何等を苦とするや。所謂、死苦なり。死已りて復、生れ、身根入壞れ、命根斷滅して、復、兄弟・知識を見ず、色・身滅し已りて、復、異處に行く。自の業の果を以て、資糧と爲し、一切衆生は必ず終盡に歸し、命盡きて身を棄て、中陰の有を受く、是れを名けて死と爲す。一切の生有らんには皆死に歸せん。若し死して生れずんば、生れて死せざらん。是の處は有ること無し。諸の天子よ、人中に於て樂の心を生ずること勿れ」と。爾の時、夜摩天王牟修樓陀は偈を以て頌して曰はく。

人世界中に、陰有り、皆是れ苦にして、生有らんには、異に死に歸し、死有らんには、必ず生有らん。若し中陰に住せんには、自の業にて、苦惱を受け、長夜に遠く行く苦にして、此の苦は説くべからず。屎尿の中に没し、熱氣に燒かれ、是の如くに胎の苦に住して、具に説くことを得べからず。常に食味を貪り、其の心は常に希望み、味に於て大苦を受く。此の苦は説くべからず。小心にて、常に希望み、欲に於て、足ることを知らず、受くる所は諸の苦惱にして、此の苦は説くべからず。怨憎不愛會は、猶し大火の毒の如く、生ずる所は諸の苦惱にして、此の苦は説くべからず。恩愛より別離して、衆生は大苦を起し、大惡にして堪忍し難し。此の苦は説くべからず。寒熱は大苦の畏れにして、無量種の苦を生じ、大苦は甚だ暴惡にして、此の苦は説くべからず。病苦は人命を害ひ、病は死王の使と爲り、衆生は斯る苦を受く。此の苦は説くべからず。他の爲に策使れて、常に自在有ること無く、衆生は斯の苦を受く。此の苦は説くべからず。愛の毒は衆生を燒き、追求めて大苦を受け、次第に乃至死せん。此の苦は説くべからず。若し惡知識に近かんには、衆苦、常に斷たず、當に惡道の苦を受くべく、此の苦は説くべからず。妻子の衰惱を得るを見れば則ち、大苦を生

衆の爲に、數々、無量種の法を宣説し、第十四の人中の大苦を説けらく「所謂、他に輕賤らるゝ苦にして、堪忍ふべからず。種々に差別し貧窮にて人より輕毀さるゝこと徧く多く、十種の苦有り、種姓・親族・兄弟の富人に輕賤られ、貧窮の苦を以て、他に依りて食し、綺語して實ならず、親族に義無き語を空しく語り、他に依りて住み食し、衣服は塵垢る。他人に輕毀せられ、若しは城邑に入り若しは節會の日に人に輕毀らる。人道の中にて、是の如き等の、無量に輕毀めらるゝ大苦有り。世間の人に、薪無き火住して心中に在り。謂く、輕毀の火にして、親里・知識・兄弟の火に燒かるゝを最尤甚しと爲す。福德惡しきが故に、此の十苦を得、遍く其の身を燒き、大惡にして、怖畏るべく、乾きし身を燒くを以て、氣は烟の起るが如し。諸の天子よ、應に足るを知ることを生ずべく、人中にて樂を欣ふことを生ずる勿れ。人中は樂少く、甚大なる苦惱にして、衰惱し、壽短く、輕毀の垢汗は唯、人中のみに多く、輕毀さるゝこと有り、四道の中に非ず。人道中に於て輕毀は最も重し。他の輕毀を得んには、一切の身分は猶し毒に中るが如く、本得し所の供養の處に隨ひて、後、更に輕毀ぜらる。若しは人、先に常に好き供養を得るも、後に少利を得、少時の供を得ん。若しは善男子、是の如く輕毀られんには、死苦より過ぎん。諸の天子よ、是れを人中の忍び難き大苦と爲す。復、次に第十五の人中の大苦とは、所謂、老苦なり。當に汝の爲に人中の老苦を説くべし。老とは能く一切の身分をして羸瘦れ減劣へしめ、諸根、皆熟し、少壯を破壊る。杖に拄りて行き、氣力有ること無く、住處を輕毀せられ、背は僵にて、鼻戻り、髮白く、死の使身意を減劣へしめ、未だ命終らずと雖も、畜生の如し。諸の天子よ、是れを則ち名けて人中の老苦と爲す。名色に戲弄されて、久しからずして必ず死せん。若し老苦を見て怖畏れずんば、當に知るべし、是の人を名けて心無しと爲し、猶し木石の如し。心無きを以ての故に、復、人身なりと雖も、猶し畜生の如し。諸の天子よ、人道中に生れて、大苦を爲し、生有るを以ての故に、是の故に老苦あり。既に、老苦を知らんには、

【二】 人界を除いて他の地獄、餓鬼、畜生、天上界のこと。

【三】 名色(Nāmanupā)の有情の心身を組成する五蘊のこと。

し、況んや三惡道に於てをや、大苦惱を受く」と。是の如くに利益して他を攝めて、常に放逸ならざらしむ。夜摩天王は無量種・無量の差別・無量の方便にて無量種の法・涅槃の勝法を説き、妻子の苦を説き已りて、復、夜摩の天衆の爲に、第十三の人中の大苦を説けらく『所謂、飢渴の苦にして、飢渴に由るが故に、無量の惡を作す。其の餘の衆苦も、飢渴の如きは無く、飢渴を以ての故に、衆惡の處に入り、大種姓の人も飲食の爲の故に合掌して涙を垂れ、哀聲にて下賤の小人に親近み、慈愛の語を説く。是の如く一切は皆飢渴に由り、飢渴を畏るゝが故に、其の命を顧みず、危險の處、刀刃の間、及び惡象の敵に入るは、一切皆、飢渴の苦に由るが故なり。或は大海に入りて、無量百千由旬を経、無量の惡魚・鯀彌鯨魚洪波の惡處にて、自ら身命を捨て、鱸舟に乗り、大海に沈む。是の如く一切は皆、飢渴の苦を畏るゝに由る。復、無量種々の差別有りて、具に説くべからず。是の如き諸の苦は口腹の爲の故なり。若しは人に執縛られ、右門より出で、惡聲の鼓を打ち、嚴るに死臺を以てし、災ひの標は前に在り、怖畏れ、愁惱みて將に殺處に詣らんとし、命は須臾に在り、復、大苦なりと雖も、未だ飢渴に過ぎず。是の故に、應當に、淨善の心を以て、福田中に於て、好き財物を以て、布施を行ひ、時・處を具足し、生死の畏の中に於て、勤修し精進し、善心にて布施すべし。天中は飢少きも一切の生死は皆、飲食に依る。飢渴を除くを以て、是の故に、一切は應に布施を行ふべし。諸の天衆よ、是れを人中の飢渴の苦惱と名け、無量に差別す。天道中の苦は微にして軽く、天の樂之れを覆ひ、福德多きが故に、飲食得易し。而も天は、欲界に過ぎ、飢渴の烟火に覆蔽るゝ苦の火を畏るゝことを覺らず。諸の天子よ、是の如く人中の種々の生・老・病・死の苦を觀じて、樂を欣ぶことを生ずる勿れ」と。是の如くに、夜摩天王牟修樓陀は夜摩の天衆の、其の心調伏し、多く調ひ、柔軟なるを見、既に觀察し已りて、復、天衆の爲に人中の苦を説き、勤修して他を利せり。自を利することは則ち易し。牟修樓陀は、不斷の力を以て、利他の爲の故に、夜摩の天

【三〇】 鱸の字、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。原本經に作れり。

厭離を生ずべし。若し諸有を貪らんに、利益を得ざらん。是の因縁を以て、人中の一切の衰憊を説けり。若し人中に生れて、追求するを以ての故に、不善業を作さんには、是の因縁を以て、或は地獄に墮ち、或は畜生に墮ち、或は餓鬼に墮ちん。既に惡道に生れて、種々の苦を受けん」と。是の如くに、夜摩天王は、復、十一の人中の大苦を説きて、諸の天衆に告げらく「人中の大苦とは、所謂、惡知識に近くなり、皆利益無く、一切は苦の因なり。惡知識に近かんには、惡として得ざるもの無く、身・口・意の一切の惡業を造る。是の因縁を以て、身壞れ、命終らんには、惡道に墮ちて地獄の中に生れ、無量の苦を受け、未來世に於ては、或は餓鬼・畜生の中に墮ちて、無量の苦を受けん」と。人中の地獄・餓鬼・畜生の過を觀じり、天衆をして、人有の怖望みを遮へて、一涅槃・寂滅の處を説けり。

復、次に、夜摩天王は夜摩の天衆を利益せんと欲するが爲に、人中の苦を説けらく「所謂、人中の第十二の妻子・親里の衰憊する大苦なり。所謂、妻子・親里の殺縛、鞭打、飢渴、貧窮にて種々に苦惱するなり。愛する所の人、苦惱を受くるが故に、亦、苦惱を得。是れを衰憊と名く、人道中に於て、妻子・親里・眷屬の因縁を以て苦惱を得。是れを以て、人中に生るゝを樂むこと勿れ。一切の生有るものは必ず死に歸せん。死有る處に隨はんには、皆、是れ苦惱にして、生死中に於て、最大之苦とは、謂く、生・老・死にして、人中に具に有せり。諸の天子よ。既に、人中の是の如き大苦の堪忍ゆべからざるを知りて、樂を欣ふことを生ずる勿れ」と。是の如き等の無量の善き寂滅・無上の道義を以て、諸の天衆に示せり。人道中には利益の事無く、種々の有の綱は譬喩すべからず。況んや、三惡道には無量百千億の譬喩すべからざる大苦充滿ち、人中に比ぶべからず。若し天の退く時に、放逸の少き天、之れが爲に説きて言はく「汝、當に人の善道中に生るべし。若し、人、終らんとするに臨めば、親里・知識は其の天の善道の中に生れんことを願ふ。一種の善道、猶尙、是の如

【九】 人間世界。

施の業無く、人に輕毀められ、晝夜辛苦し、人に使はる。施無き因縁にて常に苦惱を受け、手足破裂れ、貧窮にて食無く、衣服垢き壞れ、飢渴に憊まされ、寒熱に辛苦む。是の如く無量に苦惱み、堪忍ゆ可からず。晝夜使役されて斷たず、絶えず。人中にては、復、種姓色貌有るとも、勢力下劣にして、而も財富多きあり。復、種姓・色力・智慧有りて、一切皆勝るとも、常に貧窮なるあり。貧窮なるを以ての故に、賤しき人に親近み、業の爲に誑らかされ、心誑らかされしが爲の故に、大劇しき苦を受く。諸の天子よ、是れを人中にて使役せらるゝ苦と爲す。復、次に、他の爲に使苦せらる。若し貧窮き人、法に順ひて行ふも、貧窮を以ての故に、悪行・不善の人に親近み、不善に近くが故に、其の惡業を同しくし、喜樂ばすと雖も、他に使はるゝが爲に、惡業を造り、身壞れ、命終らんには、惡道に墮ち、地獄の中に生れん。他の爲に使はるゝが故に、二世の苦を受く。復、次に天衆よ、人世界中に大苦惱を受く。所謂、第十にして、追求する大苦・無量の苦惱なり。財を求むるが爲の故に、大海に入り、敵に入りて鬪戦ひ、經營し、造作り、言辭にて辯説き、下賤に親近み、田を耕し種を植ゑ、商賈し販賣し、畜生を畜養ひ、方に遊び、行使し、貨の爲に使はれ、大山の巖に昇り、處々を遊行り、他人に依附し、此くの如くに、所作ひ、一切を追求するは、皆、財物の爲にして、衣服を嚴飾る。或は貧窮の人、或は愛著する人、是の如く追求めて、愛の網に縛られ、乃至、命盡くるまで、或は惡業を作し、或は妄語を作し、他人を誑惑し、輕き秤・少き斗にて人を欺誑き、沽酒を販賣り、胡麻を糶賣し、及び、毒を賣る。是の如き等の惡しき律儀の行を作し、生を治めて販賣し、或は國土・城邑・聚落・軍營・人衆を破り、及び餘の種々の衆惡の業なり。妻子の飲食・敷具・財物を以ての故に、之れを追求する苦は、無量・百千・乃至千歳にして、説くとも盡くすべからず。諸の天子よ、是れを人中にて追求する苦と名く」と。是の如くに、夜摩天王は、天衆を利益し、有を厭離せしめんが爲の故に、究竟の法を説けり。「諸の天子よ、人中に於て、希望む心を起すこと勿れ、當に

【八】 存在。迷の生活。

【七】 秤の字は宋・元二本及宮本に依れり。原本稱に作れり。

子・親里・及び餘の愛する所・恩有る人と離れんには、別離の大苦にして、刀火に墮ちて其の身心を燒くが如く、大苦惱を受く。是れを愛別離の苦と爲す。夜摩天王は天衆を利せんが爲に、此の法を演說せり。時に、夜摩天王、復、天衆の爲に第七の人中の大苦を説けり。所謂、寒熱の二苦なり。諸の天子よ、云何なるは人中の寒熱の二苦なりや。人中に於て飲食調はざるを以て、應に冷なるべきに熱し、應に熱すべきに冷え、久しく坐して則ち苦み、久しく立ちて亦苦しみ、多く飲みて亦苦しみ、睡らずして亦苦しみ、若しは昏夜右脇にて臥し、久しく眠りて亦苦しみ、左脇して亦、爾り。初め樂み、後に苦しむ。人、世間に於て、食り樂むを以ての故に、樂の爲に誑らかされ、善業を修むるとも、樂に誑らかされしを以ての故に、地獄に入る。諸の天子よ、人中の樂は、苦と異なること無きが如し」と。是の如くに夜摩天王牟修樓陀は、諸の天衆を利益せんが爲に、是の如き法を説けり。

「汝等、天衆此の意を生ずること勿れ。謂く、人中の樂は應に厭離を生ずべし」と。生死を離れしめんが爲に說法して利益せり。天の放逸を除かんが故なり。

復、次に、夜摩天王は夜摩の天衆の爲に、復、第八の人中の大苦を説けり。所謂、病苦にして、無量に差別せる無量の病起る。所謂、熱病・下痢・上氣・欬逆の四百四病にして、諸の衆生を害ひ憂・悲・愁惱等の病は人中の大苦なり。時に、夜摩天王牟修樓陀は天衆を利益せんが爲に、復、第九の大苦を説きて、生死を離れしめ、人中の生死の大苦を示せり。所謂、人中にて他の爲に使はる、是れを大苦と爲す。同道に、同じく生れ、同根・同歳・同力なるも、業劣りしを以ての故に、他の爲に使はれ、若しは晝・若しは夜、自在を得ず、常に大苦を受く。是れを人中にて使役さるゝ苦と名く。

復、次に、他の爲に使苦せらる。若しは人、第一の種姓にして、精勤み、色力・讀誦・智慧を具足し、乏しきこと無きも、貧窮を以ての故に、下賤なる人の爲に使役せらる。時に、夜摩天王牟修樓陀、夜摩の天衆をして、利益を得せしめんが爲の故に、復、說法を爲せり。「業下劣なるを以て、布

【六】天王のこの語の意味は、恐く「人間の樂みそのものから厭離の心は起き得ない。只佛の教化によるの外はない」。

を食りて、味の爲に縛らる。是の因縁を以て、身壞れ、命終らんには地獄に墮ちん。復、懈怠有り。比丘の禪味を舍離し、美食の爲の故に、處々に遊行し、心は食を樂み、懈怠なるを以ての故に、身壞れ命終らんには、終に地獄に墮ちん。諸の天子よ、是れを人中にて味に著せるを以ての故に、愛せざると合會ふ苦惱を生ずと爲す。

復、次に諸の天子よ、人中の第五の愛せざるものと會ふ苦とは、所謂、身の觸にして、此れを以て心を縛り、不善を思惟し、法行に順はず、意正しく念ぜず。是の如き惡人は、惡境に縛られ、身壞れ命終らんには地獄に墮ちん。諸の天子よ、是れを、人中にて愛せざると合會ふ苦惱を生ずと爲す。

復、次に天衆よ。人中の第六の愛せざるものと合會ひて苦惱を生ずとは、所謂、人有りて、心意躁動しくして止住ること能はず、心意正しからず、多くの散亂有り、常に惡業を思ひ、善法を樂まず、不善の法を樂み、利益する事無し。是の因縁を以て身壞れ、命終らんには、惡道に墮ちて、地獄の中に生れん。諸の天子よ、是れを人中とて愛せざると合會ふ苦惱を生ずと爲す。及び餘の種々の無量の諸苦を人中にて具に受く。復、三種の怨憎會苦有り。謂く、怨家に近づき、其の命を害する事を恐るゝは、眼中の刺の如く、常に隨順せず。是れを第一の怨憎會苦と爲す。

復、次に、第二の怨憎會苦とは、惡知識と共に、事業を同じくするなり。是れを第二の怨憎會苦と名く。

復、次に第三の怨憎會苦とは、内に瞋恚を懷き、便を得て傷害するたり。是れを第三の不愛怨憎會苦と名く。諸の天子よ。是れを、人中の無量種の苦と爲す」と。時に、夜摩天王牟修樓陀は復、天衆をして厭離を得しめんが爲の故に、第六の人中の大苦を説けり。所謂、愛別離苦なり。二世の利益、是れを名けて愛と爲す。善友と別離するを、是れを大苦と爲す。若しは父母・兄弟・姊妹・妻

財物有らんも、一切は食を以ての故に、三有の海を成就せん。

是の如く夜摩天王牟修樓陀は諸天の爲に説けり。復、次に天衆よ、人世間に於て、第五苦有り。

謂く、怨憎會にして、六種の苦有り。何等を六と爲すや。謂く、眼に怨等を見て、心に愛樂まず、心憐愍まず、其の身の色を見て、心意に憒亂し、心・心數に怖畏を起し、不利益を生じ、心・心數中に苦惱を生ず。一切の惡の中にて、初の第一の惡は、所謂、怨家の色、及び惡知識を見るなり。

復、次に第二の怨憎會苦とは、若しは其の聲を聞かんには、利益を得ず、愛せず、順はずして、心に憒亂を生ぜん。是れを怨憎會苦と爲す。第一の惡聲とは、謂く、聞く所は正法ならざる聲を攝むるにて、憎惡の聲の故に、身壞れ、命終りては、地獄・餓鬼・畜生に墮ちん。若しは愛せざる、利益せざる聲を聞き、聞き已りて惡心を生じ、憒亂み、愛せず、樂まず、心に憐愍まず。是れを人中の怨憎みて愛せざるものと合會する苦と爲す。

復、次に第三の怨憎不愛會苦とは、謂く、鼻に香を聞き、愛せず、樂まず、心降順せず、之れを聞きて心惱み、或は深き苦を生ず。是れを大惡にして愛せざると合會ふと爲す。諸の天子等よ、是れを人中にて愛せざると合會ふと名く。若し人、愚癡にして、智慧有ること無く、或は行き、或は住して、心に貪著を生じ、輕んじ慢りて敬はず。若し人、香を以て法、僧に供養するに、其の人、便ち欲心を以て、之れを躑がんに、身壞れ、命終らんには、地獄・餓鬼・畜生に墮ちん。是の如き惡人は、身の因縁を以て、貪る身を以ての故に、身心淨からず、身壞れ、命終らんには、地獄に墮ちん。諸の天子よ、是れを人中の愛せざる怨憎と合會ふ苦と爲す。復、次に第四の不愛會苦とは、所謂、世間の愚癡の惡人、味に囚るが故に、惡業を作し、惡業を以ての故に、身壞れ命終らんには、地獄に墮ちん。若しは沙門に非ずして、沙門の像を現はし、内に腐爛を懷くことは、猶し蠱聲の如し。或は僧寺或は白衣の舍に在り、實には沙門に非ずして、沙門の服を著し、常に美食

【四】 又は心所、心の穢々なる活動に名く。四十六の心所あり。

【五】 白衣。僧の袈裟なるに對し俗人を白衣と云ひ、又昔印度に位官無きものは白色の衣を用ひしより、之れを位官あるものにならんで白衣と云へり。

醜惡し。手を以て之れを捉ふるに、猶し火に燒かるゝが如く、亦、刀に割かるゝが如く、是の如くに嬰兒の身體は細軟にして、母人、之れに觸れんには、大苦惱を得ん。若し、新しき衣を得んに、塵澀・厚重なり。或は故き衣を得んに、補納は破裂れて孔穴穿ち露に、狭小く單薄し。艸蔕に止りては、寒時には大に冷えて大寒苦を受け、熱しては則ち大熱にて猶し火に燒かるゝが如し。本、布施清淨ならざるを以ての故に、斯の苦惱を受け、胎より出でて、大苦惱を受く。復、不淨の布施の因縁を以て、母をして少き乳ならしめ、食する所苦澀ならしむ。母の食、劣るが故に、其の乳は則ち少し。

或は母の食醜惡きが故に、乳をして少からしめ、羸瘦せ、色惡く、唯、筋・皮・骨を以て、其の身と爲すのみ。飢渴の病の故に、身體力無く、若しは食噉む所無く、他より乞求め、人に輕賤せられ、少しく飲食を得、色・香・味薄く、他に依りて食し、辛苦して命を繼ぎ、是の如き乏しき食にて、身をして苦惱せしむ。本、行ひし所の不善の施を以ての故に、乃至、命盡くるまで充足せず。乏しき食を以ての故に、常に苦惱を受く。復、次に第四の苦惱とは、食を希望むを以て、苦惱を得るなり。飢餓に惱まされて或は盜賊を作し、諸の惡業を作し、無利益を作し、或は勇健を作し、因つて命を失ふことを致し、或は死苦に次ぎて、諸の苦の重きあり。所謂、飢渴なり。爾の時、夜摩天王牢修樓陀諸の天衆の爲に、偈を以て頌して曰はく。

生死の大苦惱にて、飢渴と等しきもの無く、衆生飢苦を以て、諸の不善の業を作す。自身より火を起す、故に飢渴の苦と名く、飢渴の三處を燒くことは、劫火の林を燒くが如し。世間の大火なる焰火も後世に至ること能はず、飢渴の火は斷ち難く、百千劫に至る。愚人は不善を造り、險惡の道に行くは、皆飲食の爲の故なり。智者は是の如くに説き給へり。飢渴に大力有りて、大猛火より過ぎ、一切の三界中に、食の因縁を以て轉す。若しは人世間に、種々の

苦、四に食を希求する苦、五に怨憎會苦、六に愛別離苦、七に寒熱等の苦、八に病苦、九に他に給使せらるゝ苦、十に追求して營作する苦、十一に惡知識に近づく苦、十二に妻子・親里の衰憊する苦、十三に飢渴の苦、十四に他の爲に輕毀めらるゝ苦、十五に老苦、十六に死苦なり。是の如き十六中の大苦にて人世間に於て、乃至、命終る。及び餘の衆苦は生死の中に於て、堪忍すべからず。有爲の中に於ては、少しの樂も有ること無く、一切無常にして、一切皆盡き、一切敗壞す。初め中陰の識の香氣の如きに生れて、何等の苦有りや。業風に吹かれ、肉眼の見るところに非ず、天眼の見る所にして寢ふる所無し。若しは人中に生れ、種姓の家に生るゝに、下・中・上有り、布施・持戒・智惠の果報を以て生れんとする者は、此の識の香氣の中陰にて、亦、是の如きの食を得、若し貧窮の種姓に生れんとすれば、食する所は匱乏く、色・香・味・觸も皆悉く匱乏しく、身の量減劣れり。少き布施の故に、勝れし報を得ず。是を人中にて初の中陰の苦を生ずと名く。

復、次に、第二苦とは、若し胎中に生れんに、業の煩惱の因縁を以ての故に、住して貧窮の家に生れ、母は匱乏く苦酢き食を食し、膜衣・筋の中薄少くして、食味は其の臍の中に入り、胎中の子の身をして羸惡ぬ色ならしめ、氣力を劣弱からしむ。母、疲極るゝが故に、胎中に於て則ち大苦を受け、轉じて兩脇に向ひ、走り避けて苦惱む。母の食、冷熱なれば則ち痛苦を受け、力無く、救無く、叫喚ぶこと能はず、屎尿の中に没して無量の苦を受く。是れを善道の人中の第二の大苦と爲す。何に況んや地獄・餓鬼・畜生に於てをや。

復次に第三苦とは、胎より出生するに、胎藏の逼迫することは猶し油を壓すが如く、嬰兒の胎を出でて、墮ちんとして逼迫することも亦復是の如し。是れを大苦と爲す。復、次に、初め生れし時は其の身柔軟なるを以て、生酢の搏の如く、亦芭蕉の如く、又熟せし果の如く、母人、臍産を臍、手を以て之れを捉ふるに、其の手堅澀く、皸裂り劈坼け、厭惡しき感面、指甲長く利く、面目

【一】筋の字、宋本及宮本に依れり、原本筋に作れり。

【二】凡て苦惱を受ける子を中心として觀察する奇異なる描寫なり。

卷の第五十八

觀天品之三十七

夜摩天之二十三

爾の時、夜摩天王は天衆に告げて曰はく『汝、今、何が故に、園林の華池・無量の衆寶にて莊嚴る山峰に於て、歌舞し戲笑せざるや』と。天王は是の如くに、諸の天衆を觀するに、厭離を生ぜりと爲んや、厭離せざるとせんや。時に、諸の天衆、夜摩天王の此の語を説き給ふを聞き已り、天王に白して言さく『當に何處の園林・七寶の山峰の中に樂處有るも、我れ、無量の生死の衰憊、無量差別を見て、堪忍すべからず。我れ、自らの目にて、一切の諸の欲は皆悉く無常にして、後に皆苦を致すを見る。此の欲は無常にして住せず、久しからずして敗壞し、堅きこと無く、樂み無し』と。爾の時、夜摩天王、天衆の説くを聞き、之れに告げて曰はく『汝、今當に知るべし。一切の欲樂は後に皆苦を致さん』と。時に、諸の天衆、天王に白して言さく『我れ今已に、欲の大苦爲ることを解せり』と。時に、夜摩天王、諸の天衆に告げらく『我れ能く一切の生死の無量の諸苦を宣説せん。今、當に汝の爲に略して少分を説き、億千劫をして復、放逸ならざらしめ、常に人、天二種の善道を行はしめん。若し放逸を斷たんに、是れを智慧と爲す。若し放逸の縁來れば即ち應に遠離すべし。若し放逸の爲に使役せられざらんには、則ち、地獄・餓鬼・畜生に墮ちざらん』と。復、天衆に告げらく『今、當に汝の爲に、三惡道と二種の善道を説くべし。二の善道とは天と人となり。三惡道とは所謂、地獄・餓鬼・畜生なり。是の如き五道は大勢力の苦にして、我れ能く宣説して廣く説くべからず。今、當に略説すべし。要を以て之れを言はんには、天・人中に於て、十六の苦有り。何等を十六とするや。天・人の中の善道に攝めらるゝは、一に中陰の苦、二に胎に住する苦、三に胎を出づる

心に敬重きやうじゆうを生じ、歡喜くわんぎび、踊躍おどどりて、是かくの如ごとき念ねんを作なさく「我れ今、主を得たり」と。時に、實じつの天衆てんしゆう、無量の惡あくを見、皆みな、厭離えんりを生ぜり。

の中陰を以て、夜摩天の放逸の過惡に傷害せらるゝを示せり。業盡くるを以ての故に、餓鬼に墮ちんとし、足は上、頭は下、印の如くに相ひ似たり。業の繩に牽かれ、作す所の業に隨ひ、是の如く成熟せり。時に、實の天衆は復、是の如き第二の中陰を見、復次に、第三に化中陰を見るに、夜摩天の如きは、復、放逸の爲に、傷害はれ、業盡き、還り退き、惡業に縛られ、畜生に墮ちんとす。足は上、頭は下。是の如き中陰は印の印する如く、畜生中に生る、無量の種類の相ひ似たる中陰なり。是れを第三道の中陰の有の相と名く。之れを見て怖畏れ、復、厭離を生じ、驚愕き惶怖れ、互に相ひ觀視て、偈頌を以て曰く。

微細にして解知り難く、徧く一切處に行くは、是れ業にして、衆生をして諸趣に流轉せしむ。若し人賢聖を謗り、好んで、邪見の業を行ひ、業果を信ぜざらんには、死して則ち地獄に入らん。若し内に惡を懷き、法を以て人を詔誑かんには、世間の愛せざる所にして、死しては則ち地獄に入らん。若し人欲樂に著し、常に惡業を行ひ、樂を以て其の心を誑かさんには、死して則ち地獄に入らん。若し人、畢竟して樂を得んには、乃ち安隱と名づくることを得ん。若し樂まんには苦報有らん。是れを名づけて樂を爲さず。放逸なる諸の天衆は、夜摩天を退失せん。若し法を具足せん者は、智者に讚歎られん。園林中にて遊戲び、樂みて諸の天女を見、欲境にて厭足無し。是れを以ての故に退没す。樂み増長す故に、渴愛轉た増長せん。智慧の人の説く所は、愛を斷つことを第一と爲す。我れ世の中陰を見て、

今、大厭離を生ぜり。誰ぞ當に我れを救護ひ、我れをして解脱を得せしむるや。

時に、諸の天衆、是の如き等の種々の中陰を見て、厭離心を生ぜり。時に、夜摩天王牟修樓陀は、諸の天衆の心調伏せるを知り已りて、皆化天を滅し、示すに自身を以てし、寂滅もて莊嚴れり。諸天之れを見て、其の心安隱なり。往きて天王に詣り、到り已りて圍遶き、住して一面に在り、

【三】 邪の字は宋・元・明三本及び宮本に依れり、原本表に作れり。

【四】 住の字は、宋・元・明三本及び宮本に依れり。原本從に作れり。

病の身の死することを作さしむ。身既に死し已り、無量百千の諸蟲は、其の屍を噉食む。若し見る者有らんに、皆厭惡を生ぜんことは、猶し屎の聚の如し。夜摩天王は放逸なる諸の天衆を利せんが爲の故に、是の如き化の醫單曰人を示せり。

爾の時、天王は復、化を作し、示して、實天をして見せしむ。謂く、中陰の有にして無量の有の綱の化せる中陰の有なり。衆の生死の業の因縁を以て、地獄・餓鬼・畜生・人天の中に生るゝが如く、中陰の有を化し、諸の天衆をして、皆、無量種々の心行の業にて因縁有りて、無量百千の道の生死を生ずることを現見せしむ。諸の實天をして、厭離を得せしめんが爲の故に、大池の中に於て、是の如き化を示せり。不可思議・希有の化にして、等しきもの無く、比なし。天をして現見さしめ、池中にて具に一切の五道の衆生を見せしむ。業の煩惱の因縁力を以ての故に、流轉して行じ、一道より死して、復、一道に生れ、生死に輪轉して、救ふもの無く、歸無く、伴侶有ること無く、諸有に輪轉し、地獄・餓鬼・畜生及び人天に輪迴す。實の天衆をして種々の中陰の有に生るゝことを見せしむ。見已り驚怖れて、極めて厭離を生ず。復、夜摩の諸天の中陰の身を見る。夜摩天を見るに、業盡きしを以ての故に、天より退墮し、悔の火に燒かれ、放逸を貪るが故に、天身即ち滅して、中陰の身生じ、足は上頭は下、印せる如き中陰なり。惡業を以ての故に、地獄の陰に生る。生死の業を見るが故に、極めて大に怖畏れ、共に相ひ謂ひて言はく「是の業の因縁は甚だ大に夜摩の天衆を戲弄ぶ」と。時に、實の天衆は是の事を見已りて、厭離の心を生ず。是れを地獄の中陰を見る故名け、生有の陰に非ず。牟修樓陀は是の如き化を示せり。何等を以ての故に、生陰を示さざるや。天心軟かにして、堪忍すること能はず。若し生陰を見んには、譬喩すべからず、苦説くべからず、即ち身命を失はんのみ。是の故に、化を示し、生陰を示さざるなり。是れを實天の夜摩天より退きて、地獄の中陰の身に入らんとせるを觀ると名く。時に、夜摩天王は復、希有なる神化

【三二】中陰又は中有。四生の一。死して後次生を受くるまでの間に於て、肉眼にて見えざれども淨妙の色を以て成りて形最あり、四五歳の童子の如しと云ふ。

【三三】生有。四有(生有、本有、死有、中有)の一。四有とは生れて死し、再び生るゝまでを四に分けたるもの。

生じ、皆悉く圍遶き、叫喚き啼哭び、啼哭ぶ時に、鳥有りて飛び來り、諸の死屍を取るとも、猶し木石の如くにて、衆鳥之れを取るとも覺らず、動かす。阿修羅女、既に啼哭び已りて、一切皆死す。復、鵬、鷲、鳥、鴉の衆鳥競いて共に之れを取り、空に從つて去り、諸の天衆をして、復、之れを見ざらしむ。夜摩天王は天衆を利せんが爲に、化して是の如き啼哭悲泣することを示せり。

爾の時、夜摩天王の、復、龍王を化することは、前に説きし所の如し。復、無常を示せり。或は龍王有りて熱沙に焼かるゝことは、猶し燄火の如く、法陀羅炭の乾きし艸の聚に入るが如く、是の諸の龍王の熱沙に焼かるゝことも亦復、是の如し。復、龍王有り、龍女に圍遶れ、金翅鳥の爲に搏み撮られて將の去らる。諸の龍女の衆は聲を發し、大に叫ぶ。復、龍王有り、鋸の爲に解れ、悲の聲にて唱叫び、怨の心にて相斫き、互に相ひ加害す。是の如き化龍は死の爲に將の去られんとす。諸の天衆は是の事を見已り、心に極めて厭離す。

時に、夜摩天王、復、弗婆提人、瞿陀尼人を化し、無量百千皆悉く衰惱し、及び諸の女人も亦復是の如く、老して、極めて須臾に皆死に歸す。既に死して後は、多くの諸の蟲生じ、地に偃臥して、甚だ惡み賤むべし。時に、實の天衆、此の諸の事を無量に差別する大惡に過有る見、死苦を見已りて皆厭離を生じ、互に相ひ謂ひて言はく『此の諸の衆生に苦有りて死す。此の諸の衆生は老いて病死し、盡きて、終竟に當に何處に詣るべきや、誰が爲に將ゐて去らしめられんとするやを知らず。一切の資具は皆悉く無常にして、一切の諸の樂は皆雜りて過有り、無常にして住せず。敗壞の法の保つことを信すべからず。一切の諸法は皆悉く破壞して、少しの樂も有ること無し』と。是の如くに實天は互に共に論説して、皆厭離を生ず。

時に、夜摩天王は諸の天衆の心に厭離を生ぜしことを知り、復、丈夫の自在に慢を離れ、決定して上生することを化す。謂く、鬘單曰人は天の福より少しく減じ、第一の樂を受く。復、化して老

【二〇】 法陀羅(Kundura)。紫檀と譯す。聖き樹なり。
【二一】 金翅鳥。迦樓羅(Garuda)の譯名。又妙翅鳥とも譯す。龍を食すと云ひ鳥の王。想像上の怪鳥なり。

【二二】 弗婆提。弗利婆提提訶(Puravahita)のこと。勝身と譯す。須彌四洲の一。山の東に位す。詳しくは後卷の經文及び註釋を見よ。

間に行はる。謂く老病にして、衰壞するとも、愚癡なるは覺知らず。

是の如き死王閻羅王の伺命は、此の偈頌を説き、天衆を呵責し、百返千返、諸の苦惱を加ふ。時に、實の天衆は衰惱せるを見已りて、一切の放逸の心を離るゝことを得て、三歸依を受く。時に夜摩天王、諸の天衆の心已に調伏へるを知り、復、變化を示して、實の天衆をして心に厭離を得しむ。是れ等の化王の著する所の天冠・一切の欲具は皆天王牟修樓陀の身中より出で、諸の姪女と共に、隨順して供養することは、前に説きし所の如し。上色を具足するも、復、衰老の爲に毀壞せられ、髮白く、面には皺あり、遍く身に脉現はれ、杖を柱として行き、羸瘦、憔悴へて、一切の諸の業を皆作すこと能はず。他に依りて行き、諸の愚人の爲に輕弄、戲笑さる。上氣して樂まず、諸根變熟し、一切の力盡き、衆に輕賤され、行歩して數倒れ、死時、將に至らんとせり。池に近づき行き、身極めて羸瘦にして、他の扶持に依り、身色醜惡なり。池の側に行き、未だ幾くの時も經ずして、身中に多種々の病起ること有り。所謂、熱病・下痢・欬・喘・盛氣・啞病・脉腫・疔瘡・癩病にて死地に垂れ近き、身は大穢惡なり。是れ大惡病にして、療治すべからず、死相已に現はる。其の王は具に是の如き諸病を嬰へ、是の如き等の極大の苦惱を得、然る後に命終る。既に死せる後は隨脹れ、臭爛し、多くの無量百千種の蟲有り。時に、諸の天衆、此の死屍を見るに、復、鷲、鷲の諸の惡しき貪る鳥有り、山より飛び來りて、諸の死屍を取り、之れを噉食ひ、或は屍を取り、空に騰りて去るものあり。時に、諸の天衆、是の事を見已り、其の心欲を厭ひ、一心正念なり。爾の時、天王は天衆を利せんが爲に、復、神化を示す。羅睺阿修羅王・勇健阿修羅王等の一切皆大海の水の下に在るを示せり。夜摩天に至り、天王の所に住み、王を去ること遠からず。住して一面に在り、大聲にて叫呼び、既に叫呼び已り、顛墜して地に墮ち、尋いで即ち命終りて、木の如く、石の如くに動かす、覺らず。諸の阿修羅王、諸の姪女等は是の事を見已り、極めて苦惱を

【三七】 喘の字宋・元・明三本に依れり、原本兼に作れり。

る有りて、猛熾なることは、大山を燒くが如し。皆、大力にして化の山中より出で、金剛の雷を放つ。復、死王の閻羅の伺命有りて、其の頭の狀は烏・鷲・鷗・野の狐・狗・駱駝の面の如し。遍く身に火熾にして、惡蟲は身を覆ひ、以て天衆を怖れしめ、大に黒き化の山中より出づ。一切の疾走することは、猶し猛風の大黒雲を吹くが如く、熾と雷と俱に起り、走りて化天に趣く。爾の時、死王閻羅の伺命漸く化天に近き、捉へて化天を得、餘火の鐵繩にて、其の手を返縛り、縛り已りて牽挽する。爾の時、化天、餘の天身の繫縛さるゝを見て、極めて大に怖畏れ、各各散り走る。時に、死王の使、尋ね逐ひ、之れを捉へ、頭上を擧置りて、空に昇り去りて、復、見るべからず。眼の境界を過ぎればなり。虓咆ぶ聲は甚だ怖畏るべく、或は伺命有りて捉へて化天を得、餘鐵の繩を以て、其の頸を繋り、地に入りて去る。復、死王閻羅の伺命有り、餘の化天を捉へ、水中にて擲著り、二六 咆喊び唱叫ぶ。諸の化天を喊き、其の身没せずして、水上に住在せり。諸の化天の爲に、偈を説きて言はく。

愚癡にして憍慢る心は、放逸の爲に使はる。樂の時、既に已に過ぎて、今や當に死苦に就くべし。無量の境界の林には、惡毒其の中に満ち、愛の牙は甚だ廣大なり。善を求めて、應に捨離つべし。

衆の善業を作さずして、常に癡にて放逸ならんには、死時、既に已に到りて、竟に何んの作す所あらんや。没して愛水の中に在り、衆苦を度すること能はず。生死に没するを以ての故に、永く安樂有ること無し。一切の生有る者には、死常に其の後に隨ふ。云何んが愚癡なる人は而も放逸なる行を樂むや。知り難く、遮くべからずして、常に大勢力有り。是れ大力なる死軍なりとも、世間は覺知らず。是れ鬪戰する力に非ずんば、方に能く捨離する無し。衆生は放逸なるが故に、死の怨の至ることを覺らず。死の使に二種有りて、遍く世

【三】 响の字宋・元・明三本に依れり。原本响に作れり。

の天衆の爲に、復欲の過を示せり。若しは天、若しは龍、阿修羅等の欲の味を示し已りて、復、欲の過を示す。退没する時に於て、諸の衰惱を得るにて是の諸の天人・龍・阿修羅は、一切處に於て、無量種の諸の欲樂を受け已りては、退く時に至る。諸天等の應はしく、受くる所の者に隨ひて、其の種々の退く法を示せり。所謂、高山の險峻き崖岸には、無量種の師子・虎・豹・野狐・猪・兔・牛・驢・象・馬・駱駝・猫・牛・失牧摩羅魚・摩伽羅魚・龜・鼈の屬有り、或は一頭なる有り、或は二頭なる有り、或は復、多頭にして、口中に土を含み、手中に火を執り、復、遍く身に煙・焰の俱に起ること有り、或は火を雨ふらすことあり、或は金剛の惡雹を放つこと有り、遍く衆多の處にて、其の聲もて燒灼ぶことは、甚だ怖畏るべし。一百山の同時に俱に崩るゝが如く、無量の種類にて、身色は黧黝く、頭は大山の如く、色相は畏る可く、擧身の髮髮に焰火熾然たり。或は百臂有り、或は千臂有り、其の手中に、或は繯を執ること有り、或は刀杖を執り、或は金剛を執り、見る者大に怖れん。大山谷に滿ち、是の如き等の衆は大山より出でて、走りて化天に趣き、目を奮らし、大に怒り、眼の赤きことは血の如く、其の口中より、諸の火焰の黄・赤・朱・紫の無量種の色を出し、黒雲中に電光の亂れ起るが如し。

復、化の死王、閻羅の伺命は色貌畏る可く、走りて化天に向ふ。手に赤繩及び諸の器仗を捉り、執る所の器仗の頭には皆火然ゆ、大惡聲を發して、猶し雷の震ふが如し、其の身は熾然として、十由旬に滿てり。或は伺命有りて、一百眼、或は四百眼乃至千眼有り。眼皆餘出で、青・赤・黄の鶻は種々の雜色にして、其の火は熾然として十里に至る。種々の相貌は一切衆生の怖畏る所にして、醜陋く惡む可く、化の山中より燒灼びて出づ。腹を凸せて下に垂れ、脇は山谷の如く、頭は山峰の如し。或は咽を縮めて兩肩の中に入る有り、或は長髮なる有り、髮は皆直堅し、咽に火燄起り、或は長き爪のもの有りて、火燄熾然たり。或は身毛有り、燄然として火起れり。或は遍く體の大火な

【一三】 Sishumara 鱒魚。

【一四】 Makara 海の怪物。經典にはこの怪物の二眼がこの太陽のやうに輝き大山のやうに海上にゆるぎいで、大洞のやうな口を開けて船舶を呑んとすることを記載す。以下屢この名いづ。

【一五】 金剛杵の意ならん。

【一六】 閻羅 (Yama)。雙王、靜息王等と稱す。地獄の主。第一冊の註に詳し。

繋り、若し縛られ、憂悲・苦惱・怖畏・鬪諍の僥益せざる事は一切皆欲の因縁に由るが故なり。一切の人中は皆、欲の過に因りて、安隱を得ず。云何に天中は欲の過に因るや。所謂、諸天は阿修羅と共に鬪戦して、相ひ壞つことは、一切皆欲の因縁に由るが故なり。若しは阿修羅の天と共に鬪諍ふことも、亦復、是の如くに、欲の因縁に由る。是の如き等有り。是れを欲の過と爲す。此の因縁を以て、牟修樓陀夜摩天王は、實の天衆の放逸を除かんが爲の故に、是の如き化を示せり。

若しは、諸の龍等は龍と共に鬪諍ふも、國土失壞れ、震雷、放電も一切皆欲の因縁に由るが故なり。若しは、諸の畜生の互に共に鬪諍ひ、殺し縛り捕ふることを得るは、一切皆欲の因縁に由るが故なり。是れを欲の過と名く。鬼神中に於ては、食の因縁、或は欲の因縁を以て、互に相ひ撲打し、刀を以て相斫るは、一切皆欲の因縁に由るが故なり。是れを欲の過と爲す。此の因縁を以て、夜摩天王は、實の天衆の放逸を除かんが爲の故に、是の如き化を示せり。

地獄の中に於て、互に相ひ焼き打ち、互に相ひ殺害し、諸の苦惱を受くるは、人中の時に於ての欲の因縁に由る。惡業を造作り、鬪諍ひ、憎嫉み、其の本の女色の因縁を念するを以て共に相ひ憎嫉む。是の惡業を以て、地獄の中に墮ち、身體裂壞す。是の如き地獄は皆欲の過に由る。此の因縁を以て、夜摩天王は實の天衆の欲を捨離せんが爲の故に、是の如き化を示せり。五道に遍く、欲の過患を示して、生死を厭はしめ、人中の所有る欲味は一切皆失ふことを示し、夜摩天王は天衆に欲味、欲の過を示さんが爲に、蓮華を化作す。百葉は墮落ち、破壊れ磨滅ぶ。復、廣く天人の過を示現す。既に過を示し已りて、復、出離し解脱する種子を示せり。諸の天衆を利益し安樂にせんが故なり。

夜摩天王は、復、諸の天衆を僥益むが爲の故に、欲の過を示せり。何を以ての故に、異なる欲の過を聞かんに、則ち生死に於て、厭離心を生ず。異を見るを以ての故なり。此の因縁を以て、諸

天王牟修樓陀の身中より出づ。復、瞿耶尼人を化し、自ら樂を成就し、歡喜ひて遊戲することども、亦復、是の如し。時に、實の天衆は是の如き等の無量の種類、無量の差別を見る。夜摩天王は是の如き第一の神通を成就し、放逸を除き、勝れて利益を爲さんが故に、是の如き化を作せり。利益せざるには非らず。放逸なる天に無常を現見して、心をして則ち柔順ならしむ。是の故に、化を示して種々に具足し、先に欲味を示して、後に其の過を示し、其れをして欲を厭はしむ。是の因縁を以て、夜摩天王は實の天衆の爲に、化の欲味を示して、種々の樂を受けしむ。歌舞し遊戲し、衣服もて莊嚴り、飲食し、姪女に親近み、供養して、五種の樂を受け、心に念ずる所の如く具足して皆な得り。是れを欲味と名く。云何なるは欲の過なりや。若し欲を得已りて心に愛樂を生じ、之れを求めて得ず、他と共に有りて、獨り己れに屬するに非らず、愛と別離する苦、無量種の苦、強力者の爲に侵奪るゝなり。復、五種の強力に奪はるゝこと有り。所謂、土賊、水火の怨家なり。復、餘の苦有りて、常に怨の爲に侵かされ、常に他に奪はれんことを畏る。守護する怖畏、或は心に生死を憂愁し、樂を食りて身心常に苦む。是の如き欲の過にて、終には死に至り、無量種の衰惱、諸の苦有るとも、愚癡なる人は、此の欲の過の衰惱の苦の中に於て、厭離を生ぜず。復、欲の過有り。何等の過有りや。欲の因縁の爲に、母子鬪諍ひ、住處を同くせざるは、一切皆欲の因縁に由るが故なり。若しは兄弟鬪諍ひ、互に相ひ憎嫉み、若しは打ち、若しは縛るは、一切皆欲の因縁に由るが故なり。是れを欲の過と爲す。若しは王者共に諍ひ、無量の國土互に相ひ攻伐し、互に相ひ打縛し、若しは殺し、若しは害し、種々の苦を加ふることは、一切皆欲の因縁に由るが故なり。是れを欲の過と爲す。是の故に當に知るべし。皆、欲に由りて、一切を繫縛り、生死に在ることを。

爾の時、天王牟修樓陀は實の天衆の爲に、是の如き無量に差別せる人中の欲の過を化作す。王者は共に諍ひ、無量に方便し、及び餘人は欲の因縁を以て、海中に入り、若しは共に鬪諍ひ、若しは

【三〇】 瞿耶尼 (Goddhanya)。瞿陀尼とも書く。同じく須彌四洲の一、西方に在り。後卷の註にくはし。

老の罰の時至りては、能く少壯をして盡きせしめ、病苦若し來り至らんに、能く安隱を壞

はさん。此の三種の惡の罰は、天・非天を破壊し、速に來り、時至らんとせるも、愚者は覺

知らず。天・龍・阿修羅・健險・緊那羅・羅刹・毘舍闍は皆老死の爲に壞はされ、能く貪

愛の者をして親しき里を捨離せしめ、癡愛の相は繫縛りて、諸有に輪轉す。子孫及び子孫、

是の如き種子等にて、人は愛の爲に誑らかされて、一切皆當に失ふべし。

是の如き化人は他を利益するが爲に、此の如き偈を説けり。時に、實の天衆は是の偈を聞き已り、

心に思惟を念じ、境界の中に於て多く愛樂ます。爾の時、天王牟修樓陀は天衆を利するが爲に、復、

其の一切の身分の中に、種々の莊嚴・種々の容貌・種々の寶冠・無量種の色・無量種の形・無量種の相・

天の乾婆婆・若人は龍・阿修羅等を現化することを作す。各は自法の衣服を以て莊嚴り、天王

の身の毛孔中より出で、各本の色の如く、其の形相の如く、其の自法の如し。自ら姦女と共に歌舞

し、嬉笑し、娛樂して樂を受く。天王の樂を受くることは人と相ひ似、富樂を歡悦び、自の相を愛

樂み、歌舞し嬉笑し歡娛して樂を受く。復、諸の龍有りて、種々に莊嚴り、或は一頭なる有り、

或は二頭なる有り、乃至、七頭に於て、種々の色、種々の形相有り。勝妙なる寶冠にて其の首を莊

嚴り、種々の音聲にて歌詠し、遊戲して、歡喜の心を生じ、娛樂して樂みを受く。是の如き勇健な

る羅睺、阿修羅等を皆盡く化し出せり。

天帝釋の樂は夜摩天より減り、諸の姦女と共に圍遶て供養し、第一に莊嚴る阿修羅女は圍遶て

供養せり。五樂の音聲の、之れを聞かば愛す可く、阿修羅王は住みて宮殿に在り、天王牟修樓陀の

身分より出でて、第一の樂を受く。

又復、鬱單曰人を化現し、雲臺等の十大山中に住み、富樂は自在にして、少しく第二の三十三

天より減じ、園林、華池に多く種々の諸の飲食の河有りて、種々に歌舞し、遊戲して樂を受け、

【五】健險、乾達婆(Gandharva)のこと。食香、惡香と譯す。香を食して以て活を存する帝釋の俗樂神なり。

【六】緊那羅(Kinnara)疑人、人非人等と譯し、又歡樂神とも云ふ。常に歌舞する人畜いづれともつかざる怪物の名。後卷に出す。

【七】羅刹(Rakshasa)可畏、食人鬼と譯す。惡鬼の名なり。

【八】毘舍闍、辟舍柘等に音譯せらる。持國天の所領の鬼にして、噉精鬼なり。

【九】羅睺(Rahu)。障蔽と譯す。阿修羅の名。良く日月の光を隱覆すと云ふ。

【一〇】鬱單曰(Uttaravathi)須彌四州の一、即ち鬱多羅究留(Uttarakuru)にして、鬱單越とも書き、北拘慮洲と云ひ、須彌山の北方に在る大洲の名なり。後卷の註を見よ。

ぞ愛せんや。

是の如き天王牟修樓陀の口より出だせし所の變化せる僊人は、實の天衆の放逸を除かんが爲の故に、此の如き偈を説きて、畢竟して利益せり。爾の時、天王牟修樓陀、復、利益の爲に、神通を變化して、其の胸中より大蓮華池の甚だ愛樂べきを踊出して示現せり。其の池に多く鴉・鴨・鶩・鳧有りて莊嚴と爲し、第一の清淨なる八功德水なり。其の蓮華池に百千億の七寶の蓮華有り、以て其の上を覆へり。其の華の香氣は百由旬に満ち、其の蓮華臺には、王其の上になり。種々の妙寶にて天冠を莊嚴り、種々の光明、種々の寶衣にて其の身を莊嚴れり。種々の寶印にて其の臂を莊嚴り、種々の婁女にて圍遶を爲して、師子座に坐せり。其の諸の婁女は手に白拂を執り、左右に侍立せり。復、諸の人有り、王を讚歎して言はく『勝妙の増上せることは猶し帝釋の第二の天王の如し』と。是の如き等の百千の化王有り。夜摩天王は憐愍の心を以て、他を利益するが故に、一切の諸の實の天衆をして、放逸を離れしめんが爲の故に、帝釋・轉輪聖王及び餘の無量百千の諸王を化作せり。

爾の時、天王牟修樓陀は利益する爲の故に、復、變化を示し、其の臍の中より大蓮華を出し、廣さ百由旬、百千億の葉なり、七寶の蓮華は種々の寶の葉にて多くの衆蜂有り、歌詠の音を出し、聞く者に悦び、之れを見て愛樂む。夜摩天王は其の臍の中より化する所の蓮華は、其の蓮華の莖の長さ五千由旬なり。毗瑠璃の莖は金剛を間錯へ、青因陀寶もて共に集成する所にして、以て莊嚴り、天の虹色より勝り、甚だ愛樂むべし。大蓮華内に諸の化人有り、種々の衣服にて其の身を莊嚴り、第一の勝れし樂にて、犂を執り、地を耕して偈を説きて言はく。

一切の地を犂く者は、心に皆果を怖望む、癡なる心は利を怖ふが故に、當に死有ることを覺らず。愚者の利を怖ふ心は、念々に常に增長きて、諸行の念々に滅盡に歸することを覺らず。

【三】帝釋 (Śakra devendra) 能天王と譯す。初利天の天主にして、四天王及び三十二天を領し、常に阿修羅と戰いて之れを征し、佛法を保護し、佛法に歸依する人を保護する。古印度に最も崇拜せられたるインドラ (Indra) (帝) を佛敎にて帝釋と云へるなり。

【四】轉輪聖王、新加羅伐辣底曷羅闍 (Ośtravartī) の意譯。寶輪を轉じて須彌四洲を統治する想像上の王の名。王の別あり、各三十二相を具へ人壽八萬歲時までに出世、爾後は出でずと云ふ。後卷に出ず。

諸の大愚人を口中より出せり。或は百、或は千を出し已り、虚空の中に住して、偈を説きて曰はく。

一切衆生の心は幻の如くにて、法は住らず、一切は必ず死に歸せん。有の中に於て放逸すること莫れ。一切の愛す可き中にては、愛心轉た增長き、終には必ず破壊に歸せん。有の中に於て放逸すること莫れ。有の中は更らに、處として生有りて滅せざる無し。一切の樂は皆畏れなり。有の中に於て放逸すること莫れ。一切の見る所の中、五欲は愛す可しと謂ふとも、一切は皆夢の如し。有の中に於て放逸すること莫れ。喜愛は調伏へ難く、常に衆生の怨と爲りて、速に將りて地獄に入る。有の中に於て放逸すること莫れ。數欲樂を受くと雖も、得已りて復失ひ、必ず當に皆壞滅ぶべし。有の中に於て放逸すること莫れ。初・中・後、不善にして、能く世間を壞はし、業の鎖に繫縛さるゝことは、猶し釣にて魚の釣らるゝが如し。種々の方便にて、業の鎖を斷たんと欲すと雖も、一切の天・非天も業の鎖を斷つこと能はず。生死の鎖は極めて長く、首尾を見るべからず。是の愛は甚だ堅牢して、以て愚癡の人を縛る。我、及び餘の天衆、若しは人、阿修羅の一切皆無常なりとも、癡盲にて見るること能はず。業の身は一切に過く、常に諸有に流轉す。一切の愛は心を縛るとも、智慧は乃ち能く斷たん。愛の木の中より、五の鑽燧を生じ、覺觀の風力の故に、時の火の爲に燒かる。愚癡は智慧無く、苦の中にて妄りに樂を貪り迷ふが故に顛倒に取り、五道の中に流轉す。妻子及び種々の富樂を喜樂み、常に此の妄樂を保たんには、死王の爲に將りて去らしめられん。虎狼の鹿を殺すが如く、之れを害ひて疲厭す。死王は大勢力にして、殺害することも亦是の如し。一切の諸有の中は、無量多種の苦にして、癡なるが爲に迷惑されて、心に疲倦ます。若し人、惡に依止せんには、自ら身を愛すと名けず。既に自ら身を愛せず、世間更らに何ん

【九】 天上界の人と天上以外の他の諸道の人口を指す。
【一〇】 阿修羅(Ashura)阿須倫、阿素羅、阿素羅と書き、非天、不端正等と譯す。六道の一、山中又は海の底に住する鬼畜の類、後卷にしばしば出づ。
【一一】 木の字は宋元明三本及び宮本に依れり。原本水に作れり。
【一二】 五類を意味するならん、人間の生活とは所詮この五蘊の鑽燧の擊發して進みゆくの外なき故なり。

爾の時、天王牟修樓陀、復、神通を現はして、天衆をして放逸を離れしめんが爲の故に、其の口中より百千の諸天の大衆を出し、或は七寶の宮殿に坐する有りて、種々の妙寶の光明の身なり。種種の容服にして、讃の天女と共に莊嚴て端正にして、天の歌音を詠じ、以て圍遶を爲し、一切は皆牟修樓陀大王の口より出づ。或は蓮華の中に坐せる有りて、蜂の歌音の如し。天酒を飲むに、香味相應く、諸の天女と共に、或は百、或は千なり。天の衣蓋を以て莊嚴と爲し、身より光明を出し、皆、天王の口中より出す。

時に、牟修樓陀は復、神通を現はし、口より出せり。或は天衆の、七寶の鳥に乗るもの有りて、遊戯し歌詠し、五樂の音聲にて、諸の天女と共に歡娛みて樂を受く。天王の口中より出せし天の莊嚴りは、比を爲すことを得ざる光明の功德を皆悉く具足せり。

爾の時、天王牟修樓陀は復、神力を以て、其の口中より化天を踊出せり。拘婆羅耶中に坐して、天の伎樂を作し、妙なる音聲を出し、諸の天女の衆に圍遶れ、皆天酒を飲み、歌を頌して戲笑す。諸の天女と共に、或は百、或は千、或は億百千にして、色の喩ふべからざる殊勝の天女に圍遶れ、種々に天の園林中にて遊戯し、空中を遊行り、道路を行き、歌頌する音聲は實天より勝ること一倍に足り、歌音・色・香・種々の功德を皆悉く具足して、天衆をして聞かしむ。時に、實の天衆は未だ曾て此の希有の事を見ず。見已りて希有の心を生じ、或は歡喜を生じ、或は疑を生ずること有りて、是の思惟を作さく『此の天は云何にして、天王の口中より出でて、甚だ希有と爲すや』と。時に、實の天衆は是の如く思惟し、或は共に論説して、云何なるやを知らず。

爾の時、天王牟修樓陀、復、神通を現はし、其の口中より化の僊人を出せり。種々の容貌にて、或は長髮なる有り、或は螺髻を作し、或は身に樹皮の衣を著せる有り、或は手中に凜瓶を執持てる有り、或は天衣を著、華鬘にて莊嚴り、或は黒色の鹿皮の衣を著し、是の如き等の種々の色貌有る

是の如く天王牟修樓陀は諸天を調伏へて、爲に正道を説けり。時に、諸の天衆は一心に諦かに聽き、心を調伏へるが故に、諸根を折伏へて、諸根寂靜なり。夜摩天王牟修樓陀は蓮華臺に於て師子座に坐せり。時に、諸の天衆、天王に白して言さく「願くは我が爲に畢竟の利益、畢竟の安樂を説き給ひて、我をして此の畢竟の利益、畢竟の安樂を得せしめ給へ。我れ云何んがして行はんや」と。

爾の時、天王、諸天に告げて曰く「佛世尊有して、一切智を具へ給ひ、解脱の師にましまし、一切の諸の過を皆解脱し、一切の功德を皆悉く具足し給へり。一切衆生の中に於て、最も殊勝爲り。若し能く歸依せんには則ち能く汝等の苦惱を斷除かん。佛には放逸無し。汝、當に歸依すべし、能く汝等の無量、無邊の生死の怖畏を救はん」と。

爾の時、天衆、天王の教を聞きて、一切胡跪き、及び諸の天女は敬重の心を生じ、諸根を攝伏へ、佛世尊に敬重心を生じ、合掌し頂禮して、三歸依を受く。一切の天衆は、誠實の心を以て佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依す。善淨き心を以て、放逸を毀訾ち、誠の心にて過を悔ゆ。化天に無量種の衰惱、滅壞有りて、無量の苦惱の堪忍ること能はざるを見しを以てなり。

爾の時、天主牟修樓陀、諸の天衆の心に厭離を生ぜしを見て、復、爲に無量の神通を化現し、須臾の間に能く一身を以て千身と爲すを示し、千身中に百千身を現はし、須臾の間に一形相に無量種の形相を現はし、須臾の間に虚空に飛昇り、種々の妙寶にて、其の身の形服を嚴飾り、須臾の間に水中に没して一千の頭を現はし、種々の寶冠、種々の寶印にて其の臂を莊嚴り、其の身の光明は千日より勝れたり。須臾の間に大山を化作して園林を具足し、園林中に在りて、一切の天衆に圍遶かる。天衆皆見るに、或は大蓮華中に在りて、無量百千の光明の天女に圍遶るゝを見る。是の諸の天女は身より光明を出せり。時に、實の天衆は皆天王の身及び天女の衆を觀ること能はざりき。

【八】その説示なくしては「我云何して行はんや」の意味ならん。

皆應に思惟して放逸を遠離すべし。一切世間の惡龍の池の中に(在るものうち)、放逸池中の境界の惡龍を最も大惡と爲す。諸の風火の惡の中、放逸の火は憶念の風と與に最も甚しき惡と爲す。一切の闇の聚を無量時に集め、無始より來た集めても、放逸の闇の聚を最も闇冥と爲す。一切の便を求むる諸の惡怨の中、放逸は大なる怨にして、境界の便を求めて最も大惡を爲す。諸の利刀の中、放逸の利刀は最も傷害を爲し、惡道に墮つる刀なり。一切の大惡なる毒蛇の中に、放逸の毒蛇、貪欲の毒は能く一切の愚癡なる衆生を殺し、毒中にて最惡なり。一切の怨家の詐りて親善む中、放逸の怨家は詐りて親善を現はし、最も大惡を爲す。一切を起すに親なる故に、愛の故なり。一切の杵・槌・枷・鎖及び繩索を以て繫縛る中、放逸の繫縛を最も堅固と爲す。過の堅き難の故なり。一切の曠野に、水無く、樹無く、果無く、蔭無きに、無量の衆生中に於て苦に遭ふ。諸の曠野の中に、放逸の曠野を最も大惡と爲す。樂の水を離れ、善人の樹を離れ、持戒の蔭を離れて、能く世間の一切衆生に無量の苦惱を與ふるを以てなり。一切の不實なる虛妄の見の中、妄見を實と爲すも、そは旋火輪、乾闥婆城の如し。鹿愛の餓の中に、放逸の虛妄を最も不實と爲す。境界の樂は動きて停らず、住せず、如實有ること無く、唯、虛妄の見のみにして、旋火輪、乾闥婆城の如し。鹿愛の餓の中に、放逸を最も虛妄、不實と爲す。一切の險岸より顛墜する中、放逸の險岸を最も畏る可しと爲す。必定して當に大惡道に墮つるが故なり。汝等天衆、當に知るべし。是の如く一切五道に攝むる所の衆生は放逸を以ての故に、三趣の衆生は惡業を行ふが故に、大惡道に墮つ。是の故に、一切の苦惱を畏れん者は、應當に、心勤めて放逸を捨離すべし。此の放逸は一切の苦の本なり」と。爾の時、天王牟修樓陀は、諸の天衆の爲に、偈を以て頌して曰はく。

放逸ならざれば、脱るゝことを得ん、放逸は常に苦を受けん。放逸と不放逸とを已に略して其の相を説けり。

【五】 乾闥婆城、乾闥婆(Candharva)は西域の僂僂にて、良く幻作をなし、城を空中に化現して衆人に見せしむと云ふ。よつて形容あるも實無きを乾闥婆城に喩ふ。
 【六】 Meghalina 沙漠中に煙氣樓の如く起る湖水のこと。鹿が之を愛して近づく故にこの名あり。「餓」の文字は熱沙にある水蒸氣に光線的作用にて上の相を表はすので用ゐしなり。
 【七】 五道。五趣に同じ。阿修羅を畜生に攝して、地獄、餓鬼、畜生、人、天なる生死處。中、地獄、餓鬼、畜生を三趣と稱すること、前の註に出でたり。

至らん。既に是の如き過を知らんには、應に放逸を樂むべからず。世間は無常に屬し、皆、三毒の刺有り。生有るが故に、死有り。應に放逸を樂むべからず。死は能く命を破壊り、老は能く衰變へしめ、病は能く安隱を壞はす。應に放逸を樂むべからず。業の繩は衆生を縛り、心は繩の閑道に依りて、三有の中に流轉す。應に放逸を樂むべからず。樂む者は必ず苦を受けん。苦む者は苦轉々勝れん。公夫も妻子の爲に應に放逸を樂むべからず。母も亦妻室と爲り、妻も亦怨家と爲る。此れ等は輪轉て行ふ。應に放逸を樂むべからず。園林、山谷に於て天女の衆に圍遶るとも、世間は皆當に盡くべし。應に放逸を樂むべからず。一切の天の樂を受くるとも、皆當に破壊に歸すべく、虚妄にして信すべからず。應に放逸を樂むべからず。生有るは皆是れ苦にして、是れ老死の器なり。決定して必ず當に得べし。應に放逸を樂むべからず。諸根は調伏へ難く、能く調ふ者有ること無く、一切の樂は皆盡く。應に放逸を樂むべからず。少年は必ず當に老ゆべく、諸の欲は猶し夢の如し。是の故に、智有る者は應に放逸を樂むべからず。猶し芭蕉の葉の如く、電の如くにて、久く住らず、一切は皆破壊す。應に放逸を樂むべからず。諸根は調伏へ難く、樂みて諸の境界に著す。唯、智慧有る者のみ、能く自らの境界に住するのみなり。是の如くに、天王牟修樓陀は諸の天衆の心に、厭離を得しを以て、他を利益するが爲に、是の如き偈を説けり。爾の時、天王、牟修樓陀、復、天衆の爲に、放逸の過を説きて、是の如き言を作さく『汝等天衆、云何にして没して放逸の闇中に在りて、大惡を見ず、不畏を見ざるや。汝等皆、是の如き等の天は放逸なるを以ての故に、皆悉く破壊されて死滅に歸し、能く救ふ者無きを見よ。彼の諸の天衆の一切の樂具は皆悉く汝より勝り、色量・形貌・富樂・光明・天女の歌詠、舞戲は皆勝れり。汝等、現に彼の諸の天衆の、放逸なるを以ての故に、一切磨滅ぶるを見たり。汝等天衆よ、

【三】三毒。貪、瞋、癡の三煩惱のこと。

【四】三有。有(Bhava)とは、生死の果報の必ず有るに名く、欲界、色界、無色界は衆生の業報にて受く生死處にして、之れ必ず有りて盡しからざれば三有と名ずくるなり。又は三界(Triloka)とも云ふ。

王牟修樓陀、諸の天衆の爲に、偈頌を以て曰はく。

愚癡は放逸を樂しみて、常に諸の苦惱を受く。若し放逸を離れんには、則ち常に安樂を得ん。一切の諸の苦の樹は、放逸を根本と爲す。是の故に、苦を離れんと欲せば、應當に放逸を捨つべし。

爾の時、實の天は夜摩天王牟修樓陀を見、心皆安隱にして、歡喜びて馳せて夜摩天王に趣き、共に相ひ謂ひて言へらく『我れ今、主を得たり、夜摩天王は今や大蓮華臺に坐し、天衆に圍遶れて、能く我れを救護し、能く我れを攝受す』と。是の如く各々共に籌量已り、一切皆、大蓮華に向ひ、蓮華臺に上る。牟修樓陀天王の住處の師子の座は、蓮華臺と二俱同色なり。夜摩天王は餘の天衆と共に、華臺の中に住せり。天衆、到り已り、天王に白して言さく『誰ぞ天衆をして是の如く破壊せしめ、是の如く衰惱せしめ、是の如く墜墮せしめて、水中に沈没せしめて唱聲、叫喚かしむるや。誰ぞ能く是の如くに、諸の天衆に種々の苦惱を與ふるや』と。

爾の時、天王牟修樓陀、天衆に告げて曰く『此れ放逸の過なり。一切衆生には必定して皆有り。汝等天衆は皆悉く未だ知らず』と。爾の時、天主牟修樓陀は諸の天衆の爲に、偈を以て曰く。

一切の諸の衆生も皆悉く破ること能はず。一切の諸の業行に能く勝る者有る無し。能く諸の世間をして、一切皆失壞はしむ。是の如き力有るを以て、是の故に名けて死と爲す。彼れ能く世間を壞はし、能く陰界入を破る。死王は此の世より、將に未來世に至らしむ。力の能く抵捍ふもの無く、能く救ふ者有ること無し。唯、法有りて能く救ふのみ、是の故に法を救と名く。命は速にして、久く停らず。壯色も亦是の如く、死の來るや甚だ迅速なり。應に放逸を生ずべからず。一切の衆生の樂は、皆無常の爲に壞はされ、命は死の滅する所と爲る。應に放逸を樂むべからず。若し善業盡くる時は、必ず三惡趣に

【一】陰界入。陰、入は前卷の註を見よ。界(Dhātū)とは種族の義、六根、六境、六識の十八界のことなり。
【二】三惡趣。趣(Gāmi)とは、業因によりて趣き住む處の意、地獄・餓鬼・畜生道は、六趣の中、惡業にて墮つる惡所なれば、之れを三惡趣と云ふ。

驚怖れて哀を求め、是の如き言を唱へらく「我れを救へ、我れを救へ」と。復、相ひ謂ひて言はく「若し天、放逸ならんには則ち是の如き衰惱、殃禍を得て、墜落し退没せん」と。互に相ひ告げ已れり。時に、諸の實の天、心に調伏を得て、皆厭離を生じて、放逸を行はず、心に隨順を得たり。

時に、夜摩天天王牟修樓陀、實の天衆の心調伏せるを見已り、他を利益するが爲に、自ら其の身を隠して、蓮華臺に入り、諸の調伏して放逸ならざる天と共に、蓮華臺に入りて、實の天衆をして、天王を見ざらしめ、王及び天衆、第一の善心にて、天衆を利するが爲に、皆共に蓮華臺中に入りて、餘の實の天衆は其の身を見ず。諸の實天を觀て、是の如き念を作さく「彼天、云何んが調伏を爲せしや不や、慢を離れしと爲すや、不や」と。

爾の時、天王、諸の天衆の心善く調伏し、乃至、心中に放逸を念ぜずして、皆、怖畏を生ぜしを知り、今、正に是の時に、應に説法を爲して之れを攝取すべしと。此の事を知り已りて、大池中の大蓮華の内に於て、復、變化を作して、怖畏を生ぜしむ。蓮華の無量の葉有るを化作し、及び諸の化天は蓮華の葉に在りて大池に墜つ。水に墜つる時に、無量種の怖畏の聲を出し、復、無量の天衆の死屍の狼藉たるを化作す。夜摩天天王牟修樓陀、心に自ら思惟すらく「是の如き天衆は極めて大に怖畏せり。或は當に馳走せて餘地に奔るべし」と。即ち復、化を現はして其をして去らざらしむ。唯、化天を觀て、轉轉復、大いなる厭離心を生ず。是の如き一切種々の化現を皆悉く作し已りて、其の天衆と華臺の中に入り、復、更に觀察す。遍く觀察し已り、第一の悲心にて天衆を利するが爲に、蓮華臺を出づ。諸の天衆と共に、華臺を出で已り、即ち神力もて攝め、化の事を皆滅し、天衆を安慰めて、是の如き言を作さく「若し、天、放逸ならんには一切皆當に此の衰惱を得べし。一切の怖畏は放逸を本と爲す。放逸ならざる天は則ち怖畏れず、衰惱を得ず」と。爾の時、天

墜落ちて大池の中に墮ち、或は沈没するもの有り、或は少力にして、浮びて水上に在り、聲を發して大に叫ぶもの有り。或は沈没して、在る所の知らざるもの有り、或は死し已りて水下に没するもの有り、或は死し已り、浮びて水上に在ることは猶し船柁の如きもの有り。或は叫喚もの有り、或は天女と共に相抱きて大に叫び、或は天女の兩手にて急ぎ抱くが爲に、水中に没することは猶し人間の悪水中に在りて、船柁の壞るゝ時に、人皆沈没するが如し。此の化の天衆の華葉中に住し、葉と共に清淨なる水中に墜ち、没して大池に在ることも、亦復、是の如し。

爾の時、復、一蓮華の葉有りて、化天の中に満てり。而も復、墜落ちて大池の中に墮つことは、石の水に墮ちて復更に出でざるが如し。爾の時、復、一蓮華の葉有り、多くの化天有り、住して其の中に在り。而も復、墜落ちて大池の中に墜ち、迭に共に相抱き、皆大いに叫喚び、或は半身を没し、久しき時に叫喚びて、然る後に盡く没す。是の如く百々千々、無量種有り、安詳に徐ろに大池の水中に墮つことは猶し沈む石の如し。實の天衆をして皆悉く之れを見せしむ。無量の天衆は没し已りて出でず。

爾の時、復、一蓮華の葉有り、中に化天満つ。墮落せんとするに臨み、聲を發し、大に叫ぶことは、大山の崩るゝが如く、或は地の動くが如く、或は大海の潮波の聲の如し。化天の墮つる時に、大音聲を出すことも、亦復、是の如し。時に、實の天衆、彼の岸上に在りて、化の天衆の是の如き音聲を聞き、是の如き等の諸の衰惱の事を見て、皆厭離を生じ、心に大に恐怖る。周圍に池を遶らせる此の化天を觀て、心極めて厭離し、共に相ひ謂ひて言はく『此の如きの事は本より未だ見ざる所にして、是の如き等の一切天衆の、極めて大に衰惱すること有るは、昔より未だ聞かざる所、昔より未だ此の大怖畏を見ざる所なり』と。是の語を作し已り、或は思惟すること有りて、極めて厭離を生ず。爾の時、復、一蓮華の葉有り、中に天女満てり。而も復、墜落して大池の中に墮つ。

卷の第五十七

觀天品之三十六

夜摩天之二十二

時に、夜摩天王牟修樓陀、諸の天衆の心に厭離を生ぜしを知り、復、爲に化を現はして、厭離を増せしむ。化作せる天衆は、華葉の中にて遊戯し歌舞す。諸の實の天衆の本より未だ曾つて見ざるところにして、是の如き天衆は遊戯して樂を受け、無量種、無量の差別有り、實の天衆をして慢を離るゝことを得せしめんが爲の故なり。時に、實の天衆、諸の化天の歌樂の音聲を聞きて心に羞恥を生じ止めて、歌舞せず、遊戯すること能はず、欲樂を受けず、一心に正しく住して化の天衆を觀す。化の天衆を見るに、無量種の歌舞、戲笑を作し、無量に差別して愛す可く、更らに相似して譬喩を以てすべきもの無し。時に、諸の化天、蓮華の葉の中にて歌舞し遊戯して、種々に樂を受く。

爾の時、天王牟修樓陀、實の天衆の心、憍慢を離れて、善く調伏せるを見已り、復、蓮華の葉の中に天の歌舞するを化す。一の華葉有り、中に滿てる化天は、忽然として墜落して大池の中に墮つ。或は深く没するもの有りて、更に復出せず。或は湧き出づるもの有りて水上に在り。或は死屍の如く浮びて水上に在り。或は相ひ抱きて二り俱に沈没するもの有りて、皆、是の言を唱へらく「我れを救へ、我れを救へ」と。迭互に相喚び、或は相ひ抱きて聲を發して大に叫ぶもの有り、或は相抱きて便ち沈没するもの有り。諸の實の天衆、大池の岸に在りて、諸の化天を觀するに、化の天衆の退没して亂壞するを見て、怖畏を生じ、極めて大に愁惱めり。

爾の時、池中の一蓮華の葉、既に墜落ち已り、復、一蓮華の葉有りて、化天中に滿つ。而も復、

る。放逸を行ふことを得る勿れ。諸根は制すべからず、境界は遮ふべからず。智者は境界に於て則ち能く自在なることを得ん。故に、應に愚癡を捨て、常に智慧を修行し、常に諸の過、利無きの根本を遠離すべし。放逸は諸の欲を生じ、欲に由りて苦の因を造る。生死は皆是れ苦にして、生滅の法は是の如し。若し放逸を捨離せんには則ち境界を樂まずして、能く諸の過を離れて則ち解脱の樂を得ん。放逸は是れ苦の樹にして、是れ大苦の根なり。放逸は能く一切諸の衆生を破壊らん。是の色等は無常にして、樂に非ず和合に非ず、得已りて復失はん、諸有は皆是の如し。樂有る境界に隨ふも、皆、是れ繫縛の因にして、得るに隨ひて、轉た増長くことは、火の乾きし薪を得るが如し。是の如く厭足こと無くんば則ち名けて樂と爲さず。若し愛樂を離るゝことを得んには、乃ち名けて樂と爲すべし。若し生死の樂を離れんには、爾乃ち常樂を得ん。若し欲の爲に使はれんには、則ち常樂と名けざらん。

是の如くに夜摩天王牟修樓陀は方便力を以て、彼の天の慢を壞はし、是の如き歌詠は第一の妙聲にして、昔より未だ聞かざる所なり。諸の天衆を誘ひて、實天をして其の歌聲を聞くを因として、法を聞くを得せしめんと欲せり。時に諸の天衆、既に聞くことを得已り、本修めし心力に熏ぜられしが故に、即便、斯の如き歌の義を覺知り、既に覺知り已りて、心に厭離を生じ、是の如き言を作さく『彼天は我より一切皆勝れ、自ら放逸を離れて偈頌を説く。況んや、我れ卑劣にして放逸を行ふに於てをや』と。時に、夜摩天天王牟修樓陀、方便力を以て、諸の天衆をして厭離の心を生ぜしめ、放逸を斷除きぬ。第一の方便にて、爲に利益を作す。此の天衆は色の樂みの懦弱故に、天の當に退没するを知らずして、後、退く時に至り、悔の火にて自らを焼き、後、地獄の大火の爲に燒かるゝなり。夜摩天王、是の方便を以て、實の天衆をして、心に厭離を生ぜしめて、利益を得せしむ。

にして、天女の衆と共に、歌詠して遊戯す。時に、諸の化天も亦復、同く一類を作り、歌詠して漸く來り下りて實の天衆に近づく。爾の時、二種の天衆、既に相ひ見已るに、化天の歌詠は漸く増して轉た勝れたり。時に、實の天衆、勝れし色を見るが故に、即ち色の慢を離れ、既に實の天の形服の色慢を破れり。爾の時、化天は即ち音聲を出して歌頌を詠す。時に、諸の實天は化天の歌詠の爲に覆はれ、化天の香氣・色量・形貌、及び化の天女の量色・形貌の一切皆勝れたり。時に、諸の實天の五欲の境界、一切の欲樂は彼の化天の五欲の境界の欲樂の爲に覆はる。夜摩天王の方便力を以ての故に、諸の實天の諸の慢をして漸く薄からしむ。爾の時、化天は實の天衆と共に一處に集りて、實の天衆の威徳の光明をして皆悉く隱蔽せしむることは、閻浮提の日光既に現はれては、星宿の月光一切皆滅するが如し。化天の威徳の實の天衆の光明を悉く滅せしむることも、亦復、是の如し。時に、化の天衆は勝れし歌音を出して、實天の音をして隱蔽ひて現はざらしむ。化天の音は、閻浮提の人中の歌音をして、天聲に比せしむるが如くにして、量色・形貌の所有る勝れし相も亦復、是の如く、夜摩天の人の色相より勝るゝが如し。時に、實の天衆は羞て、心を覆ふが故に、廣池の岸に向ふ。時に、化の天衆は彼の池中の大蓮華の上に在りて、歌舞し嬉笑し、天中の所有五欲の功徳を皆悉く具足し、樂しき事を成就し、廣池の上の大蓮華の中に於て、歌舞し戲笑して共に相ひ娯樂む。時に、化の天衆の一切の樂具は皆實天より勝り、雜の歌頌を以て、實の天衆の爲に、偈を説きて言はく。

一切は業に相似して、天中の樂報を得、天の命及び樂を受けんも、業盡きたば則ち失壞れん。
是の故に諸の未だ失はざる、天中の種々の樂は、皆、福徳の因に由る。福無ければ則ち大苦なり。命は速にして、暫くも停らず、上色も亦、是の如くにして、死の來るや甚だ迅速なり。放逸を行ふこと勿れ。放逸は能く衆生の一切の樂を破壊し、命は死の爲に滅せら

無量の差別を以て、天の樂を受け、是の如き等の樂は、心に念ずる所の隨に具足し成就す。善業を以ての故に、其の念ずる所の隨にして、一切の諸の樂みは念の差別を隨ひて皆成就することを得。是の諸の天衆は、無量なる念の爲に、覺觀の波に輪ばれ、大河に漂はされて歡喜の心を生ず。一切の天衆、久しく大池の大蓮華の中に在りて天の樂みを成就し、天の無量なる放逸の樂を受く。

時に、夜摩天天王牟修樓陀、諸の天衆の放逸の樂みに著せるを知りて憐愍の心を生じ、諸天の放逸なる行を除かんと欲するが故に、之れが爲に化を現はして、色の慢を斷除く。廣池を去ること遠からずして、大山を化作し、名けて清淨と曰ふ。猶し善淨の如く、眞の毗瑠璃・無量の金銀・種々の雜寶にて莊嚴を爲し、遍く彼の山に遊戯林有りて周圍を圍遶ぎ、多く無量百千の流泉有りて、水は皆清涼なり。其の山の寶の峰の光明は普く照し、一切の林樹を以て莊嚴と爲し、多くの華池有り、無量種の華を以て嚴飾と爲す。無量百千の枝葉にて蔭覆ふことは猶し天宮の如し。是の如く、勝れし山の周りは遍く莊嚴れり。夜摩天中の常樂の地處に住せし所の天衆は皆悉く之れを見たり。

夜摩天天王牟修樓陀、復、更らに思惟して、天衆を化作せるに、天の怨家の如し。顔色端正にして、其の行は速疾く、歌舞し戲笑して、常樂地より勝ること十倍に過踰ぐ。或は復、勝妙なる天女を化作し、常樂地の一切の天女より勝ることも亦十倍に過ぎたり。此の地の天女は一切如かず。何等を一切とするや。所謂、相貌は端正しく、顔色は殊妙にして、嬉笑し歌舞する種々の遊戯は皆悉く殊勝れたり。其の清涼山は一切皆是れ毗瑠璃の山なることは前に説きし所の如し。

爾の時、勝れし天は化の山に在りて、第一の最高の山峰に住み、此の峰の中に於て、化作せし天子、及び化の天女と歌詠し、伎樂の音聲は美妙にして、聞く者は愛著す。彼の化の天衆、及び化の天女は、化の山峰より次第に下り、遊戯し歌舞して來り、實の天に向へり。

爾の時、實の天の化天の歌詠する音を聞くに、前に説きし所の如く、十倍に殊勝なる美妙の音聲

【三五】 輪の字は、宋・元・明三本、及び宮本に依れり。原本、論に作れり。

より生ずるなり。是の故に、樂を求めん者は、應に放逸の行を離るべし。若し放逸を離れし者は則ち死せざる處を得ん。放逸ならざる行を以て、則ち涅槃に近づかん。放逸ならざるを以ての故に、涅槃の處に至ることを得ん。是の故に、智者は説きて、放逸を苦の因と爲す。一切の放逸なる者は、猶し狂病人の如く、現に他の爲に輕んぜられ、死しては則ち惡道に入らん。一切の放逸なる者は、業の果報の中、及び、生死の處に於て、顛倒ならざる行無し。放逸の火は熾然として地獄の衆生を燒く。若し地獄を脱れんと欲せば、當に放逸なる行を離るべし。若し放逸を離れんと欲せば、當に樂みて智慧を修むべし。則ち煩惱の縛を脱れて、常に安樂の處を得ん。五根にて三垢を生じ、心は三界を流轉す。已に放逸を離れし者は、放逸を是の如くに説けり。放逸の藏は甚だ苦にして、放逸ならざる藏は樂なり。是の故に、樂を求めん者は、應に放逸なる行を離るべし。

是の如き水波輪鳥は彼の天衆をして放逸を捨離して、善く調伏せんが爲の故に、是の如き偈を説けり。時に、諸の天衆は、放逸なるを以ての故に、是の如き等の眞の語、實の語に於て、此の法を聞きしと雖も、聽受すること能はず。復、虚空の廣池の内の蓮華の葉の中に於て、共に相ひ娛樂み、遊戲して樂を受け、天の伎樂、天の妙へなる音聲を作し、及び餘の境界にて、堅く色・聲・香味・觸等に著し、厭足くことを知らざることは、鹹水を飲みて、復、數飲むと雖も渴を斷つこと能はざるが如く、此の諸の天衆も亦復、是の如く、無量、種々の天樂を受くと雖も、足ることを知らず。

爾の時、天衆、虚空の中に於て、久しく樂を受け已りて、復、廣池にて彼の天子及び諸の天女と、大蓮華の葉の中に於て遊戲して樂を受け、五樂の音聲にて彼此和合し、一處にて同心、同欲なり。共に相ひ娛樂みて、其の心は堅く六欲の境界に著し、久しく此處に於て歌舞し喜笑し、無量種、

【三】 貪、瞋、痴の三毒の煩惱のこと。

【四】 厭足の字は宋・元・明本に作れり、原本足厭に作れり。上の渴愛の註と照應す。

樂を受く。自ら勝れし業を作して集めし所の業盡くるとも猶覺知らず。善業、將に盡きんとし、退く時至らんとするとき、異處に行きて、當に何なる道に生れて、何等の苦を受くるや、何等の樂・善・不善の業を受くるや、今、當に我れを將りて何等の處に至り、我れに何なる道を示すや、地獄に在ると爲すや。餓鬼に在ると爲すや、畜生に在ると爲すや、人中に在ると爲すや、畏るゝ處に生るゝと爲すや、畏れざる處と爲すや。放逸の黑闇中に没するを以ての故に、是の如き等を覺らず、知らず。若し覺る時至るも善業已に盡き、無常の大風吹きて墜墮せしめん。是の如き天衆は多く放逸を行ひ、怨詐に親しむが如く、實の利益に非ずして、詐りて利益を爲すのみ。善業既に盡き、將に異果を受けんとせり。爾の時、乃ち覺りて、是の念を作さく「我れ、不善を作し、多く放逸を行ひて、是の如くに終りし時、爾乃、覺知るのみ」と。多く習ひ行ひしを以て、此の放逸の怨に畏難を生ぜず。復、華池に於て遊戲し、歌舞し、善業の力の故に極めて愛樂を生ず。復、樂みて蓮華の葉の中に遊戲する諸天、及び虚空の宮殿に住する天衆を觀るに、彼此和合して共に樂を受く。爾の時、鳥有り、水波輪と名く。善業の力を以て、放逸なる諸の天衆の爲の故に、偈頌を以て曰く。

衆生の命の住らざることは、猶し水の濤波の如く、堅さ無きことは水の沫の如きも、天は覺知らず。若し風の鼓を吹くこと無く、水の沫の或は久しく住らんも、無常なる天の福盡きんに、速に滅して久しく停らざらん。譬へば、燈の油盡きては光明も亦皆無きが如く、業盡きては亦是の如く、天樂則ち隨ひて滅せん。作す所の業にして、失壞せざるもの有ること無きも、是の如き諸の衆生は愚癡にして覺知らず。凡ての諸有の生類は生るゝこと有らんに、必ず滅に歸せん。一切の有爲の法も皆亦復是の如し。衆生は自らの業の故に、生死に流轉す。云何に、此の世間は放逸に破壊さるゝや。放逸は善法を失ひ、放逸は堅き縛と爲る。其の放逸なるを以ての故に、退りて地獄に墮つ。若しは一の因縁有り、謂く、放逸

【三】地獄、餓鬼等の様々なる世界。

ざるを以て、復、異なる念を生ずらく「今、此處に、應に香の風來りて樹葉を吹き、互に相ひ擦觸れて妙なる音聲を出し、歌音より勝るべし」と。是の念を作す時、善業を以ての故に、種々の香風吹きて、樹葉を動かし、互に相ひ擦觸れて、妙なる音聲を出し、天女の歌音は十六分中にて、其の一にも及ばず。時に、彼の天衆、諸の天女と共に、歌舞して遊戯し、久しき時に樂を受けて、猶ほ足るところを知らず。

爾の時、天衆、復、是の念を作さく「我れ、今、此の所住の處々、應に種々の七寶の雜色にて莊嚴れる宮殿を生じて、一切の天欲を皆悉く具足し、念するに隨ひて出生せしむべし。是の如く生じ已りて、此の廣池の周匝に普遍く虚空中に在りて、諸の天女と共に歌舞し、遊戯し、喜笑して樂みを受けん」と。是の念を作す時、即ち種々の七寶の宮殿の雜色の莊嚴有り、眞珠の瓔珞を以て莊嚴を爲し、其の殿の四面は種々の衆寶の勝妙の欄楯にして、之れを觀ては愛す可く、其の欄楯の上には、或は鵝鳥有り、或は孔雀、或は命々鳥有りて、種々の衆鳥は住みて其の上の在り、處々に皆衆鳥有りて止住まれり。心の愛する所の如くに種々の衆鳥は其の前に現はる。天衆、見已り、諸の天女と共に此の宮殿に昇りて、遊戯し、歌舞す。一切皆往きて、廣大池に向ひ、宮殿中に在りて大池を下觀し、諸の蓮華を見るに、希有の心を生ず。此の大蓮華は種々の寶の莢・種々の光明・種々の妙色を以て莊嚴りを爲せり。所謂、金剛・青因陀寶・赤蓮華寶・毗瑠璃寶・大青寶王、金の光明の葉にして、之れを見んには樂みを受けん。

時に、諸の天衆、虚空の宮殿の中に在り。復、餘天有りて、廣大の蓮華の葉の中に住み、諸の天女と共に歌舞し遊戯して互に相ひ娛樂む。或は虚空の宮殿に在るもの有り、或は大蓮華の葉に在るもの有り。是の諸の天衆は無量種の譬喩すべからざる遊戯を作して樂を受け、是の如く種々に遊戯し、歌音の其の聲は五百由旬に遍く、五欲の功德を皆悉く具足せる五樂の音聲にて、無量の

【三】命々鳥(Jivajivaka)。又、共命鳥、生々鳥とも稱し、一身兩頭の鳥なりと云はる。

青寶の葉なるは赤蓮華の果にして、或は雜寶の葉なるは雜寶を果と爲せり。或は眞金の葉にて白銀を果と爲し、金葉・金果も亦復是の如く、種々の枝葉にて宮室を蔭覆ひ善業を以ての故に、天の念する所の隨に皆悉く具足せり。爾の時、天子、諸の天女と共に、心に歡喜を生じ、枝葉にて蔭覆へる宮室に入り、闐然として住し、衆と共に、遊戯して種々の樂みを受く。魚の水に處して厭足を知らざるが如く、此の枝葉にて蔭覆へる宮室に於て希有の心を生じ、宮室の中に在りて、嬉戲し歌詠し娛樂して樂を受く。既に樂を受け已りて、復、是の念を作さく『我れ、今、此處の枝葉にて蔭覆へる宮室の内に應に、第一の色・香・味・觸を生ずべし。天の上味は葉より流出し、天女の衆と共に之れを飲みて快樂せん』と。善業を以ての故に、即ち念する時に、天の上味の飲の色・香・味・觸の最も第一と爲せるを、葉より流出せり。諸の天女と共に、之れを飲みて樂を受け、心に足ることを知らず。愛欲に心を以て、久しき時に、歌舞し遊戯して樂を受け、放逸地を以て、厭足を知らず。先に作せし所の業にて退かんとせる時に臨みしも、遊戯して樂を受け、境界を渴愛して、厭足くことを知らず。

復、是の念を作さく『今、我れ、此處の華葉の中に、應に第一の須陀の味を生じ、香・味・觸を具すべし』と。善業を以ての故に、即ち心に念ぜし時に、第一の須陀は香・味・觸を具して葉の中より出づ。出で已りては之れを食めり。時に、諸の天衆、久しく樂を受け已りて、復、是の念を作さく、『今、我れ、此處の寶樹の枝の中に、應に寶珠の璣珞の莊嚴勝妙れし天冠・光明を具足せる臂の莊嚴等の、諸天の種々の嚴飾の具を生じ、光明の莊嚴は樹の枝より出づべし』と。是の念を作す時、善業の力の故に、種々の天の莊嚴の具、光明の嚴飾を出生せり。

爾の時、天衆、莊嚴の具を著け、久しく天の樂を受けて、厭足を知らず。諸の天女と共に五欲の樂を受けて、厭足を知らず。久しく樂を受くと雖も、境界の中に於て、轉た渴愛を増し、心定まら

【一】 靜かなるかたち。

【二】 (10) 人間の欲望は決して満されることなく、満せば満すほど倍の欲を益すこと、渴きて鹽水を呑む如しといふ。かくて人間はその存在に即して懼みを離るゝこと能はざるを知るべし。

し、虚空中に在りて遊戯して樂を受け、七寶にて莊嚴れる鳥に乗り、那羅林天は宮殿に住めり。此の二天衆は一切和合して虚空中に在り、共に相ひ娛樂しみ、虚空の中に於て久しく遊戯し已り、復、山峰に昇る。久しく山峰にて遊戯して樂を受け、復、廣池に向ひ、華を念ひて去んぬ。或は鳥に乗るもの有りて、虚空の中に滿ち、騰躍りて行き、天の妙音を歌ふ。是の諸の天衆は勝れし樂を念ずるが故に、復、廣池に向ふ。既に池に到り已り、鳥より下りて、廣池の蓮華の葉の中に入ることは、前に説きし所の如し。種々に遊戯して快樂を受く。

爾の時、天衆、廣池の大蓮華の中に在りて、久しく樂を受け已り、復、是の念を作さく「今、我れ此處に應に枝葉を生じて宮室を蔭覆ふべし。俱翹維の聲、種々の妙寶にて華林を莊嚴り、種々の寶色の枝葉にて蔭覆ふて以て宮室と爲し、我れ當に中に於て遊戯して樂を受くべし」と。善業を以ての故に、即ち念する時に、種々の妙室の光明にて莊嚴り、第一の妙華の色香を具足し、以て其の上を覆へり。所謂、白銀・毗瑠璃寶・大青寶王・赤蓮華寶・玻璃色寶、是の如く乃至、金色寶にして、微妙第一にて、之れを見んには悅樂まん。是の如き種々の衆寶の枝葉にて宮室を蔭覆へり。善業の力の故に、念するが隨に生ぜり。爾の時、天衆、此の枝葉の衆寶の枝葉にて宮室を蔭覆ひしを見て、心に歡喜を生じ、此の宮室に入り、歡娛びて樂を受く、一切の天女は圍遶を爲し、天衣、天鬘にて其の身を莊嚴り、一切の天欲を皆悉く具足せり。其の心は和順にして相ひ妨礙けず、妬嫉・鬪諍・瞋恚を離れて樂行を受く。善業を以ての故に此の天樂を受け、五樂の音聲は一切齊等ひて、枝葉にて蔭覆へる宮室の中に於て、諸の天女と共に欲樂を受け、心に厭足くこと無く、愛の毒に燒かれ、五欲の樂を受けて厭足を知らざることは、譬喩すべからず。枝葉にて蔭覆へる宮室の中に於て天の勝れし樂を受け、深き樂を成就す。是の如き枝葉の宮室を蔭覆へるは、衆寶の成す所にして、毗瑠璃樹は眞金を葉と爲し、赤蓮華寶を以て其の果と爲し、青因陀寶を以て其の枝と爲せり。或は白銀の葉にて玻璃を果と爲し、或は

諸の天衆を調へんが爲の故に、偈頌を以て曰く。

暴風に鳥集りて飛ばんに、其の行くこと甚だ速疾なり。一切衆生の命の速疾なることは此れより過ぎたり。風の行き或は廻旋るに、鳥の去りし時も返ること有り、命根既に壞れ已らんに則ち還る期有ること無けん。業は速に盡くるを以ての故に、速に死時到り、必定して天處を離れんも、愚者は覺知らず。大力も遮ふべからず、極惡にして衆生を憎み、死王は甚だ勇健なり。必定す、須臾に至らん。天、多く放逸を行ひ、樂の爲に誑かされて、必ず當に無量なる大苦惱を得べきを覺らず。一切の法は無常にして、畢竟して當に破壞すべく、諸有の法は是の如く、是れ最も怖畏るべし。老は能く壯色を壞はし、死能く身命を喪ひ、敗壞は資具を破らん。相對の法は是の如し。是の如く大惡にして衰憊し、大に怖畏(るべきも)、汝、猶放逸を行ふ。是れを心無き人と名く。若し未來世を畏れんには則ち智眼有ると名く。若し此れと相違せんには、是れを大愚癡と爲す。一切は心に誑かされ、意をして皆迷亂せしむ。業盡くれば則ち失壞することは、油の盡きては燈の滅するが如し。無量なる境界の樂も此の樂は皆無常にして、本作せし業盡きしが故に、必ず當に磨滅に歸すべし。是の實語鳥は善業の力を以て、諸の天の心をして調伏せしめんが爲の故に、是の如き偈を説けり。時に、諸の天衆、放逸なるを以ての故に、愚癡にして覺らず、心に信解せず、亦、攝め受けず。復、是の如き常樂の地處の愛す可き山谷・河泉・流水・華池・園林を觀るに、一一の華林・山峰・溪谷には、天衆充滿し、空中にて遊戲し、諸の歌音を聞きて遍く虚空に滿てり。時に、諸の天衆、復、異處の衆多の天子及び天女の衆を見るに、華池の岸に在りて天の上味を飲み、如意の樹に於て五樂の音聲にて快樂を受く。復、異處に行きて宮殿有るを見るに、虚空に天子・天女在り、天臺にて莊嚴り、天の五欲を皆悉く具足し、遊戲して樂を受く。二の天衆を見るに、合して一會を爲

【二七】園の字、宋・元・明三本及び宮本に依れり、原本、園に作れり。

施耶舍華を取りて其の身を莊嚴り、復天女を嚴り、歌舞し遊戯す。五欲の中にて久しく樂を受け已り、愛す可き境界にて、諸の欲樂を受けて厭足くことを知らず。愛河に漂はされて、復廣池の大蓮華中に向ふに、此の諸の天衆を或は百、或は千の諸の天女の衆にて圍遶を爲し、種々に莊嚴りて大池に到る。各住む所の蓮華の葉の中に至り、各各遊戯して、愛す可き勝妙の樂を受け、印にて印する所の如く、各、自らの業の如く、相ひ似たる樂を受く。

爾の時、天衆、復、是の念を作さく『此處に應に種々の山谷有るべし。種々の象鳥の種々の色貌・行・食は相ひ類し、之れを見て心樂しまん。七寶の身より妙なる音聲を出し、一切處に行きて皆障礙るところ無し。或は水中に在り、或は陸地に在り、或は空中を行きて疲倦ること無し。若し、此の鳥有りて來りて、此處に至らんには、我れ當に之れに乘りて虚空中を行き、諸の天女と空中にて遊戯すべく、常樂の地處の諸天を下觀し、歡娛びて樂を受け、遍く觀察し已り、諸の天女と共に、復、勝れし樂を受けん』と。時に、諸の天衆、是の念を作せし時に、種々の山・種々の山峰・種々の山谷・種々の山窟・種々の樹林・種々の鳥衆有りて、善業の力の故に、念するに隨ひて即ち來り、種々の相貌・種々の莊嚴・種々の勝妙れし跋求の聲ある種々の七寶の雜色の衆鳥なり。天女は之れを見て一切皆希有の心を生ず。其の音は美妙にして虚空に遍滿し、皆來りて此の蓮華の葉の中の天の遊戯する處に向ひ、遍く虚空を覆へり。爾の時、天衆及び諸の天女は既に彼の鳥を見、心轉た歡喜ぶ。歡喜ぶを以ての故に、天女の衆と共に虚空に昇らんとせり。爾の時、諸鳥、天の念する所を知り、來りて天衆に近づく。時に、諸の天子、諸の天女と共に鳥の上に昇りしに、鳥即ち飛行し、虚空に遍し。手に箜篌を執り、衆の妙音を歌ひ、笙、笛、鼓吹は甚だ愛樂むべく、之れを聞きて心樂しむ。復、自地の天衆の天の欲樂を受くるを觀、喜びて愛著し、心に沮沒することを念ぜず。善業を以ての故に、唯天樂を受くるのみ。爾の時、鳥有り、名けて實語と曰ふ。放逸なる

即ち來り、復、一の華有り、名けて見樂と曰ひ、復、一の華有り、種々色歡喜開敷柔軟華華一切光明勝莊嚴華・朱多藍華・無厭足華・憶念樂華と名け是の如き等の陸に生ずる華有りて、天の念する時に隨ひて一切現前る。樹林中に、復、諸の華有り。所謂、曼陀羅華・與喜樂華・香觸愛華・香味可愛華・咬多羅華・五葉之華・龍林舌華・遮株羅華・林豎之華・須摩那華・光明華・聞香聞飽華一切愛華・山豎華・山蜂豎華なり。是の如き等の華は樹の下に生ずるもの有り、榛林に生ずるもの有り。此の諸天等、蓮華中に住みて遊戲する時に、善業の力の故に此の諸の華を生ぜり。爾の時、天衆は諸の天女と共に蓮華林に住みて遊戲し、華葉にて種々の樂を受く。彼の大蓮華は念に隨つて池を廣くす。勢力是の如し。

時に、諸の天衆は蓮華の葉の中にて、是の思惟を作さく『今、此處に應に衆山有るべし。種々の寶の峰は此こより出生し、光明を具足し、種々の鳥の衆に種々の妙聲あり、山峰中には巖窟・河池・平處・險岸・寶を鎮めし地在りて、是の如き等の處にて、我れ應に遊戲すべし』と。復、是の念を作さく『我れ今、此の大蓮華の葉に住まん。此處に若し巖窟・河池・平地・流泉有らんには、我れ當に中に於て遊戲して樂を受くべし』と。善業の力の故に、即ち念する時に、多く園林・華池・山峰・巖窟・平なる頂有りて、皆愛樂すべし。七寶の光明にて莊嚴りをなし、種々の樹枝は甚だ愛樂むべく、之れを見んには、心樂むこと一山より過ぎたり。天華の果樹の枝條の蔭覆は猶し宮の室の如く、甚が愛樂む可し。百千の寶窟は生じて山中に在り、以て莊嚴を爲せり。時に、諸の天衆、蓮華の葉を離れ、千の天女と自ら圍遶り、上妙の天華は色・香・觸等を皆悉く具足して萎變むこと有る無く、天女を莊嚴り、美妙なる歌聲・音曲は齊等しくして、聞く者心樂み、天に應しき所の如くに五欲を具足し、安詳に徐に歩いて大山に昇り、目顧みて遍く觀る。時に、諸の天衆、遊戲して樂を受け、食河にて飯ひ、流の味を飲み、既に無量なる諸の飲食を食し已りて、即ち河邊にて曼陀羅華・俱

【四】株の字は宋・元・明・及宮本に依れり、原本抹に作れり。

【五】此「念」は天衆の念なるべし。天衆が念ひのまゝに蓮華の池が廣くなるのを、かく文學的に表はせしならん。

葉中に入りて遊戯して樂を受くるもの有り、或は種々の妙寶の間錯れる華臺に入りて、諸の天女と共に快樂を受くるもの有り。華臺の中にて、心に念ずる所の隨に華葉の上に昇る。時に、蓮華の葉は是の如く是の如くに轉じ、更に增長き、善業を以ての故に、蓮華の增長すること二百由旬、三百由旬、乃至、千由旬なり。天の善業の意の念力を以ての故に、臺も亦是の如くに漸く更に增長すること二百由旬にして、其の大蓮華の光明も亦爾く漸く更に增長す。爾の時、天衆は各々餘の華葉中に在りて、天女の衆と共に遊戯して樂を受け、此の諸の天衆既に華葉に上るに、葉即ち增長す。

爾の時、天衆、遊戯して樂を受け、是の如き念を作さく「我れ今、此ここに遊戯して止住らん。應に酒の河、及び須陀の食を生ずべし」と。即ち念する時に、蓮華の葉の中に即ち酒の河及び須陀の食を生じて、皆悉く具足せり。復、是の念を作さく「我れ今、酒を飲みて須陀の味を食はん」と。即ち天女と共に天酒を飲み、須陀の味を食す。

爾の時、天衆、久しく樂を受け已りて、復、是の念を作さく「我れ此處に止住りて遊戯せん。此の華葉の中に應に園林を生ずべし」と。善業を以ての故に、其の念ぜし所の隨に即ち園林を生じ、七寶の雜りし樹には種々の鳥の種々の音聲有り。寶樹の蔭の覆ひて猶し宮室の如く、華果を具足し、念ぜし所の華果は時に隨ひて皆得。種々の河・泉池・流水には勝妙れて愛す可き種々の妙なる聲有り。寶鈿・鑽りし地處には多く妙れし華有りて、色・香・相貌は皆悉く愛す可く、華に三種有り。所謂、青色優鉢羅華・拘物陀華・菴摩羅那華・蘇支羅華・香葉華・離沒華・具足欲華・維婆羅華・君荼羅華にして、是の如き等の水に生ずる華有りて、華の光の中には多く衆蜂有り。是の如き等の華は念するが隨の雜色にして、青寶の色有りて周遍に皆生じ、是の如き天の華にて、其の林を莊嚴れり。復、陸地に種々の華を生じ、其の華の種々の色貌は相ひ類して甚だ愛樂む可し。此の林中に生れし彼の諸の天衆は、住みて是の如き蓮華の葉の中に在り、所謂樂光明華にして、天子、天女之を喚びて

しからずして則ち失壞れん。此の受くる所の天樂は、具足して説くべからず。無常の力は

自在にして、久しからずして須臾に至らん。樂は水の泡沫の如く、陽燄の水に非ざるが如

く、諸の樂も亦、是の如くに一切必ず破壊せん。極悪は遮るべからず、衆生は皆怖畏

し、死王、將に至らんとせば、其の力は壞すべからず。一切の樂を破壊し、及び命根を斷

ち、業の鎖に繫縛れ將に餘世に至らんとす。若しは樂の已に過ぎ去りたる、是の樂を念すべ

からず。若し樂、未來に在らんに、亦、名けて樂と爲さず。若し樂、現在に住し、愛の

境界と雜らんに、無常に遷動されて、一切皆破壊せん。若し、樂、三界に屬せんには、智

者の讚へざる所なるに、云何んが諸の天樂は是の如き樂を愛樂むや。此の身は久しく停ら

ず、死火の必ず來り至りて、能く一切を燒滅すること、火の乾きし薪を焚くが如からん。諸

の樂は速に遷り滅す。放逸を行ふこと勿れ、臨終の時に悔の心を生ずること勿れ。無量百

千(たび)生れ、業の樂も皆已に過ぎて、夢の如くに何所にか至り、風の如くに念は住せざら

ん。愚者は樂みて厭くこと無きも、火の乾きし薪を得るが如く、是の故に著する所の樂は、

則ち常の樂を爲すに非ず。渴愛を解脱する者は、能く欲の過を離れ、禪を修めて放逸なら

ず、垢無き淨き樂を得ん。是の如き樂を得る者を、乃ち名けて樂と爲す可く、諸有を樂と名

くと雖も、猶し雜毒の蜜の如し。是の如くに樂に著する者は、心、恒に欲樂を求めんも、欲

の樂は常の樂に非ず。是の故に寂靜に非ず。

是の如き衆の蜂は善業を以ての故に、諸の天衆の爲に此の如き偈を説けり。時に、諸の天

衆、此の法を聞くと雖も攝め受けず。復、此の池を觀て心に愛樂を生じ、諸の天女と共に遊戲し

歌舞し、處々を徧く觀じ、久しく此處に遊戲して樂を受く。復、彼の池中の蓮華を觀んと欲するに、

輕便なる四大の自在なる力の故に、業の勢力の故に、蓮華の池中にて自在に遊行し、或は天衆の華

【三】 M. paribhāṣita 風愛と譯す。陽燄の譯語はよく意味を表はさず。是は沙漠中に起る水湖にして日中午前七八時より十一時頃までに太陽の光線の曲折によりて表はれ、鹿は眞の湖水と思つて愛着して奔りゆくことからこの語來る。譯者は千九百十九年四月下旬スイズの運河の東方六七丁の所に滿々湛へたる鏡の如き大湖を見、椰子樹のやうな並木が明徹の湖底に映れるに驚かされた。二三分の後に消えうせ、又他方に現出せり。

池内の蓮華の中に、皆悉く是足す。是の故に、此の池を隨念池ずいねんちと名け、其の華を名けて隨念蓮華ずいねんれんたと爲す。是の如くに二の事を同じく隨念と名く。爾の時、天衆、初はじめ見し時に、心歡喜を生じ、一百倍に足れり。善業ぜんごふを以ての故に、彼の池の岸に在りて歌舞し戲笑し、五樂の音聲にて一切共に是の如き天樂を受く。

時に、諸の天衆、既に遊戯し已りて、復諸の天の上味の飲の醉の過を離るゝを飲み、既に上味を飲みて樂を受く。功德は念するが如に即ち得、意に念するが如き香・意に念するが如き色・意に念するが如き味、其の憶念するが如き種々の寶器あり。彼の池中に即ち寶器有り、上味を充滿して、池より出で、美妙なる天酒は池より流出せり。此の諸の天衆、斯の上味を飲み、上味を飲み已りて、復異處に向ひて遊戯して行き、蘇陀の聚を見るに、色・香・味・觸を皆悉く具足せり。意之れを食せんと欲し、歡喜くわんぎびて往き趣く。既に、食する所に至りて皆共に之れを食し、或は手を以て食し、或は寶器を用ふ。業の如く相似て、須陀を食し已り、其の來る處に隨ひて、還りて廣池に向ふ。彼此、迭たがひひに共に歡喜の心を生じ、天衆は圍遶ゐりたうき、五樂の音聲にて歌舞し、喜笑し、遊戯して行き、廣池の中に到り、大蓮華を見るに、光明は殊勝しゆしょうれて百千日より過ぎたり。彼の一切の天の妙寶の光明は、華の光明の十六分中に於て其の一にも及ばず。爾の時、天衆は大蓮華を見、心極めて歡喜くわんぎ、天衆は圍遶ゐりたうりて、五樂の音聲にて歌舞し遊戯して大池を圍遶ゐりたうき、皆共に循めぐり行き、是の如く、是の如くに、其れに隨ひて池を遶り、周りを遍く循めぐり行きて、復、池中の希有の事を見る。華池の上に、種々の愛す可き妙色の七寶の衆蜂有りて、雄雌、娛樂して快樂を受け、共に華の汁を飲む。華の汁は美味にして譬喩すべからず、竝に華の汁を飲みて、偈を以て頌して曰はく。

若し種々の業を作さんには、則ち種々の果を生ぜん。種々に生を受けし者は、業種々なるを以ての故なり。心、雜るが故に、種々に種々の依る處を遺る。種々の業盡くるが故に、久

【一〇】蘇陀。須陀に同じ。次の註を見よ。

【一一】須陀(Sudra)。又は蘇陀、首陀、修陀に作る。妙味ある印度の食樹より出づる液汁なり。

【一二】喜の字は、宋・元・明三本及宮内省圖書寮本に依れり、原本善に作れり。

此の覺時鳥は放逸なる天の爲に、死法の決定して疑無きを説けり。時に、諸の天衆は放逸を以ての故に、此の法を聞きしと雖も、厭離を生ぜず。諸根の自體の性は軽く動くが故に、樂を受くること多き者は諸根軽く動きて則ち亦伏し難く、樂勝れたるを以ての故に、諸根軽く動きて調伏す可からず。此の因縁を以て、此の諸の天衆は、眞實にして堅固なる利益を聞くと雖も、然も此の義を覺らず、知らず。設へ覺知すること有りと雖も、愛の毒に害され、覺ると雖も受けず。此の因縁を以て、實の語にて、利益する眞の語を聞くと雖も、攝め受けず。法を受けざるが故に初の美境に著し、諸の欲樂を受け、五樂の音聲にて嬉笑し歌舞し、種々に遊戲し、園林中の蓮華池の處にて、諸の天女と共に。善業を以ての故に、無量の七寶にて莊嚴れる愛す可き山峰に在りて、常に快樂を受けて斷たず絶たず。一切の天は欲の功德を具足し、共に相ひ娛樂み、種々の珍寶にて莊嚴れる地にて常に快樂を受く。是の如く遊戲して種々に樂を受け、次第に遊行りて廣池に到る。其の池の縦廣は一百由旬にして、一蓮華有り、其の華は柔軟かく、七寶間錯り、毘琉璃の莖にて、金剛を鬚と爲し、其の華は開敷きて遍く大池を覆へり。此の諸の天衆は本より未だ曾て見ず、既に此の華を見、希有の心を生ずらく。『今、此の天中は甚だ愛す可しと爲す。所見る處は皆愛樂む可し』と。諸天、之れを見て百倍に歡喜び、迭互に相ひ示して、皆共に瞻仰す。一面を圍遶き、共に行きて遊戲し、心に歡喜を生ず。此の蓮華を觀て、一切皆、希有の心を生じ、共に相ひ謂ひて言はく『汝、觀よ、汝、觀よ』と。愛す可き蓮華は昔より未だ見ざる所にして、大光明有り、多く無量の七寶の衆蜂有りて莊嚴り、是の如きは、大寶の蓮華にして、此の大蓮華は遍く大池を覆ひ、周圍に華遶くして、少分に水を見るのみなり、廣池の岸には、眞珠の間錯れる青因陀寶・赤蓮華寶・白銀色寶間錯はりて莊嚴れり。大蓮華臺の高さ五由旬、廣さ十由旬にして、天の念する所の隨なり。善業の力の故に、天の遊戲して樂を受くる時に於て、天の心に念するが隨に、若しは大、若しは小なり。天の心に念するが如くに、大

て讚歎し之れを供養す。園林中の蓮華の河池、是の如き處に在りて種々に歌舞し、共に相ひ娛樂みて相ひ妨礙げず。自らの業にて樂を受け、園林の處、平地・山峰・蓮華林中に在りて、常に天の樂を受く。時に、諸の天子は天女の衆の爲に圍遶れ、一一の處、一一の園林、一一の愛す可き遊戯の處、一一の七寶の山峰の中にて、天の欲樂を受けて厭足を知らず。諸の愛す可き妙へなる蓮華池を見、妙へなる音聲を聞き、天の上味を食し、細軟き上妙の天衣を服し、愛する所の香にて久しく五欲を受け、共に相ひ愛樂む。爾の時、鳥有り、名けて覺時と曰ふ。放逸なる諸の天衆の爲の故に、偈頌を以て曰はく。

三有の衆の中に於ては、一切は皆當に死すべくも、愚者は生死に於て、厭離を生ずること能はす。一切必ず死有り、皆當に勤めて方便すべく、死の怨既に來り至らんには、能く救ふ者有ること無けん。能く一切の樂を斷ち、能く衆の苦惱を加へ、一切の愛と離別せしむ。是の故に名けて死と爲す。能く衆生に畏を與へ、能く大苦惱を與へ、能く意をして迷惑はしむ。是の故に名けて死と爲す。能く命を保つ心を斷ち、能く諸根を破壊するも、衆生は破ること能はず。是の故に名けて死と爲す。衆生も壞すこと能はず、諸の業も勝るゝこと能はず、衆生をして失壞せしむ。是の故に名けて死と爲す。衆生は皆悉く有にして、(これを)決定して能く殺害し、能く愛と別離せしむ。是の故に名けて死と爲す。天・夜叉・樂神・鬼・龍・羅刹等をも、時の輪は皆能く殺す。是の故に名けて死と爲す。惱亂して調伏し難く、一切に於て火の如く、堅強にして避くべからず。是の故に名けて死と爲す。能く陰・入・命氣・及び心意を壞はし、時の法は大勢力なり。是の故に名けて死と爲す。其の行は甚だ賤速にして、諸の衆生を破壊す。當に勤めて福業を修め、放逸を行ふことを得る勿れ。

【七】 三有。因果の法則に支配せられる欲界、色界、無色界なる三界のこと。

【八】 陰(Skandha)。新譯には蘊に作る。五蘊(色・受・想・行・識)に分類せらる。即ち有爲諸法のこと。
【九】 入(Yatana)。新譯に處に作る。六根、六境なる十二入を指す。

華に生まる。

若し拘婆羅耶の鬚に生れし者は、光明及び色も亦其の華の如く、或は赤、或は青、或は種々の色にして、七寶にて莊嚴れることも亦拘婆羅耶の鬚の如し。云何に七寶の雜色にて莊嚴りしや。青毘瑠璃を以て其の髪と爲し、目、眼、眼瞼は皆亦是の如き銀色にして、爪甲は赤、白紅、齒は眞珠の如し。其の身は猶し閻浮檀金の如く、臍下の毛の色は因陀寶の如し。自餘の身分の處々は雜色にして、心の畫師の畫き作る所の如し。

若し蓮華臺中に在りて生れし者は、色も亦是の如く、閻浮檀眞金の色の如く、髪は青寶色にして、唇の色は猶し赤蓮華寶、或は硃磔色の如く、其の甲は猶し蓮華寶色の如く、臍下の毛の色は紺硃磔の如し。唯、少分のみ説きしなり。若し、曼陀羅華中に生れし者は、其の身の衣服に種々の色有り。中に在りて生れしが故に、還りて其の色に似たり。相ひ似しと謂ふは、現見れし法の何たる色の草に隨ふも、其の中の生物、生れし所の物は即ち其の色を同じくするが如く、中に在りて生れし故に相ひ類することも亦然り。其の生れし處に隨ひて即ち其の色を同じくすること亦復、是の如し。華に在るを以ての故に、一切は相ひ似たり。天子生れ已りて、常に衆の樂を具して斷たず、絶たず。常に天の樂を受くることは譬喩すべからず。彼の樂の中に於て、但、少分を説かんに、譬へば海中の一滯の水の如く、此の説く所の樂も亦復、是の如し。若し、人中にて善業を作せし者、此の天の樂を聞かんに、心に則ち精勤まん。何を以ての故に、業の果を知るが故に此の樂の報を望みて善業を勤修め、如しは解脱を爲さん。勤め精進む者は、有の中の無量の苦を破ることを爲すが故に、愛の毒を破壊す。彼れ、有の中に少しの樂も有ること無きを見、是の因縁を以て善業の果を説き、此れは天の樂なりと説き、有の果を爲さざればなり。爾の時、天子、既に此の天の常樂の地處に生れて、常に其の中に於て五欲の功德にて遊戲して樂を受け、百千の天女は歌詠に

【三】 閻浮檀金。閻浮檀樹の根に流るる河。其の河に産する沙金を閻浮檀金と云ふ。

【四】 又は車渠、Amurtaga。勝蔵と譯す。琥珀のこと。

【五】 草の字は宋・元・明三本及宮内省圖書寮本に依れり、原文、菓に作れり。

【六】 Bhava 存在。世界のこ

正法念處經

卷の第五十六

觀天品之三十五

夜摩天之二十一

復次に、比丘、業の果報を知り、夜摩天の住する所の地を觀す。彼れ聞慧を以て、或は天眼を以て夜摩天を見るに、復、地處有りて、名けて常樂と曰ふ。衆生何なる業にて彼の地に生るゝや。彼れ見るに、若は人の殺さず、盜まざることに前に説きし所の如し。常に邪姪を離れ、乃至、畫ける女像を見るときも欲想を念ぜず。彼の畫ける女に勝れし相を生ぜず、畫ける女を見る時に念想を生ぜず。某女人に似しとも、心に亦愛す可き想を生ぜず。是の如く觀じ、欲心を以て畫ける女像を觀ぜず。心、迷染はず、心正法に依り、正しく念するを以ての故に、欲心を捨離て、遠く女人を避け、自ら其の身を毀ち、既に自ら不邪姪を思念し已りて、心に歡喜を生じ、未だ欲心を生ぜず、常に方便を作して生ぜざらしめて、邪姪の者を勸めて、正道に住せしめ、欲の過の愛樂む可からざることを説く。若し能く是の如くに邪姪を捨離せんには則ち第一清淨の身業にして、正見にて貪らず、身壞れ命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩天の常樂の地に在らん。彼れ中陰、乃至、天處に在りては、皆善業に因りて五根に樂を受け、色・聲・香・味・觸を皆悉く具足し、次第に天に生まれ、彼の天中の三處に化生す。一は蓮華臺中に生まれ、二は拘婆羅 耶の鬘の中に生まれ、三は曼陀羅

元魏婆羅門瞿曇般若流支譯

【一】中陰。中有に同じ。四有の一。死して後次の生を受けざる間に、肉眼には見えざるも、微細の淨色を以て成る、形量ありて小兒の如しとす。其の期間は説定まらず。【二】耶の字は、宋・元・富本に依れり、原文、邪に作れり。

不壞信を得るにあり」と教へてゐる。

第三には、本經第二冊略解題にも指摘してある般若皆空の思想である。第六十七卷の終りに近い處に、十二因縁を略説した後で、「是の如く、内外互に共に相因として増長を得、作者あるに非ず、常に非ず、變にあらず、無因生にあらず」と説き進んで「是内外の法、互に相因縁たり。譬へば飛鳥の虚空に遊べば、その至る處に隨ひて、影は常に身に隨ふが如し」と述べて、因縁假に有を説き、第五十六

昭和七年二月上旬

卷の第二偈には「樂」みを論じて、過ぎては既になく、未來には來らず、現在にありても、刻々に遷りつゝありとて、龍樹が「中論」に於いて好んで用ゐる所の論理法によりて常有の思想を破りつゝあることは本經に盛られたる思想として注意すべきものである。

其他人體生理の弱點を論じ、又は外界の種々相を論じては、痛烈なる文學をもつて生死流轉の相と、人欲の惡毒を剝離して蘊す所のないのも一つの特色とすべ

く、又、第六十四卷より六十七卷に亘りて、人體生理を廣説して、調、不調の「風」と「蟲」とを細叙して病氣を説示する所は、本冊の尤も特色とする所であらう。

終りに第六十八卷の終には須彌四州の風物習慣等を述べて、大海の中に身長五由旬の水人あること、山中には亦女樹ありて人間の子を生み天明に生れて夕暮には老衰して死すといひ、亦石河ありてこの中に入るものは皆石と化る等幾多奇抜の描寫を載せてゐる。

譯者 山邊 習 學識

正法念處經國譯に際して(略解題)

一、解題を造る便利上「正法念處經」七十卷を四冊に纏めた中、第二、第三、第四、第一の順序にて刊行することとした。第一冊は一卷より二十一卷までを含み、地獄・餓鬼・畜生の三道を描き、天帝釋と阿修羅との戦闘記事に終りを告げてゐるが、本經の特色を尤も發揮してゐる部分である。第二冊は第二十二卷から第三十九卷を含み、四天王（第二十卷より第二十四卷）と三十三天（第二十五卷より第三十五卷）と、夜摩天（第三十六卷より第三十九卷）を廣説し、第三冊は第四十卷より第五十五卷までを含み、全部を夜摩天に費してゐる。第四冊は即ち本書で、第五十六卷より終りの第七十卷までにて、夜摩天に加へて、身念處を詳述してゐる。

一、本經の思想的立場は全く小乘的で

正法念處經國譯に際して(略解題)

あるが、その文體が豊麗と雄渾を極めてゐるので、その表現の生彩潑濶たる、描寫の深刻なる、全體的に、その表現様式に於いて、小乘の「華嚴經」と云つて差支はないであらう。之が爲めに針の袋を脱する如く、時には小乘の教を破つて大乘の壘を摩せんとするの觀がある。(その例證に就いては、第二冊の略解題を参照せよ)

一、今少しく本冊に表はれた注意すべき諸項をあぐれば、

第一に、第六十卷、第六十一卷の各處に、自利に他を説き、大乘の菩薩行を暗示しつゝあることである。即ち夜摩天に於いて「孔雀王菩提薩埵が願力をもつて孔雀身を受け、他人を利益し、及び孔雀(彼自身の意)を利し、天の爲めに説法し

てゐる(第六十一卷、第二偈の次の文)。亦同卷の終には「利益安樂一切諸天、一切菩薩法利衆生」で結び、次いで六十一卷の終から第二偈には「施・戒・智・精進悲忍・善調伏・若人於無量不可數劫・修六波羅蜜・斯人各爲佛」(此中、忍を悲忍とし、禪を善調伏とせり)と説いて、佛徒の修道の内容として六度の行をあげ、その因行によりて佛果を了るといふ大乘の理想を明かにしてゐる。

第二に、上述の大乘への轉向に就いて道の普遍化に於ける重要な役目をつとめる「信」の高潮である。第六十卷第三偈の「信爲大般機・若人放逸行、信爲能除滅死時得信故、能除生有悔」と説き、次で第六十一卷の初めには「聞法に力を入れて説き、「聞法は憍慢を破りて法を敬ひ、法を信ぜしめる」といひ、進んで「成就深心、信根清淨、一向淨心、信於三寶」といひ、「佛恩を報ずるには、

卷の第六十三……………〔一四——一九〕……………二〇

觀天品之四十二 夜摩天之二十八……………二〇

卷の第六十四……………〔二〇——二七〕……………二〇

身念處品第七之一……………二〇

卷の第六十五……………〔二七——一九六〕……………二〇

身念處品第七之二……………二〇

卷の第六十六……………〔一九——二五〕……………一九

身念處品第七之三……………一九

卷の第六十七……………〔二六——三三〕……………二八

身念處品第七之四……………二八

卷の第六十八……………〔三四——五〇〕……………二八

身念處品第七之五……………二八

卷の第六十九……………〔二五——二六七〕……………二五

身念處品第七之六……………二五

卷の第七十……………〔二六——二八七〕……………二七〇

身念處品第七之七……………二七〇

大乘同性經解題……………〔一——四〕……………二九

大乘同性經（全二卷）……………〔一——三八〕……………二九

索引……………卷末

目次

(本丁)

(通頁)

正法念處經國譯に際して(略解題).....

正法念處經しやうはふねんじよきやう(全七十卷中自卷第五十六至卷第七十六).....

卷の第五十六

觀天品之三十五 夜摩天之二十一.....

卷の第五十七

觀天品之三十六 夜摩天之二十二.....

卷の第五十八

觀天品之三十七 夜摩天之二十三.....

卷の第五十九

觀天品之三十八 夜摩天之二十四.....

卷の第六十

觀天品之三十九 夜摩天之二十五.....

卷の第六十一

觀天品之四十 夜摩天之二十六.....

卷の第六十二

觀天品之四十一 夜摩天之二十七.....

經
集
部
十一

山邊習學
泉芳璟
譯

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5



國譯一切經

大東出版社藏版

